

fate/銀時も行くオーダー

ひとりのリク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【はじめに】

銀魂77巻までの内容既知を前提にしています。

FGOストーリーに沿わない進行あります。

【概要】

人類最後のマスターは、藤丸 立香と坂田 銀時!?

宇宙一バカな侍が参戦し、人類史上最も混沌カオスなグランドオーダーが幕を開ける!

【第一部】

序章 特異点F―完結―

1章 邪竜百年戦争オルレアン―救国の聖処女―完結

2章 永続狂気帝国セプテム―■■■■■■―完結

イベント ぐだぐだ本能寺―ブリーフ3の野望―

未定。

誠に申し訳ございません。特定のキャラクターを活かしたストーリー執筆に難航しているため、延期します。

3章 封鎖終局四海オケアノス―■■■■の航海者―

4章 死界魔霧都市ロンドン―■■■■の■■■■―

5章 ■■■神話大戦イ・プルーリバス・ウナム

目次

特異点F

主人公の記憶は都合良く弄られる	1
人理焼却へ腹痛と眠気	5
人理焼却へ人との会話	10
人理焼却へキミのとなり	16
異世界で二番目に出会うやつは信用していい	22
器は独りじゃ大きくなならない	26
触媒って正規ルートで入手してもロクなことにならない	34
捻っていても真つ直ぐに	40
狙撃手へ	45
心は見えないからこそ全力で叩き込め	51
大空洞の激闘	59
人理の壁	65
嫌な奴には先手を取れ	70
いつてきます	79
邪竜百年戦争オルレアン―救国の聖処女―	
異なる物語、始動	87
新人だからこそ真つ直ぐに	91
最強の邪竜	103
一難去り、次は	114
ジャンヌと地雷亜	121
魔女は剣を取る	128
憤怒は笑う	136
旗を握る者たち	145

魔女の一撃	156
歪な師弟	164
諦めない理由	171
暖かく示す未来	179
永続狂気帝国セプテム―民の先導者―	
台風対策よりも特異点修復	185
欠壊した帝国	191
ローマ真剣勝負	197
すべてのローマはブリーフに通ず	207
風呂で洗えるのは心と身体、それと思い出―前半―	214
風呂で洗えるのは心と身体、それと思い出―後半―	223
乱入者の軌跡	233
大浴場での防衛戦	243
かがり火未満	251
ローマ帝国の破壊者	258
なんで重要なことって直ぐに話さないんだ	270
化け狸の皮算用	276
仙望郷へ誘い込め	289
破壊神の影	297
牢城災建帝国セプテムⅠ	305
牢城災建帝国セプテムⅡ	312
牢城災建帝国セプテムⅢ	322
牢城災建帝国セプテムⅣ	335
ローマは不滅なり	348

特異点F

主人公の記憶は都合良く弄られる

十六年生きている。

沢山の出来事があつて、人生を振り返つて印象に残ることは多々あるけれど、夢のなかについてはよく覚えていない。

眠つて、目が覚めて、暗い安寧に委ねる時間を思い返す。だけど、一つ一つの挙動を思い返せるほど鮮明な映像はやはり思い描けなかつた。

十六年生きている。

家族と過ごす時間、友達と遊ぶ時間、勉強に悪戦苦闘する時間。その全てをぶつちぎっている睡眠という時間が楽しみで仕方がない。夢を見るたびに心がワクワクして、目が覚めたら子供心すら薄れてしまう魅惑の悪魔。

十六生きて、これほど楽しみに、そして忘れてしまうなどと不思議な体験を勿体なく思う。同時に、夢という世界に魅力と人生を押されたときから将来の行く先は決めていた。

夢のなかに居たい。

夢に触れたい。

いつか、夢のなかで冒険したい。

自分の可能性を内包した世界でも人生を謳歌したい。

「せん——、——て」

だから、この日。

夢のなかで浮遊し、空を見上げて、世界のどこでもない場所で彷徨う体験を忘れることは出来ない。

生涯で初めて、自分の全身を動かして有り余る感動が夢のなかで轟いた瞬間。人生を生きる意味という青くさい感情さえ握りしめていたのだ。

▼

外野の音を拾い、次に肌寒さを感じして意識が雑に殴られる。寝起きにしている初めての消失感が胸を焦がす。体感にしておよそ十分。人ならざる領域で、妖精のような浮遊感を味わい過ぎた。

夢のようで少し違う時間が終わる。

目を開けて、声のかかる位置に視界を並行移動させる。すると、細くて綺麗な両足を瞳を見つけた。それだけでも思わず唾を飲み込むほどになぜか緊張して、状況が飲み込めずに回答を求めて視界を上に向ける。

「先輩、起きてください」

「——あ、えっと……？」

瞳から脳、そして全身に熱が走るまでに三秒。それまで、失礼という感情も忘れてまじまじと映り込んだ女性の表情に見惚れていた。

「あの、無言で見つめられると困ります」

「ご、ごめん……いきなりのことで、つい」

キョトンと不思議なものを観察するさまがあまりにも初心で、呼吸よりも彼女を見ることを優先したくなる。

だが、それはいけない。

初対面でこのザマなんて一生の恥になる。

「えっと、落ち着け俺……」

……よし。さっきは起こしてくれてありがとう。

俺は藤丸 立香。さっきまでの記憶が曖昧な高校生……だと思う」

「自己紹介ありがとうございます。リツカ、とても良い響きですね。

……あ、そうでした。私も名乗り返さなければ、いけませんでしたね。すみません、こういうことに慣れていなくて。

改めて、私はマシユ。マシユ・キリエライト。少し前からここ、カルデアの職員として働いています」

不格好ながら取り繕って気を取り直そうとした直後。返ってきた名前の響きを復唱する間もなく、カルデアという聴き慣れない単語に

再び思考が固まっていく。

「先輩がここにいるということとは、今回の一般候補生に選ばれたからですね。ですが、どうして記憶が曖昧なのでしょう」

次いで出てきた一般候補生という言葉。恐らくは自分のことを指すのだろうが心当たりがない。

恐ろしく綺麗な見知らぬ廊下、窓の外には凄まじい勢いで吹雪く天候。まだ夢のなかと言われても信じてしまいそうな状況下。

「カル、デア：…？」

辛うじて漏れた言葉には情けなさが滲み出ている。

「ごめん、思い出せない。こんな山のなかに来た覚えがなくなって。直近で思い出せるのは、故郷で友達と鬼ごっこをしていたことくらいかな」

「どうでしょう…。私も一人一人の詳細なデータは確認していません。あ、もしかすると。あそこで防寒対策をしっかりと寝込んでいる人なら分かるかもしれません」

華奢なマシユの指が示す先、そこには。

「ぐがが……」

「フオウ」

一見して巨大毛虫の男が床で寝ているではないか。彼の腹あたりには子犬のような白い生物が跳ねている。

いや、巨大毛虫に見間違えたのは蔑んだからとかではない。あまりにも場違いな様相で驚いてしまったせいだ。ついでに言うなら、よくもまあ存在感しかない寝袋男をイビキごと感知していなかった自分に腰を抜かしそうだ。

「いや、おかしくね。寝袋とか普通は廊下で使わないよ」

「そうなのですか？ てつきり先輩のように、睡魔に耐えきれず即席ベッドで寝てしまわれたのかと」

「待つてほしいマシユ。あの人と同じに見られるのは納得がいかないぞ」

マシユの発言に抗議の念を挟んだところで寝袋男がもぞりと蠢き始める。寝袋から腕を出すと、なおも飛び跳ねている謎の動物を下ろ

そうとしていた。

「だ、あだ。ああもうやめろ定春。メシか、散歩か……？銀さん眠いから。いまはどこも自粛中だから今日は寝てなさ……」

「フオウ、フオウー」

だが、捕まえることはできず。

諦めて上半身を起こして、気怠げなまぶたがようやく全開となった。その反応はさきほど、自分がしていた動作と似通っていて親近感を覚える。

「あれ。定春お前、また縮んだ？やけに毛並みも良いじゃねーか。それにちよいちよい色も着いてるし。なに、ちよつとグレてきてる？」
「グルル」

「あの、その子は定春ではなく、フオウさんです」

マシユは寝袋男の珍妙な物言いに怖気ることなく、謎の動物の名前を訂正した。彼女の声に寝袋男……は、あんまりな言い方なので、特徴的な銀髪色の癖っ毛から、銀髪天パとでも呼ぼう。銀髪天パはマシユを見て、次にこつちを見て、最後に手元のフオウを見て眩いた。

「…………あれ、よく見りやお宅たち誰。もしかしてまだ夢だったか……」
「夢ではありませんよ。ここはカルデア、人理をより強く、より長く継続させるための機関。人理継続保証機関カルデアです」

マシユの言葉を聞きゆつくりと寝袋から出て窓に近づく。何度か瞬きをして現状を飲み込んで、頷いた瞬間。

「いや、まじでどっこオオオオ!？」

男の気持ち良い絶叫が響き渡る。

あんな絶叫を生で見ることは早々ない。

とんでもないところに無意識のうちに来てしまった。

藤丸はこれから先の不安に苦笑いで応じた。

人理焼却へ腹痛と眠気

「いや、まじでどこオオオオ!?!」

銀髪の男が絶叫、藤丸不安に駆られる。

おさらい以上。

寝袋から出てきた男の容姿は現代的とは言えない。

上下黒色の服装に、青雲模様のある着物を右腕だけ通している。銀髪の天然パーマ、独特の感情を宿す腐った瞳。そして、ひっそりと目立つのは彼の腰に携えた木刀。着物の雰囲気漂う服装で、過去から来た人かとも想像するが……木刀を携える侍なんていたのだろうか。

「おい嬢ちゃん(こ)どこ(こ)?どこなの!?!」

「カルデアです」

「フオウ」

「いやカルデアってどこだよ!?!」

「マシユ、カルデアって俺もよく分かんなくて」

ともあれ、カルデアの存在を貫き通そうとする姿勢のマシユに柔らかに説明をしてもらうしかない。狼狽まくる彼を見ていたらこっちが落ち着いてきた。いい歳した大人が騒ぐ姿はある意味ためになる。

不審者を視界の外にしてマシユと話をしようと視線を向けたとき。

「(こ)ら(こ)ら、廊下で叫び声を上げるものじゃないよ。ワンパクな人はすでにいるからね、これ以上廊下から閑静さを奪わないでほしい」

廊下の奥から歩いてきた長身の男によって遮られた。

「賑やかな場所にキミがいるのは珍しいね、マシユ。ふむ、彼らは見慣れないが顔に覚えはある」

「はい、レフ教授。お二人は一般候補生。恐らくは本日最後の入館者です。そして、お二人とも廊下で睡眠をとられていたので起こしていたところですよ」

大雑把に緑色の男は、緑色のシルクハットを被り、長い茶髪が似合っていた。黒い瞳で銀髪の男と自分を見比べると、にこりと笑ってみせる。

「ああ、どおりで寝癖があるわけだ。」

坂田 銀時、それに藤丸 立香。二人は一般候補生だったね。はは、寝ちやつてたか。それはシミュレートを受けた影響だろう。意識が覚醒しないままゲートから出たせいで、一種の夢遊状態になっていたわけだ」

「いやいや、その説明で俺がここにいる理由は解決しねえよ！」

「俺もここに来るまでの記憶がないんですけど？」

緑色の男から出た名前で、銀髪の男が坂田 銀時という名前と知る。銀時も彼に食らいつき、現状の説明を求めろ。

「そうか、カルデア人事部門の交渉は記憶にすら残らない鮮やかな手口だったか！」

「ただの誘拐じゃねえか!？」

銀時の声を聞いてレフは「む！」とわざとらしく言い放ちシルクハットを指で弾いた。

「これ以上の長話はいけない。もうすぐ所長のご挨拶が始まる。ボーイコットしようものならあとが怖い。この廊下を真っ直ぐに行けば着くから、その話はあとだ」

「おい話をはぐらかすな！」

「レイシフト？ マスター？ いきなり呪文唱えられても覚えられないので一時停止できますか？」

立香と銀時のことはお構いなしに話を進める。

「これでも忙しい身でね。ちなみに、今日の晩ご飯はハンバーグだ」

「晩飯の下準備する気じゃねーか！」

レフの話の締め方に抗議の声を上げているとマシユが彼を庇った。「あの、先輩たち！ レフ教授もお忙しいと思いますし、そろそろ所長の挨拶も始まります！ 私がご案内します、急ぎましょう」

「ちよちよ、背中押すな。分かった、分かったから！」

「晩ご飯、お邪魔しますね」

二人の背中を押してマシユはそそくさと歩き始める。

会議室と思わしき場所に案内されて、二人は静かになかに入る。
が、それは余りにも遅く呵責な謙遜だった。

「チツ」

入室一番、モニターの前に立つ綺麗な女性が舌打ちで藤丸たちに精神的ダメージを与える。

席に着く人たちの大半は我知らず、と藤丸たちを見る素振りもない。だが、金髪の男は興味津々と目を見開き、凝視していた。

藤丸と銀時は視線を交差させ、各々が日本人としての誇りを胸に。即座に危機的状況を脱却すべく行動する。

「は、腹が痛いんでトイレ、どこですか？」

銀時は腹痛を訴え、ゴロゴロと雷鳴の如く腸を鳴らす。

「貴方、もう戻ってこなくて結構よ」

白髪の女性は頬に青筋を立てる。

魔術回路のように張り巡る青筋に、金髪の男は「ほう…」と感慨深げに呟いた。

次に藤丸である。

彼の行動は、銀時の腹痛によつて音が掻き消されてしまい、銀時の後手に回っていた。

「ズピ〜」

「先輩、立って寝るとお身体に悪いですよ」
立ち寝。

直立不動による脳の休息を選択。

「貴方も！せめて座って寝なさい！」

白髪の女性、これに対して助走をつけ、傍聴席を飛び越えて藤丸に飛び蹴りをかます。

せめて横にしてあげようという慈悲だ。

「いぎやあ!?!」

「せんぱい!?!」

藤丸の顔面に乗り上げた女性は、そのままサーフィンのように藤丸を下に轢いて廊下に飛び出した。

その横で銀時は腹を鳴らす。

「なんなの、47番に48番！本番前の緊張が足りなさすぎる！入室して3秒で退出希望と居眠りつてあり得ないでしょう!？」

魔術師以前、社会人としての自覚が足りないわ!!」

「え、これって就活なの？いまから企業説明会？」

「」

「終活よ！人類の終わりを回避するための活動!!？」

銀時に言い放ちながら踏み出す。

その足が藤丸の腹に減り込み、断末魔の末に藤丸は意識を手放す。

「47番と48番、アナタたち一般候補生の手は必要ありません。今すぐに自室へと戻るなり、トイレで履歴書を破るなりしていなさい」

「……………そーかい、邪魔して悪かったな」

ズカズカと歩く女性の足が藤丸の身体を降る瞬間、男性の社会の窓を押し割ったことを銀時とマシユだけが目撃する。

その悲惨さを悟った視線、あまりにも痛々しい。

「」

「先輩の先輩が……」

男性でないマシユでも、その機能がどれくらい大切なのかは知っている。カルデア職員はマシユにそういった知識を最低限しか与えていないが、マシユの学習能力は半端ではない。生命の誕生、育みかたはカルデアベースに秘密裏に侵入し、習得済みである。

ゆえに慌てる。

あわあわと藤丸を担ぎ、猛ダツシユでその場を離れるマシユ。

銀時も彼女に続き、腹を沈めるために会議室を出る。

「いい、ここに来たマスター候補生！あなた達は選ばれたの、特異点修復を成す道具として。そこに自由意志は許さない、失敗なんてもつてのほか。」

歴史ある魔術師たち、死ぬ気で人理の礎となりなさい」

ドアが閉まる直後、オルガマリーの冷酷な言葉が銀時の耳に残って

いた。

人理焼却へ人との会話

マシユ・キリエライトはカルデアに数あるプライベートルーム、そのうち一室を選び開け放つ。

「ドクアアアアアア!!」

「いやあああああ?!」

マシユの声に驚き叫び飛び跳ねひっくり返る男性。

手に持っているイチゴのショートケーキは決して落とさず、自ら先んじて床に背中から落ちた。

「急患です、診てください!」

「マママ、マシユ!」

急患つて、その子かい!? 見ない顔だけど…」

そんな彼への心配を後回しに、マシユは診察を急かす。

動揺しながらもケーキをテーブルに置き、楽しみを壊すことなく状況把握に努める。マシユが急かすほどの事態がよほど珍しくあったからだ。

「私はお母さんではありません!」

この人は48番目のレイシフト適性者、藤丸 立香です!

つい先ほど、47番目のレイシフト適性者、坂田 銀時と入館しました!」

マシユは簡潔にことを伝えながら、藤丸を男性が座っていたベッドへと降ろす。

「それで、藤丸くんになにが起きたんだい?」

「はい。所長の逆鱗に触れて、魔術回路で強化された脚で顔面を轢かれました」

「うへえ…想像できちゃうなあ…」

まあ顔の形が変わってないから温情はあるか」

軽口を叩きながらテキパキと触診を行う。

慣れた手つきで数十秒。

「うん、症状がわかったよ。ただ寝てるだけだ」

「そ、そんな…。だって先輩は所長の飛び蹴りを受けて、そして…そし

て…先輩の先輩も踏まれていました」

右と左の人差し指を突き合わせ合い、やや赤面しながらマシユは状況を伝える。後出しではあるが、それはドクターと呼ばれる男の診察に不服があるからだ。

「ええ!? そんなハードなプレ…つと、いけない」

ドクターは慌てて口を閉じる。

マシユ・キリエライトに不純な知識は極力与えないようにする。

「分かった、そこら辺も含めて見ておくから。マシユは今から特異点修復に行くんだろう? Aチームの君がいないと始まらないだろうからね」

「は、はい…それではドクター、先輩をよろしくお願いします!」

マシユは丁寧にお辞儀をして、慌ただしく去っていく。

見送ったドクターはドアが閉まるのを確認しておかしげに声を出す。

「……だ、そうだ。入館早々、とてつもない不運が重なったね、藤丸くん」

「たはは……。さっきまで眠くて眠くて」

その、白髪の女性は偉い人なんですか?」

「名前はオルガマリー・アニムスファイア。藤丸くんに分かりやすく彼女の評価を伝えるなら、社長令嬢かな」

「それは…とても厄介そうです」

「あははは…その反応分かる、分かりすぎて怖いよ!」

上半身を起こしながら藤丸はドクターの容姿を見る。

白衣を纏うポニーテールの優男。それが第一印象で、さらにマシユとの会話を聞いて人間性を読むと、誰とでも仲良く付き合える人間だった。

人懐っこい笑顔は警戒の類を不要とするほどで、カツアゲされる絵が似合いそうだ。

ブーツとそんなことを考えていると、ドクターの腕輪から音が鳴る。

「はい、ロマニです」

『私だ。マシユが到着次第、レイシフトを開始する。念のためにキミもこちらにきてくれたまえ。』

医務室からなら2分もかからないだろう?』

「あ、ああ…。分かったよ、レフ」

どうやら通信機器のようで、技術の発達が自分の知る一步先を行っていた。

レフとは、先ほどのシルクハットの男性だろう。彼の言葉通りならここは医務室ということになってしまふ。

「えつと、ここは医務室…には見えないです」

「ここは僕のサボり場なんだ。まあ、藤丸くんが来たから今日からキミの部屋になるんだけどね」

あつははく、と笑うドクター。

テーブルからコーヒーを手に取り優雅に飲み始める。

「いや、そうじゃなくて。早く行かないと間に合いませんよ?」

「大丈夫。ここからだどう足掻いても5分はかかる!」

だから敢えて自分を落ち着かせるために、いまこうしてコーヒーを飲んでいるのさ」

「手、震えてるじゃないですか…」

やや情けなく手を震わしながら、なおもドクターは笑顔を崩さない。目元は暗くなっているが、彼なりの強がりか。

そんな表情もすぐに元に戻り、ドクターはこちらへと向き直る。

「さて、行かないと。だけど自己紹介も無しなんて味気ないし、それくらい許されるさ。」

僕はロマニ・アーキマン。カルデアの医療に携わっている。ロマニも、アーキマンも言いにくいのか、皆んなは僕のことをロマンと呼んでくれるよ」

「藤丸 立香です。えつと、高校生です…気づいたらここにいました。マシユは俺のことを先輩って呼ぶんですけど、会ったのは今日が初めてで…」

ずっと引つかかっていたことがある。

マシユ・キリエライトが自分を呼ぶときの呼称、先輩。

その言葉は指導を施される立場や、当人の実力を認めた者が慕うときに呼ぶもの。それなのに、マシユとは今日が初対面なのに先輩と呼ばれる。簡単に受け入れていいものなのか、気になっていたのだ。「ふふ、先輩か。キミ、短期間でマシユと仲良くなれるなんて凄いことだぞ?」

「そ、そうなんですか?」

「ああ。理由はあとで話そう。それじゃあ僕は――」

そのときだった。

照明が途切れ、大きな揺れを伴い異常を報せる。

「な、なんだ!?!」

「揺れ…爆発音…!?!」

人類を絶望に叩き落とす鐘がカルデアに轟いた。



刻は数分遡る。

「くそ、あんな肌寒い廊下で寝たせいだ…。つか、いつからあそこで寝てたんだっけ?俺、直前までなにしてたんだ…」

銀時は相変わらず腹を鳴らしながら、トイレを探してヨタヨタと彷徨っていた。

活動限界にはまだ程遠い。だが、右手で腹部に触れて鎮めておかなければ、アレの脅威がいつ迫るか分からない。いたって真剣に、歩幅は小さく、等速直線運動を心がけて移動する。

「まじトイレどこだよ…。似たような扉ばっかで見つかんねーよ」

ふと、廊下の窓に視線を向ける。

3メートルはあろう大きな窓。汚れ一つない綺麗さから、手入れのこまめさがうかがえる。

坂田 銀時は大きな窓、高い天井に違和感を感じない。

それは本人が、そのくらいの高さなら必要な場所もあるだろう、と。天人を前提にした思考がどこかにあるからだ。

ただ、銀時はこの世界がなにか違う気がすると思っっている。

自分の知る、天人が跋扈する江戸とはズレがあると。
そんなことを思慮の片隅に、次のドアを開ける。

「おいお前、ここぞでなにしている!？」

この部屋は様々な機器が並び、グラフや数値でなにかを監視している。廊下にはいない人間が多くいることを見て、この部屋は言ってしまうと心臓部だと知る。

「あれ、ここって指令室かなんかですか? すいません、トイレってどこですか。ナビお願いできますか?」

「ここ中央管制室だから! トイレは反対側!」

「ご丁寧にも、お仕事頑張ってくださいね」

「アンタ邪魔しかしてないからな!？」

奥に浮かぶ球体に目もくれず、銀時は管制室にいるオルガマリーをチラリと見てそそくさと退散する。

ついさつき揉めたばかりだ、忙しいところを邪魔するわけにはいかない。

そんな銀時の判断は、管制室を訪れた時点で無意味だった。

「あんのクソ適性者め……」

ブチリ。

魔術回路の一本を焼き切る勢いで青筋を立てる。

彼女の苛立ちは留まるところを知らない。

坂田 銀時、藤丸 立香。二人の一般候補生に舐められたことが、アニメスフィア家当主としての誇りに傷をつけた。自分よりも劣る人種の反骨を魔術師として許せないのだ。

「二度泣かせてやろうかし、あうっ?!？」

しかし、それもまた唐突に訪れる。

オルガマリーの腸内で、アレが凄まじい勢いで稼働。まるで銀時の雷鳴に呼応するように、オルガマリーの腸内を襲った。

それとは、便意。

苛立ちとともに、数日ぶりの便意発生。

「あれ、所長どちらへ?」

「……………新人指導よ」

じきにレイシフトしようという最中、責任者でもある彼女が現場を離れるなど：それもトイレになど威厳がない。そういつた思考が彼女のなかにあるため、新人研修を装いドアへと向かう。

なお、腹部を右手で押さえながら。

「え、けどなんだか姿勢が低いですよ。」

もしかして、うん——」

「も、元からよ。ぐっ……いいですかアナタたち！あのクソ天パをシバいて戻ってきたら……」

だが悲しき。

オルガマリーに便意を堪える忍耐力はない。

魔術師として修羅場を見てこようと、肉体を伴う修羅場など極少数。

「直ぐレイシフト出来るようしておきなしゃいっ！」

即座に駆け出し、ドアの向こうへと消えた。

「いやそこ中央管制室付属^のトイレエエエエエ！」

それも、中央管制室に勤務する職員のためのトイレに。

次の瞬間、中央管制室、そして目下のレイシフト適性者が入るコフィン^は爆発とともに、赤く黒く変色していった。

人理焼却へキミのとなり

赤い世界。

壁に広がる紅、空気を焦がす緋、地面を塗り潰す^{あか}血。
なにもかもが燃え上がり、建物と世界が瓦解する不協和音で聴覚は
役目を果たさない。

部屋に入って先ず、一面の景色を目撃して言葉を失う。

次に、鼻腔に突き刺さる臭いの正体を知って吐いた。

「――」

自分の吐く音すら聞こえない。

しかし立香は、吐くことでようやく正気を取り戻す。

正気を保つための手段を身体が本能的に実行した。

赤い世界を受け入れてはならない。人として出来る恐怖の拒絶を
終えて、名前も知らない部屋で、ただ一人を探すために立ち上がる。

正体不明の、とにかく沢山並んでいる2メートルを超えるカプセル
のなかに人がいる。生死は分からない、考えたくもない。

ガラスは割れ、血が付着している。

理解したくはないが、見る限り生存は絶望的だ。そんな人たちが軽
く三十人は超えていて、その一つ一つを確認しても目的の一人はいな
い。

幾つかのカプセルは空洞だった。

もしかすれば、この血溜まりのどこかに…。

「あ、あ…」

身体が熱い。

蒸すほどに温度が上がっているのだろう。

呼吸をすることが辛い。だが動かなければ死ぬ。

肉体的、精神的に終わる。

時の不運を呪った。なにもかもが怖くなって、意味も分からずに涙
が垂れる。

理不尽な出来事から目を逸らして、これまで生きてきた自由も捨て
て眠ってしまえば、楽になれるだろう。

「そう、しようかな」

背中に小さな衝撃が走る。

「フォウツ!!」

「ぐツ!?」

背中への衝撃によるめくも膝を折るまでではなく。テテテと背中を伝い肩に到達した小柄な白い犬、フォウの姿を見てここに来た決意を思い出す。

『藤丸くん、急いで外に逃げるんだ。いまなら間に合うかもしれない、きみだけでも逃げてくれ!』

『待って、ください…。マシユが、あつちには彼女がいる!』

『あつ、藤丸くん待つんだ!ちよ、足速っ!』

この釜茹で地獄のような場所には自らの足で飛び込んだじゃないか。

不安に駆られて、真っ直ぐに走ってきたんだ。どうしても、彼女のことを気にかかってしまった。もう御託は並べられない、行くしかないぞ。

(諦めるな、探せ…!)

チラつく少女の姿を炎の向こうに願う走る。

「マシユ……どこだ、マシユ!!」

ほんの少しだけの面識しかない、希薄な少女の名前を呼ぶ。名の知れぬ恐怖を誤魔化すため、いまできる一步を踏む。

「いたら返事をしてくれ、どこだ。頼む、頼むよ…!」

とにかく駆け回り、道と呼べるか怪しい場所すら踏んで行く。靴の裏から伝わる熱に怯えながら、これ以上に怖い思いをしているからと足を動かす。

咳き込みながら走って、拾える情報全てに意識を向けて。

「せん、ぱい…」

身体が勝手に動いていた。

フォウが肩から降りるよりも先に、小さな声を耳で聞いて走った。不思議だ、あんなに遠くで、大声も上げていない人の声を聞くななんて。幻聴かもしれない、だがそれでよかった。

「！」

事実、探していた人は目の前にいる。

「……………」

喜びも束の間、言葉を失う。

マシユの下半身が見当たらない。瓦礫は地面と密着していて、探し人の上半身は死に絶えつつあった。

素人目に分かる。分からなければならない。

マシユは死ぬこと、この事態は最悪だということ。

なら、彼女になんて声をかければいい。

…そんなもの、決まっている。

「ツ……………」や。また、会ったね」

しゃがみ込んで、マシユの視界に映り込む。

マシユと視線が合った瞬間、答えは出た。

「どう、して…」

「助けにきたよ」

とっ散らかった不安を全て放り投げた。

現実には自分に解決できる許容範囲を超えている。

マシユの下半身を押し潰した瓦礫を退かす知恵も力もない。そして、辺り一面の火事を消化する機械も持っていない。

「逃げ…て。私は…助かり、ません」

『警告、カルデアアスの状態が変化しました。近未来観測データを上書きします』

マシユが悲壮な声を漏らす。

アナウンスがなにか言っている。

それがどうした。

こんな終わりが迫るときもウジウジしてられるかってんだ。

『上書き、完了。近未来、百年先の地球において、人類の痕跡は発見できません』

軽薄そうな少女が、意外にも感情豊かなことを知れた。

『人類の生存は確認できません。人類の未来は保証できません』

下手すれば自分よりも力持ちだし、行動が早い。

「そ、んな…！逃げる、どころか…。もう、人類は…」

「終わらない。人類は終わらないよ。俺も、マシユも生きるんだ。コンピュータがなんだよ…未来が視れるからって、勝手に俺たちを終わらせて良いわけないだろ…！」

マシユの言葉を遮る。

直感が訴えた。

マシユに絶望を与えるな、と。だから否定する。

炎が迫る。

絶望が視界から歩いてくる。

視覚が憎い。格好つけているのに、決意が裏返りそうになる。

『特異点を抽出…発見。西暦2004年、日本冬木市と断定。これよりマスターは霊子転移レイシフト、これの調査にあたってください』

死ぬ間際っていうのは、こんなにも心が曲がるのか。

痺れを通り越して、身体が脱力し始めた。

受け入れたくないのに…。

「大丈夫、だから…」

視界が赤く染まり始めた。

恐怖で塗り潰されていく。

俺は、それが視覚からなのだ。

夢を見ることがすら叶わずに、絶望に叩き落とされる…。

マシユがいる前で、藤丸の声はどんどん擦れ、震える。

堪え続けている恐怖がいまにも爆発しそうなとき。

「よく。隣、失礼するぜ」

藤丸の頭に大きな手が乗り、ワシヤワシヤと撫で回す。

それだけで、心が救われる。

「銀時、さん…！」

「よく頑張ったな立香」

「フォウ！」

藤丸の横には、銀時が立っていた。

足元を駆けるフォウが、銀時を案内してくれたのだと知る。

彼は打開策を持ち出すわけでもなく、どかつとその場に座る。この

絶望が変わるわけではないのに、押し潰される恐怖が取り除かれていく。

「そのバカでけえ宣言、俺も加えさせてくれ。」

「こんなときこそバカやってないと落ち着かねーからよ」

「…はは、すげえ良い笑顔ですね」

にんまりと笑う銀時につられて藤丸が笑う。

その二人をマシユは不思議そうに見る。遠のいていた意識が戻るほどに、二人の行動が分からないからだ。もうすぐ死ぬのに、なぜ笑っていられるのか。

『コフィン内マスターのバイタルは基準値に達していません。レイシフト適性マスターを再検索……。発見しました』

「マシユ、次に目え覚めたらなにがしたい。」

立香が叶えてくれるつてよ」

そんな疑問のなか、銀時の質問が飛んでくる。

「えっ、あ、ああうん！言つてごらんマシユ！」

突然の話に藤丸は慌てながら、その意図を察して合わせていく。

答えても、答えなくても結末は変わらない。そう思いながらマシユは口を開ける。

「…なら、私は…空が、見たいです」

答えないと明日が来ない気がした。

答えなかったら二度と彼らと会えない気がした。

なによりも、二人の話の輪に入りたかった。

「空か…。確かに、ここの外は吹雪がすごいもんね」

「決まりだな。ならやることはピクニックだ。」

山なり海なり行つて、ゴロつと寝転んで一日過ごす」

「贅沢な一日になりそうです」

ワイワイと盛り上がり始める銀時と藤丸。

なぜ笑えるのか。

その疑問に過ぎった声は、先ほどの藤丸の言葉だった。

“ 未来が視れるからって、勝手に俺たちを終わらせていいわけないだろ…！”

その言葉に銀時は同調した。

たぶん、そんな大したことのない理由だ。

そして、答えとして大雑把なはずが、納得してしまった。

『適応番号47、坂田 銀時。適応番号48、藤丸 立香をマスターとして再設定。アンサモンプログラムスタート、ファースト・オーダーの実証を開始します』

マシュ・キリエライトは笑いながら目蓋を閉じる。

次に目を開ければ、二人が隣にいることを信じて。

異世界で二番目に出会うやつは信用していい

誰かに呼ばれた気がして、意識が落ちていく。
ゆっくり、ゆっくりと階段を降りるように。

暗い世界を、目に見えない階段に足を丁寧に乗せて下へ。

徐々に意識が沈んでいき、その刻は数時間にも感じられた。

そのあいだ、考える余裕はない。

何故だろうと考えて：それすらも考えることが出来なくて理解した。私には、なにかを考える器官が無いのだ。

いまを感じることしかできない。

彷徨っているなかで、楽しいと感じる。

なぜだろう。私には、そんな暇がないはずなのに。

このままでいたいと、どこかで思っている。

「もし、お嬢さん」

そんなとき、外側から声が聞こえる。

優しく、全てを抱擁してくれるような甘い声。

深い眠りからも覚めてしまう匂い。

意識がゆっくりと浮上した。

「う、あ……………」

目蓋を開ける。

ぼんやりとした思考のままだったせいで、空がどんな色かもよく分からない。だから、知らない女性を頼るくらいにはとろけていた。

上半身を起こして声の主を見る。

「起きましたね、おはようございます。

貴女が誰だか、分かりますか？」

「オルガ…マリー」

眠気を引きずりながら、女性の顔を見る。

膝まで覆う黒いマントを羽織り、顔はフードで見えにくい。それでもフードよりも長い紫髪と180を超える身長が特徴的だ。

黒いフードを被りながらも、その奥に見える顔は驚くほどに綺麗だ。そのなかではつきりと見える口元がゆつくりと動き、落ち着かせるように微笑む。

「オルガマリー、いい名前です。それに、貴女の目はとても美しい。傍にいてほしいと思うほど愛おしく感じる」

「あ、え……!?!」

その言葉がオルガマリーの心臓を跳ね上げた。

周りの景色が気にならないくらいに女性の瞳に惹かれる。

言葉通りの意味で捉え、魔術師同士で行われる水面下の陰湿な探り合いを忘れていく。いまは休息のひとときであると、脳が簡単に認めってしまった。

女性が伸ばす腕に身を引くこともせず、頬に触れることをじつと受け入れる。

「なんて柔らかい頬でしょうか。私の手は滑るのに潤っています。

ああ、凜とした瞳と相まって美しい」

「そ、そんな大袈裟な……ええ、でも……えへへ」

ストレスの激減。

オルガマリーの苛立ちや不安、生まれ落ちて取り除かれることのない疲れがほぐれていく。女性の甘言には、それだけの安心感が満ちている。

(あく、すごい気持ちいい。)

女性と話して褒められることがこんなに良いなんて。

えへ、うへへ……)

満ちていく。

満たされる。

瞳から、耳から、肌から安心を注がれる。

オルガマリーがヨダレを垂らしそうなほどに頬を緩ませた。瞬間、女性は笑顔の種類が変わった。

「貴女を食べてしまいたいほどに、ね」

「えへへ………へ?」

恐慌を孕む艶やかな微笑み。

美食に頬を緩ませる健啖家。

「いただきます」

蛇が笑い、獲物が身を硬らせる。

いま、オルガマリーは餌として認識し、有頂天から地獄への失墜で意識を失った。

—
—
—

「なあ、おい」

次に目が覚めたのは、頬を叩く音。

そして男性の気怠げな呼び声を聞いてだ。

「嬢ちゃん、なあって」

凄まじい倦怠感が残る身体をゆつくと起こす。

少しだけ視線を上げると、そこには青い短髪の男性が欠伸をかきながらヤンキー座りをしていた。

状況が飲み込めないなか、男性が持つ杖が目に入る。

ただの杖ではないと察し、次に男性の正体に目を向けたとき。男性は杖を持ち上げて、杖の先を向けてきた。殺気があるというのに、こちらを避けさせる暇もなく杖は突き出された。

「せめて胸を揉ませ——」

直後、背後で聞き覚えのある女性の声が聞こえる。

杖は頬の横を通り過ぎ、恐る恐る後ろを振り返る。

「アヂイイイイイ!!!」

「ギャアアアアア!!!」

背後には、メラメラと燃え上がる女性の面影。

脳天に杖が刺さりながらも手を伸ばす執念にオルガマリーは絶叫した。

間もなく女性は消え去り、オルガマリーは呼吸を整える。

消えた女性然り、女性にトドメを刺した男性然り。彼らの正体にた

どり着いたからだ。

(サーヴァント……！)

敵か、味方か。

燃え盛る都市はなんなのか。

溢れんばかりの疑問をぶつけようと口を開きかけ、またも男性の行動が先をいく。

「これ観た？FGOの新オープニング。

めっちゃイカすぜ、とくに俺とか、俺とか！」

懐から取り出した通信機器、携帯電話の画面を見せてくる。そこに映し出される映像を最初から黙々と観て、ゆっくりと深呼吸する。

そして、黒い空を見上げた。

「いやこれ私どうなってんのよオオオオオ！」

オルガマリーの絶叫は、メドューサによるストレス発散をも上回ったとか、なんとか。

器は独りじや大きくならない

「レフ助けてレフ助けてレフ助けてレフ助けてレフ助けてレフ助けてレフ助けてレフ助けてレフ助けて」

オルガマリーは体操座りで遠くを見つめ、呪文の如くレフの名前を呼んでいた。

そんな彼女に声を掛けられず佇むのは立香、マシユ、銀時。青髪の男性、キャスターはというと、耳糞を掻き出していた。

「おいキャスター、うちの所長になにしてくれてんだ」

「FGO2部の後半OP観せた」

「ネタバレじゃねえか！いまは1部だ馬鹿野郎！」

「いやアンタもなに言ってるんだ」

立香の冷ややかなツツコミに動じない銀時。

マシユに至ってはこれまでの経緯をオルガマリーの耳元で囁いていた。

なお、マシユが研究服から戦闘服になっていたり、キャスターといつ遭遇したのかは割愛する。

読者はほかの2次創作で腐るほど読んだことだろう。

「まあ良いじゃねえか。オメーさんたちの探し人も見つかったし、あとは本陣に乗り込むだけだ」

「さっさと行こうぜ。セイバーってのを倒せば万々歳なんだろう？カルデアってのと連絡できねーんだ、勝手にやっちゃまおうぜ」

「それで事態が収まるなら意義なーし。マシユのことも気になるし、早く終わらせるに越したことはないよね」

「所長がお疲れですので、不肖マシユ・キリエライト頑張ります」

「フオウー！」

それぞれが意気込みを見せる。

4人と1匹の和気藹々とした雰囲気オルガマリーは横目で確認。

(な、な、なんだというのこの空気はツ!?)

うわ言を漏らす外面とは裏腹に、内面ではかなり焦っていた。

(マジなんなのよ、同窓会に遅れてきたポジション!?)

中学時代パツとしなかったのをそのまま引きずってる感じ?!

サイレン○サイレンの『吉○さん』みたいなやつじゃない!もうすでに最悪の事態なのに、帰りたくても帰れないじゃない!」

両手で頭を抱えながら上半身を逸らしていく。

無論、カルデアの目的云々も立香と銀時には説明済みだ。

ここにきてオルガマリーのボツチが加速するのは誰も口に出さない。

「所長、途中から声に出ています」

「そりゃあ出るわよ!なんなのよこの新オープニング!

私これどこに沈んでんの!?!第二部つてなに!?!それにこれ、Aチー……」

混乱が混乱を呼び、ついに吹っ切れたと言わんばかりにオープニングにツツコミを入れる。その途中、電子音が立香の腕につけたバングルから鳴った。

『つ、繋がった!?!おおい、誰か聞こえる!?!』

全員の注目が集まる。

声の主はロマニ。必死な様子から咄嗟に藤丸が反応した。

「ドクター!よかった、ご無事だったんですね!

こちら藤丸、マシユ、銀さん、フォウ、それに所長がいます!」

最後に聞いた切迫した声と変わらないことから、カルデアの状況を想像しながらまずは生存報告を優先する。

『おお、藤丸くん!それに皆んなも無事で……つて、ええ!?!所長もそこにいるのかい!?!』

ロマニの安堵も束の間。

所長の生存に大袈裟な反応を見せる。

「……ロマニね。余計な言葉は気に食わないけど、それよりもなぜ貴方がそこにいるの。レフはどこよ?」

冷ややかで苛立ちが込められた言葉。

生存を喜んでいないと受かったオルガマリーの機嫌は最悪だ。し

かし、銀時はロマニの反応に別の意味があることを察した。

『本当に所長の声だ……。っと、失礼。』

所長、落ち着いて聞いてください。カルデアはいま、原因不明の爆発によって職員の生存者は20人もいません。そして、僕が指揮を執っているのは僕より上の階級がないからです』

「……………は？」

ロマニの言葉を咀嚼出来ず、だがふざけた事実だと根底で理解する。その返答はアホのように口元を開け、恐怖から顔を背けようとする声だった。

事態はそれでも待つてはくれない。ロマニはその反応を初めから知っていたように、受け止めろと意味を込めて続ける。

『レフ教授がいた管制室が爆心地。つまり、彼の生存は絶望的です。通信手段はおろか、近づくこともままなりません』

「あ、あ……レフ、嘘よ……」

膝から崩れ落ち、いまにも泣きそうな顔で地面を見つめる。それだけの存在だったことが想像できるが、ロマニは追悼に費やす時間がいまではないと判断している。

『心中お察ししますが、現状について……』

早口でマスター候補者の容態……危篤状態を告げる。

到底無視出来るものではないと、流石にオルガマリーは意識を切り替えて47人の冷凍保存を指示した。許可のない冷凍保存は重犯罪だが、状況を鑑みて生存を優先させた。

この確認を終えるや、オルガマリーは疲れ果てた声で告げる。

「少し、1人にさせて」

出会って数時間の立香だけでなく、マッシュやロマニもかける言葉を持つてはいなかった。

オルガマリーの背中を横目で見ていた銀時は、頃合いを見て歩き始めた。

瓦礫にもたれかかるオルガマリーは無気力そのもの。

このさき、永遠に会うことの叶わない存在に馳せる時間。人類史の存続を引き換えに1秒の失意を過ごしているとしても、心が立ち直れないことには本人にもどうしようもない。

「隣、いいか？」

そんなとき、最も話したくない男が隣に現れた。

「さつき私は1人にしてと言ったはずよ。アナタ、女性のあとをつけるなんて失礼にも程があるのではなくて？」

厳しく言葉を突きつけるつもりも、声音は宙を浮遊するほどの勢いしかなく。簡単に男の相席を許してしまおう。

「トイレつつーわけでもなさそうだったからな。」

え、まさか……」

「いま思ってること口に出したら呪い殺すわよ」

言動一つに苛立ち始めたとき。

「ま、骸骨が跋扈してんだ。ガキンチョ1人ってのは心配なわけよ。心配ついでに独り言だ、煩かったら立香たちんところに戻りな」

最もらしい理由を押しつけて、銀髪を瓦礫に落ち着かせながらゆっくりと語り始めた。



「とあるガキがいた。親も知らず、兄弟もいない。知ってるのは血の臭いと、戦場での生き方だけ。一日中駆け回って身体を返り血塗れにする、そんなヤンチャ坊主だ」

目の前のヤツを斬って殺して、漁って飯を喰らう。

そんな当たり前な日々を過ごしていた。ハタから見れば異常な生き方も、ガキは物心ついたときからしてきたこと。だから悪いとも思わない。それを指摘する人間も現れず、意味も考えずに敵を斬り続けていた。

“屍を食べる鬼がいると聞いて来てみれば……。
随分と可愛い鬼がいたものですね”

そんなある日、1人の男がガキに手を差し出した。ガキは男を殺さず、言われるままに男のあとを追った。

ガキは男のもとで初めて文字を、言葉の意味を知った。

男はやがて塾を開き、身寄りのない子供たちを集めて教えを説く。日が進むにつれて子供たちは増え、ガキはいつしか仲間も手に入れた。戦場じゃ永遠に知らなかった道徳だ、ガキは徐々に人らしくなっていくた。

“筋は良い。けど残念、私には届きません”

そして、初めての負けも知った。男は強かった。戦場で幾万人も斬ってきたガキを笑顔も崩さずに圧倒するほどに。あまりの悔しさに1日中挑んだが、ついぞ勝つことはなかった。それも新鮮で、ガキはそんな時間が好きになっていった。

ガキは次第に男を恩師として見るようになり、周りもそれを面白おかしく言っていた。んな日々が永遠に続けば良いと本気で思っていた。

そんなとき、恩師はとある組織に連行されて行った。

名目は不穏分子の育成という名のテロリスト。国にあだなす人間として、恩師は冤罪で牢に繋がれ、やがて死刑を言い渡された。

ガキは怒り狂った。ガキの仲間もそれに同調し、先生を奪った国から先生を奪還するために剣を握った。

たった1人のために国を相手にしていたら、いつの間にかクソみてえなヤツらが割り込んできて、瞬間に地獄は完成した。しかし、ガキはよーやく先生の元にまでたどり着くことができたんだ。

「戦場でな」

「……え？」

拘束された恩師が戦場にいる。

唐突な話にオルガマリーは思わず疑問符を漏らす。

なぜ戦場にいるのか、と。

自分の話に存外聞き入り、鋭く感情に表れるほど熱中していること

に不思議な感情を抱きながら、銀時は少しだけ視線を上げた。

この先にある、どうしようもない結末をまた噛み締める。

「目の前には斬首を待つ先生。後ろには拘束された仲間。

早い話、負けたんだよ。何年も闘って、沢山の犠牲を積み上げた果てに、負けちゃったんだ」

「――あ」

僅かな間をおいて、オルガマリーは結論にたどり着く。

頭の良さが窺い知れるほど想像力がある。そして、悲嘆と恐怖で結末を察する表情には、冷徹で完璧であろうとする姿はない。オルガマリーの本当の顔を知れた銀時は、自分の話に興味があつたと確信して話を続ける。

「ヤツらは選択を迫った。

先生の首を斬るか、仲間を斬るか。どちらかしか助けられず、もう片方は死ぬ。それ以外の道は……思い浮かばなかった。

仲間は必死に自分を殺せと言う。当然だ、自分の命よりも先生の命が大事だったからな。俺だつてそう言うさ」

「それで……なにを選んだの？」

オルガマリーの問い。

どっち、ではなく、なにを。

ほかの何かを選択したことを期待していたのだ。

でないと、男は報われないではないか。

息を呑み、銀時の次の言葉に注目する。

銀時もオルガマリーの様子を知りながら、ただ事実のみを口にした。

「先生を斬った」

“ ありがとう ”

恩師の最期の言葉を思い出しながら。

「この手で、首を斬った」

返答に期待通りの答えは出来ない。

オルガマリーは顔を俯かせてしまった。

報われないということ、いまの自分と薄らと重ね合わせていた。

幼少期から壮絶な人生を歩んでも、結局たどり着く未来は望む場所じゃない。なら、自分だってそうなることも大いにあり得る。

「だがよ」

「あ……」

ポン、と。

オルガマリーの頭に手をのせる。

暗い心に、明るく声をかけた。

「斬ったのも、そこに立ったのも自分の意思だ。後悔してねえし、後悔しちやならねえ。それだけが成長したガキに出来る責任の取り方だった」

ようやく。

オルガマリーは銀時の表情まで見る余裕が生まれる。

そこには作り話では到底作れない、朗らかな笑みを向ける強い意志がある。

「戦場で大切なモン失ったガキには、何故か人との縁が繋がって大切なモンが増えていった。だから今度は取りこぼさないように、テメエに出来ることなら全力で身体張って守った。

だから今も、どこかでしぶとく生きてる。失ったモン忘れないように、手に入れたモン失くさないように足掻いてんのさ」

嘘と吐き捨てるのは簡単だ。

いままでも自分がしてきたことをここで繰り返せばいい。

だが…。

罵詈雑言を浴びせたにも関わらず身を案じて様子を見にきた。拳、きつと身の上話をして背中を叩いてくれている。

「もう2度と、守れなかった笑顔がないように」

「……そう」

所々、隠しきれてはいなかったけど。

銀時の実体験を語っているのだと確信した。

銀時はオルガマリーの表情から陰が消えるのを見届けてから立ち上がる。

「オルガマリー、俺たちを信じろ。」

汚くていい、完璧じゃなくていい、笑ってりやなんとかなる。完璧じゃ誰も寄りつかねーし、完璧装っても知恵は出ねえ。

俺たちは互いに欠点補いながらこの未来さきのことを考えりやいいんだ」

それに、と銀時は付け加える。

「こんな局面で後から死んだやつが現れても、きっとロクなもんじゃねえさ」

そうやって、銀時は耳糞をほじくり出しながら立ち去っていった。

触媒つて正規ルートで入手してもロクなことにならない

オルガマリーのあとを追った銀時が戻ってきて数分。

不安が拭えない面々のもとに、何事もなかったと態度で言うようにオルガマリーは戻ってきた。

「待たせたわね」

本当に大したことはない、と思わせてしまうほどに彼女はケロっとした表情で言う。数十分前の荒れ模様はどこへ行ったのか。事実を知る銀時にロマニが問いかけるが、「知らね」と鼻くそを飛ばして返事をされる。ロマニ、そしてマシユにとつて、オルガマリーの不機嫌を宥めるのが容易ではないことを知るからこそ、銀時の手腕が桁外れであることを理解した。

彼らの困惑を気にせず、カルデアの方針を問う。

ロマニの報告、対応を確認し終える。

「概ね異論はないから、この特異点を修復するために聖杯戦争を終わらせるわよ」

要点を掻い摘み、結論を出して指針を定めた。

ここまでで嫌味の1つあっても仕方ないと覚悟していたロマニは肩透かし。マシユ、立香はスムーズな方針に意気込み、銀時とキヤスターは肩を回す。

「やーっと出番かよ。街ん中じゃ骨、寺に行きや変な骨。もう魑魅魍魎は飽きたぜ」

オルガマリーはマシユに寄り、なにか言葉を伝える。

キョトンとしたあと、マシユは慌ててなにかの準備を始めた。

右手を腰に当てて、左人差し指を銀時に向ける。

「そのためにも先ずは、坂田 銀時。

貴方はサーヴァントを召喚しなさい！」

「サーヴァントの召喚って、さつきロマンが言ってたやつか。なんだっけ、まどマギ召喚すんだっけ?」

『違うから! 脚本的にも、絶望度的にも通じるものはあるけど僕が好きなのはマギ☆マリだから!!』

僕は現実のアイドルにも、空想の魔法少女にも裏切られたくない! 理想を追い続けていたいんだよ!』

「煩いわよドルオタ!! 使えるもんなんなんでも使うの! アンタのせいでマギ☆マリが召喚されたら絶望されてでも周回させてやるから!」
『周回させるってなに?! え、もしかして全体宝具で実装が決まってるのかな?.....ちよ、無視?!』

あのバカはほっときなさい。

オルガマリーは呆れ気味にロマニを無視し話を戻す。

「本来の聖杯戦争なら7騎以上は召喚できなかつたでしょうね。けど、ここは既に聖杯が在るだけの別のモノになっている。なら私たちカルデアがシステム・フェイトを使つてのサーヴァント召喚は行えるはずよ」

肝心の銀時はオルガマリーの話を途中から聞いていない。

「それに、キャスターとマシュだけだと不安じゃない。サーヴァントから身を守つてもらうためにもう1騎は確保しておきたいわ」

事態の深刻さ、そして圧倒的な人員不足を考慮した提案。迅速な判断に周囲は拍手を送る。

最もな理由を述べるその裏腹には、ボツチだから新人を入れておこうという魂胆があつたりする。

「所長、サークル設置が完了しました! いつでも英霊召喚行えます!」
「マシュが見つけた龍脈にサークルを設置させたから、アナタが召喚しなさい」

「おいおい、魔法だか魔術だか知らねえ素人にやれんのかよ? 下手すりゃ召喚失敗して、痛い年頃が漫画のカッコいいセリフ言ってるだけにしか見えなくなるんじゃないのか?」

「それはそれで良いじゃない。カルデアベースにしつかり保存してあげる。」

けどそうね、失敗するかどうなるか分からない。召喚には本来、特定の英霊を呼び出すために英雄の聖遺物が必要なんだけど。そこは運よ、覚悟決めなさい」

手段が他にない故の開き直り。

少しは躊躇う判断も、いまのオルガマリーが即断即決する邪魔になりはしない。

「ったくよお、こーいいうの柄じゃないんだよ。アレだろ、ガチャとかいうの。銀さん、ギャンブルでもやってるの帕のつくやつだから」

「ちよつ、不安になること言わないでくださいよ……」

「おい坊主たち、サークルの右下になんか書かれてっぞ」

『サーヴァント：SSR0・1%、SR0・5%、R1%』

礼装：SSR0・4%、SR1%、R97%』

※なお触媒により触媒対象英霊の排出確率2倍！

「いや確定じゃないんかいイイイイイ！」

そこには型月厨も真っ青のサービス終了まっしぐらな数字が表示されていた。希望の光である召喚陣が地獄の門にしか見えなくなっていく。

「これは、いったい……」

「まあ、場所と状況がこんなだからな。おおかた、デイ○イトワークスが不具合でメンテナンスを失敗したってところか」

「やはり元凶はデイ○イトワークスでしたか……」

「いや、そんな規模じゃないと思う」

10連SR確定どころか、SSRの確率を下げる鬼畜仕様。

正義の味方もあつたものじゃない。

「キイイイイイイ！（猿声）」

ただでさえ瀬戸際でのギャンブルをしようというのに、運営の不具合によって戦力強化すらも怪しくなる始末。オルガマリーはこの世の理に堪らず頭を抱えて発狂した。

「まあ騒いでも仕方ねえ。少しでも確率が上がるってんなら、触媒を用意するしかねえよ」

『ええ!? 銀時くん、触媒があるっていいのかい!?!』

銀時は自信満々にロマニへと向き直り、ポケットからあるものを取り出した。

「さっき拾った石」

ロマニ含めたカルデア職員が不安と絶望に打ちひしがれる。オルガマリーなど声も上げなくなった。

「その石よりこっちの方が良いと思う」

時代に不釣り合いな、鉛玉の無い弾を取り出す立香。

なにを思っただけで拾ったのか理解できず、オルガマリーはついに足に強化の魔術をかけるや。

「お前ら触媒舐めんなッ!!!」

「しようじ!?!」「ソルトリバー!?!」

瞬時に渾身の蹴りを放った。

頭から落ちる2人をよそに、マシユが遠慮がちにオルガマリーに声をかける。

「あ、あの……!」

「マシユ、まさかアナタもおかしな物を持ってないでしょうね……?」

マシユもあちら側に行ってしまったら本当に終わると思いつつ振り向く。

すると、マシユはいつの間にか両手に抱えていた光り輝くソレを差し出す。

「この『約束された勝利の剣』などダメでしょうか……?」

そう、エクスカリバーである。

fateを知る者が見てきたあのエクスカリバーを手にしていた。一同が押し黙るなか。

オルガマリーは震えながら退け反り、そして上半身を勢いよく起こして目を爛々とさせ叫んだ。

「それっ!!!ソレっ!!!絶対にそれよ!!!」

これ以外あり得ないでしょ!?!これアーサー王呼ぶやつじゃない!?!だってfateの顔だもの!?!」

勝利は目前にありき、と言わんばかりのテンション。

エクスカリバーがなぜあるのか。

そもそも、なぜそれをエクスカリバーと言えるのかはどうでもいい。

なぜなら、ここにエクスカリバーがあるのだから。

「いやいやマシユ、流石にエクスカリバーはないって。こんなところにエクスカリバー落ちてたら勇者が拾って事態収束させるから」

「うーん、邪神とかその類を呼びそうな気がする」

起き上がったってきた2人が意見を言う。

しかし、マシユの頭上には、地面に突き立つエクスカリバーを目を輝かせながら抜く姿が浮かんでいる。サークル設置のときに見つけたらしいソレをオルガマリーが無視するはずがない。

「いや勇者でしょ!?マシユ拾ってるじゃない、見なさいよ回想シーン！軽々と抜いてるわよ、これおもつくそ選ばれてるじゃない！伝説始まってるわよ!!!」

「馬鹿野郎、俺が召喚すんにマシユが選ばれてんじや意味ねえだろうが」

「少なくとも石ころや弾もどきよりマシよ!!!」

ぎゃいのぎゃいの、触媒の言い合いで収拾がつかなくなっていく。

マシユとロマニ、キャスターがそれを見守っていると。

ころり。

ころころ。

まあたいへん。

銀時が手に持っていた石がサークルへと転がり落ちたではないか。

「「「あ……………」」」

サークルはそれを触媒と見做し、ようやくその役目を果たすために回転を始める。希望のはずが、オルガマリーにとっては死刑宣告を言い渡された気分となる。

「ちよ、まって……………」

手を出して止めようとするが、ときすでに遅し。

サークルの輪は見る見るうちに収束した。

光が弾け、魔力が記録を形作る。

記憶を構築し、心を灯し、召喚は奇跡を紡ぐ。

「なにやら不都合があったみたいだが、もし望まない形での召喚なら……本当にすまない」

礼装などという扱えるか分からないものではない。

言葉が聞こえ、足音が鳴ったとき。オルガマリーの不安は払拭され、へなへなと尻餅をついた。

そこには確かに、英霊が立っていた。

アーサー王ではなくとも、間違いなく英雄のような冒険譚を知る、1人の青年が凜とした瞳で一同を見渡す。

最後に、周囲の燃え盛る街を確認し、人類の危機に立ち向かうことをマスターである銀時を見て宣言する。

「ジーク、召喚に応じ参上した。」

いまの俺がどこまで役に立てるかは分からないが、自分に出来ることは任せてほしい。

どうかよろしくお願いする、マスター」

捻っけていても真っ直ぐに

燃え盛る都市、冬木の道路のど真ん中。

生きる者は跡も残さずに消えた世界で。

「はー、ほんつとウ○娘は最高ね。だってどんな娘も、最後にはうまぴよ○してくれるのよ？こんな可愛い娘たちのためなら課金も辞さないわ〜。」

もう1億円は注ぎ込んだけど、いつか」

瓦礫に腰を下ろしながら、オルガマリーは手元のタブレットでスマホゲームの流行に乗っていた。

アニメスフィア家のお金は現在火の海のなかにあるので、実質無尽蔵である。

「……だって、もう直ぐ死ぬんだもの。人理修復できずに！私の有り金全部サイ○に送ってやるわよ!!!」

うおんうおん泣きながら、絶望を前にしてヤケクソになっていた。

『誰か所長を止めてくれ！早くウ○娘から所長を引きずり戻すんだ！僕がカレンチャ○を育成している間に！』

『いやお前も戻ってこんかい！』

モニターの向こうでロマニが誰かに殴り飛ばされ。

「まずいですって所長！」

「そうです、所長！早く特異点の修復をしましょう！」

こちらではオルガマリーの奇行をマッシュと立香が止めている。

「おい所長さん、なに掛かってんだ。確かにこんな時世だが、煉○さんだって勝ったし、エヴ○だって公開されたんだ。な？下を向いてちや始まらなねーよ」

耳の穴をかつぽじりながら、銀時が背を押すように語る。

「始まらないって、ジークって英霊なんか知らないのよ！」

貴方は楽観視しすぎなの！分かってる!?この特異点を解決しなきゃ、私たちの未来は失われるの！

それなのに、新戦力が無名どころか英雄でもないなんて……！

ねえ、相手は伝説のアーサー王なのよ？それに、超陰湿なスナイパーがいるって話じゃない。このメンバーで、本当に勝てるの!？」

オルガマリーが痲癩を起こしている原因。

それは銀時が召喚した英霊、ジークにある。

ジークの出自、宝具などを粗方聞いた彼女は現実逃避するようにウ○娘の世界へとレイシフト。オルガマリーはジークだけじゃ勝利が望めないと言っているのだ。

「すまない、俺のせいで所長の機嫌を損ねてしまったようだ。やはり戦力不足は俺では補えないか……」

オルガマリーの落ち込みようにジークは肩を落とす。

そんな彼に「そりゃ早とちりだぜ」と言い、周りが疑問に思うなか更に銀時は問う。

「泣き言は全部言ったか？」

「……まだ足りない」

「んじや、飽きるまで聞け」

「……言いたいわよ。けどっ」

荒ぶ身体のままガバツと立ち上がると、両拳を握りながら叫ぶ。

「ああああっ！もうっ、分かってるわよ！

泣き言はここまで。アーサー王だろうがなんだろうが、私の敵になった時点で負かしてみせるんだから。

アンタに言われるまでもないっつーのよ！」

勝手に歪んで、身勝手な男の言葉で立ち直る。

権威や血統に生きる少女の自由奔放な復活に、彼女を知る者たちは頭上に驚きを投げずにはいられない。

「げ、激励の言葉を言うのでもなく……あの所長が開き直りました」

「うまぴよ○伝説流れてるけどね」

『銀時くん、キミ本当に所長となにを話したんだい？』

「あー、あれだ。エヴ○のネタバレ」

『ちよ、それ僕にはやめてね？絶対だよ？』

適当なことを言いながら、復活したオルガマリーと作戦会議を再開する。



「いいのかよ、キャスター」

「任せろって。アーチャーの野郎は俺が倒す。」

ずつつけ狙われてチマチマ狙撃されっぱなしなんだ。アンタら全員で騎士王を相手にしてくれりゃ、心置きなくこの杖を刺せるぜ」
「え、刺すんですか」

作戦会議もひとしきり終わり、キャスターがアーチャーを。残り全員で騎士王を倒すことで話は終わる。

キャスター曰く、騎士王がこの異常の中心であり、騎士王さえ倒してしまえば冬木の聖杯戦争も終わるのだという。

「そう、ここに来るまでに宝具は出せなかったのね。宝具も分からないんじゃないや望みは薄いわよ。」

……足りない分は私たちが補うから、アンタは思いつきり行きなさい」

「所長！はい、ご期待に伝えてみせます！」

マシユは盾の英霊の力を存分に振るえない。

英霊の真名が分からないため、宝具無しで挑むしかなく。

「可愛い子には旅をさせよってか？」

「はっ、なんだそれ。知らねー言葉だな」

キャスターに聞く銀時。

なんとなく意味を理解しながらも、キャスターは知らないふりをした。

『ここからも気をつけて。君たちが遭遇したスケルトンやゴーレムは“この地球上”には存在しない技術で出来ている。』

奴らが元は生き物なのか、魔術で造られたものかも不明だ。シバの観測で最も類似するものがスケルトンやゴーレムというだけで謎だらけ』

「人の骨にしては強度がサーヴァント並み。」

かといって魔術と照らしても該当するものがない。ほんと、ふざけ

た状況ね」

「つまり、この先で待ち構えている相手が普通じゃない、だけで終わらない可能性があるんだよね」

「……………ま、分からねえもんは後回しだ。早い話、騎士王さえ倒せば特異点は修復するって結論も出した」

「俺も出来る限りのことはするよ。」

「といっても、この服のガンドとか強化魔術を使うくらいなんだけどね」

アーチャーの狙撃範囲のギリギリまで歩いて移動する一行。

周囲を警戒していたジークがそれを察知する。

「皆んな、なにかが来る。これは…」

『なんだこれ!?時速70kmで巨大な敵性反応が接近!皆んな、その場を離れてくれ!』

言うが早いか、マシユは立香を、キャスターはオルガマリーを、ジークと銀時は各々で進行者の軌道から飛び退く。

「????!」

??直後、立っていた場所の地を抉りながら現れるのは黒い霧を纏った巨大な人間。人ならざる咆哮を上げて、身の丈もある斧を乱雑に振り回して建物を破壊していく。

「あの黒いのは?!」

「バーサーカーだ。あいつ、森の奥から動かなかったはずなのに、どうして来やがるんだ!」

「ちっ、仕方ねえ!ここは俺に任せろ!」

キャスターの説明を聞いた銀時。

彼の杖をサツと奪い去ると。

「えっ」

山の方角に向けて、杖を全力投擲した。

「奪われて飛翔する賢者の杖!」

キャスターを投げられない人向けの宝具。

遠くにキャスターの杖を投げて敵の注意を惹きつける。

銀時が本気で投げると雑兵なら蹴散らせる。

ブーメランとあるがキャスターが取りに行く。
ランサーと読むがランサーではない。

他にもプロトタイプやバーサーカーにも似たような宝具がある。

ランク：C

種別：対軍誘導

レンジ：1〜∞

最大効果：持ち主への嫌がらせ

「それ俺の杖エエエエエ！」

「？」

「あり得ないほど飛んでいくキャスターの杖。」

それを全速力で追うキャスターと、お約束のように引き寄せられる

バーサーカー。

「ちよつと！なんでキャスター囮にしたの!?!」

「カニファ○が俺にそうしろって言うんだよ」

バーサーカー強襲という一難は去り、作戦は白紙へと戻った。

「他人にスケープ・ゴートしたただけでしょうが！」

オルガマリーの怒号とともに、銀時の頭にかかと落としが炸裂。

キャスターを抜きにして、アーチャーと騎士王の攻略が開始する。

狙撃手へ

——炎上都市。

まず思い出すのは冬木の大災害。
あの日、正義の味方に救われて、同じ路を歩み始めた。
いまでも、その心は変わらずにある。
だが、天体観測所に私たちの声は届かない。

「来たか」

狙撃手は大気の揺れから相手の動きを知り、ゆっくりとした所作で和弓と剣を手元に投影する。

「やはり、交わす言葉はない……」

ここに正義、悪を隔てる理由はない。

互いの正義が衝突するとき、負けたほうが悪になるのではなく、勝ったほうが正義に近づく。負けたから悪など、この世の半分は悪に満ちてしまう。

いまから始まるのは敗者のいない戦い。

人理を救う旅路の始まりだ。



刻は数分前に戻る。

キヤスターがバーサーカーを引きつけている間、再び狙撃手対策を練り直すことになったカルデア一同。その原因を作った銀時は鼻毛を宙に散らしていた。

「マスター、狙撃手を相手にするなら一つ提案がある。良いだろうか？」

「おお、思いついたら言ってくれ。どんなモンでもとにかくアイデアが欲しいとこだ」

対狙撃手会議はジークの挙手で始まる。

「俺の宝具でマシユをアーチャーの上空に吹き飛ばす。そうすれば狙撃する暇もなく距離を詰められる」

『ええええええ!!? ジークくん、それってバルムンクを発射台にするってことだよね!』

「ああ、心配はいらない。この宝具は魔力消費が少ないうえ、連発が可能だ。駆けつけければ直ぐに打ち直せる」

「なるほど、私の盾ならそれが可能かもしれません。先輩たちを守りながら距離を詰めるよりも確実です!」

物事の重大性、危険性をあっさりと受け入れるサーヴァントたち。マシユは前傾姿勢すぎてロマニが引き気味だ。

『嘘だろ、本当に実行する気なの:!!?』

宝具を耐えたあとに戦闘するなんて、マシユの身体がいつか分からない。僕は…』

「いいわ、それで行きましよう」

オルガマリイがロマニの声に割って強く頷く。

『ええ!』

所長こそ真つ先に反対すると思っていたんですが!』

ロマニの意見は最もだ。

ジークの宝具で吹き飛ばされ、即座に戦闘に移行する。簡単に言っているが、危険どころか下手を打てば敗北直行。もう少し安全で確実な意見があるはずと思いつながら、所長に聞こうとした矢先の肯定。

オルガも自分の発言に内心は驚いていた。

燃え盛る都市のなかで頭がおかしくなったのか?

いいや、違う。

「マシユがやれると言ったんだもの。」

私には信じることでしかないわよ」

「所長! はい、任せてください!!」

マシユの背中を押して、横目で見たのは銀時のアホ面。

デタラメに過ぎる悲惨な過去を聞いた。本当なのかも分からない、出会って数時間の男の過去を信じられるはずがなかった。

ただ、ここは右も左も分からない特異点。

脳裏にちらつく、レイシフト直前の記憶。

たまたま、銀時の言葉が届く環境に来てしまった。数十年の付き合い合

いがあるとうと譲らないはずの席に、少しだけの隙間を許してしまうくらいには時と場所が整ってしまったのだ。

(いまはそれに賭ける。この先、マシユ達が生き抜くためには無茶を通してなんぼよ)

自分の勘に頼り、デタラメな対狙撃手対策は実行が決定した。

「けど、サーヴァントを相手にした実践は事実上これが初めてよね。流石にマシユだけじゃ得策とは言えない」

考え込むオルガに、立香は反射的に挙げようとした手を引っ込める。

(もし、ドクターの言う通りマシユが宝具を耐えたあとに戦えなかったら……？俺が居ても何もできないんじゃないか?)

無茶な作戦に飛び込むだけなら喜んで挙手する。

しかし、マシユの隣に立つだけの自分になにが出来るのか。戦えない以上、根性論を叫んだところでクソの役にも立たない。それでもマシユのマスターなら立つべきなのか？

決めるに迷う立場で一瞬の迷いを生んだとき。

「俺も同席するぜ。銀さん、そんなくらいなら耐えられっから」

またも銀時は危険な場所に軽々と踏み込んでいく。

「しかし、銀時。相手はサーヴァントです。徘徊している竜牙兵や骸骨とは比べ物になりません！」

「サーヴァントってのがどんだけ強えかは知らねえ。けどよ、足引つ張るくらいなら最初から手挙げてもない」

銀時の言葉は、立香の迷いを見透かし、それは正しいものだと言うように視線を向けていた。ぽんと頭に手を置いて、不安げな表情をわしやわしやと散らかす。

「マロンが言ってる通り、マシユが戦えるとは限らねえからな。立香、オメーは騎士王さま相手にすんだ。ここは大人に任せとけって」

「…そっか。うん、四の五の言ってもらえないね。直ぐに追いつきます！」

頼もしい声に、所長が開き直っている理由が分かった気がする。レイシフト前、マシユと3人で居たときの心強さを信じることにした。

『僕、ロマニなんだけど』

彼の抗議は流されて、バルムンクによるシールドー奇襲作戦は実行に移された。



狙撃手、アーチャーの眼は燃え盛る都市から飛来する、銀色の息吹を捉えていた。

「あれは……まさか、宝具か!?!」

直後、射抜くために引き絞られている矢を解き、回避へ移ろうとしたとき。更なる予想外の出来事に眉をひそめ、その場に留まった。

空を仰いだ先で、流星の如く夜空へ駆けていく宝具。凡そ狙い通りとは思えない軌道に首を傾げる。

「この距離だとして、これほどの威力を放つ所有者が外すか?」

それは見事に的を外し、呆気なく消えていく。

宝具の余波を腕で受けながら呟いた視線の先で。

「はあああああッ!!!」

着陸する飛行機のように、地面に向かって凄まじいスピードで迫る少女を確認していた。

「なっ…!?!」

束の間の驚き。

それだけで奇襲は成功したと言ってもいい。

咄嗟に矢を持ち直し、少女よりも大きな盾への防御に役割を変える。

「くっ!?!」

重い一撃が矢を叩き、逃げを許さない勢いはアーチャーの身体を大きく吹き飛ばしていた。

体勢を崩すことに成功したマッシュは、盾を握りしめて。

「浅い……直ぐに次を、ツアッ!?!」

全身を駆け抜ける電流に、身体を硬直させてしまう。

「宝具に乗って距離を詰めるか!あまりにもバカバカしくて意表を突

かれたよ。だが、その身体では奇襲目的の一撃がせいぜい」

あくまでも宝具を受ける形での奇襲。これほど雑で、自身を削るものも中々拝めないだろう。

「本命はこの間に近づくことか。その様子だとあと十秒は動けまい。せいぜい、己の実力を過信したことを悔やむがいい」

ゆえに一撃で仕留められれば理想。それ以外は失敗もいいところ。加えて、マシユはサーヴァントとしての力を完全に発揮できないのだ。

「え、それって自己紹介ですか、コノヤロー」

単身で乗り込んでいれば、ここで仲間たちが射抜かれる姿を見せつけられる羽目になっていた。

「もう1人!？」

「遅えっ!!！」

二重の奇襲、侍の刃がアーチャーの身体を真横から殴りつける。咄嗟の守りをかわし、追撃の一振りで顎をかち上げた。

「大丈夫か、マシユ!？」

「はいっ……!」

銀時のお陰で硬直も解けました。感謝します」

僅かな遮蔽物を利用した奇襲は成功した。

立ち上がるマシユを横目に、血を拭うアーチャーを見てニヤリと笑って見せる。

「貴様……まさか、盾の少女と?」

「冷蔵庫に入って核爆弾から身を守る野郎がいるんだ。それと比べりゃ、こんな大盾に守られての奇襲なんざ波乗り気分だね」

「確かに、宝具に飛ばされておきの感覚はサーフィンのおきに味わう情報と似たものでした。私、早速1つやりたい事を叶えたみたいですよ!」

「あ、ごめん訂正するわ。サーフィンってもっと安全だった。だから変な覚え方しちゃダメだよマシユちゃん」

ウキウキと目を輝かせるマシユ。

下手なことを覚えてしまえば所長や立香がうるさいため、柔らかく

興奮を抑える。敵を前にして毒気を抜く、そんな雰囲気のかな。

「本当ですか？では、サーフィンも実現するために役目を果たします
！」

「うし、海に行くのも追加だ！カメラが回るぜ！」

マシユと銀時は初めてサーヴァントを相手に武器を握った。

心は見えないからこそ全力で叩き込め

終わりゆく世界で、あり得ざる猛攻が繰り広げられる。

相手は炎上都市の狙撃手、アーチャー。

猛攻の中心点は地上最後の侍、坂田 銀時。

「うお、オオオオオオ!!」

「ぐ、うっ——ウ!?!」

双剣で迎え討つアーチャーが後手に回る。常に先手を打ち、退がれば追撃がアーチャーの身体を深く叩く。

ただの木刀と侮ったのが最初の過ち。英霊にダメージを通すほど強力な礼装と見るべきか、その真価をまだ見せないまま猛威を奮う。(凄いですが、アーチャーとはいえ接近戦で圧倒するなんて…! 私も、役目を果たさないと!)

マシユは2人の攻防を見て、ここだと思ったタイミングで飛び込んだ。銀時の死角から放たれる不可避の刃。攻めこまれながらも、カウンターの形で首を狙うソレを。

「ハアツ!!」

盾で上方に弾き、銀時の攻撃に不備を生じさせないように立ち回る。マシユには、死角からの刃を銀時なら躲せるという確信があった。だが、それでも実行するには危険な綱渡り。相手は宝具を持つ英霊。どんな隙になにを仕掛けるか分からない。

「狙った隙は確実にカバーする。

やはり多対一は厄介極まるな……っ!」

ならば、と。

銀時には攻撃に集中してもらうため、マシユは一切の防御を引き受けていた。

予想を上回る圧倒的優位。

ドクターは手筈通り、立香たちに近づくように助言している。これはアーチャーを引きつける間にジークたちの到着を待つ作戦。

それも直ぐに終わる。だから、銀時の戦いを少しでも目に焼き付けておこうと2人の動きに全神経を注ぎ込む。

「はっ、1人で格好つけて門番なんかしてっからそーなんだよ!!? 大人しく集団行動してりゃ勝てたかもなあ!!?」

「私も進言はしたさ。なんと言っただと思う。『臣下が居ては剣を存分に振るえない』と一蹴されたよ。」

全く、気にかげられるとは嬉しいじゃないかッ!!?」

怒鳴り合いながら、大雑把な剣撃で死を交わし合う。

不敵に笑う銀色が現実を塗り替えんと、誰よりも輝いている。この瞬間、世界を歪めんとするアーチャーでは届かない場所にいると知る。

マシユの世界を押し広げるには十分な景色だった。

「んだそりゃ。どっちも甘ちゃんだな」

「…………ちっ」

幾度の刃が火花を散らし、そして盾が何度目かの隙を払い落とす。懐で重心を落とした銀時が木刀を振り抜いた。

アーチャーの腹に直撃する。苦悶の声を漏らしながら吹き飛んだ。

「トレス・オン投影・開始」

「あれは……ハッ!!?」

否、距離を置くことがアーチャーの目的。

詠唱とともに宙に現れる十数本の剣。

「剣を宙に出せるのかよ……!!?」

「恐らくは爆発します!!? 銀時、こちらへ!!?」

剣の投影、そんな理屈も内容も知らない彼らは宙で自身を狙い澄ます矢に驚愕した。

思い出すのは炎上都市冬木に來た最初の頃、数度見た射撃。

その矢は目標に届くや爆ぜる、蹂躪の一矢。

「なんとか出来るのか!?!」

「分かりませんが、やるしか……!」

前後左右上空、盾で取りこぼす隙が必ず生まれる配置。

避けて進むものなら通り過ぎざまに爆発するだろう。かといっ

て、守っていても後ろから射殺されるのは必然。

マシユの後ろに周りながら聞く。

彼女は本来持つべき英霊の力を発揮できずに此処にいる。それがこの土壇場で開花することに賭けるしかなく。

アーチャーの手が振り下ろされるのを号令に、全ての剣が切っ先を2人に向けて放たれた。

「させない！」

「——ツーンっちだマシユ!!？」

声が響き、銀時はマシユに盾で守る方向を変更させる。

屈み気味に構えた盾の横で、見覚えのある魔力放出が剣を吹き飛ばしていた。

「タイミングばっちり過ぎだろ。」

もしかして物陰から見たりした？

もう、所長ったら性格わるくい」

「んなわけないでしょうがっ！」

寄り道せず、最短最速で駆けつけたわよ！」

真っ先に降りたオルガマリーに声を掛ける銀時。

「ジークさん、これ以上ないタイミングでした！」

「2人とも無事で良かった！」

「なんとか間に合ったか。ここまでは計画通りだな」

ジークと立香も合流して、目先の目標を達成する。

「んじや、ジーク」

「ああ、マスター」

2人が前に立ち、アーチャーに剣を構えて伝える。

「ここは任せて行け」

騎士王の攻略を3人に託す宣言。

予想外だったのだらう、アーチャーは少しばかり目を開いて反応した。どう見ても、配置するなら逆だと思っただためだ。

そんなもの銀時には関係ない。

アーチャーの手合いはまだ戦うべきではないと判断した。この組み合わせが最適という考えはカルデア職員含めた総意だ。

「来る頃には終わらせておくわ。
アンタたちこそ無事に来なさい、所長命令よ」
そう残して、足早く大空洞の入り口へ駆けていった。

歪な地形の広場から、マシユたちは剥き出しになっている大空洞の入り口へと走っていく。彼女たちを見送る間、アーチャーは微動だにせず待っていた。

この場にいる全員が警戒を高めて観察をしていたが、最後尾の立香が暗がりの奥に姿を消す瞬間まで眉一つ動かさない。

「先に言っとくぜ」

なにを考えているのかを想像する必要もない。

目蓋を閉じ達観したように呼吸する男、すまし顔のアーチャーへ向けて、銀時は一気に飛び込みながら呟く。

「勝つのは俺たちだ」

絶対ではない。しかし、必ずやり遂げる未来を宣言しながら視線が交差する。そして、間合いで木刀を振り抜いた。

「そこに、1つの犠牲もないと言えるか？」

木刀を防ぐ黒い剣が返答に力強さを与える。

火花を散らすほどの勢いで木刀と競り合う。アーチャーが本気で力を込めても押し返せず、ギリりと歯を見せつけながら銀時は答えた。

「バカかお前、あるに決まってんだろ」

「っ…!!？」

木刀が黒鍵を絡めとるように下へ沈む。

木刀に込めた力を緩め、アーチャーの姿勢を崩した。

「燃えちまったこの町がそうだ。」

間に合わなかったは言い訳になんねえ」

更に、流れるように反対の腕を蹴り上げて白い剣を打ち上げる。

「だから俺たちは戦う。」

救えなかった人たちを、最後の犠牲にするために「
機を狙っていたジークが踏み込む。」

ガラ空きとなる肩から斬り裂く軌道を、アーチャーは黒い剣を手放すことで回避した。

「ジーク、退がれッ!!?」

銀時が叫ぶ。

目下に取り残されたアーチャーの武器は、主人を失った鉄に有らず。爆発物だという情報共有をしているジークも既に行動を開始していた。

銀時の身体を掴んで跳んだ瞬間、剣からは想像も出来ない爆発が巻き起こる。

黒煙から飛び出した先で、2人はアーチャーの姿を探す。

だが、見つかるはずがなかった。

「ならば彼女たちは犠牲のうちに入らないと?」

アーチャーと名乗る理由：和弓を手に、黒煙の向こうで矢を番ているのだ。ジークだけが宙を移動する手段を持っており、相手の意図を理解するだけの経験があった。

「己だけでなく、志を共にする者なら死なせる覚悟があるんだな!」

放たれる矢、次いで驚く怒号。

ジークは矢を撃ち落とすのではなく、夜空へ向けて腕を伸ばす。直後、魔力を放出して地面へと急降下。

「アーチャー、お前はそんなにも人を信じられないのか」

「なにを言うかと思えば、そんな初歩的なことか」

手から地面に着き、同時に銀時が駆け出す。

一瞬の間としても、距離が離れすぎている。二十メートルばかりを三秒で駆け抜けようと、その間に十の矢が銀時を射抜くだろう。

「人を信じ続けたからこそ、ここにいるというのに」

木刀を握る銀時、矢を番え直すアーチャー。

そこに、両者の攻撃体制を上回る魔術が地面を疾った。

「シュトラセ／ゲーエン理導／開通」

「なにつ!？」

銀時の路を器用に補助し、アーチャーの足場を最大限に破壊、退避の妨害を尽くす魔術。簡単に言えば破壊しか出来ず、それだけならサーヴァントを相手にも通じる手段となる。

ゆえに、銀時の路は動きやすく破壊したに過ぎず、彼が路を見誤れば状況は反転するだろう。

「騎士王なんてのが相手と聞いて、マシユたちは迷わず戦うと言った」「彼女たちは、たった1つの犠牲を無くすために戦う」

銀色の侍は出会って間もないジークの意図を肌で感じ、一步先に崩れていく足場を迷うことなく駆けていく。

一瞬の仕業だが、アーチャーも宙に飛んで弓を手に応戦しようとする。そこを、崩壊を利用して地面を突起させ、射出の瞬間に妨害した。

「個々で戦うお前たちとは真逆の存在だ」

「あいつらはそれで良い。」

両手で持てる分だけでいまは十分さ」

宙空で、突き出した木刀がアーチャーの靈気を貫く。

「が、っ……………」

引き抜いた木刀とともに、和弓がアーチャーの手から落ちていく。

ドサリ、力なく放り出された五体。

その横で銀時が力強く地を踏んだ。

「なあ、この世界はどうなってる。」

お前さんの目的は、街を火の海にすることか?」

もう時間のないアーチャーに、銀時は生きる者として凶行の理由を問う。アーチャーは薄らと目蓋を上げて、血混じりに答えた。

「俺、は”正義の味方”……………」

信じた道を……………継った責任を果たすまで。そもそも……………お前たちは、俺たちとは戦う理由が違う」

「デメエ、そいつはどういう」

「答える義理はない。返答が欲しいなら、先ずは…私の問いにキミが答えを示すのが筋だ」

身体が粒子となる直前、アーチャーは囁く。

「証明してみせろ……お前たちが」間違つてはいない」ことを。その身、朽ち果てるまでに」

虚空に消えた言葉の真意は分からず。

嫌な予感に圧されるように、2人は大空洞のなかへと駆けていった。



暗い洞窟のなかを駆ける。

全員、不安はあるが言葉にはしない。

銀時たちに見送られた時点で覚悟は決めていた。

「明かりが漏れてる」

そして、道は終わりを迎える。

3人は互いを見て頷き合い、大空洞へと踏み込んだ。

「これが、キャスターの言っていた……」

見渡せば底。

意識が引き寄せられるほどに深い黒が満ちた世界。

立香ですら異様な空気が漂っていることを察知する。

ロマニが言っていた”神代の魔力濃度”というものを理解するならこのことだ。

生憎と、失われた歴史の神秘に浸る暇はありそうもない。

神代の魔力とやらよりも明確な脅威が居るのだ。

憐憫に立つ騎士の姿を見る。

「名乗れ。ここに来た目的はなんだ？」

カッと見開く目。

そして。

「ブツ!？」

小さな弾が黒き騎士に直撃、爆発とともに全身に電流のようなものが奔る。

『えっ……』

「えっ」

突然の爆発に呆けていたのはオルガマリー、そしてカルデア職員一同。痙攣する騎士に目が点になるなか。

「とおおおおっ!!」

飛び込んだマシユが、その盾で騎士…否、騎士王を弾き飛ばしていた。

『えええええええええええええええええ!?!』

「アーチャーの奇襲、上司のアンタが責任取ってね」

爆発の首謀者、藤丸 立香は騎士王が口を開いた瞬間、問答無用でガンドを放っていたのだ。

「まだ話し終えてないだろうっ!」

「チャンスが転がってたら狙うでしょうが!」

「騎士王マジになってるじゃないのっ!」

「マシユ・キリエライト、押して参ります!」

こうして、激昂した騎士王とマシユ、立香、オルガマリーの戦いが幕を上げた。

大空洞の激闘

大空洞がたった一騎の踏み込みで揺れる。

深淵に染まる黒い槌が、避ける理由を奪われた大盾に直撃する。

「う、ヴ……い！」

騎士王の魔力放出をその盾に浴び、苦悶の声を漏らすマシユ。本来なら避けて距離を詰めるものだが、騎士王の斬撃の軌道には必ず背後に控える2人を捉えている。

「くっ、ダメー！私たちが重荷になってる！」

『2人とも気をつけて！岩が崩れ落ちてくる！』

後方、立香とオルガマリーは限りなく傍観に抑え込まれていた。オルガマリーが立香を抱えるという、男としては情けない格好で。

騎士王の斬撃は魔力放出として大空洞内を駆け廻り、そのたびに吹き飛んでくる落石から逃げる事で精一杯。

辛うじて隙を見てオルガマリーが魔弾を放とうとすれば、マシユを盾にして万が一の可能性を潰す。

だが、そんな態度にオルガマリーが黙るわけがなく。

「これならどう!？」

指先を横に払い、魔弾が騎士王の斜め横に向けて発射される。明らかに外れた弾道はマシユを越える瞬間、急速に捻れて騎士王の側面へとカーブを描く。

「……フン」

騎士王は一瞥すると、盾を蹴り飛ばした反動でことも無く回避した。

「所長の攻撃が全部外れた!？」

「アンタの一発当たったほうが奇跡なだけよー！」

再びデタラメな魔力放出がマシユの身に降り注ぐ。

騎士王の戦い方は僅かな美麗を残した殲滅活動。

窮鼠猫を噛むことを許さない弱肉強食絶対主義。

「それに、次はもうないと思いなさい。

相手は世界に名高い騎士王、アーサー・ペンドラゴン。最初の不意打ちが決まったことが既に奇跡よ」

早二分が過ぎて、徐々にマシユは後退している。

『マシユも奮闘しているけど、騎士王の火力は桁違いだ。』

『まだ生きている要因を挙げるなら、騎士王の意識が常に大空洞の入り口に向けられている。藤丸くんの不意打ちが効いたせいだろう、応援の闇討ち対策だ。』

恐らく、姿が見えた瞬間に宝具を使うつもりだぞ』

数パーセントの可能性に意識を割きながらマシユを圧倒する。

さらに、オルガマリーの必死の援護射撃があと一步を踏み込ませないからこそ生存している。世界最強の騎士を相手に二分も対峙していられるのは、ただそれだけの奇跡に過ぎないのだ。

「それでも俺は、マシユと所長と勝ちたいんです」

力強く訴える立香。

3人の名を挙げていることに驚いて、喉を詰まらせながらオルガマリーは苦渋の現実を伝える。

「…くっ、なんとかしたいのは山々。私も考えてるけれど、実力差がはつきり見えて全部上手くいく気がしない。ガンドも魔弾も、全て避けられるんだもの」

立香の想いは共有するまでもなく、騎士王を相手取ると決めたときから同じだ。改めて口に出されたことの喜びを早口で誤魔化していると、立香はピクリと表情を躍らせる。

「いや、それですよ所長！」

「な、なによ!」

「避けるってことは、当たれば痛手なんです。なら…」

「…いよ!」

耳元で囁く立香の提案に、こそばゆさに身を震わせながらも真剣に努める。気恥ずかしい数秒を経て、逡巡する暇はなく答える。

「…あんだ、顔に出すんじゃないわよ」

『藤丸くん、僕たちは信じることしか出来ない。』

大丈夫、マシユは賢い子だ。言わずともやることを理解してくるはずだ。だから、気負わずに行っておいで』

立香の提案に否定できるだけの材料はない。

たった一発勝負の賭けに、カルデア職員総員で算出を始めた。

――
――
――

漆黒を纏う志しが視界を染めていく。

人が自然災害に無力であるように。

騎士王の魔力放出もまた、天災と言って差し支えのない破壊力を持っている。

背後に聳える聖杯が霞むほどに黒く、大空洞に現れた侵入者を排除せんと絶対の一撃を振るう。キャスターの魔力を優に超える火力を前に生きていられるのは、一重に盾の存在があつてのもの。

「が、あああッ!!」

何合目かも忘れるほどに理不尽な攻撃に盾をぶつけ、辛うじて一秒の生存を勝ち取る。

この盾は絶望を前にして折れない、立香やオルガマリーたちの想いそのもの。出来損ないの半人前以下が許される、決意の異議申し立て。

「……………」

どんなに不様で、惨めに酸素を吸い込もうと。

藤丸 立香が不意打ちのガンドを決めた瞬間を思うと、もっと汚く足掻いて良いんだと励まされる。

現に、その抗いは止まっていけないのだ。

「食らえ、食らえ、当たれ、こんのっ!!」

砂粒を散らす如く、オルガマリーの魔弾が執拗に騎士王を狙う。その度に魔力放出で弾き、駆け回る邪魔者の影を捉えんと剣を構えて。

「くっ、させませんッ!!」

また、一秒の生命を繋ぐために盾を振りかざす。

立香は相変わらずオルガマリーに抱えられているものの、この瞳には傍観者でいるつもりは微塵も感じられない。

視線が合ったわけではない。ただひたすら、なにかを待ち続けている。異様に落ち着いた様子で戦況を見守っている。

なら、やれることに変わりはない。

「このままではジリ貧だと気づいているだろう。いずれ貴様たちの体力は底を尽きる。」

盾の少女よ、このまま痩せ細るのを待つか？」

「わたし、は……………」

騎士王の囁きに驚く。

向こうから会話を仕掛けてくるとは思わず。そして現実を良く把握している最悪の指摘。

どう見ても先に体力が尽きるのはこちら。

目の前の騎士王は剣を振るだけで相手の身を削ることができると。

まるで黒い太陽の如き存在だ。灼かれる側は脱水症状を起こして倒れ伏すしかない。それを数分の生命に存えるのが、正体不明の英霊から授かったこの盾。

「いいえ、違います。」

私だけが、まだ覚悟をしていなかったんです」
そう呟く。

オルガマリーの援護に助けられて。

立香の瞳を見て。

そして、騎士王の在り方を考えて。

マシユ自身の立ち振る舞いを思い返した。

敵も味方も、自分を除いて攻め続けている。

突破口を探して、時間稼ぎなど要らないと武器を研いでいる。

なのに、自分は立香やオルガマリーを守ることに意識が向いていた。失うことが怖いから、敵の前で立ち止まることを選んでいた。

「前に、進む覚悟を——！」

歯を食いしばり、身体ごと…それこそ感情も力に込めて一步踏み出す。決意の瞳と交差して、盾の攻撃に騎士王は初めて前進を阻まれる。

「これは…!?!」

それが決着の火蓋の合図。

騎士王の驚愕と全くの同時に、マシユの背後を横切る影。

オルガマリーが駆け抜けたと判断したとき、魔弾が1つ顔を掠める。思わず遅れて、もう1つの事態に気づく。

「カルデアのマスターは……」

オルガマリーが重そうに脇に抱えていた、黒髪の少年の姿がない。

「ちゃんとやりなさいよ」

騎士王に聞こえないように呟くオルガマリー。

その口元は緊張しながらも、薄らと笑っていた。

オルガマリーの役目はバトン。

この一瞬でケリを着けるために、最高のタイミングを見逃さなかった功労者。

「はい、必ず!」

その功労者を輝かせるかは、マシユの背後から飛び出した立香次第。オルガマリーとは反対側から飛び出し、存在の認知に僅か遅れた騎士王。立香を目視したとき、右腕から既にガンドが放たれていた。

「小癩なっ!!!」

当たれば二の舞となるそれを、騎士王は全身から魔力を放出してガンドを蹴散らした。

『魔力放出で防がれた!?!』

騎士王は押し迫る盾を左腕で制し、右手に持つ聖剣に魔力を込める。

「先ずは貴様だ、カルデアのマスター!」

盾から離ればその身を守るものではなく、オルガマリーの介助も間に合わない。

それでも、立香は変わらずに騎士王を見ていた。聖剣が歪な魔力を纏い、放出される直前まで目を逸らさない。それが、立香の役目だか

人理の壁

振り抜いた一撃が騎士王を吹き飛ばす。

絵面として輝かしい光景ではあるが、ただマシユが殴っただけなら踳^{よろ}踳^{めく}程度がせいぜい。或いは、なにも援護がなければ盾を置いて近づいた瞬間に察知されていた。

オルガマリーがマシユの背後を通り、立香を置いたとき。立香はマシユの背中に触れて、魔術礼装・カルデア服の瞬間強化を起動した。その効果はマシユの瞬発力を跳ね上げ、騎士王にも届く一撃へと昇華された。

「おおっしゃあ!!」

『よっしゃ!!!』

渾身の一撃を見届けて、マシユ以外がガッツポーズする。

マシユは確かな手応えを感じて歓喜に震えていた。

「や、やりました!目標、沈黙です!」

砂埃の向こう、仰向けに倒れる騎士王。

『こちらでも騎士王の霊気の破損を確認。』

人間で言うところの、骨が砕けた状態だ。もうまともに立ち上がるのは難しい!』

「けど、まだ敵は消えていません。早くトドメを…」

急いで盾を取りに行ったマシユが振り返る。握り締めた盾を振り上げるのではなく、構え直したことで立香とオルガマリーは嫌な予感に視線を向ける。

「う、そ……」

驚愕の声が漏れる。

そこには、再起不能と分析された騎士王が立ち上がっているのだ。

『ば、馬鹿な!』

ランサーやアサシンなら消えてもおかしくないのに!』

ロマニたちの疑問も当然だろう。だが、誰もが分かる理由が一つ。

騎士王には、立ち上がらなければならない背景がある。

「盾の少女、名を聞こう」

「ま、マシユ・キリエライトです」

息を切らし、血を吐いて。

それでも、聖剣を天高く掲げた。

「そうか、マシユ。称賛だ、受け取れ」

魔力放出の濃度を超える剣が大気を震わす。

歪で、死を報せる黒い花が開花する。

花の蕾が開く瞬間、マシユは盾を構えて。

立香が隣に飛び込んだ。

「ごめん、強化魔術はもう使えない。

けど大丈夫、マシユなら耐えられる」

「先輩……はい、はい！必ず、防いでみせます！」

いまから行われることは宝具の解放。

世界に名高い騎士王の宝具など、言わずとも名前くらい思い浮かぶ。それほどに有名で、その名に違わない威力を持っている。立香は魔術師でも特殊な能力もないただの一般人、普通なら自殺行為だ。

だが、騎士王が立ち上がるように。立香もまた、マシユの隣に立ちたいと願っただけの話。死ぬほど簡単で、死ぬ覚悟がなければ着席不可能な席に一番乗りした。

2人の覚悟を見届けた騎士王は、歯を擦り減らすように謳い、最後の一振りを力強く振り下ろした。

「エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣……！」

地を抉り、熱量を撒き散らして、天文台を屠る供花と化す。

次の瞬間、マシユと立香は騎士王の宝具以外の情報を全て遮断された。

「……ア、……」

「……、……！」

塵すらも塵と化す熱量。

灰すらも熱量に変える一振り。

世界最高峰の宝具を盾で受け止めて、2人は至近距離ですら声も聞

こえない闇を浴びる。

こんなものは初陣で体験して良い規格ではない。

もっと小規模な敵と対峙して、徐々に己の力を自覚して、最終的に妥当する相手として初めて受け止めるべき一撃。それらの有るべき段階を飛ばして、決戦の舞台に放り出された。

盾を握り締めるマシユの手が震える。

肌で分かる。このまま、2人は消えていくのだと。

心が消沈していくマシユの背中に、暖かいなにかが力強く触れる。

「……、大丈夫！」

「……………あ」

ぐつと背中を押す正体が手のひらと知り、それが誰のものかを理解するのに時間はいらぬ。

藤丸 立香の手のひらだと理解したとき、彼の励ます声が耳に届いた。

「せん、ぱい」

靈気が砕けても立ち上がる騎士王には、なにか理由がある。なにを捨て置いても……それこそ、誇りを振り払うように優先したいことがあるのなら。マシユにもそれは同じこと。騎士王が敵対するように、彼女にも盾を握る理由があるから。

「聞こえます、先輩！」

理由の名を叫ぶ。

この地獄に放り込まれた身体で、なにも分からないままだけど。

約束した事を果たさないまま終わりにたくない、と。

約束した事を実現したいから、と。

炎のなか、絶望の片隅で希望を語った侍と共に見たい景色がある。犠牲にしたくないものは、その1つだけで頑張れる理由になった。

「うおおおおおッ!!?」

騎士王の想いを受け止めたうえで、黒い星屑に変えたと決意を轟かせる。

『バ、これはい!』

ロマニたちが目を見開いたとき、漆黒の花を散らす光が盾から放た

れる。絶望を押し戻し、それは分厚い壁としてマシユたちの前に顕現した。

絶望に抗う光、それは正しく希望だった。

世界最高峰の宝具は顕現した壁の前に、力尽きるように霧散する。

「……驚いた。私の剣を振り払うか」

轟音が去り、静寂に包まれる大空洞。

「やった……騎士王の全力を防いだぞマシユ！」

「はい、やりました先……ぐっ、ア……！」

「マシユ!？」

肩で息をする騎士王に対し、マシユは膝を着いて満身創痍だ。

「あと、少しで……！」

マシユは、それでも一步前に踏み出していた。

『無茶だ、これ以上マシユは動けない！』

ここは一旦、銀時たちの応援を……いや！」

カルデアのリーダーに新しく2つの影が現れる。

駆けてくる銀髪の男たちを見て、騎士王は舌打ちする。

「チツ、面倒なっ……！」

『よし間に合った！銀時、ジーク、騎士王を倒すんだ！』

もう満身創痍だ、急げ!!』

「私を、侮るな……！」

それは、言ってしまうえば力業。

それも、いまのマシユやオルガマリーの力では覆しようのない、連続の宝具使用という最善手。銀時やジークでさえ、熱量の中心に飛び込んで無傷で居られるはずがなく。靈気の外側が碎ける音を聞きながら、騎士王は覚悟を決めて宝具を解放するために構え直す。

銀時とジークは視線を交わし、頷き合う。

「二行け、マシユ!!」

立香、オルガマリー、ジーク、そして銀時はマシユの覚悟を受け取り、その背中を押しした。

「なにッ!？」

なにかの魔術強化か、その正体を探る暇も、宝具を振り下ろすこと

嫌な奴には先手を取れ

マシユの盾が騎士王の宝具解放より先に靈氣に届いた。その終わり、潔い表情を残して魔力の粒子となった。「終わった、んですよね…」

騎士王が消えたあと。光の粒子の水晶体…特異点の原因を見ながら、現実を確かめるようにマシユが立香たちに尋ねた。

「やったぞマシユ！おめでとうー！」

「やれば出来る子だって知ってたわよ!!」

「きゃっ!?!」

喜びに溢れた立香とオルガマリーがマシユに飛びつく。

初陣で騎士王と対峙、撃破という偉業を達成したのだ。その緊張感から解き放たれた彼らの喜びは上限値を突破していた。

『キヤスターでも引き出せなかった宝具がここで使えるようになったんだ！あの約束された勝利の剣を押しつけるなんて凄いよ!』

モニター越しのロマニもお祭り騒ぎのように興奮している。そして、誰かに鎮められていた。

「それで、宝具の名前ってあるの?」

「えっと、分かりません」

「そう…ま、そんなことだろうとは思った」

「はい、すみません…」

オルガマリーは「違う、そうじゃなくて」と口ごもりながら、ボソツと言葉を続ける。

「…じゃあ、〃 擬似展開・人理の礎〃」

「え?」

「アナタ、英霊の真名が分からないんですよ。だから仮で、ロード・カルデアスって名付けたらどう? って提案したの! 気に食わないなら自分で考えなさい!」

見事な早口。顔は真っ赤。表情は落ち着かず。視線はどこか別の

場所を見て。両腕を組みながら。プイツと頬を膨らませて。

「所長…」

1秒の時間に詰め込まれる数々の動作に周りが感嘆するなか。

「こ、こんなとき所長は素早い判断を求められるの。」

考えておけば直ぐにでも使えるじゃない！悪い!?!」

雰囲気能耐えきれず更に口調が早くなる。

銀時たちはニヤリと笑い、視線を交わすと。

「所長、ツンデレの安売りですね」

「CV. 釘○さんか？」

『これはもう歩くツンデレだよ』

こんなにも遊び甲斐のある所長もこの先なかなか拝めないだろう、と。全力で弄る方向に舵を切った。

「死ねっ！」

青筋が切れたオルガマリーが魔弾を放ち、銀時たちを追いかけ回す。

彼らを他所に、大空洞にキャスターが現れる。

「よオ、終わったみてえだな」

「無事で良かった。どうやらそちらも終わったようだ」

「くそー、色々言いたいのが解決したから愚痴はなしにしといてやる。

あの騎士王を倒したんだ、俺もご覧の通り退去するしな」

ジークが彼の足元を見れば、聖杯戦争が終わった証となる英霊の座への退去が始まっていた。

「キャスター、なぜあの映像を所長に観せたんだ」

「あん？そりゃあ、時系列がゴチャゴチャ”してるからな。ま、騎士王がどうして特異点の原因かとか、謎は謎のまんまだったけどな！」

「そうか。やはり、全て解決したわけではないのだな」

「ああ。んじや、俺はここまでだ。あとのことは任せる。」

次に会うなら、ランサーのクラスでも召喚してやってくれ」

冬木の聖杯戦争、最後のサーヴァント、キャスターも退去した。

ジークが振り返れば、落ち着いたオルガマリーがキャスターのセリフから疑問を拾っていた。

「あとのこと、ね。随分と大雑把だけど、これで修復は完了じゃない」
『こちらでも異常の見落としを探していますが、特別なものはなにも
キヤスターの杞憂だと思いたいですね。

「こちらで退去の準備をしているので、もう暫くお待ちください」
「おう、早くしてくれよ。帰ったらお前の隠し持つてるスイーツ食べ
てやつから」

「ドクター、またイチゴのショートケーキを余分に横領したんですか
!？」

『うええ!?! どうしてキミがそのことを知って……あ、その顔! 鎌を掛
けたな! ああ違うんだマシユ、お願いだから盾を置いて!?!』

「あはは、ドクターって意外とやるんだね」

「ふふ、良いじゃないか。俺も着いていけるようだ、カルデアでの生活
が楽しみだよ」

笑顔ではしゃぐ銀時たちを見ながら、オルガマリーは微笑みながら
一筋の涙を流す。

「……そう、もう終わりかあ」

誰にも見られないよう、顔を逸らして拭う。

目の前で楽しく騒いでいるあの空間に、まだ立っていたいと思った
から。やっとな馴染めて、人の輪に入ることを知ったから。オルガマ
リーの胸の内に、生きたい理由が増えてしまったから。

なぜ、それらの理由に“から”と付け足すのか。

それは――。

「良く耐えた。サンキューな、オルガマリー」

「っ!?!」

思考が先を続ける前に、銀時の手のひらが頭を撫でた。

孤独に震える心に染み込む温もり。

肌も、言葉も。いまオルガマリーが欲しかったものを、銀時は
知ってか知らずか選んでいた。なにか隠し事があるという勘に任せ
て。

「な、なに撫でてるの!」

誰も許可してないし、子供扱いしないで!」

「頑張ったやつには労いの1つ言うもんだろーが。

オメーの開き直りがなきや、マシユも立香も無事じゃなかった。これからもその調子で頼むぜ？」

ニツと笑うさまに、オルガマリーは目を逸らす。

カルデアで罵詈雑言を浴びせ、邪魔者として追い出したにも関わらず。しっかりとオルガマリー・アニメスフィアと向き合える、坂田銀時の人間性に申し訳なきが心の中から溢れてしまうのだ。すでに少なくない信頼を寄せているんだと、このとき自覚した。

「……………あのね」

黙ってしようとしたことを、彼にだけは打ち明けておこうと口を開いた。

「やあ、きつきぶりだね。カルデアの諸君」

オルガマリーの声を、あり得ざる存在が打ち消した。

勢いよく反応する。

銀時は似た声帯が印象に残っているから。

オルガマリーにとつては、最も信頼できる人だから。

両者が声のするほうに振り向いたとき、彼の手元には特異点の原因とされた水晶が握られていた。

「水晶が、レ…レフ教授の手元に…」

「彼は死んだはずじゃ!？」

「マシユ、まさか騎士王を倒すとはね。シバを生み出したときの達成感を上回る驚きすらしたよ。」

それに、一般候補のマスター2人がここまで番狂わせをしてくれるとは…………」

カルデアで見せていた表情が化けの皮と知るに時間は要らない。

忌々しく、苛立ちを込めて見下ろす瞳が語る。私は敵だ、と。

「レフ…………レフ!」

「……………あいつ」

銀時の眼光が鋭くなるのを他所に、オルガマリーは盲目的にレフに歩み寄っていく。前例のないことが連鎖し、彼女のストレスはピークに達していた。レフは、オルガマリーに降りかかる困難を共に乗り越

えた人間。届く声が低温であろうと、さぞ心地の良い眠り歌に聞こえるだろう。

「どいつもこいつも、私の慈悲で生かしておけば許容外のことばかり引き起こす。実に不愉快な生き物だよ、君たち人間は」

それをレフは知っている。

もう棺桶に沈んでいることを解っている。

「ダメだ所長！」

「それ以上近づかないでください！いま近づいたら…」

飛び出そうとする立香を引き止めるマシユ。

もし間に合うのなら一緒に行こうとした。

だが、マシユの勘が言うのだ。レフの手は、既にオルガマリーの首に伸びていると。

「マシユ、人ならざる力を得た君なら分かるだろう。その盲目的な女とは違ってな」

「ぐっ…」

立香も、マシユも、ロマニでさえも彼女の意識を惹くに値しない。オルガマリーの芯を理解して、脊髄を殴り倒すような一声でもなければ三半規管は震わせられない。

「だけどねオルガ、君の存在で愉しませてもらった。

生前にあれだけ欲していたレイシフト適正を、“肉体を失う”ことで獲得したのだからね」

『……………くそっ、やはりか』

「ふん、生きていたかロマニ。諸共消し飛ばしてやろうという慈悲を無駄にしたか。ところで、賢いお前は本当は気づいていたのではなかな、オルガの肉体は既に“死んでいる”と。

ふーっ、いけないな。事実は正確に伝えるべきだよ。生きているかもなどという希望的観測なんて、茶番劇よりも可笑しいだけだ」

くつくつと粘りつく笑みを浮かべる。

「オルガの足元に爆弾を設置したよ。あの瞬間、管制室にいた彼女は誰よりも粉微塵になった。そして、レイシフト適正を欲した彼女の願いを、トリスメギストスが掬ったに過ぎない」

「そんな!？」

「お前……………」

立香やマシユにも見せずに流した涙。

オルガマリ―はその身が無いことを知っていたから流れたもの。自らが死んだ瞬間を自覚しているからこそ、彼らと生きられないことを悔やんだ。

「カルデアに戻れば、オルガの意識は消失——」

数分前のことも忘れて。

泣きながら近づくオルガマリ―。

彼女に哀れみの視線を向けるレフよりも先に。

銀色の風が、大気を震わせて言葉を中断させた。

オルガ マリイイ イイイ イイイ イイイ イイイ イイイ
イイ イイ !!? ?

「———なによ、アンタは黙って……………」

坂田 銀時の叫びが、遂にオルガマリ―の意識を驚掴みにする。

「やった、所長が振り向いた!」

「けど…所長はもうあの男の範囲内です…」

全霊の声が届いたとして、次は助ける手段がない。

令呪を使うものならレフの魔の手が先に彼女を殺すだろう。例え意識が向いたとして、依存している彼女が簡単に離れるとは考えにくい。

『あと少し間に合わなかったか!』

成す術無しと、ロマニがモニターの向こうでデスクを叩く。立香もマシユも、その悔しさが痛いほど分かる。

「大丈夫、しつかりと俺たちの想いは伝えてある」

「……………どうということ?」

銀時はそんな2人の背中を叩き、背筋を伸ばさせる。

まあ見てろ、と。淀みなくオルガマリ―に信頼を注ぐ銀時の視線の先。

感動の再会を邪魔されて腹立たしそうに睨むオルガマリー。怒号を放った銀時を一瞥して、レフのもとに再び歩み寄ろうとした矢先。

“オルガマリー、俺たちを信じろ”

「っ!？」

オルガマリーと呼ぶ声が、数時間前の言葉を記憶の奥底から引きずり出てきた。

「ふん、無駄な足掻きを。そうやって吠えて、無力な己を呪いながら見ていろ」

「な、んで……」

“こんな局面で後から死んだやつが現れても、きつとロクなものじゃねえさ”

「私には、レフが……レフしか……」

“これからもその調子で頼むぜ?”

「……………」

次々と、短時間で言葉を交わした侍の信頼を浴びる。

長年培ってきた理解者への依存と、短時間で何度も信頼を預けてきた男。こんなものを比べるほうが可笑しい話だ。

レフはオルガマリーの疲れ果てた心に寄り添い、いつも窮地から助けるために力を貸してくれた。

それに対して、銀時は生意気な態度を取るしお互いを支え合うために自分の過去を勝手に話す仲間を1人で行かせはしなかった。

「くく、さあオルガ。最期に君の宝物に触れさせてあげよう。聖杯を使い、カルデアスと時空を繋げておいた。もう果てた哀れな少女に相

応しい——」

大きく深呼吸。

さまざまな記憶を思い返して、2人の違いを見つけた。

漸く、オルガマリーの聴覚は現実を聞き入れる。

「んなこと知ってるわよ、ばーか」

言い放つや、レフに右腕を構えて至近距離から魔弾を連射した。

「ぐっ!？」

「所長!!」

「やったー！」

反応が遅れたレフは穴だらけになる。

そんなものは知るかと。オルガマリーは全速力でかつて依存していた悪魔のもとから自ら離れた。

「レフ、貴方のおかげでカルデアの所長として威厳は取り繕えてたと思うわ。そこは本当にありがとう。」

けどね、貴方に助けられて安堵はしたけど、あの馬鹿どもみたいに心が暖かくなることはなかった。だって、次も1人で矢面に立つことは変わらなかつたんだもの」

「オルガマリー……」

悲しさに目を閉じて、銀時のもとへ走る。

彼女の足に迷いはもうなかった。そこには、共に前線に立つてくれる人たちがいるから。

「騎士王との戦いから思っていたが、キミの魔弾はこんなに強力だったかな……。まあいい、こんなものは些事だ」

「きやあつ!?!」

だが、いつの間にか元通りのレフが腕を振るうと、掴んでもいないオルガマリーの身体がふわりと浮かぶ。

「貴様が死ぬことに変わりはない、もう手遅れだ!」

怒り塗れの罵声。

力任せの情緒で、命無き少女を太陽と遜色のない情緒体のなかへ投げ飛ばした。

「手遅れだとツ!?!そりや、人間には通用しないぜツ」

「なにを……アンタ、一緒に死にたいの!?!」

ガシリと、吹き飛ばはすのオルガマリーを地面に引き止めたのは銀時。両腕で彼女を抱きしめて、全力で歯を食いしばり、綱引きのように身体を寝かせて、地獄へと向かう少女を離さない。

「現にこいつはテメーの呪縛から解放された。その意思を手遅れなんて決めつけんな!?!」

「……………馬鹿じゃないの、ほんとに」

あと数秒で銀時の身体は限界を越える。

「急げマシユ!!俺たちも加勢するんだ!」

「先に失礼します!」

抱き留めるのを見るなり駆け出した立香、そしてマシユの脚力でも、あと僅かに間に合わない。もっと強く、圧倒的な爆発力でもない限り。

「転身——終了」

必死に足掻く銀時を噛い、彼の想いを無駄にしたくないと駆ける少女の頭上に、その影は突如として現れた。

大空洞を揺らす物量、敵味方の距離を無かったことにする全長、なによりもレフの想像を越える存在の発生。

ジーク。

その身、邪竜ファヴニールの端末である。

彼の宝具、その身を在るべき姿に転身すること。

即ち、大空洞に現れたのはファヴニール。

レフの意識が逸れた瞬間に転身を始め、見事に眼前での変化を果たしたのだ。逃れる余裕は与えず、隙も無く。ファヴニールは一息にレフを消し炭にせんと息を吸い込んで。

「ブエックション!!!」

レフの髪の毛が鼻をくすぐり、全力でくしゃみした。

「ちよ、あぶ——!?!」

瞬間最大風速を測ることがバカバカしくなる。

下手をすれば竜の息吹を上回る風速で、レフの身体は吹き飛ばされ、自らが繋げたカルデアスに頭から突っ込んでいった。

「……………あ」

『あっ』

「レフ、カルデアスに沈んだアアアアアアアアアア!?!」

立香の驚愕が大空洞に轟いた。

いつてきます

ファヴニールの息吹：否、くしゃみでカルデアスに突っ込んだレフ。一同が呆気に捉われるなか、何事もなくレフの全身が沈んでいくのを見届ける。

「え、終わり？悪の幹部ポジションなのに」

「えっと、はい。恐らくは」

首を傾げる2人。実は残機があるとか、本体は別にいるとかいう雰囲気でもなく、少しずつ現実を受け入れている。

転身を解いたジークは汗を流しながら、ぐつと親指を銀時に向けていた。

「や、やったな！き、作戦通りだぞ、マスター」

「う、うんうん、良くやった。俺の指示通りだな！」

「いま思いつきりくしゃみしたよね。」

めちやくちや偶然の産物だったよね!?

レフとかいう裏切り者、自分のフサフサの髪の毛が仇になってカルデアスに突っ込んだよ!!」

いやいやいや、あれを作戦で誤魔化そうとするな。

格好良く決めたかったのは分かるけども。

『ふ、藤丸くん、それ以上はやめよう。格好つけておいて、くしゃみで死んだなんて笑い話にしか……プツ』

ロマニも吹き出しているように、レフ教授だったなにかの死因がくしゃみであることは揺るがない周知の事実。

いますぐにでも新聞でデカデカと載せてやりたい気分だ。

「レフ……」

「所長、あの……レフ教授はもう、私たちの知る人ではありませんでした。なので、その……」

などとテンション高め of 立香から変わり、レフの裏切りを受けたオメガマリーにどう声をかけるか迷うのはマシュ。

俯くオルガマリーは、あたふたするマシユをチラリと見ると、頬を綻ばせてワナワナと震え出す。

「え、えつと、あれえ?」

肩が震えているのだが…その震えにマシユは首を傾げる。なんと
いうか、怒りよりも別の感情しか見えないのだ。言うのなら、お笑い
番組を観ているときとか、その類のものを知識から想像する。

オルガマリーはマシユの素っ頓狂な声に、ついに感情を爆発させ
た。

「ギャーツハハハ！」

「ざまあみなさい、私を今まで騙してきた罰よ！」

「自分が開発した地球で焼却されなさい!!!」

「ほえ?」

「年中ニコニコして他の女性職員にも甘い言葉かけるわ、夜通し女性
職員と資料作成に付き添うわ、挙げ句に男性職員とランチするわで私
に独占されないんだもの。」

「そんなやつ居なくなつて清々するっつーの！」

「うっわあ、独占欲の塊」

「しかも最後はまともじゃねーか」

オルガマリーの妬みに顔を歪める2人。マシユについては立香が
耳を塞いだため聞こえていない。教育上宜しくないから正解だ。

「なによ、言いたいことあるなら聞こうじゃないの」

『薄々思つてはいたけど、所長つて一途なんですね』

ロマニの褒め言葉には、かつここれがマギマリなら喜んで受け入れ
るんだけど魔弾と暴言吐く上司はキツツイなあかつこ閉じる、という
行間が入る。

「ロマニ、顔にこれがマギマリなら喜んで受け入れるんだけど魔弾と
暴言吐く上司はキツツイなあ、つて浮かんでるわよ」

『げええっ?!なんでバレたんだ?!』

「生死を彷徨うと地の文を読めるようになったの」

「すごいメタじゃないですか」

「冗談だつて。あのゆるふわの考えそうなことなんて、お菓子かオタ

クのことだもの。……やっと、接し方が分かってきたのに残念ね」

賑やかな雰囲気は、オルガマリーが耐えきれずに溢れ出した涙で終わりを告げる。

皆んなが口籠るなか、ジークが聞く。

「…聞きにくいだが、あの男が言っただことは」

「うん、私、もう死んでるみたい」

「本当、なんですかね……………」

事実として受け止めたことを微笑んで示す。

オルガマリーが認めるからには、もう誰にも生命が終わったあとに否定することなんて出来ない。

だから、立香とマシユはこみ上げる熱を噛み殺してオルガマリーと向き合う。

「マシユ、立香。ここにきて俯いてるようなら魔弾お見舞いしてやるどころだったわ。その顔、覚悟、そして想いを忘れてはダメ。

誰かの犠牲を越えて行くんじゃない、人の想いを励みに立ち上がりなさい。何度でもね」

理不尽な現実殴られて、握る拳を解くにはまだ時間が必要だった。けれど、未来を歩めない人から激励されて立ち直るのに一瞬も要らない。

「うぐ……………えぐつ……………はいっ……！」

「忘れません……………いつまでも、覚えていきます……！」

力強く、何度も頷いてオルガマリーの言葉を脳裏に焼き付ける。

そして、大気の揺れとともに別れは訪れた。

『……………名残惜しいだろうけど、もう特異点が崩壊を始めた。全員、退去準備に入ります」

「ええ、そうしてちょうだい」

ロマニも覚悟を決めて、自分の成すべきことに意識を切り替えた。これなら大丈夫だと一息ついて、オルガマリーは銀時を見る。

「銀時、ここままでよく働いてくれたわ。きつとレフの後始末で忙しくなるでしょうけど、魔術師もびっくりの身体能力があるから心配してない。」

マシユを……カルデアを終わらせたなら呪ってやるからね」
「ああ、任せろ。俺は頼まれた依頼はなんでもこなす」万^{よろず}事屋だ。
謝礼は“明日”、アンタが望んだ未来にこいつらを連れてってやる」
「ふふ、そんな仕事があつたのね。案外楽しそう。山籠りに飽きたら雇ってもらおうじゃない」

「そんなときは会計頼むわ。あ、俺含めて給料も出してほしいんだけど」
「さ、最低です銀時！会社の利益からびた一文捻出する気概を感じません！」

「もしかしなくても自転車操業じゃないか！」

軽口を叩き合つて、最後の一秒までオルガマリーの横で約束をする銀時。

「いやいや、そういう月も年に12回くらいあるだけなんだって。いやまじで」

「年中無給だろうがっ！」

「カルデアの労働環境以下です。」

「いますぐに転職をオススメします！」

「転職先なら安心なさい、私のカルデアで面接免除で雇ってあげる。年中無休でね」

ぎゃいぎゃい騒ぐ彼らを微笑ましく、そして忙しく準備をしているロマニの視線で計器が振り切れる。

『これは……！急げ！早く藤丸くんたちを——』

晴れた表情を全て曇らせる風が吹く。

「よくぞ騎士王を倒した。」

「これで特異点冬木は定礎される」

気づけば佇んでいた影。

「えっ……？」

カルデアの計器が異常値を感知する。ロマニの緊迫した声が警鐘を鳴らすよりも先に、その影は和やかに収束する雰囲気嘲笑う。

「苦痛と生きる道を君たちも歩むとはね」

見上げる銀時たち。

誰もが凝視するも、誰一人としてその影を姿形も捉えることは出来ない。まるで星でも見るような感覚…影との距離感がまるで分からないのだ。

「ぐう…これは…!?!」

「立つことが…恐ろしいと感じます…!」

「ちよつと、どうしたの2人とも!?!」

会話どころか、言葉を聞くだけで平衡感覚が奪われる感覚に陥る。そんな2人にオルガマリーが身体を支えようと寄るなか。

「——誰だ、お前」

坂田 銀時は怖じけることなく対峙していた。

「その質問はおかしい。この世の誰もが私を知っているはずだ。全ての私の産みの親は君たち、人類史なのだから」

『い——、——て!』

モニターが砂嵐のようにブレ、ついには通信が切断されてしまう。

「おめでとう諸君。君たちは選んだ。無駄な足掻き、その一步をいま歩み始めた。人間、愚かで臆病で、残忍で醜悪な生物よ」

この異常事態は全て、影が落とした歪み。

対処する術はなく、立つことだけが銀時たちの抵抗となる。手を出せば死ぬことくらい、オルガマリーにでも理解できた。

「それでいい。じきに此処は崩れる。」

長くはない生命、終末へと進む一秒をしっかりと堪能する権利だけは奪わない。己の幸福に気づくことなく、天命を全うするがいい」

「随分と好き勝手に言いやがる。騎士王さんの影で高みの見物してるオメーがこの街を燃やしたのか」

「答える義理はない。だが、レフの名乗りくらいは代弁しておこう。」

彼は2015年担当。我らの王が人類を一扫するために遣わせた、人理焼却を担う一柱だ」

「我らが王…それに、人理焼却だつて?」

「2017年以降は消失したのではない。カルデアを残して人類史は焼却されたのだ。」

君たちが死なずとも、カルデアは刻を待つだけで2017年をもつて灰と化す。本当に、幸せな種族だ……」

仮面着けたように表情が分からない影でも、声の抑揚だけは知ることが出来る。

(影は俺たちを…いや、人が死ぬことを喜んでいるのか?)

いま立たされる状況なら怒り浸透になるはずが、立香は影の主張に疑惑を抱く。さらに思考を加速させようとするが、意図があるかの如く重苦しく精神を掻き乱されて中断した。

「さようなら、ただの人間。解り合えぬ愚者たち。地球に永劫は無いと知りなさい」

「待ちやが、っ!?!」

ついに、前に飛び出そうとする銀時の襟を掴んだのはオルガマリ―だった。

「坂田 銀時。あのボロマントの言葉を受け入れるの? 私たちは……人間の魂は朽ちるって、そう肯首する?」

「いいや、絶対に認めるもんかよ。誰よりも、所長: アンタの目が諦めちゃいないんだ。俺が負けるもんか」

「ええ、よく言ったわね鈍間。いまの顔、最高に憎たらしい笑顔してるわよ」

銀時の意志を確認して、全員の前に踏み出す。

鼻を鳴らし、腕を組んで影を睨むさまは、人理保障機関のトップに相応しい出で立ちをしていた。

「何者か知らないけれど、よっぽど人間のことを嫌ってるようじゃない。けどね、私の部下を好き勝手に言わないでもらえる?」

私のことを侮辱されたみたいで気に食わないから」
立ち去ろうとする影が足を止めた。

気まぐれか、興味が湧いたのか。若しくは、死の淵で気高くあり続ける少女の声が立ち去っても届くと思っただのかもしれない。銀時でも止められない帰還を止めた価値を背中で聞く。

「聞きなさい、"首謀者"! アンタが誰であろうと、レフのファッション並みにくつだららない企みはカルデアが阻止するから!」

これでもか！と右腕を伸ばし、人差し指を向けて。

「人理継続保障機関カルデア所長、オルガマリー・アニムスファイアが宣言します！」

藤丸 立香、マシユ・キリエライト、そして坂田 銀時が王様気分の汚いど出っ腹に風穴を空けるわ！覚悟しろ！」

走馬燈を消し去る勢いで、影しか見えない敵に勝利宣言を終えた。胸の奥に勇姿を刻み込む銀時とジーク。

立香やマシユは溢れんばかりの信頼に涙が出ていた。

「……………」

そして、影は全てを聞き終わると音もなく消える。

ポロボロと流す悔しさに浸る暇もなく、銀時たちの足元から光の粒子が発生した。ロマニの言っていた退去だと直ぐに分かると、ジークが最初にカルデアへと帰っていく。

時間差は僅かしかない。

銀時は2人の背中を押した。

「行くぞ立香、マシユ」

「ぎ、ぎんとき……っ」

「う、うっ……………」

最後にオルガマリーに視線を向けた立香。

「所長！」

喉から、自然と叫んでいた。

「俺、まだなにがなんだか分かりません！居眠りしてアナタに蹴り飛ばされて、ドクターたちとお菓子食べてたらあちこち真っ赤になって！」

涙声で不格好に言葉を続ける。

オルガマリーはゆっくりと頷いて、最後まで聞き流すまいと涙ぐみながら視線を合わせ続ける。

「こんな場所に連れてこられたかと思えば人外魔境だし、所長も助けられない！」

もうこんな想いはごめんだ！

絶対にやり遂げます。貴女の人生が無駄じゃないと証明する！役

立たずに終わらない！だから、だから……」
マシユと2人で頷き合う。

2人同時に勢いよく涙を拭い、憎たらしいほどの笑みを浮かべて。

「いってきます!!」

元気よく出発の挨拶をして、銀時とカルデアへと退去していった。

「ええ、任せたわ。私の分まで、しっかりと生きなさい」

所長が見せた笑顔は、涙を流す立香とマシユの背を押す。そして、それ以上に2人の心に不屈の覚悟を持たせる瞬間となった。

ここに、世界の垣根を越えた物語を綴る。

新しく、人理焼却に抗う戦いが始まる。

これは、銀色の侍と紡ぐ聖杯探索だ。

邪竜百年戦争オルレアン

― 救国の聖処女 ―

永続狂気帝国セプテム

― 民の先導者 ―

封鎖終局四海オケアノス

― ソラの航海者 ―

死界魔霧都市ロンドン

― 白白はくはくの正義 ―

■■■■ 神話大戦イ・プルーリバス・ウナム

― 鋼はくの白衣 ―

■■■■ 円卓領域キャメロット

― 輝けるアガートラム ―

絶対魔獣戦線バビロニア

― ■■■■の■■■■ ―

邪竜百年戦争オルレアン―救国の聖処女― 異なる物語、始動

十六年生きている。

沢山の出来事があって、人生を振り返って印象に残ることは多々あるけれど…。

“ 人理継続保障機関カルデア所長、オルガマリー・アニムスファイアが宣言します！”

あれほど、誰かの背中が格好良いと思えたことは一度もなかった。未知の存在に、我が運命を受け入れたうえで立ち向かう彼女の背中。きつと、あの宣言を覚えている限り、自分は挫けるたびに立ち直れる。

“ 藤丸 立香、マシユ・キリエライト、そして坂田 銀時が王様気分の汚いど出っ腹に風穴を空けるわ！覚悟しろ！”

傲慢で我がままなのに、嫌いになるほうが難しい人は初めてだ。
オルガマリー・アニムスファイア。

彼女の願いを叶えたい。いや、叶えるために。俺は、マシユと、そして――。

「ん、あれ…？」

たん、と視界の奥底が軽い振動を連れて浮上した。

夢の世界から意識が転げ落ち、一気に現実に飛び込んだと自覚する。

「……………ふ〜」

起床時間午前7時。

ここ数日間の訓練で疲労は溜まっていたらしい。

カルデアに帰還し、世界を救うことを誓った日から軽く1週間が過ぎた。休息は1日で終わり、所長の追悼をする暇を僅かばかりにして俺たちは聖杯探索グラントオーダーに向けた訓練を開始した。

生きることが第一に、マシユたちとシミュレーターに没頭していた。

…なお、マシユ〃たち〃のなかに銀時を含めていいのかは議論する必要がある。だってあの人、ほぼサボってたし。なんなら管制室で保護者ポジション決め込んでいた。

『なあロマン、なに1人でいちごケーキ食ってんの？イチゴだけでいいから口に入れてくれよ』

『なんでメインを獲ろうとするの!？』

美少女ならともかく、おっさんに「あーん」なんて死んでもするもんか!』

『んだと?!いま流行りのTSするからイチゴください』

『流行に乗れてないよ?!いまはタオル一まぶべろ!』

突然の暴走を止めるために蹴りを入れる銀時。

取っ組み合う2人をよそに訓練は続いた。

そして今日、1つ目の特異点修復に臨む。

朝から寝ぼけて行くわけにもいかない。

頬を叩いて気合いを入れる。

「よし、行くぞ」

日常とはかけ離れた朝日を浴びながら、冒険の二歩目を踏み出した。



「さて、これからについて話をしよう」

中央管制室に集まった立香、マシユ、銀時。

所長代理であるロマンはオーダー開始前の最終ミーティングを開始した。

「説明以下略!」

「ええっ!？」

そしてこの発言である。

「所長代理としてその発言はどうかと思います!」

「まあまあ、落ち着いて。ここで長々と説明しても、読者は皆んな知ってるだろうからね。ほら、見てみなよ、読者たちの生声を」

ロマニが指差した先には、数人のカルデア職員が立ち話をしていた。

「おい、また俺ら最初から特異点修復やるのかよ」

「今更オルレアンって…ぷぷっ」

「どうせ筆折れるだろ」

「ばっかヤロウ！邪ンヌの悪役っぷりを見られる貴重な場所だぞ！俺はこの日のためにカルデア戦闘服に録画モードを組み込んでおいたんだぜ」

読者たちの声を代弁する職員たち。

「似たような説明をいろんなF G O二次創作で読んできた強者たちだ、彼らのニーズに応えられるのも二次創作ならでは」

「いやどう見てもこの先のこと全部知ってるよね!?あの人たちに聞けば人理修復いけちゃうでしょ!?!」

「あー、ダメだよ藤丸くん。彼らはそう思いながらも、心のどこかで原作との違いを楽しみにしているもんなのさ。だからこそ、ドラ○ンボールのような長いあらすじは不要！時代はコストカット!」

「安心したまえ諸君。聖杯探索その他諸々の事情はご都合主義で皆んなの頭にインプットされる。ついでに説明を省いたロマニの給料もカットしておこう」

実質の糖分カットに絶望するロマニ。

「発言がとても危なっかしいです、ダ・ヴィンチちゃん!」

「うっ、頭になにかが…」

脳内に直接情報を叩き込まれる一同。

銀時に至っては頭が残念すぎて情報の半分以上を取りこぼしていた。

「とういうわけだ、オーケー?…うん、よろしい。」

藤丸君、マシユ、銀時君。健闘を祈る」

こうして、最速で第一特異点へのレイシフトに移った。



くとある男の独白

冬木の町を散策しながら、もう生存者は絶望的なことを察した。瓦礫の山だったり、人の成れの果てを見て彼らは心を痛めている。誰だつてそうだ、自分にもそれくらいの感情は残っている。

だが、これは最初に抱いた感情じゃない。レイシフトして先ず、人の気配が落ちた大地を見ながら、まるで。

「跡地」――

戦、人と、異形の者。

死体置き場、仲間と、敵。

刀塚、折れて、訣別。

全て、見てきたもの。ここにあるはずがないもの。

平和に落ちた地獄の影は、そっくりそのまま自分の知る戦場と合致している。

名前が違う。

場所が違う。

世界が違う。

町を探索すれば否定材料しか見つからない。現状、裁判所に持ち込んでも証拠不十分で追い返されるだけだ。

じゃあ、いつの日か。

否定材料がゴミになったら？

証拠ではないものたち全てが、絶望的な真実に辿り着くパーツを担っていたならば…。

分かるはずがない。

俺はどうしてここに来たのかも知らない。

きつと、そういうサガなんだと納得しておこう。

新人だからこそ真つ直ぐに

「ええ、分かりました。ドンレミ跡地に現れたアサシンは後で処理しておきましょう。」

もう下がっていいわよ。邪魔者の監視を継続しなさい」

閉じ込めた怒気の底から、クツクツと煮える音を漏らして女性が息を吐く。すでに沸点は超えていた。それでも上がり足りないと言え、瞳に、影は宙に溶けることで頷いた。

入れ替わるように大広間へと入ってくる足音に、怒りの上昇が止まる。

「やはり、サーヴァントが複数召喚されているようですね。面倒ごとになる前に、一気に叩いてしまえますか、ジャンヌよ」

「それなら大丈夫よ、ジル。各方面、私たちの敵は粗方見つけ出しているもの。」

間も無く私の復讐が終わる。ここで横やりなんて絶対に許さないから……」

怒りを吐きながら、歯軋りに呼応して怨嗟が炎となり腕に滲む。己を焼かず、障害物に苦痛を分け与えるもの。世の理不尽を粛清するための感情を見て、ジルと呼ばれた男は微笑んだ。

「これは頼もしい限り。我が友、プレラーティが感動のあまり身を歪めてしまったのも肯けます」

「…あのデブ、本当に信用出来るわけ？」

私にはゴミサーヴァントにしか見えないのだけれど」

「これは手厳しい。ですが、彼は異形を愛し、異常に嫌われる者。その証拠に、ファヴニールと相対して死なずに済んでおります」

「……………いいでしょう、あの気持ち悪い生き物は任せます。この戦争を続けるために上手く活用してみせなさい」

悪を敷く悪に忠誠を示しながら、深く頷いた。

オルレアンに巢食う脅威が笑う。

日が経つごとに増す精度。前線に立ち、母国を焼き払う聖女を見守る。だが、精神的成長は既に行き詰まりつつあった。多くのことが片

付き、残すものは僅かな世界。慎重に魂を選定しなければならない
と、今宵の月を想いながら次の手に移った。



暖かい日差しを浴びて、そのまま意識が休んでしまいそうなほど微
睡んだとき。吹き抜ける風の匂いが日本のものとは思えず、興味に駆
られて暖かい世界を求めた。

「うわあ……！」

目蓋を上げて、目一杯に映る緑の大地に感動のあまり言葉が出な
い。腕をぶんぶんと上下させて、なんとか言語化できないかと脳内を
探る。しかし、どこまでも駆け抜けていけそうな世界を瞳で楽しむこ
としか考えられない。

ますます寝転がりた。

人間として寝転がらなければ失礼というもの……。

いざ——！

「こりゃあ天晴れだな。外国の宇宙^{ソラ}ってのは」

「えっ」

踏み出そうとした足を止める。

気づけば横に立っていた銀時。ボケーっと見上げるものだから、釣
られて視線を向ける。外国の空がどんなに透き通っているのか、それ
も楽しみで見上げたものだから面食らってしまう。

「あれは……輪っか？」

浮かれた気分を一瞬で叩き潰す異変が空にあった。

青空一面を覆い尽くさんとする円環。

地球を見下ろし、地上を監視するように巨大な輪が手の届かない場
所に刻まれていた。

何故だか分からないけど、アレを恐ろしいと思った。人類の……
や、世界の敵と言えるくらいには。

「なあマシユ、フランスってのはソラも洒落たことしてんの？もしかして時空の裂け目とかだったりする？」

「……………わ、わかりません。あのような輪っか、地球のどこにも存在しません。過去、空にあのようなものを観測したという記録はどこにも乗っていないはずです」

「過去に来たという点で見れば似ているな」

別世界で生きてきたマシユでも分からない代物。

だから、良くないものなんだろう。そう考えていると、風景に似合わない電子音が鳴る。

『やーっと繋がった！皆んな、無事かい？……………って、皆んなして空を見上げてどうしたの』

「ドクター、空を見てください」

ロマニが通信を繋げてくれた。

早速で悪いけど、空に浮かぶ円環について見てもらった。安否ならこっちで済ませているから。

『空？……………なんだこれ、光の輪!？』

人理焼却と関係があるかもしれない。あれの解析は僕たちでやっておく、皆んなは現地の調査に専念してくれ』

「了解です」

モニターの向こうで慌ただしさが二割増しになる。

こちらでは両拳を握り、小さく意気込んだマシユ。

「ここからは忙しくなります。まずは拠点を確認したいところですが……………」

「まあ、取り敢えずさ」

「銀時、なにか気になることがありましたか？」

細かい打ち合わせは済ませているので、マシユが指揮をしようとしたとき。銀時は足元を見ながら最初の行動を提案した。

「こいつに聞いてみね？」

ひよいと右腕で持ち上げたのは、完全に伸びている鎧を着た男性だった。

「ええっ?!いつから居たのこの人!？」

「す、すまない…じつは全員踏んでいるんだが、言い出すタイミングが掴めなかったんだ」

「うそっ!? うわほんとだ、ごめんなさい!」

4人の下敷きとなった4人の現地民。マシユの下敷きとなった男性だけは幸せそうな顔をしている。

「こ、ここは…俺たち、変な光に包まれて…」

「あー、あれだ。なんか変な化け物に襲われてたから助けたんだよ」

欠伸をかきながら、とてもではないが化け物を撃退したあとの雰囲気ではない銀時が嘘を吐いた。

(やばいですよ銀さん。バレたら殺されちゃいます!)

素直に謝る派閥の立香は額に大量の汗を流す。嘘を貫くか、そもそも貫けるのか自信のない表情を浮かべてしまう。頭を回し始めた現地民の視線が向いたとき、マシユが大盾を出して顔を隠してくれる。

「そうだったのか、ありがとう。きっとそいつらはワイバーンだ。やつらのせいで俺たちは戦争どころじゃなくなったよ…」

「え、なにそれ、どんなファンタジー?」

「もしかして、ワイバーンを知らないのか?」

よく見ればその服装、ここらじゃ見ないな…」

(やばっ!もうだめだっ!)

(い、いざとなれば私が盾になります!安心して私の後ろに隠れてください!)

「あんたら旅の途中か!なら尚のこといまのフランスを知っておくといい。命の恩人をみすみす死なせるわけにもいかなからな!」

人懐っこい笑みで銀時の背中を叩く男性。

(笑顔が眩しい…!)

(すまない…マスターの嘘が立香の良心を痛めてしまつて本当にすまない)

違うんです、レイシフトした先にたまたま居た貴方たちを下敷きにしてしまったんです。

そんなことを言い出せる雰囲気でもなく。開幕、こちらのマッチポンプで現地民と仲良くなったことは旅の終わりまで忘れることはな

いと思うのだった。

「火刑後に蘇ったジャンヌ・ダルク、彼女が操る無数の竜……。そして、巨大な竜によって壊滅させられた街、ドン・レミ。」

うん、歴史に詳しくない俺でも異常事態だって分かる」

「ワイバーンは幻想種…空想上の生き物です。まさか、骸骨のような敵性生物がここにもいたなんて」

仕事に戻るフランス兵と別れ、立香たちは街の近くの木に腰を下ろしていた。立ちションに行った銀時を除いて。

『もー、緊張感がないなあ』

「アンタにや言われたくない」

「あ、お帰り」

欠伸とともに銀時が座る。

話し合いの結論を求めてきたところから、そもそも面倒でサボっていた説が濃厚となっていた。

『件のジャンヌ・ダルクが特異点の原因なのは明らかだ。この時代にいないワイバーンを召喚してるから、聖杯を持っていると見ていい。近くの街で情報を集めてくれ』

適当に返事をした銀時は、ジークの横に座る。

「どうしたジーク、疲れたか？」

兵士の話聞いてから、ジークの顔色が悪くなっている。どう聞いたものか全員が悩んでるところにズバツと切り込んだ。

「…俺は信じられない。ジャンヌ・ダルクが惨殺を繰り返しているのは、なにかの間違いだと思う。…すまない、根拠を提示しろと言われたら」

「自分なりの根拠があるんだろ。アイオーやら全体攻撃なんてあるんだ、俺は否定なんてしねーさ」

この1週間、ジークとは少くないコミュニケーションを取ってきた。彼に限らず、銀時やカルデアの職員全員が新入りの立香、銀時、ジークと接し、意志の確認をしている。

他人を思いやり、和を協調する。そんなジークが真剣に言うのだ、銀時の意見に立香とマシユは頷く。

「ああ…ああ！彼女は頭の固いところがあるけど、誰よりも人を愛している女性だ。だから、可能なら話をしたい」

「ジーク、まずはアイオーを否定しないとペット扱いになるよ」

ともすれば、珍しく積極的に意見を主張するジークに思うことは1つくらいだろう。

「もしかして、ジャンヌ・ダルクと会ったことがあるのですか？」

「じつは聖杯戦争に参加したことがある。そこで裁定者ルイラの彼女と出逢い、旅をしたんだ」

「ええ!?!それは初耳!」

「お、驚きました。まさかジークさんが私たちの大先輩だったとは…」
『考えてみれば、ジーク君の生い立ちは詳しく聞いていなかったね』
『それにしても驚いた。ファヴニールになった経緯、珍しい魔術にばかり気を囚われていたよ。上手いこと触れてない過去があると思っ
ていたが…』

「特殊な事例だから、あまり詳しく話すと混乱すると思ったんだ。隠していたこと、本当にすまない」

「まーまー、いいじゃねえか。これで話が色々進むわけだし。なら、尚のこと実物を見ないとな」

「ああ、ありがとう…。気が楽になったよ」

会話をしながら、飲み物でも手に取るように木刀を抜いて。

「え…?」

背後に振り抜いていた。振り終えて一秒、誰も銀時の行動を理解するに至らない。突然の奇行、空振りした場所を見てもやはり影1つない。

「マ、マスター?」

自分の話の問題があったのかとオロオロするジーク。しかし銀時

の視線は向こうを見つめたまま応えない。二秒経ち、全員が漸くソレに気がついた。

「人……？」

原っぱの上に人が立っている。フランスではまず見ない和服、全体的に目立たない暗い出で立ちの男がいた。見たら居たという、脳が混乱してしまう現象に銀時はいち早く気付いていたのだ。

「てめー……！」

「……………」

理解を追い越して、和服の男と銀時が刃を握る。

男が取り出したものはクナイ。忍者が扱う両刃武器として有名だ。先程の気配のなき、日本人という点から彼は忍びのサーヴァントなのだろうか。

「マシユ、手伝おう！」

「はいっ！」

考えても仕方ない。相手の意図が分からないなら、味方を守ることに専念するんだと立香たちが動いたとき。

飛び上がった男の行動に度肝を抜かれてしまった。

宙返りする間に撒かれるクナイの雨。無作為に地面に散らばるその数は、常人が手から繰り出せる数ではない。

「多すぎないか!？」

「気をつけろ、今ので糸を張りやがった！」

駆けつけようとした全員の足が止まる。

銀時の言葉を聞いても、立香の目には糸がどこにあるのかまるで見えない。だが、マシユとジークは気付いて周囲の糸を切った。

「本当だ、こんなに細い糸があるのか？」

「か、髪の毛よりも細いです。それに強度は鎖の比じゃありません」

『皆んな気をつけろ！いきなりサーヴァントの反応が現れた！って、銀時君が戦ってるのか!?!』

遅れた通信によって、相手がサーヴァントだと確定した。つまり、銀時は生身で戦っていることになる。この事実は周知だ。フランスにレイシフトするまで、戦闘シミュレーションにより銀時はマシユ、

ジークと戦ってきた。魔術抜きなら銀時に軍配が上がるほどの實力。それでも。

『ここで死ねば本当に死ぬ。銀時君が實力者でも、魔術にまでは対抗できない。皆んな、急いで援護するんだ!』

和服の男と互角に打ち合う銀時だが、魔術や宝具1つで呆気なくひっくり返る。

「マシユ、立香を頼んだ」

「分かりました!」

多すぎる糸の壁をジークの魔術で地面ごと崩す。

「ほう、あんなことが出来るか。忍の術が霞んで見えるな」

「遮蔽物もないところに糸を張り巡らせるやつに言われたくねえよ」

「単純なこと。糸を張るための糸を立てればいい」

銀時の木刀を躲しながら笑う男。データラメな方法を口にしながら、真横から跳んできたマシユを宙を蹴り、方向転換して回避する。

「空間を蹴った!?!」

「そんなふうには糸を使えるのか」

マシユの追撃を躲した男は距離を置いて着地する。

「無事か、マスター」

「ああ、傷1つねえよ。それより気をつけろ、ヤツは接近戦も強い」

「承知した。いまの失態を取り戻してみせる」

銀時に合流し、全員が再び刃を構えたとき。

「ま、待って!待ってください!」

私たちは危害を加えるつもりはありません!」

ザツ、と。男の奥から1人の女性が飛び出してきた。被っていたボロのフードが脱げて、金髪で端正な顔が現れる。

『いつの間にかもう一騎!』

ロマニが素っ頓狂な声を上げた。

探知機能の無能っぷりを晒していたところに、ジークが剣を下ろして咄く。

「ジャンヌ…!」

「えっ、この人が…?」

ジーク表情は親しい者に向けるものだ。見間違いではないと分かり、次なる問題に移る必要が……。

(いや、その必要はないんじゃないか?)

立香、マシユ、銀時は瞬時に同じ結論に至る。

竜の魔女、ドン・レミを壊した復讐者なら、ジークが1番に違和感に気付いている。本物のジャンヌか、フランスを恐怖に陥す魔女か。「なぜ止める。お前さんの名を知ってる相手だ、竜の魔女の手下やもしれんぞ」

「もし手下であれば、先ほどのフランス兵たちは街に帰っていないかつたでしょう。大丈夫、私を信じてください。

皆さん、どうか私たちを信じて話を聞いてくれませんか」

だからマシユと立香は警戒心を緩めていた。

前に出る銀時を除いて。

「アンタのことは信じるよ。ジークが保証人だ。けど、後ろのソイツは別だ。どうして死んだお前がいる、地雷亜」

「銀時、貴方の言葉が答えですよ。生前の知人のようで驚くでしょうが、彼は死後に英霊としてオルレアンに召喚されたのです」

睨み合う2人に割って入るジャンヌ。

「……英霊つてのは、暗殺者も成れるもんなのか?」

「歴史に残る偉業、大事件を残せばあり得ます。自然の大災害ですらも英霊になるケースもあるのだとか」

渋々と木刀を下ろす銀時。

警戒心を解かない様子を見て、ジャンヌは2人の関係が敵同士のものだと理解する。

「地雷亜、生前になにをしてみたのですか」

「……詳しいことはあとで話そう。いまは時間がない。ジャンヌ、奴らの目的地はヴォークルール。じきに巨竜と4騎のサーヴァントを引き連れて竜の魔女が来る」

「……よくぞ伝えてくれました。私は直ぐに避難誘導を行います。皆さんは隠れていてください。地雷亜、手伝ってくれますか?」

「承知した」

銀時の話を終わらせた地雷亜の言葉。

ヴォークルール、巨竜、竜の魔女。こんなにも欲しい情報が目の前に転がっているのだ、立香は反射的に聞いていた。

「待ってください！竜の魔女が来るんですか？どこに!？」

「分かりやすく言うとな、あの街が今から竜の魔女に焼き払われる。ここで大人しくしておけ。ということだ」

ついさつき親切にオルレ안의現状を教えてくれた兵士たちがいる街。彼らの優しさを知っただけで、立香には助けに行く理由になる。

『待つんだ、彼の言う方角に探知をかけた。結果、相手はサーヴァント5騎に加えて謎の巨大飛行物体を確認した』

『聖女ジャンヌ・ダルク、それに地雷亜と言いましたね。お気持ちはお察ししますが、どうか此処は逃げてください』

「でも、街の人たちが死んでしまいます！」

『マシユ、気持ちは分かる。だけど君たちが死ねば、70億の生命だけでなく、歴史が消えるんだ。特異点を修復すれば、この犠牲も無かつたことにできる』

『レオナルドの言い方は尖っているが、これも事実だ。どうか堪えてほしい』

街1つと全人類史。天秤で測ればどちらが重いかはハッキリしている。立香、マシユには5騎のサーヴァントと巨竜を相手に生きて帰る保証がどこにもない。機を見計らい、特異点の原因究明に力を注ぐのは当然の意見だ。

「それは…」

特異点冬木では逃げる場所が無かったから賭けのような攻勢に出た。今回はどうだ、逃げる時間がある。早まって全員の命を危険に晒す必要があるのか。立香は抱えた重責から即答できず、それでも諦めたくないと思っていたとき。

「忠告感謝します。ですが、私が目を背けては止められない。無論、助力は乞いません。ここが戦場である限り、命の保証は誰にも出来ませんから」

断言したジャンヌが、もう語ることはないと思われ、駆け出していった。地雷垂も無言で付いていく。

駆け抜ける聖女の背中に、思わず見惚れてしまうほど。彼女の真っ直ぐな生き様に口が勝手に動いていた。

「俺たちも行こう」

言ってから口を抑える。

冷や汗を流しながら後ろを伺うと。

「立香、俺も同意見だ」

「決まりだな」

「はいっ！」

ほんと頭を撫でられ、銀時たちが一斉に歩き出していた。

全員、間違っていることは承知だ。

『ちよ、待った待った！立香くん、それにマシユは戦闘慣れしていない。相手の戦力も分からないが、巨大飛行物体はドン・レミを焼き払った巨大な竜という。危険すぎる、経験を積む前に死んでしまうよ！?』

「ドクター、すみません。ここで逃げたら後悔すると思うんです。戦力を知らないから、この目で確かめないと分からない」

「私も同意見です。仮に死んだことが無かったことになっても、見捨てた事実が消えません」

「まあ任せとけて。それに女が戦うってのに野郎が逃げてちや格好つかねえや」

「ドクター、立香の勇気を無駄にしたくないんだ」

ただ、彼らには人として捨てるものの分別がハッキリとある。魔術師では信じられないものを拾い、手遅れだからと独りにしないバカたち。

人情で動ける銀時を見ながら、立香は大きく前進していく。

『ひいっ！どど、どうしよう!?!ととと、取り敢えずマジ☆マリにメールだ』

ロマニ・アーキマン

宛先：マジ☆マリ

件名：助けてください。

【僕の部下が敵のボスと巨竜の前に飛び出していきました。どうすればいいでしょうか】

マギ☆マリ

宛先：ロマニ・アーキマン

件名：Re 助けてください

【胸を張って見送れ無能。ジャンヌが死んだら特異点修復が遠退くだろ☆ボレ？ケ↑？

つか仕事中にこっちにメールするな〇(へー)〇】

『めちやくちや罵倒された!?僕を癒してくれるように設定したはずなのに!?!』

『あちやー、ロマニのPC内蔵データからこっちがご褒美だと勘違いされちやったかー』

カルデア内でのロマニの株が急降下する音を聞きながら、一行はジャンヌたちのあとを追うのだった。

最強の邪竜

ジャンヌと合流し、住民を避難させた街で敵を迎え撃つことで意見を合致させた一行。

「街に入んのはいいが、アンタはどこぞの竜の魔女と勘違いされてんだろ。素直に入れてくれるとは思わねえが」

「いいえ、問題ありません。むしろ好都合です」

ジャンヌは素晴らしく活気に満ちた笑顔を見せて。

ヴォークルールの街の門に向けて歩いていくのだった。

門番の前に立つジャンヌ。遠目から見ても、門番たちが慌てて武器を構えたのが確認できる。失敗したか、誰もがそう思った瞬間にジャンヌは拳を握った。

「えっ」

ドゴオン。

擬音が目に見えるほど豪快に門が飛ぶ。清々しいほどに碎け、門番たちも腰を抜かした。街を行き交う人々の視線は門に釘付けとなり、そして。

「竜の魔女です」

照れ顔で恐怖の宣言をするジャンヌ。

追い討ちとばかりに門の奥から炎が噴き上がり、いよいよ真実を帯びたところで。

「うわああああああああ!!!」

「出たぞ、竜の魔女だ!!」

「逃げろ!!!」

街は瞬く間に阿鼻叫喚の地獄と化した。

「皆さん、街の皆さんの誘導を手伝ってください。ラ・シヤリテまで逃げる時間を稼ぎます!」

「おいしいい!豪快になにぶちかましてんの!」

「わ、私たちが悪者のようになってしまいました!」

「ルーラー、もしかして緊張してたのか?」

「はい、注目されるのに慣れてなくて…。つい」

「火は俺の糸に着いたものだ。家屋には移らないようにしてあるから安心しろ」

『絵面!!』

『聖女ジャンヌ。農民でありながら軍を率いるカリスマ、どんなものかと思っていたが……まさか脳筋だったとは』

『これが田舎頭、つまり農筋だね! ってそうじゃない!』

「ラ・シャリテへの門はあっちです」

「くっ、やるしかねえ! お前ら、逃げ惑う住民を誘い込むんだ!」

「えっ、どうするんだマスター!?!」

人が焼かれた。

門が壊された。

殺戮者たちが来る。

ドンレミのように、故郷が蹂躪される。

恐怖が恐慌を呼び、ジャンヌの策に光の速さで事実には尾ひれ背びれが付いて街中を駆けていく。

『大丈夫だよねこれ!?! モニター越しで、鼻屑目に見てもこつちが侵略者には見えないんだけど!?!』

モニターに映るロマニも震え上がる阿鼻叫喚の街。

大量のワイバーンから人々を逃すため、各自、避難誘導を手伝いに行っただけだ。

「うわーっ! 助けて、ゾンビがいる!」

「ウアッ! アッ! アッ!」

誤った避難経路に進む人々の先から、立香が叫びながら飛び出してきた。

「ギャアアアア!」

「バイオハザード!?!」

「ヒイイイ!」

ゾンビ役のジークが特殊メイクで変装し、立香に覆い被さると血が吹き出した。

『ふ、藤丸君!?!』

『あ、血のりだね』

『どんな避難誘導なの!?皆んなパニックに拍車が掛かってるよ?危ないからやめようね!』

『フランスならフレンチホラーだ。アクションホラーは受け入れがたいのかもしれない』

『そういう意味で逃げてるの!?』

「ごめんなさい、とロマニに謝る2人の背後から叫び声上がる。

「きゃーっ!この家で密室殺人事件がーっ!

しかも小さな名探偵と金〇一耕助の孫がいます!」

「〇ナン!?ハジ〇!?」

「OMG!」

立香に做ったマシユも当然、逃げたくなるような避難誘導を行ってしまう。

『ほら見なさい、すぐ真似する人が…いやマシユウウウ!ここフランスだから!しかも2000年代の…いやなんで現地の人たち通じてるんだよ!しかもオーマイガーって…ここ本当にフランス!』

モニターの向こうでデスクを叩きながら突っ込むロマニ。なぜ遙か昔に生きるフランス人が、日本の誇る推理漫画を知っているのか気になるところだ。

「かてー!こと言うなよ。時代は常に新しいものを追い求めてるんだ。すう…。」

大変だ!あっちでディ〇イトワークスがANIPLLE〇に吸収されてFG〇に天井が実装されたぞーっ!

「なんだってー!?!」

「急げ、奴らの気が変わらないうちに!」

銀時の避難誘導により、iT〇nesカード片手に走り去る人々。

『なにやってんの銀時君!?そんなこと今言ったらタイムパラドックスが起きちゃうよ!?!』

『よく見るんだロマニ!周回効率を求めるフランスの人たちが一気に流れているぞー!』

『うわあ本当だ!これで避難誘導は完了しそうだね〜!』

…つてなるかアアア!ピックアップサーヴァントが出たら消える

天井だよ!?!そういうところだよデイ○イト!」

「天井が付いただけ進歩してるよ。あいつらも○マ娘に負けないう頑張ってるんだよ」

「目的が変わっているような…?気のせいかな?」

「そもそも、この時代になぜ iTuOesカードが…?」

ふと正気に帰ったジャンヌが疑問を抱くなか。

フランス兵たちが駆けつける。

「竜の魔女め!ここで同胞の敵討ちをしてやる!」

「ちよ、お前どこ向いてんだ!?!そっち逆!」

「いや、あれ!?!身体が勝手に!」

そして、流れるように住民たちと同じ方向へと走っていった。

「なにやってんのあいつら。言動と行動が合っていないんだけど」

「この兵士たちは俺が追い払った。さ、これで心置きなく街を壊してもいい」

「地雷亜さん、それ敵がつて意味ですよね?ジャンヌ・ダルクが壊す的な意味じゃないですよね???」

疑問やら悲鳴が飛び交うなか、着々と住民の避難を進めるのだった。

ものの数分で住民の避難が完了する。

先ほどの喧騒が嘘のように静かなヴォークルールの街路。

『皆んな、ついに来たぞ!頭上に気をつけるんだ!』

ロマニの通信が警告したのはそんなときだ。

「あれは…」

「ジーク、どうした?」

こちらへ近づく空の大群。

なかでも一際大きい存在に目を細めるジーク。

「事情は後で話す。マスター、隙を見て変身する」

銀時の問いかけにそう応えて、各自に集合を促していく。

(それって、つまり……!)

目視でも分かるシルエットの正体、ジークの変身。

2つの要素を合わせたら、必然と答えが出る。

敵意を剥き出しに巨大が空から飛来する。

初めて出逢ったはずなのに親近感が湧いてしまうほど、大きな竜を俺たちは既に知っていた。

違っていることはひと目見て2つあった。

先ず1つ目は背中に乗せた乗客たち。ただの人間は1人として居ない。身体のなが異常に満ちていて、救いを捨てた魂で活動する器。生前なら、穢れた者たちを真つ先に拒絶している。

もう1つは。

「あら、ふふ、フ——」

品性に見せた眼差しで崖下を蔑む。精神を逆撫でする笑いが立香たちの意識を握った。

「つと、いけない。面白すぎて気が緩むところでした。失敬？まさか、私よりも先に街を襲っているなんて思わなかったものですから」

邪悪な竜に怯んだだけではない。

言を発した女性の姿に身を見張ったせいだ。

「おいおい、ジャンヌにうり二つじゃねえか」

「中身は全く違うようだがな」

病に望まれた果ての白い肌、愚者たちが見せつけた歪な笑みを浮かべて。異常たちを纏める、ジャンヌ・ダルクに瓜二つの顔を持つ魔女が問いかける。

「愚かな霊気…ボロボロの身体、廃れ果てた私似のアナタにお聞きしたいことがあります」

簡単なことだ。状況証拠とでも言えればいいだろう。

竜を従えて、聖女と同じ成りで、とても恐ろしい雰囲気纏っている。

彼女が竜の魔女でなければ誰だというのか。

「私たちの邪魔をする愚かな民ですか。それとも」

微笑に反応して、竜の背中から全ての亡霊たちが飛び出す。立香たちを囲うため、四方に降り立つ。

「私に忠誠を誓いにきた、従順な復讐者たち？」

返答に求めるものは1つ。

きつと、どつちに転ばせても彼女は俺たちを殺す。齒向かえば全力で。降伏の意思を見せれば裏切る形で。こつちの意志をいかに愉悅に変換するか。この場には、彼女たちの精神をどう肥やすかの選択肢しかないのだ。

「……………私たちは…」

ジャンヌはそれを分かっているから返事を躊躇う。この時間も彼らを愉しませてしまうものだが、少しでも勝機を手繰り寄せようと頭を働かせていた。

返事は即死。巨竜の炎が先か、周りのサーヴァントに殺されるかの違い。

「民を愛し、人の生き様を肯定する。そのために俺たちは特異点を解決しに来た」

だからこそ、魔女への返答は彼でなければならなかった。

「あ？聞こえなかったかしら、私は偽りのジャンヌ・ダルクに質問したのです。しょんべん小僧はワイバーンの火でも消してなさいよ」

「彼女は偽物ではない、故に貴女の質問は独り言だ。なら、誰が答えてもいいだろう」

『ジーク君!?あまり敵を刺激するのはやめてくれ…』

「クソガキが」

『熱ツツ!!彼女のひと睨みで僕のPCが燃えた!』

そして、違っていることの2つ目。

あの巨竜は最強という誇りを存在ごと奪われている。

冬木から帰還して1週間、ジークの能力について色々知った。だから分かる、巨竜の名前がファヴニールだと。本来忌むべき存在で、孤高の邪竜である。敵のことながら、敬意を表していたジークだ。誰かに従う最強など、決して受け入れられるものではないはず。

「こちらも問おう。お前たちはこのフランスをどうするつもりだ」「見てわからない？ どう見ても壊しに来た格好でしょ。」

「あ、それともジャンヌ・ダルクが街を壊すのは納得できない？」
竜の魔女は聖女の名を汚す。

堂々とした邪悪にジークは瞳を細めた。

「生命を足蹴りにするヤツを俺たちは許さない」

「そう、残念。嘘でも認めてくれれば、一生奴隷にしてあげたのに」
ここで対話は終了した。

根本から曲がらない信念を持った者が対立する。竜の魔女とジークの会話で、各々の陣営は納得したのだから。

「ルーラー、少しだけ時間がほしいんだ」

一瞬、ジークはジャンヌの瞳を見て笑った。荒々しい開幕をちよつとだけ申し訳なさそうに、そして守つてくれると信じて。

意図は分からない。なにかを仕掛けたいこと以外、内容が読めなかった。

「分かりました。」

「それと、ありがとうございます」

「ふふ、相変わらず律儀だな」

それでも信じることにした。自分のことを魔女ではないと言ったとき、欺瞞や打算のない目をしていたから。

戦場で微笑んだ聖女を見て、ただ1人。

「なに、その顔。偽者らしわね…」

竜の魔女だけはジャンヌを蔑んだ。

もう終わった悲劇の形をした者が、本物の前で笑うことは挑発でしかなかった。

「焼き払え、ファヴニール」

だから燃やす。灰に変えて、無様な屍を見て笑いながら進む。竜の魔女はそうあるために望んで生まれた、フランスへの復讐心なのだから。

「○○○○——！」

闇い感情を喰らい、最強の竜は待機から解かれた。

竜の魔女の命令から、ファヴニールが行動を移すまでの時間は僅か1秒。慢心のない準備には、眼前から感じるかつての脅威を感じていたからだ。

己を殺した英雄の姿はハッキリと覚えている。この特異点に召喚されたとき、微かに彼の存在を感じた程度には警戒するほどに。然し、それも直ぐに消えた。

あの英雄が還った？違う、死んだか、若しくは事情があつて姿を隠した。

最強の勘がフランスを焼き尽くせと言う。故に、ファヴニールはこの目で敵の全滅を確かめるために竜の魔女に着いてきた。

(やはり、彼の気配を察していたか)

ジークは左腕を握りしめながら、ファヴニールの行動に共感していた。宿敵の気配が消えるまで、フランス中を焼き払うつもりなのだ。相手が誰であれ、ジークフリートである、という可能性……つまり、英雄という存在が消えるまで。

ジークが令呪を使用し、宝具を放つ。

最速で工程を終了しても、先手と殲滅に狙いを絞るファヴニールには一歩届かない。

だからこそ、ジャンヌの宝具によって対抗する。最大の先手を防ぎ、意表を突いた変身によるカウンター。これがジークのシナリオであった。

(彼女なら間に合う)

聖杯戦争中の記憶がジークに勇気を与えてくれる。最強であるファヴニールを前にして、ここまで胸を晴れるのはジャンヌのおかげだ。

令呪による変身の直前、ジャンヌが勇みよく踏み込んだのを見て身体が強張るまでは。

「えっ？」

ここにジークの誤算が生じる。

ジャンヌ・ダルクの霊気が不完全で、それは宝具解放も出来ないほどだと気づいたのだ。

「させません——！」

ジークに頼まれて、ジャンヌは即決した。ファヴニールの初手を防ぐ手段に宝具は選べなかった。解放出来るほどの力がないのなら、最小限で遂行するのみ。跳んでいたのでは間に合わない。竜の魔女が控えさせている2騎に阻まれるのは確実だ。

だから、踏み込んだ。

旗を槍投げのように構えて、躊躇いなく放った。

「なっ!?!」

竜の魔女、そして配下たちが信じられないものを見たと唾然としながら。ファヴニールから吹き上がる血液、次いで空に放たれたブレスを目撃する。

最強の竜の右目に深々と突き刺さる旗。してやったりと鼻を鳴らす聖女。そして、彼女の背後で瞬く光に理解が追いつかないまま。

「マシユ、前のサーヴァントを倒すよ!」

「了解です、マスター!」

マシユは棺を担いだアサシンに。

「よオ、早速だが退いてもらうぜ」

「ヌツ…!?!」

銀時はランサーに詰め寄って反撃を開始した。

圧倒的有利な状況から一転。

四方を敵に囲まれながら、縊^{くび}り殺されるだけの獲物が内側から狩人に反撃する。竜の魔女は思惑を大きく食い破られてしまい、判断を下すまでの経験も無く。

「英雄ジークフリートの身体で成すべきこと。この一瞬、人理焼却を阻止するために——！」

「は?変身?...ライダー、宝具を!」

我に戻ったとき。先ほどまで存在しなかった英雄、ジークフリート。この場においても己の誇りを掲げ、真っ向から討つ姿勢に指示が遅れてしまう。

大剣から溢れ出る、竜を倒すための魔力。ライダーが理解したのはファヴニールの宿敵であること。そして、自身の宝具に身代わりにな

れという指示。本来なら鉄拳で返事を返すところを、狂った靈気で逆らうことは出来なかった。

「幻想大剣——」

ジークフリートの宝具解放に時間は要しない。だが、ライダーの宝具をファヴニールの前に召喚すれば、防ぐことも可能だ。タラスクと呼ばれる、聖女マルタを敬う竜を犠牲にするために宝具の解放を口にした。

「待たれよ」

「ぐっ……貴方、しつこいわよ！」

目の前に現れる長刀が、ライダーの宝具解放を防いでいた。

「失敬。簡単に宝具を捨てようとするのだ、手合わせ願いたい身として止めずにはいられなかった」

「ふざけるな……誰が好んで捨てるものですか！」

長刀を振るう和服姿の男によって、大剣を妨げるものは無くなった。

次々と現れる想定外の英霊の登場。魔女は絶望の淵に立たされながら、ファヴニールの様子を確認する。いま立ち直り、ジークフリートの存在に気付いたところだ。

間に合わないのは百も承知で、

「くそ、くそがつー！」

竜の魔女が手を下そうと呪い剣を取り出した。

眼前で解放される宝具はそんなもので止められない。本体を攻撃しても一振りで消し飛ばされる。だが、あまりにも格好がつかない。切り札を出して負けるなど、受け入れられるはずがなかった。

「早まるなマスター！」

剣を振るよりも先に、セイバーが魔女の身体を抱えて宝具の軌道上から退避する。

「——天魔失墜——」

邪竜を屠るためにある世界最強の大剣、バルムンクが放たれる光景を目に焼き付けながら。

ファヴニールがジークフリートの存在に気づいたとき、全てが間に

合わないと理解していた。守りも、回避も、逃亡の道までもが塞がれている。だが、ジークフリートを殺すことを諦める気は毛頭ない。

安全圏にいる己の主人を確認して、次に繋げろと想いを送る。そして、手遅れのブレスの準備を始めたとき。

ジークフリートの凝縮される想い。ジークが背負う役目を大剣に乗せて。邪竜必殺の一撃が振り下ろされた。

邪竜の咆哮を退けて、ここに安寧への一步は踏み出された。

「フアブニール………？」

輝く大剣、透き通る景色。

刹那の攻防を制した正義を、竜の魔女は呆然と見ることしか出来なかった。

邪竜、ここに失墜^ちる。

一難去り、次は

空から振り下ろされた青い光が邪竜を消しとばした。

民家を押し潰していた巨大は粒子となり、街に放たれた恐怖心を和らげていく。

「や、やられた…」

一方で、侵略者たちにとっては想定外の事態。

「うそ、でしょ…：ねえ、ジル…：あのファブニールが、こんなに呆気なく殺られるわけないでしょう!？」

驕りに唾をかけられて、怒りを抑えられるほど彼女は賢しくない。

おもちゃを盗られた子供ののように、地面を踏み締めてしまった。

「現実を見なさい、愚か者」

その声は彼女と同じ怒りから生まれたもの。しかし真っ直ぐで、妬ましいほどに煌びやかな自信を持って放たれていた。

ジャンヌはファブニールの瞳から落ちた旗を掴み、既に距離を詰めている。竜の魔女に動揺しながらも、直ぐに思考を切り替えた聖女にまた怒りが湧く。

「させるかっ!」

馬鹿正直に受け止めようとする魔女を越して、セイバーの剣がジャンヌの旗を受け流す。

(迷いはない…：いまのマスターじゃ勝てないか)

セイバーの剣技はジャンヌの接近戦に余裕を持って対応できる。バーサーク化による流麗さへの欠損があらうとも、一対一なら霊格を砕くことも可能だ。

「セイバー、邪魔をするなっ!」

「流れを読め、マスター。退くぞ、ぐっ!？」

冷静さを欠いた魔女が割り込もうとする。それだけでも大きくハンを追ってしまうのに、セイバーに更なる負荷が襲いかかった。

「多勢に無勢は避けたいが…：すまない、ここで仕留めろと俺の勘が告げている」

「助かります、ジーク君!」

ジャンヌの接近戦を補うジーク。

勝ち目を潰されたセイバーは既に魔女の眼中になかった。

(なによ、それは)

心の奥底からなにかが湧き出る。

ああして、肩を並べて戦う姿に心を妬いている。自分にだって、オ
ルレアンで待っている右腕がいるというのに。彼のことを思っても
収まらない苛立ち。ならば、先ずはファヴニールを殺してくれた英雄
を殺すまで。

「チエックメイトだ」

八つ当たりの剣を握ったとき、最強の忍びがクナイを光らせる。

ガラ空きの敵将が目の前にいる。無防備な者から首を持ち帰ると
いう、ペンを握る英霊でも可能な容易い行為を地雷亜が見逃すはずが
ない。この瞬間のため、ずっと息を潜めていたのだから。

「あ……」

音もなく飛び、セイバーの守りを呆気なく突破していた。セイバー
は狂った感性で気づく。振り向こうと考えるも、四肢を削ぐ犠牲すら
許さないのがジークの大剣だ。セイバーの守りは主人を守るに至ら
ないと知り、漸く魔女本人が命の危機…否、最期^おわりを目撃する。

「っ——」

地雷亜のクナイが真っ直ぐに魔女の心臓に突き刺さる。憎悪で染
まっていた瞳は絶望に変わり、取りこぼした光を掴む間も無く終わりを
迎えた。

「……なんだと」

霊格に届く直前、魔女の身体が弾け散る。終わりの手応えごと消え
失せた。

『消えた!?!』

『転移か! 高等なものを扱える魔術師がいるようだね』

「セイバーも消えたぞ!?!」

「残念だ、ライダーも連れて行かれたか」

竜の魔女、セイバー、ライダーがその場から消えていた。

残るはランサーとアサシンとなる。

「そうだ、銀時とマシユは!?!」

一息吐く間もなくジークが剣を構える。

「お、のれエ」

振り向いたとき、銀時の木刀がランサーの胸を貫いていた。銀時には傷1つない、完封したことが見て分かる。

『げ、撃破…!?!ランサーを撃破してる!?!』

驚きながら、直ぐにマシユの方へ視線を向ける。

「な、んで…わ、たしは…!」

「やあああつ!!」

アサシンの棺を弾き、右拳で顔面を打ち抜いていた。無傷とはいかないものの、アサシンの霊気を砕いた場面には脳筋さを感じずにはいられない。

『やった、マシユも敵を撃破だ!』

『うん、藤丸君も良くぞ集中してくれた』

「やりました、アサシンを撃破です!」

「うん、すごいよマシユ!」

ハイタッチする2人。銀時も合流して手をかざし、脅威が一先ず去ったことを実感する。

「あはは、皆んな流石だ」

竜告令呪によって変身したジークは一安心して笑った。

サーヴァントとなり、一瞬のみジークフリートに変身することが可能となった。バルムンクも可能だが、連射が不可能であり威力も本来以下となる。戦況がもつれることを見越しての令呪使用が、良い意味で無駄となったことを喜んだ。

「君には驚かされました。まさかジークフリートに変身できるとは」

「このお陰で彼の力を引き出すことが出来るんだ。あと2回だ、大切に使わなくてはな」

「制限があるのですか?」

「令呪と同じ3画、ジークフリートに変身できる。それは今回も変わらないみたいだ」

ジヤンヌはジークの返答に目を細めた。

ジークは察する。きつと、制限のところ隠れたものがあると思いたいのだろう。それを笑って誤魔化した。

「それよりもルーラー、君も人のことは言えないと思う」

「ええ!?どこがでしようか…」

「いや、責めているわけじゃないんだ。宝具が使えないのに、ファヴニールのブレスを止めたことに感謝したくて」

「…ええ、任せられましたので!貴方に頼まれると、なんだか無条件で聞き入れたくなってしまったんです。」

「ですから、他にも相談事はばっちりです!」

「ああ、ありがとう。すごく頼りにしている。けど、なにかあったら遠慮なく言ってくれ。俺も君の力になれるよう努力する」

互いに褒めちぎるあまり照れ始めたところで。

「こほん、お熱いところ悪いけどさ。聖女さま?こいつどうにかしてくんない?」

銀時が申し訳なさそうに指を向ける。

「拙者は佐々木 小次郎。いつの間にもやら流れ着いた放浪者、所謂はぐれサーヴァントよ。」

安心しろ、ジャンヌ殿とは既に顔見知りだ。微力ながら手を貸そう」

「え、なにこの人。退けつつつてんの。なんで刀を仕舞わねーの?」

「礼には及ばぬ。だが先ほどの戦いぶりを見て、無用と考えていた褒賞が欲しくなっちゃった。そなた侍、拙者と手合わせ願う」

「話を聞けエ!誰も礼なんざ言っちゃねえよ!暑苦しいからデイスタンスしろって言ったの!」

澄ました顔をして恩を押し売りするのは佐々木 小次郎。

目を輝かせ、銀時に仕合を申し込んでいる。

「彼は見ての通り日本の山育ちです。なかでも特殊なサムライという人種のように、同族を見つけたら仕合わずにはいられないとか」

「どこの世界もサムライは馬鹿しかいないのが良くわかった」

「知らぬのも無理はない。我ら農民はヒスイなる地にて昼夜問わず駆け回り、もんすたあの調査を行なっている。きんぐなる強者を探して

いたらここに来ていた」

「それただのアルセウ○だろうかア!!?」

ライダーの宝具、タラスクを捕まえようとしているのを銀時たちはまだ知らない。

『さっきのファブニール、モンスターボールに入りそうだよね』

『おいロマニ、そんな目で私を見るな。……いやまてよ、手に入れられたら調査のリスクが減るかも?』

「ダ・ヴィンチちゃん、いよいよ俺たちがロケツ○団になっちゃうよ」

「先輩、私はロケツ○団登場の名乗りをやってみたいです!」

「ダ・ヴィン博士、モンスターボールの準備をお願い」

『良いよ。ぼんぐりのみ、それからたまいしを準備してね』

膝から崩れ落ちる立香を眺めながらジャンヌが笑う。

「ふふ、面白い人たちですね」

「マスターたちは相手の内面で判断できる。ルーラーがなんと言われようとも、彼らは君の味方でいてくれる。無論、俺も含めて」

「それで、聖女さん。俺たちと一緒に○ケモン凶鑑の完成手伝ってくれる?」

銀時たちの強さを充分に知ったジャンヌに、もう断る理由はなくなっていた。

「我が真名はジャンヌ・ダルク。カルデアのマスター、協力の申し出感謝します。共に、この絶望を振り払い未来を取り戻しましょう」

最強の敵を倒し、最大の悩みを抱えた聖女ジャンヌ・ダルク。

地雷亜、小次郎に続く仲間が増えたことにより、旗を握る力は自然と柔らかく、強くなっていた。



「—————!!!」

魔女の奇声がオルレアンの居城に轟く。

理性を放り捨てて、泣き声の代わりに辺りに炎を撒き散らす。

赤子も泣き止む荒みっぷりに、セイバーとライダーは制止すること

を諦めた。

「何故ですか。ランサーは生身の人間に負け、アサシンは半人前のザコを仕留められない」

床は焦げ、天井には剣が突き刺さる。

「あの竜殺しはなぜ復活した!?!なぜ偽物の私がアレを引き連れているんです!?!」

玉座は砕け、カーペットは灰と化す。

「お前たちはフアヴニールも守れない。突っ立っているだけで英霊など笑わせるな!」

「相手の連携が一枚上手だった。そして我々には経験が足りなかっただけのこと。地団駄を踏む時ではないだろう」

「黙りなさい。結果が全てよ」

癩癩とともに投げた剣をセイバーが弾く。

宙を舞う呪いが無様に床に転がる。雑音のなかに消えるそれを拾い上げて、理不尽な存在に声を掛ける人物が1人。

「部下に責任転嫁するようじゃ、アイツには逆立ちしても勝てねーよ」
気が立つ魔女へ投げられたのは、不愉快さを増すだけの事実だった。廊下の向こうから現れて、タバコを吸いながら言い放つ男へ。魔女は宛てのない殺意を向ける。

「…ゴミのくせに何が分かるというのです」

「見なくても分かる。ここの空気は最悪だ」

散り落ちる炎を払いながら、面積に反して窮屈な空間を嗤う。サングラス越しにでも分かる悲しげな瞳に、魔女は剣を手にして。

「ああ、もういい。私は疲れました、寝ます。ジル、あとのことは任せました。次の召喚が完了次第、この世界を墮とすわよ」

ゆっくりと鞆に収める。

急激に冷めた感情に驚くセイバーたちの間を通り抜けた。魔女は振り向くことなく、ジルという人物に声を掛けて自室へと戻っていった。

「マスターは感情を制御するのが早急の問題だな」

「難しいでしょうね。なにに置いても見聞が足りていない。…今回の

敗走、マスターには良い薬になるはずです」

狂化に犯されながら、彼女たちはマスターの脆弱さに気を払っていた。虐殺を指示する者に向けていい感情ではないものの、本来ある面倒見のよさがこぼれ出ている。

本音を口の奥に仕舞い、次に興味を向けるのはサングラスの男。

「彼女を止めてくれたのは助かったわ、ありがとう。驚いたのよ、まだサーヴァントがいたなんて」

「マスターが時折話しかけるジルとは、貴方のことか？」

「いいや、そんな名前の男は知らない。」

俺は、マスターの駄馬だば兼お守り役」

決してジルという人物ではない。

だが間違いなく竜の魔女陣営であり、サーヴァント。

「略して、マダオ。俺のことはマダオと呼んでくれ」

サングラスの男は真名をそう名乗る。

古今東西、どこにも存在しない真名。

静かに、世界交差は原点を侵食する。

ジャンヌと地雷亜

ジャンヌ・ダルクが現界したとき、自身のクラスが裁定者^{ルーラー}であることを自覚した。そして、クラス特性の殆どがサーヴァントに通じるか怪しいほどに弱体化していることも。

前情報すら入らない状態で周囲を見れば、すぐに故郷の地であることを理解した。なんてない、見慣れた風景が広がっているのだ。問題は時間、いつの時代でどういった聖杯戦争が起きているのか。見た感じ、あまり変わっていないことから生前と近い時代だと予想したとき。

『幻想種!?!』

空を横切る影、ワイバーンを目撃する。

目が合ったと分かったとき、戦闘の火蓋は切られた。

ものの1分程度、霊気の出力低下により苦戦したが倒すことができず。手応えは通常の2割、聖杯からのバックアップは蜘蛛の糸もあれば良いほうだ。

『ひとまず、どこか街に…!』

異常事態を知るべく足は自然と動いていた。

向かう先はドン・レミ。自分の故郷であり、戦場に旅立つてから1度も帰ることのなかった場所。人間として帰ることが叶わず、いまの自分には帰る資格すらないと分かっているながらも、向かわずにはいられなかった。

1時間ほどで到着し、そして故郷の前で。

『……………!』

声にならない悲鳴。

生前、それこそ火刑のときですら発さなかった激情を空に轟かせていた。

ドン・レミ。愛する家族のいる故郷は焦げて、灰黒に塗り潰されていた。

溶岩でも降ったのか。略奪の果てなのか。真相を確かめるべく、整わない心のままに地獄と化した故郷に足を踏み入れた。

戦場の跡地よりも無惨な姿が広がっている。

敵にだつて情けの1つもある。だがここは心が籠っていない。情けがない。略奪にしても規模が大きすぎる。

アレでもない、コレでもないと現実と現象を結んでは解きを繰り返す。友人の家も、自分の家も、馴染みのもの全てがこの世から消え去っていた。

吐き気を堪える——せめて原因を突き止めねば。

ヒントはある——ワイバーンだ。

誰が召喚した——。

『……ほう、これは驚いた。』

蘇った竜の魔女、手配書通りの顔だ』

その疑問を教えてくれたのは、灰の家から出てきた1人の男だった。彼はサーヴァントだ。ジャンヌの目に真名がぼんやりと映るが読めない。警戒心を剥き出すよりも先に、彼が腕に抱いた小さな子供を見て。

『あ、ああ……。良かった、生きていた……。あの、子供を助けていただきありがとうございます』

『感謝……？』

フランスを滅ぼそうと宣う魔女が、なにを言う』

『滅ぼす？それに、竜の魔女というのは……』

この時、戦闘に発展しなかったことをジャンヌは感謝した。子供を近くの街に送る道すがら、ジャンヌは男からフランスの現状について聞き知ることとなる。

男が地雷亜という名前であること。

時代はジャンヌ・ダルクが火刑に処されてから僅か十日後だということ。

そして、蘇ったジャンヌ・ダルクがワイバーンを引き連れてオルレアンを占拠。昨日、ドン・レミを巨竜によって壊滅させたこと。

『そんな……』

『名目上、フランス未曾有の危機はジャンヌ・ダルクの復讐ということになっている。どうだ、心当たりはあるか』

『私が火刑に処されたのは事実です。しかし……私は最期までフランスを愛していました。復讐など、あり得ないのです……!』

困惑したが、ハツキリと宣言できた。

フランスに対する復讐心などありはしなかった。ここまで歩んできた全てを受け入れてこれたのは、ひとえにフランス……そして故郷への愛があつたから。

『分かった。ジャンヌ・ダルク、お前さんの言葉を信じることにしよう』

『……えっ』

『なにを驚く。助かった子を見て、泣くほど喜んだ姿を演技とは思えなかつた。それだけのことさ』

地雷亜はジャンヌの言葉に頷いた。

証明する物はない。だが、地雷亜だからこそ理解できることをジャンヌはまだ知らなかつた。月詠という弟子によって、地雷亜の最期が救われたのだ。サーヴァントとして現界した彼がジャンヌ・ダルクに手を貸すのは必然と言えた。

—
—
—

「どうだった、竜の魔女は」

「え……」

立香たちがレイシフトするまでの話に一区切りついたとき。水袋を喉に傾けた地雷亜がジャンヌに問う。オルレアンを焼き払う魔女になんを感じたか、いつまでも心を散らかしては終わらない。

「彼女が何者なのか、私には分かりませんでした。ですがジーク君が言ったことは私の言いたいことだと思います。」

そう信じて、竜の魔女を倒してみせます」

ファヴニールと対峙したときを思い出すジャンヌ。胸の前で右拳を握る横顔が俯いていた。ジークは彼女の瞳が決意で満ちていない

ことを直ぐに理解する。

「それは決定事項なのか？」

「はい」

だから投げかけた分岐路。ジャンヌはジークの意図を汲んだうえで即座に肯定した。

話をして解決するなら良かった。然し、竜の魔女は罪のない人々を殺めた。命は戻らない。

「火刑されたジャンヌ・ダルクは早々に消えるべきです。例え、私を語る偽物の所業だとしても」

「それは…」

ジャンヌの意志は確固たるものだ。焼き払われた自らの故郷を見て、二度と過ちを繰り返さないと誓った。別世界でジャンヌと旅をした者であるからこそ、終止符を打つ手を止められなかった。

「どっちが本物とか、どうでもいい。」

どっちも納得できる答え見つけりゃいいさ」

ジークの想いを銀時が言語化する。

余計なお世話だと引つ込めた言葉にジークは目を見開き、ジャンヌは呆気に囚われた。

「いい加減なことを。」

…いや、これが月詠を変えた男だったか」

頬杖をしながら答える地雷亜はゆっくりと夜空を仰ぐ。

柔らかい雰囲気の後押ししてジークたちは続く。

「竜の魔女には恐ろしいものを感じた。俺の知る、諦めの悪い男と同じ執念だ。」

ルーラーは1人じゃない。遠慮なんて捨てて、俺たちを頼ってほしい」

「そうだよ。昼間だってジャンヌは出来てたんだ。きつと竜の魔女を相手にも出来るよ！」

「私もそう信じています。辛いこと、私たちも背負いますから！どうか気負いすぎないでください！」

横に並んで励ます彼らにジャンヌは目をパチクリとさせた。

きつと、気を遣つての言葉なら苦笑いしただろう。
綺麗な笑顔を見せて感謝を述べたかもしれない。

けど、彼らは背中を押すのでは足りないと言ふ。自分が一歩退がつてしまえば、人々を虐げる彼女となにが違ふというのだろう。

「竜の魔女に、私は答えを与えることができるでしょうか」

並ぶ者たちへ問いを投げた。

自分の苦悩を手に乗せる。独りで抱えたものを見せたジャンヌに、
銀時は微笑んで答える。

「アンタがどうしたいかだろ。

持つてないモンは渡せやしないさ」

竜の魔女は許されないことをした。歴史の修正が出来るとしても、
犯した罪は本人がいる限り残る。自分の分身かもしれない存在だと
しても、ジャンヌ・ダルクはきつと罪を背負う。

自死をいとわないジャンヌの心は、ここにきてほぐされた。

「本当に、その通りです」

自決が遠ざかる。代わりに新しい風が吹く。

ジークたちの視線を受け止めたジャンヌは力強く頷いた。



「此処に忍の立つ瀬がある。

見る、俺がああ月と見間違えるほどの器だ……」

ヴォークルールの広場から少し離れた石段の上。ジャンヌとジークたちが談笑する姿を眺めていた地雷亜が、寄ってきた銀時に放った言葉だ。

「お前、まさか……」

「勘違いするなよ。地雷亜の人生は一つも作品を生まずに完結できなかった。同じ過ちを繰り返して、月詠の努力を無駄にするほどバカじゃない。

興味が湧いただけの話だ。

師のいない月は、どこまで輝けるのか」

「…竜の魔女が来るとどうして分かった」

「それこそ愚問だな。オルレアンに潜入して動向を探った。忍びの得意分野さ」

銀時と地雷亜、肩を並べてパンを口に含みながら腹を探り合う。意図的なものではないが、お互いに生前のことを知るせいで雰囲気は良いものにはならなかった。

「お前こそ、なぜここにいる？」

「そりゃこつちが聞きたいね。知らねー天井があつて、面倒な連中に絡まれたかと思えば世界救うことになった」

「道化が綴る詩みたいだな。俺も、まさか死後に月を見上げる日が来るとは思わなんだ」

2人して夜空を眺める。

あの時と似て、ここにも2つの月がある。無愛想な月と似た、苦悩を背負う姿。どちらも成長していく。きつと明日には2人の想像もしない場所へ行く。

「強いな、女は」

「どこでも、いつの時代もな」

そんな想いを零していた。

感慨深く息を吐いた地雷亜は、石段を降りて銀時に問う。

「いまは流されるまま、ひと時の戦いに身を投じている。お前はこの状況をどう思う？」

「知るか。俺はジャンプ読めなくて困ってんだよ」

銀時が訊こうとしていた本題。

月から落ち着いた疑問は宙で右往左往する。

「テメーはなにか知らないのか」

「あの、銀時。先輩がどこに行つたか知りませんか？」
「!？」

横から話しかけたマシユに肩をびくつかせる銀時。

「さつきしよんべんに行つてたぜ」

「…言われてみれば、あの小僧の気配を感じない」

「先輩……！」

気を遣って位置を変えた地雷亜も事態に気づく。

嫌な予感が走ったとき、マシユは駆け出していた。

「まさか!? さっき負けたばっかじゃねえか」

「油断するにはもってこいの条件だ……」

椅子を蹴飛ばす勢いで立ち上がった銀時。

ジークたちを呼び、立香の捜索が始まった。

魔女は剣を取る

竜の魔女は独り、久方ぶりの眠りに着いていた。ぼとり、可愛らしい音を鳴らして剣が手から落ちる。

羽毛のベッドにうつ伏せとなつてから数時間。投げ出した手に持つ剣がついに主人のもとを離れた。心許ない手のひらの感触によって、陽の暮れた部屋で起床を果たす。

「……………最つつつ悪」

一言目がそれ。

二言目に呪詛を吐いて、窓の外を眺めている男に剣を投げつけた。「普通に死ぬよ？おじさん、強くないからね」

「どうせ使い道なんて肉壁くらいでしょ。ここで私の憂さ晴らしで死んでも変わらないわよ」

自責など湧いて吐き捨てた。愚かな采配は百も承知だ。

意識を落とす最中で見たものは、ジャンヌ・ダルクを語る者の情景。旗を振る力強さに集まる愚か者たち。吐き気のする熱意によって蒸発するファヴニール。

邪竜は堕ちる直前、竜の魔女に視線を向けた。無能な采配を憎むのでも、死に怯えもせず、彼らを屠ってくれろと信じて。

「…手下のくせに、生意気な」

「だから悔しがってんじゃないのか」

心を見透かすように言う男を睨む。今すぐに殺してやろうと剣を手にとったとき。

「向き合い方が分からないなら付いてきな。おじさんの肉壁以外の使い方を知るチャンスだぜ」

竜の魔女には知識が必要だった。

人生の経験が足りなかった。

この無能な男はそれを知っていると。激情に身を任せるのはそのあとでいいと思ったから。

「…………チツ。ジル、私はこのクズと出かけます。城は任せました」

「ええ、承知しました。どうかお気をつけください」

濁った言葉を残してさっさと部屋を出て行く。
タバコに火をつけ、マダオは誰もいない部屋を振り返ることなくあとにした。

「マダオは歪な存在だった。」

戦闘能力はなく、魔術による援護すら出来ない。ハズレサーヴァントにも程があると竜の魔女は呆れていた。

「悲しいこと言わないでくれ。俺だってどうしてサーヴァントになつたか意味不明なんだってば」

「適当にも程がある独り言だ。」

自分の死も自覚していない男など、どうせロクな存在ではない。

「俺、世界を救う側に行くと思っただけだな」

「笑わせないで。アンタには鍋のアクでも掬ってればいいのよ」

「そんなの上の接待で掬いまくったよ。鍋料理という鍋料理から感謝されるくらいさ。な、悪いことは言わないから復讐は……」

「うるさい、アンタなんてリソースの無駄よ。バーサークも付与できない非戦闘サーヴァント。知らないの？リソースは有限なんだから」
「人のことサンドバックにしといて酷くない!？」

だが、こうしてこき下ろせば良く響く。

竜の魔女のストレスを和らげるには適した英霊。社会最底辺のサーヴァント、本領発揮であった。

「格好良く地の文書けばいいもんじゃないよね？」

彼女を宥める者として。

そして、ドライバーとしてここにいる。

「褒めてあげる。こうして、カルデアのマスターに会えたのですからね」

「竜の魔女……!」

連れ出された先のヴォークルール、敵陣にて。

竜の魔女は藤丸 立香と対面していた。

マダオは遠くの物陰でライターに手を置いて、主人の声に耳を傾けていた。



用を足しに来た立香は気づくと人の気配がない空間にいた。

歩いたのは数十メートルの距離。だというのに、街の景観は城の庭へと早変わりしていたのだ。

「竜の魔女……！」

「騒げば殺す。一分一秒でも呼吸していたいなら、大人しく舌を動かすことね」

忌避出来た事態を悔やんで唇を噛む。迂闊な行動を恥じる姿に、魔女はくつりと湧いた愉悦感を直ぐに押し殺した。

「……いつ瞬間移動なんて覚えたんでしょうね、俺は」

「バカね、特別な認識障害の魔術を施してただけです。」

助けに期待するだけ無駄よ」

状況は分かった。

丁寧に説明してくれる辺り、余程の自信があると見た。そして立香は自嘲する。種が分かったところで自力で脱出する方法が無いのだ。

喉に溜まる唾を押し留めて、渴きを悟られないように命を繋ぐ。

「どうして……オルレアンを焼き払うの？」

問いかける瞳に涙はない。ひび割れたようにこぼれ出る命の音に、魔女が見たものはまだ燃えないという結果だった。

「歴史を繰り返さないためよ」

「……えっ」

「愚か者を見つけた。だから殺す。」

死んで気づいた。だから塵芥にする。

簡単じゃない、だから憎悪を奮うのよ」

湿気ていては燃えないという常識は精神には通じない。

憎悪、恐怖、歓喜、悲哀。押し殺せば大人しくなり、殻を被った人間は静かすぎる。竜の魔女が期待しているものは敵を殺すことだけではないのだ。

「私がここに来たのはお前たち最後のマスターと話すため。もう負けないためにね」

心を悪意に叩きつけ、敗北の前で洗いざらい中身を喰らう。魔女の探究心はいま、敗北を許されない者への興味で埋め尽くされていた。

「なぜ逃げないの。昼間のときもそう。勇敢に前を見ていたけど、目は怯えていた」

魔女の微笑が立香の鼓膜を震わせる。発音だけではここまで揺れることはなかった。1秒後、魔女の気まぐれを逸脱したら死ぬことを理解した恐怖で体が震えている。

然し、魔女の機嫌を取れる技など知らない。自分の誇れるもの、魔女の琴線に触れても後悔しない言葉を出そうと思った。

「マシユが前にいる。だから俺は諦めない」

世界で最も大きな背中を返事にした。

閉じた殻の奥から、剥き出しの勇気が飛び出す。

「盾もいつか割れる」

「…え？」

竜の魔女は剣を突き立てない。

立香の言葉を聞いて、信頼を粉々に砕くと決めたからだ。

「目の前に現れた障害物をどうやって退ける？壊すか、燃やすか、裂くか、食らうか。手段は十人十色、趣向は星の数。盾に引きこもって、盾を押しつけて勝てる？でも？」

現れるもの全てを復讐の糧にする。

守る手順を啗う魔女の在り方が牙を剥く。

「お前を殺せば盾は壊れる。」

所詮は他人。盾は勝手にお前を守ってはくれない」

「確かにここじゃ俺は赤子と変わらない」

真つ直ぐな瞳で盾突く立香が気に入らず、膝で蹴り上げる。

「ゲアツ」

「なに、開き直って。恐怖で頭がイカれた？」

鳴り出した警告音。

歯向かうための心ごと壊しにきたことを立香は察する。

単純作業だ、サーヴァントの身体能力で暴力を振るえばものの数発で達成する。そこを魔女は、

「オラ、この有様をどうするつもり？」

暴力の数を重ねる。

「お前の無様さで盾が穢されるの」

手を抜いて、肉体に染み込ませる。

どうせ殺す。なら意味はないかもしれない。さつきと殺せば一つ陥落する。それでも、人類最後のマスターがなにを思うのか、魔女は聞いてみたかった。

「穢され、ない…」

「は、なに？なんて？」

「穢してるのは、アナタ自身…」

苦痛から捻り出る声に耳を寄せる。

口から滲む血、赤く晴れた顔。惨めな敗者の顔が見えるように、這いつくばる視線に高さを合わせていた。

「——あれ」

舌が回らない。よく見れば視界が定まらない。

悶え苦しむ男の口元が笑ったのを見て理解する。

(こいつ、蹴られながら呪いを、この私にッ!?)

足下にガンドが撃ち込まれた。

身体を蹴り上げた瞬間を狙って。

「マッシュは、相手に歩み寄れる、思いやりのある子だ」

「こ、の…ゴミがつー」

鼠に噛まれた猫の気持ちを知るのも束の間。

硬直は一瞬、それで満足したかと剣を握りしめた。

「先輩は！私の背中を押してくれろ！」

魔女の憎悪が晴れることはなかった。

剣を押し返した清漣な声。認識阻害の魔術を通り抜けたマッシュが

魔女の問いに答える。

「優しい心の持ち主です！」

「な、にっ!？」

剣と盾がぶつかり、魔女は反応も虚しく吹き飛ばされた。

なぜここがバレたのかは魔女にとつて問題ではない。どう見ても弱く、実際に中身も魔術師以下の雑魚を仕留められなかった。

「――」

指揮する者の差を見せつけられていると理解する。

なら次にどうするか。何騎ものサーヴァントを殺してきた剣で挽回すればいい。それだけのことなのに魔女の身体は項垂れたまま。

魔女自身、直ぐに動かない身体が劉理解出来なかった。仕留められないことに絶望し、ここに来た意味が霧散していくことに恐怖する。

マスターとして負けた。

そして今、殺し合いで負けた。

盾を壊せないことに絶望を抱く。

(なぜ、どうして負けた?)

「憎悪に縋って足元を掬われたんだ」

「……」

俯いていたから表情を読めないはずが立香は答えた。

返答を頭のなかで噛み砕いて十秒。

ゆっくりと、柳のように立ち上がる魔女。

前髪の奥から人類最後のマスターを睨みつける。

理解できない。血に濡れない真っ直ぐな瞳に頬が歪む。

「おぼえてなさい」

変化した口元が憎悪なのか、魔女は理解できなかった。ただ、敵に塩を送らて腹立たしいと思う反面、新しい感情を知った気がした。

後ろに跳ぶ。もう用はなくなったから。

追いかけようとするマシュは次の瞬間、慌てて盾を構えていた。時代に合わない近代兵器の鐘とともに、鉛玉が盾に着弾する。

「なぜ銃が!？」

「おい、いまの銃声は!？」

マシユが軌道を確認するも、すでに魔女の姿すらない。すぐに駆けつけた銀時たちは立香の姿に血相を変える。

「ありがとう、マシユ……」

「ど、どういたしました。…それどころではありません！先輩、先輩!! ごめんなさい、私が——」

「くそ、待つてろ直ぐに手当てを——」

「落ち着いてください、私に任せ——」

仲間たちの顔が夜空の手前に現れて、緊張が一気に解けていく。立香の意識はここで落ちた。



のどかな草っ原を黒塗りの車が駆け抜ける。

2度目の敗走後、竜の魔女はマダオの準備した車で帰路についていた。

「下手くそ。どうせなら頭割るくらいしたら?」

「無茶言うな。俺は正規のサーヴァントじゃないんだぞ」

撤退時の補佐に悪態を吐きながらも、雰囲気は綿あめのように優しい。最後のマスターとのやり取り思い返して、憎悪に裏切られた気分なのに魔女自身が不思議だった。

「それで、聞こうじゃない。認識阻害の魔術を解除した理由を」

「必要ない。俺から言っても蛇足になるだけだ」

「ふん、キモいこと言ってるんじゃないわよ」

軽口を叩きながら景色を眺める。

「あんなガキに負けたら笑うしかないじゃない。」

逆に清々したわ。自分の浅はかさを思い知れたもの」

マダオは答えない。

分かりきった答えを聞いて、ようやく安心したと薄く笑みをこぼした。

「アンタは用済みよ。逃げるなり、肉壁になるなり、鍋のアクを掬うなり好きにきなさい」

「いや選択肢が限りなく底辺なんだけど!?俺だけなにも進めてないよ、ただ鍋將軍やってるだけだよね!」

マダオの抗議にせせら笑いで答える。

「用済みだけど、カスじゃなかったわ。ゴミもカスも私はもう出さない。そんな余裕、今晚でなくなるもの」

「…そりゃ、良かった」

魔女は懐からタバコを取り出して、手を鳴らして火を付ける。マダオの口に乱暴に放り込んで、もう一本を取り出すと自分も吸い始めた。

再び窓の外に向いた視線はもう戻らない。

2人とも納得した答えを出せたからだ。

無言のまま居城まで送り届けたマダオは、ソラの果てへ消えたという。

憤怒は笑う

朝一番、召喚陣の使用を終えた竜の魔女。

集まった二騎に今日の予定を説明してからこう言った。

「カルデアの連中と決着をつけます」

「正気か、マスター」

オルレアンの居城でセイバーが驚愕する。横で話を聞いていたらイダーは頬が引きつっていた。

「あら、私は正気じゃないけど本気よ？」

「タラスクでヴォークルールに攻め込み、ヤツらを分断して撃破。奇襲にはもってこいでしようね。けど戦力はこちらが負けている。勝てる見込みを示してくれなきゃ、力尽くで止めるけど？」

「まさかとは思うが…。あそこのバーサーカーを充てにしているのか？まともに機能するかも分からないぞ」

左足で立ち、両腕を横に上げてバランスを取る狂人。

「追加戦力にちよつとばかし頼るつもりではないましたよ？ええ、まさか全身ドス黒いだけの狂人が来たから焦っているわけではないですよねンンン」

「語尾が胡散臭い陰陽師みたくなっているぞ!？」

魔女は冷静さを失ったわけではない。片足立ちの狂人を召喚した途端、水分を無くしたように崩れた召喚陣を見て唾然とはしていたが。やけを起こしての発言ではない。

「…耳を貸しなさい」

その理由を2人に耳打ちする。

「アンタ、それいつから」

「そりや昨日ですよ。確認も終わりました。夜にヴォークルールに赴きましたからね」

「はあ!?ただの気分転換かと思ったが、マダオと2人で!?彼がいないのはそういうことか？」

「違います、役立たずだから私がクビにしたの。それだけよ」

「深くは追求しない。だけど、昨日の襲撃に加えて夜にも一戦交えた

なら話は変わるわ。街を離れていてもおかしくないんじゃない？」「対策は練られていても可笑しくはない。だけど安心して。ヤツらは街に止まっているし、きつと、偶然にも対策は瓦解する。

警戒心の強い今、その鼻っぱしをへし折る絶好の機会よ」

自信満々に語る魔女を見た2人は顔を見合わせる。

昨日までの冷酷無比、実力至上を掲げる竜の魔女とは別人に見えるからだ。

「……そ、ならいいわ」

ライダーは敢えて言及せずに返事をする。

ただ機嫌が良いだけかもしれない。もしかしたら心変わりをしたのかも。だが確信はなく、魔女と犯した虐殺の数々は記憶に焼き付いている。心を開くことも、手を握り返すことも出来るはずがない。

「あと、これまでの発言は訂正します。昨日の敗走は貴女たちを道具扱いしてきた私の責任」

素っ気ない返事の直後、竜の魔女は玉座を粉々に砕いていた。

「あなた…」

「マスター」

行動で示した魔女に目を見開く。

「捨ててきた事実は無くなりません。謝罪なんて並べてももう遅い。だから前を向くわ、復讐心とともに」

2人は再び目を見合わせる。

サーヴァントとマスター、バーサーク化という弊害に甘んじた結果が生んだ虐殺ではないかと。取り返しがつかないことを悔やむのは生前から変わらない。

「……そもそも、出来るならフランスを蹂躪したくはないんだけど」

「右に同じく」

「考えておくわよ」

あまりにも遅すぎた精神の成長。

「座標、ヴォークルール。敵、人類最後のマスターども。

目標、敵の殲滅。もし可能ならマスターを確保しなさい。私の奴隷にしてあげるから」

もう悔いる暇すらないことを2人は胸に仕舞う。

次に機会があるのなら、どんな理不尽にも抗ってみせると罪滅ぼしの想いを乗せて。

「さあ、訳が分からないうちに死ぬ、カルデアー！」

居城の壁を破壊して、ライダーの宝具が召喚される。

祈りが粒子を纏い、タラスクは竜の魔女たちを乗せて発射した。



早朝、暖かい日差しによって意識が覚醒した。

知らない天井は白く…はなかった。数週間ぶりの故郷に帰ったような安らぎのなか、木造の天井を見て眠気が遠ざかる。

「い、てて。……ん、いつ寝たっけ」

まだ働かない頭を起こすと、焼けるように肌が痛む。でも、なんとか耐えられるので布団から出ようとして。

「うげっ!？」

休めと言わんばかりに全神経が痛覚を倍増させる。情けない呻き声で身体のダメージを知り、一旦ベッドに身を預けた。

ゆっくりと深呼吸をして、ようやく身体の痛みの原因を思い出してきた。昨日、竜の魔女にやられたんだ。手加減していたようだけど、何十回も蹴って殴られた。確か肋骨は折れていたはず…。

「折れてないぞ…?」

痛みはあるけど、殴られたときの痣程度が残っているだけだ。ちよつと頑丈すぎやしないだろうか？

得体の知れない寒気を感じたとき、部屋の外で物音が聞こえた。

「…誰かいるの?」

誰かが外に出て行った気がする。

きつと看病してくれたんだ。マシユかな、早くお礼を言わないと。

「あれ、誰もいない」

部屋中探しても誰もいなかった。

それにしても、知らない家を使わせてもらっているのに、やけに安

心する場所だと思うのは何故だろう。

…分らない。誰もいないなら仕方ない、外に出よう。

「…あ、いた」

家のすぐ側に設置されたテーブル。

朝食らしきパンを食べながら、全員が作戦会議をしている。

「では、ジルという男が手を引いている可能性が高いと」

「憶測ですが…。オルレアンを衛っていた兵士の話を聞くと、私にはそう思えるんです」

「ふらんすを転々と旅して竜を狩っていたが、はて。ジルという男の話は聞かないだ」

「俺もその男のことは確認していない。どこかに隠れているのかもしれないな」

「ま、とにかく聖杯をぶんどればいいんだ。目処さえつけば地雷亜に獲ってこさせりゃいいだろ」

「場合による。魔術で守られていたら、俺には手出しが出来ん。特異点を生むものだ、裸で転がしているはずがない」

『地雷亜の言う通りだ。敵は聖杯になにかしらの隠蔽をしているはず。うん、ここまで纏めるとオルレアンが最有力候補になるね』

せつかく盛り上がっているところ申し訳ないこと、お腹空いたし交ざらせてもらおう。

「おはよく…」

「あ、先輩ーおはようござい…ええええ!?!」

マシユの元気な悲鳴でビックリした。まるでお化けでも見たような反応でちよつとシヨック。

「まさか起きてくるとは…」

「いやいやいやいや、馬鹿なのお前!?!死ぬの!?!」

「え、いや死なないよ?あ、銀さん髪の毛跳ねてるよ」

「あ、ほんとだありがとう!ってこれは地毛だ馬鹿野郎!」

『藤丸君、自分の容態分かってる!?!立って歩くななんて…あれ、バイタル異常なしだ。というか、なんか傷痕が所々無くなってない!?!』
「えつと、自分でも分からなくて」

「良かった、本当に良かったです！」

「マシユは立香を守らなかつたことを悔やんでいたんだ」

「ありがとう。心配かけちゃったね。昨日は助けにきてくれて嬉しかったよ。だからほら、ね？」

鼻をすするマシユを宥める。

瞳に滲むものが心労を物語っていた。早く目覚められて良かったと思う。彼女に泣かれるのはとにかく嫌だから。

「あ、そうだ。起きたとき部屋から出て行った人がいるんです、怪我が治ったのはその人のおかげだと思います」

「あん？……数十分は全員いたが」

銀さんの顔を見て冗談じゃないと分かった。

じゃあ誰なんだろう。気になってさっきの家に戻ろうと振り返り。

『皆んな、構えてくれ！オルレアンの方から時速200km超えて巨大なものが飛んでくる！』

『着地点、藤丸君たちから百メートル離れます！』

不思議な朝はなにも解決することなく終わった。

「全員隠れろ！」

咄嗟に反応出来ない俺を銀時が掴み、建物の陰に飛び込んだ。

大気が震えた直後、外壁を突き破る無礼者たちによって広間は震源地と化した。

衝撃は凄まじく、胸の奥が引き締められる緊張感で汗が垂れる。砂埃が舞う広間を物陰から覗き見て、こちらを見る巨大生物と視線が合ってしまった。

「運が良いのね、皆さん。いままで全員を倒せば無駄な犠牲を出さずに済んだのですけど」

「あれは恐竜？」

「タラスクだ」

「知ってるんですか、小次郎さん」

一緒の物陰に飛び込んだ小次郎が恐竜の正体を教えてくれる。銀さんは嫌そうな顔をしている、どれだけ警戒してるんですか。

「うむ、実は1度たやすく仕合っている。ライダー殿の宝具だ、建物

面。マシユたちのほうにタラスクが跳躍している！

「マシユ！」

瓦解する建物を蹴散らしたタラスクのひと払いで、マシユの身体がヴォークルールの外に飛ばされた。

(だけど、なんで外に？)

「私の相手はアナタ達よ」

「そうか、この目的は分断ですか！」

「させない！」

物陰からジークと地雷亜が飛び出していく。

ジークの魔力放出を背で受けるも、タラスクが止まる気配はない。反対に回った地雷亜がクナイを投げる。しかし、ライダーの魔弾が炸裂して全て落とされた。タラスクの身体、魔力を通しにくいのか、元より防御力が高いんだ。だけど前は違うらしい。挟み撃ちでなんとかするしかない。

「アンタらはここにいなさい」

考える時間はあつさりと潰されてしまう。

ライダーが地雷亜との距離を詰めたかと思えば、手に持つ杖でフルスイングをする。魔術によって強化された足は速く、地雷亜の足に追いつくほど。

「女あつ！」

地雷亜の身体は家屋を突き破っていく。

完全に後衛だと思っていた認識を崩された。だが現実には容赦なく進む。

タラスクは身を翻してジークに襲いかかり、両足で地面を踏み砕く。

「ジーク君！」

警戒していたジークはかわせたが、タラスクの次の動きにジャンヌが出遅れてしまう。

「ジャンヌ!!」

巨体を回転させ、ジャンヌの身体ごと外壁に突っ込んだ!?

やり方が無茶苦茶だ、街がもう半壊している…。

味方が一気に分散されてしまった。俺はどうする、ああ、展開が早すぎてついていけない…。

「立香、マシユを頼んだー!」

汗ばんだ猫背に衝撃が走る。

銀さんにおもいつきり背中を叩かれていた。

：本当にこの人は。カルデアの爆発のときといい、どれだけ修羅場を潜り抜けてきたんだろう。帰ったら洗いざらい聞かなきゃ。

「分かった。銀さんたちも気をつけて!」

別れて走る。

ジャンヌさんのことまで頼まなかったのは、きっと無理に気負わせないためだ。でも、どっちか1人なんてケチなことは言わない。絶対に2人とも死なせてたまるか。

「ツラウ!?!」

直後、鼻、口から通る空気が内側を焼く。突然の痛みで頭が割れるように痛み、状況が意味不明なまま地面を見ていた。

足の裏にトゲでも刺さったように怯んでしまう。鼻と口を右手で抑えて、混乱する視線をゆつくりと上げる。

「…地獄だ」

焼ける街。

冬木市とは別種の意味で燃える世界。生命を拒絶する炎が立香の意識を溶かし始めていた。



「ジーク、一気に片付けてマシユたちの加勢に行くぞ」

「ああ、そのつもりだマスター」

立香を送り出した2人。

事は1秒を争う。ライダーを倒すため剣を構えたというのに、ライダーは素知らぬ顔で外壁の向こうへと跳んだ。

呆気に囚われるとはこのことだ。

2人の相手をしなければ分断の意味がない。追いかけてようぞ

クに跳躍を頼もうとして、ライダーの行動の意味が明かされた。

「ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン
吠え立てよ、我が憤怒」

天から降り立つ魔女が1人。

怨嗟を燃やし、戦いの残滓を種火とする。

天高く掲げる剣に熱意を宿して、ヴォークルールの街を焚き火と化した。

「熱っ!!なんだこりゃ!」

「これは、ただの炎じゃない」

火元は見当たらない。振り向いた風が火花を起こし、吐いた息が自分の肌を焼いている。数分も居座れば人体は機能を焼き切られること間違いなし。とても人間が耐えられる場所ではなかった。

「燃料は大気の魔力：それに、感情か？」

「あら、そこまで解るなんて竜殺しサマには参ったわね。なら分かるでしょ、この世界の理不尽さが」

視線が合う魔女は昨日とは別人だった。

ガワではなく、心。

「我が名はジャンヌ・ダルク・オルタ。オルレアンを焼き払い、忌々しい歴史を塵芥に還してあげる働き者の名よ」

真名を謳う姿は敵でありながら輝いている。

自信に満ちた表情に醜い色はどこにも無い。

旗を握る者たち

「早く、戻らないとツ!!」

宙空に弾き飛ばされたマシユ。ヴォークルールの外壁に手を伸ばすが、盾2つ分の距離に成す術なく時間を稼がれてしまう。

さらに2つ、外壁を越える影。違う方向へとジャンヌ・ダルク、彼女を追う巨竜：確かタラスクと言った怪物の姿がある。

(いまのジャンヌさんの霊気じゃ……。それに)

たったいま燃え始めたヴォークルールの街を見て、藤丸 立香の顔が過ぎる。着地までがもどかしい、早くと心だけが街に向かうなか。

「あれは」

着地地点を目視して、待ち人がいることに気づく。

昨日見た秀麗な騎士、セイバーだ。

「悪いね、盾のお嬢さん。同じ守る者として手を抜くわけにはいかないんだ」

気の籠もった瞳を見て肌が震えた。

狂気の奥に信念がある。冬木のセイバーと同じもの…なぜ敵であるかを疑問に思うほど、騎士は綺麗に剣をとった。

盾を構えながら、セイバーの美しい立ち姿に意識が集中する。

凛々しい足先、細く力強い四肢、女性でも見惚れる身軀。そして輝く素顔を見て、神経が甘いものへ変換されるように力が抜けていく。

(…ダメ、見過ぎではいけない)

視覚に入れば手を抜いてしまう。

それがセイバーの霊気なのだど理解して、マシユは盾を普段の倍の力で振るった。

「これは、驚いた」

着地の瞬間、盾の側面に回り込むセイバーを大振りで迎え撃つ。セイバーにも信念があるように、マシユの攻撃性が予想を上回った速さで剣に衝突する。

「まだ足りない…」

反省を促すように呟く。

いま、自分で手を抜いた…否、力が抜けた感覚を自覚していた。心が未熟だから惑わされた。

背後では聖女が巨竜を相手に苦戦している。

打開策がないと消耗の果てに死ぬ。なにか…！

『よし、やつと繋がった！って、ええ!?なんでもいきなり戦闘!』

「ドクター?アナタ、本当に本物ですか!」

『本物もなにも僕だよ、僕!』

もしかして忘れちゃったのかい!』

先程、銀時たちに嘘の情報を伝えたドクターは偽物だった。誰が作り出したものかは分かっていない。オレオレ詐欺のような返答をする彼を信じるか迷ってしまう。

『なんだかややこしくなってるね。どれ、見せてみな?』

次に出てきたのはダ・ヴィンチちゃん。本物にしか聞こえない声も疑ってしまう。

『うん、なるほど。状況は大体分かった。』

マシユ、ここを乗り切るしか道はない。大丈夫、君が失敗しても所長に呪われるのは銀時の役目さ』

笑いながら語る彼女に、ようやく気が揉まれた。

所長が銀時を呪うなんて、あの場にいる人たちにしか分からない言葉だから。

「……ふう。ありがとうございます、ダ・ヴィンチちゃん」

敗北ですすり泣くロマニの声で本物だと確信する。

覚悟は決めた。

自分の力だけじゃ足りない。

なら、狙うは――。

「マシユ・キリエライト、行きます!」

「セイバー、シュヴァリエ・デオーン、いざ!」

勝機が来ると信じて、揺れる心を盾で握り締めた。



ヴォークルールの壁を突き破り、力勝負で呆気なく押し切られている。

相手は宝具とはいえ、フランスを守るために旗を握る者が晒している姿とはいえない。

「聖女とはいえ、限度はあるでしょうに」

巨竜タラスクの猛威に苦戦するジャンヌを見ながら、ライダーは冷えた独り言を漏らす。

ジャンヌ・ダルクは特別な力を授かったわけではない。サーヴァントとしての機能は欠落し、生前は田舎娘として生まれたのだ。ただ神の声が聞こえるからと、世界から憎まれてまでなぜ戦うのか。

「……なぜ、貴女から魔女が生まれたの」

狂った思考で常識を探ろうとする。

聖女であるこの身で問うべきだ。…やはり、1秒で無理だと分かる。狂化を抑え込むことが出来そうにない。抗うには元より狂った素質で注ぎ落とす必要がある。

ライダーには不可能な業だ。故に、自分の行いを目に焼き付けて、いつか罪を償うときを待ち続ける。

聖女の未来を憂いながら、清くあつた杖を手取る。

巨竜と少女、この差を埋めるからこそそのサーヴァントであるものの、少女はサーヴァントとしても欠点を抱えている。ゆえに力の差は歴然だった。

ヴォークルールの外壁を破壊した巨竜。宙から迫る巨体をかわし、脇腹を旗で叩きつけた。

「く……」

だが跳ね返されてしまう。

力が足りない。能力も不完全。欠落したものを補うタイミングを

掴み損ねた。

無いものを欲しても、巨竜の攻勢が止まることはない。人ならざる生命から繰り出される一撃、その進撃は人よりも先が読みにくい。

ただ闇雲に巨大をぶつけることはしてこない。筋肉の使い方の差だろうか、予備動作というものが無いのだ。反射速度による対抗が必要となるなか。

「ああっ!？」

無防備な横っ腹に一撃。

サーヴァントでなければ肉片になっていた。自己回復も、

(まずい、いまの私に倒せる手段がありません。どうすれば…)

巨竜の想像を越える速さから辛うじて逃げながら、反撃の手立てを探し続ける。

「考える余裕なんてあげませんよ」

「ガッ、アア!？」

腹部を抉る熱意。

一気に爆発する吐き気に世界が白く剥ける。

拳のように硬い魔弾が腹部に直撃していた。

起き上がる瞬間、巨竜のなぎ払いを躲す余裕はなく。硬い前足に襲われて、乾いた土のうえをバツタのように跳ねていく。

「ジャンヌさん!」

「よそ見なんて暇はない、だろ!」

駆け寄ろうとするマッシュに剣舞が閃く。

余計な気を遣わせたことを申し訳なく思いつつ、個体の差を思い知らされて息を止めたくなった。

2対1。

相手は宝具にバーサーク化による身体能力の強化。

こちらは宝具使用不可、身体能力の低下並びに対魔力は無いに等しい。

街は火の海。

見るからに熱い。竜の魔女の宝具だろうか。街はもう住めないだろう。ジークくんや地雷亜はともかく、銀時や立香には耐えがたい世

界のはずだ。

(不甲斐ない…)

彼らは大丈夫だろうか、と。

自身に迫り来る巨竜の殺意から目を背けて、2人のマスターのことを考えてながら視線を門に向けて。

「……………うそ」

思わず、小さな悲鳴が喉から溢れていた。

火の海のなか、1人の青年が外壁に向かって歩いていく。顔を両腕で隠し、半ば脚を引きずるようにして歩行速度を落とさずに進んでいる。その身体は視認しただけでも火傷が顔や手にあり、身体の内側はもっと酷いことになっているはず。

それでも立ち止まらずに藤丸 立香はここまで来た。

なぜ銀時たちから離れたのか。理由はきつと…自分のサーヴァントのため。

(……………止まった?)

地獄からあと少しで這い出るところで、立香は立ち止まる。彼はジャンヌ・ダルクの窮地を察して、朽ちそうな身体を笑って誤魔化する。ジャンヌにだけ見える位置から、立香は右手を胸に掲げる。手の甲、令呪をこちらに見せて、行くも退くも自由だと私に意志を尋ねている。

そこまでして、なにを気遣うのです。

「——私、は」

空を見上げた。異常の輪に塗り替えられた故郷のうえ。

応えなければ、ジャンヌ・ダルクでなくなる。

(期待を裏切るために来たんじゃない!)

巨竜の右前足がジャンヌを容赦なく踏みつけた。

「…残念ね」

跳ね上がる土塊を見ながら、ライダーは聖女に哀れみの言葉を放つ。セイバーに加勢するために踵を翻しながら、胸に渦巻く懸念を無視した。きつと、人類の敗北を目の当たりにしたからだ、現実から目を逸らしたのだ。

「告げる」

憎悪で立ち上がる宝具から走り抜け、立香は契約の詠唱を開始した。

「カルデアのマスター!？」

立香は巨竜へ向かって走る。ライダーは自殺行為でしかない目を見開いて、タラスクへと視線を戻す。そして、

「ぬ、がー！ー！ー!!」

タラスクの踏みつけを両腕で持った旗で押し留める、ジャンヌの姿を目撃した。

「なぜタラスクの踏みつけを耐えられるの!？」

立香は聴覚が硝煙に障害されるなか、マシユの懸命な叫び声を聞いた気がした。近くにいと信じる。だから突っ走って、無謀な契約に乗り出せる。

「…バカね。物陰で隠れてるなら見逃すけど、出てこられたら理性のほうを保たないのよ!」

ライダーの杖が振るわれる。ジャンヌに駆け寄る立香の周囲に魔弾が発生した。

(これは賭けだ)

マシユが意図を理解しなければ死。

マシユがいなければ元の木阿弥。

「先輩っ」

ジャンヌが耐えなければ終わり。

ジャンヌが応えなければ…。

「——ならばこの命運」

「彼女は最高の盾ですよ、立香」

なにより、妨害を受ければ自分の死。

生と死の狭間を走り、詠唱を続ける。差し出す右手で己を鼓舞する。

ライダーの杖が標的を定め終えた。この瞬間、立香の賭けは失敗へと進路を変える。

「いっはっ!？」

ならば、進路を戻せば良いだけの話。そう言わんばかりにマシユの盾がライダーの背中に直撃していた。悶絶する悲鳴とともに、ライダーは大きく吹き飛ばされていく。

『ええええええええ!』

『た、盾を投げた!』

どこでそんなことを覚えたんだ!』

モニターの向こうから驚きの声が重なる。

「自分が丸裸だぞ、愚か者!」

ライダーに視線すら向けず、盾を後ろ投げしたマシユ。

気付かなかったことで機会を逃したが、目前に次の機会が現れた。無論、これを逃すデオンではない。

軽やかに、消え入るほど鮮やかな踏み込み。体勢が整っていないマシユに起き上がる隙など与えない。見切られることのないよう、速さに振って剣を突いた。

「せいやつー!」

柔らかい掛け声とともに、マシユはバク転しながら剣を蹴り上げる。一直線に走る剣を手首から蹴り飛ばし、そして踊るようにマシユの身体が弧を描き、蹴りを二撃、三撃と見舞った。

骨と肉が混じり合う音が響く。体重が乗ったところを狙った蹴り。仕留めに来るこの一瞬をマシユは狙い続けて、意識外からの反撃は成功した。

剣を持つ右の腕、華奢な左脇腹の骨を折った手応えがある。

「百合の花散る剣の舞踏」

だが、堪える。

白百合の剣舞は血を噛み締めて、止まることなく宝具を解放した。咲き開く花弁がマシユの脳髓に侵食する。デオンの生涯を描く宝具の最中、百合の花が照らされる光景を見た。胸を締めつける惑わしは強くなり、中心を飾るデオンはマシユの目に尊く映っていた。

「すみません、先輩が待っていますので!」

「それは、釣れないなあ…」

必殺の剣撃に合わせて、マシユの右拳が駆け抜ける。

デオンは自分の剣がかわされたことを納得していた。彼女の目には、自分よりも美しく、輝く人物がいたのだ。

「ああ、僕が忘れていたものだ……」

胸部に打ち込まれた右ストレート。

デオンの身体は宙を漂って、やがて静かに地面に転がった。

「はは……技なら負ける気はしないのに。いや、これも会話を怠った者の末路、か……」

「セイバー……くっ、そ」

一瞬の出来事にライダーの理解が追いついたとき、もう一つの賭けが達成された。

「我が命運、汝が旗に預けよう!!?」

窮地のなかで細い希望を紡ぐ青年。

神の声に差を押され、民を導いた己に出来ること。誰か1人でも未来を望むのなら、理不尽に置かれた立ち入り禁止の表示を蹴破る。

「その誓いを受けます!!?」

ここに主従契約は完了し、ジャンヌ・ダルクの魔力が否応にも存在意義を突き動かす。

両腕で耐えていた踏みつけを気合いの声とともに押し返した。掲げる旗はタラスクの頭上を越えて、一息のうちに脳天へと叩きつける。あつという間に巨竜の頭部が地面を抉っていた。

「……流石、ルーラーのクラスね」

タラスクは一時的に沈黙した。

倒そうなどとは考えていない。まともに戦えば何時間必要か分かかったものではないからだ。

「お覚悟を、ライダー」

弾けるように跳んでライダーに旗を振りかざす。

「舐めないで!」

ライダーは杖を上げて追撃に入った。

今度の詠唱は立香に放ったものより速く、手心は一切省かれていた。

「効かない……!そうか、対魔力ね!」

ジャンヌの身体に魔術を届かせるのは困難を極める。彼女との相性に気づいたとき、旗はライダーの腹部を貫いていた。

「……竜の魔女は」

身体が光の粒子に変わっていくのを見ながら、狂化が解けるのを感じる。

「成長したわ。気をつけなさい」

だからライダーは迷惑をかけたお詫びに忠告する。どれほどの意味があるかは瞳を見つめ返すジャンヌを見れば良く分かった。

「はい、話して確かめてきます」

「…それと」

「ツ…!?!」

「負けたら、殴ってやる、から」

負けたことがちよつと悔しくて、悪戯な笑みを残した。

自分の顎の下で止まった右拳を見送って、ジャンヌは小さく深呼吸した。

—
—
—

立香の火傷は軽度よりではあったため、ジャンヌの治療で重症化は避けられた。

「今度はマシユが投げちゃったか」

「はい、咄嗟に身体が動きました。ジャンヌさんの前例がなければ、どうしていたか分かりません」

軽口を叩く立香に、ジャンヌは視線を合わせる。

「今回も上手く行きましたし、お陰で乗り切ることが出来たのは事実です。しかし立香、自分の命の価値を低く考えてはいけませんよ」

「うん、ごめん。けど見てるだけは出来なかった。あとで怒られようと思って」

「そう言われると言いくいではありませんか…」

「やらずに死ぬより、やって死んでから考える！」
『勘弁してくれ！』

「こっちは心臓止まるかと思ったんだぞ?!」

「あ、偽物のドクター！さつきはよくも——」

『またこの流れ!?!』

『あーもー、落ち着いた』

散らかっていく話をダ・ヴィンチとマシユが纏める。

休むように立香に伝えるも、最後まで戦う意志を曲げないことで全員の意見は全員突撃で一致した。

「兎も角、急いで戻りましょう。竜の魔女とジーク君たちはまだ戦闘中みたいです」

「はい。銀さんたちが心配で仕方ないですから」

「その前に」

ジャンヌは2人の前で両手を合わせる。

すると淡い光が身体を包み込んだ。

「熱は凌げませんが、ないよりはマシかと思えます」

「ありがとうございます！」

暖かい光に包まれて、力が湧き出るのを感じる。

分断されたヴォークル壁外での戦闘を終えて、3人は竜の魔女がいる場所へ駆けていった。



「ここだ——」

物干し竿を一閃。

瘴気に包まれる獣はそれで首を断たれた。

都度百度、佐々木 小次郎の長刀物干し竿は振るわれた。

その全てが黒い男の首を断ち、そして再生した。

「なんと面妖な男だ」

「oooooooo!!」

小次郎の身体は男の太刀筋を見切っている。

例え小次郎の体力が尽きたとしても、その身を捉えることは不可能だ。

「嬉しいぞ、無名の侍たち。」

その悪、尽きるまで付き合ってもらおう」

小次郎はこの侍の正体に気づいている。だが名前は知らず、この特異点に存在する理由も分からない。

ただ分かることがある。この世界の決着の刻まで、飽きることのない勝負に興じられるという使命を課せられている、と。

魔女の一撃

ファヴニールの脅威から守ってみせたヴォークルールの街は、瞬く間に焚き火台の松明と化した。

銀時たちにとって幸いなことは一般人が避難していること、それのみ。やがて安寧を取り戻すであろう建物は炎に焼かれ、積もる灰の噛い声が逃げ場を奪った。

「ふふ、苦しそうね？」

まだ死ねない頑丈な身体を呪うといいわ」

竜の魔女——ジャンヌ・ダルク・オルタの剣が乱雑に銀時の頭上へと振り下ろされる。隙が大きい、命取りのひと振り。

「ツ…クソがア!!？」

気道を焦がす呼吸で取り逃し、真正面から受け止めてしまう。膝が落ちかける銀時だが、ひと呼吸耐えるうちにジークの剣が間に合った。

「鈍いのよ、クソ英雄！」

銀時を蹴り飛ばし、反対側から走るジークの剣を叩き返す。雑な剣舞が炎のなかで輝く。憤怒を纏うオルタだけに許された自由。

「動くだけで身体が焼ける…！」

動作1つ1つに自傷を伴う。フィジカルで勝るものが奪われて、2対1でも銀時たちの状況は刻一刻と悪化していく。

「あははははー動いても止まっても焼けるわよ？」

勿論、宝具で抗つても丸焼き！さあ、どうする!？」

笑い声に反応して、炎がオルタの足元から迸る。ほとぼし

速度は普通自動車道の法定速度上限と変わらない。見てからでも躲せるものがオルタを中心にして八方に放たれた。

魔力を使用すれば焼かれる世界。ゆえに身体能力でのみ応戦が許されるなか、銀時にとっては軽度の枷でしかない。

「バンバン燃やしやがって…。ちったあ節電に協力しやがれてんだ！」

「バカなの？節電なんて概念ここにはないわよ！」

迫る炎の中心を紙一重でかわす。

肌に当たる熱を感じて、自然のものと違う威力と知る。感情を温度に変えるほどの霊気、これはただ振り払えばいいほど薄くはない。

数度の打ち合いを経て、技量自体はジークにも届かないことは把握している。身体の使い方もまだ未熟だ。

(勝機は十分にある)

(距離を詰めるぞ)

ジークと視線が合い、同じ結論に至っていると分かった。

意思疎通を終え、同時にオルタに駆け寄る。

「速っ!？」

線から点へ。吸い込まれるように迫る2人に驚いて炎を量産する。

暴れる炎の数々を上回る速さで通り抜けた。

(炎に飛び込む虫ね)

オルタは右手を軽く上げる。

その炎はこれまでのものと違い、自身の周囲を覆いながら広がる炎。剣を振るだけで払えるほど優しくはない。一瞬でファヴニールに届く距離を焦土と化した。

最大火力で放った。戦闘始まって序盤に決めるに行くことで意表を突いたと確信する。

「どうだ!」

「驕ったな、竜の魔女」

灰色の世界でたった2人、炎に染まらない男たちがいるとは思わずに。

煌めく竜殺しの剣。オルタの宝具による焼き付けを耐えて、一瞬の魔力放出で炎に風穴を空ける。

「先に意識が飛ぶでしようがっ」

「そんだけ負けたくないってことだ!」

オルタの想像を越える痛みで活路を拓き、銀時の木刀が叩き落とされた。

脳天から真下に加速する頭蓋。仰いだ視線が闇を纏い、己の油断に苛立ちが湧き上がる。

この激情を即座に発散しなければ、敗北から抜け出せないとオルタは知っている。だから木刀を掴んで振り抜かせない。

「抜けねえっ」

「負けたくないのはこっちもなのよ」

倒れかけた身体を捻り、左拳を銀時の脇腹に打ち込む。憤怒に血を這わせて、痛みを力に変えた一撃。直撃した左拳に悶絶の表情に満ちて、銀時は真横の建物に叩き込まれた。

「マスター!?!」

「アハハハ！どう、これがバスターの威力よ！」

ジークからの追撃は来ない。

魔力放出に反応した宝具が身体を焼いたのだ。直ぐに立てるほど温くはない。

(……その筈なんだけど)

焼け焦げているのにまだ死なないのだ。

その執念はオルタ自身と通じるものがある。

嫌な予感を払拭するため、銀時が倒れている建物に火柱を放つ。

「念を入れておいた。」

やり過ぎって言葉は似合わなさそうなもの」

「マスター……!」

容赦なく建物は灰塵へ。

逃げる隙すら与えない、ジークが反応できない早さでの驕り精算。

燃え盛る街の最中、まるで沈火したような静寂がオルタとジークの

間に流れる。

ひと呼吸ごとに疲弊するジーク。

片や優位な立場で剣を握るオルタ。

十中八九、オルタが周囲に炎を撒き散らすだけでジークは敗北する。

「ねえ、竜殺し。アナタのマスターは私が殺した」

「……死んでいない」

「かもね。なら死体を確認したら、私に降りなさい」

それを、オルタはあろうことか寝返りを提案した。

余裕はない。だからこそ戦力が欲しいとジークに強要する。受け入れるなどはなから考えてはいない。どうすれば我が者に出来るのか。

「俺はルーラーを裏切らない。君に手を貸すことはないし、目的を容認することもない」

「姫を守る騎士みたいね。いいわよ、アナタの都合なんて踏み潰すから。真っ向から齒向かうヤツを従わせてこそ、この復讐の価値が出るもの」

少しでも糧になるものを探して、果てなく手を伸ばす。復讐を完遂するため、経験を積むための時間を楽しむ。

「復讐は連鎖する。君が母国を憎むように。」

「復讐を手放さなければならぬのはアナタだ」

「…ええ、そうね。」

復讐者である私が誰よりも理解している」

だから、ジークの言葉が正しいかもしれないと思う。

それを否定して、自分になが待ち受けるのか。

「だから復讐劇は私で終わらせる。世界の不始末全てを私が燃やし尽くすわ！

こちとら部下が減って人手が足りないの。嫌でも従わせるから、廃人になるんじゃないわよ」

オルタはきつと、心のどこかで理解しているのだ。復讐者の末路は哀しく、歩く道に花は咲かない。

覚悟の言葉を聞いて、ジークは口を閉じた。

自分でも、これほど想いを語るのには珍しいと驚いたから。アヴェンジャーの顔を見て、ルーラーとは似ても似つかないのに手を伸ばしている。

何故だろう。

アヴェンジャーの姿を生前に見たことがあると思ひ出す。

「どれだけ汚れても、想ったことは否定したくない」

聖杯大戦で出会った宿敵、天草四郎時貞。

彼の計画を止めると決めた時と考えは似ている。

だからオルタは彼に寄っていると思った。

(でも、殺したいというわけじゃない…)

マスターが炎に包まれて、ルーラーたちの安否は不明。

天草の時と違うことは、ルーラーがまだ生きていて、マスターがまだ生きていられるかもしれないところ。不思議と分かるのだ、彼らなら大丈夫だと。

なら、これは…。

(ああ、違う。真逆だからだ。

一周回って隣り合ったから、2人が重なって見えるんだ。うん、なら寄っていると思ったのも納得だ)

人類の救済と人類への復讐。

真逆の感情がゆえに、天草四郎時貞が果てにまで至った思想がいまなら理解出来そう。

なんて…絶対、未来永劫あり得ないことを思うと、不思議なことに負けん気で剣を握れる。

「だからぶつかって、1ミリだけでも進む。

越えて、倒して、地面に落ちたものの全部を持って俺たちは未来を取り戻す」

「剣一本を持つのなら危ういの？」

「そうだ。決めたことは守る」

本当は剣を握るのも辛い。

神話級の魔力放出と比べれば格段に劣る宝具だ。然し、ジークの身体である以上は普通の身体強化すら持続して使えない。ジークフリートへ変身しようものなら、きつと途中で燃え尽きる。

でも、ルーラーがいるから投げ出さない。

目の前で間違った道に行こうとする者を見過ごせるはずがない。

「それが——」

なによりも、犬歯を剥き出しに笑う侍がまだ戦っている。

「依頼主オルガマリーの遺言なんですね」

「バカな!？」

灰と化した建物、その奥から一気に飛び出す銀時。存在に気づくの

が遅れたオルタは迫る木刀を防げなかった。

居合い斬りで打たれて身体が硬直する。

「復讐に振り回されるのは終わりにしよう」

「かはっ…」

その瞬間、ジークは剣を突き出して踏み込んだ。

切っ先はオルタの胸を貫き、霊格を砕く。貫いた剣を握り、反撃しようとした指先が力なく垂れて、勝負はこれで決した。

剣を引き抜いたジークはアヴェンジャーを抱き留めて、ゆっくりと地面に寝かせる。

「…終わったか」

「ああ。ルーラーを待たずに終わったのは少しだけ名残りだが…。マスター、心配したぞ。あの炎、どうやって凌いだんだ？」

「吹っ飛ばされた勢いで壁に穴開けた」

「成る程、それで後ろの民家に逃げたのか」

焼かれて身体中が炭塗れの顔を見てお互いに笑う。

「ジーク君！銀時、無事でしたか!？」

「街が黒焦げだ…けど、2人は大丈夫そうだね！」

「先輩、よく見たら2人とも火傷があります。急いで治療をしないと！」

遠くから走ってくる影。

ジャンヌと、マシユにお姫様抱っこされる立香。

「普通は逆じゃない？」

「強さ的には合ってるよ」

「確かに。うちの女どもと同じだ」

立香の見解に銀時は頷くしかなかった。

「…竜の魔女は敗れましたか」

「ああ。まだ辛うじて息はある。いまのうちに話すといい」

「はい、そうしますね。」

あ、ジーク君。お疲れさまでした」

「ふふ、ルーラーもな」

ジークは手当てを受けながら、ことの成り行きをジャンヌに話し

た。もう殆ど動かないアヴェンジャーを見て、少しでも話す時間をと治療もほどほどにしてもらった。

ゆっくりと向かうジャンヌを見送って、騒がしいマスターの元に行く。

『うわっ！2人とも凄い炭！炭鉱で作業したあとみたいだよ』

「おいこらテメー、なに呑気なこと言ってるやがんだ。データラメ言ってくれたおかげで死ぬかと思ったんだぞ！」

揉め事の内容はライダー奇襲のときの話だ。

“ 大丈夫、奇襲は彼女たちだけみたいだ！”

ロマニがそう言った直後、次々と敵が襲撃してきた。腹を立てるのも仕方がないだろう。

『いやその話ね!?違う、それ僕じゃないんだって!』

「がつつりテメーの顔が見えてんだぞこっちは！よそ見してパフェ食べてたんじゃねえだろうな？」

『その直前までパフェ食べてただけだね』

『やめてくれレオナルド！話がややこしくなる!』

やいのやいの揉める間にジークが入って、ようやく落ち着いて事情を聞けることになった。

『朝のミーティングまでは確かに繋がってたんだ。けど、ライダーの奇襲と同時に切断されてしまってるね。次に繋がったのはヴォークルールの壁外で戦闘中だったってわけ』

『タイミング的に、敵はジャミングもしていたんだと思う。不思議なのはライダーとの戦闘中に回線が復帰したことなんだ』

『藤丸君には繋がるけど、銀時君とはダメだね。あれ、けどいまは銀時君の通信機も繋がってる』

「……………」

皆んなが首を傾げるなか。

銀時だけは視線が上がっていく。その先はこの場にいないジャンヌのもとへ。

もう別れる2人のジャンヌ・ダルクを哀れに思ってたか。

…違う。

“ 見る、俺がああ月と見間違えるほどの器だ”
どうして地雷亜のセリフを思い出したのか。

あの日、という言葉。てつきり月詠のことだと思っていた銀時だが。

なぜ、恐る恐るジャンヌ・ダルクに視線を向けたのか。

「……………おい」

そこに、ふらりと戻っていた地雷亜の前で、ジャンヌが水分を口から嘔いて倒れていたからだ。

瑞々しい音に反応して3人も気づく。

ちやぽん、ぱちやり。雨上がりの水たまりを踏むように、横たわるジャンヌの身体が痙攣して、下に溜まった赤いものと戯れる。

地雷亜は慈しむ瞳で彼女を眺めていた。後ろ姿は保護者のようで、あまりにも平穏な表情だから。ジークたちの理解が追いつくまでに数秒の時間を要した。

「本物は1人でいい。だからお前さんは用済みだ」

頬に付着した赤い液体が垂れる。

真昼の月を見下ろして、剥がれた本性が全面に浮かぶ。

細い、細い蜘蛛糸のように。

歪な師弟

『サーヴァント、アサシン。名を鳶田 段蔵』

江戸伝説のお庭番が召喚されたのは、特異点が発生して間もなくだった。

『ほう…空想上の？ふむ、宜しい。私には、貴方のような者を招く定めでもあるのでしよう』

マスターであるジル・ド・レエはこの時点で間違えた。彼を自害させることで原点を辿ることが出来たはずだ。

然し、暗殺、謀報、近接戦に長けたアサシン。これ程の逸材を引き当てるのは奇跡と言っている。その真名に疑問を抱きながらも、生い立ちは奇人を上回る者。ジルは病人であることを理由に段蔵をサーヴァントとして受け入れた。

『私はオルレアンに復讐する。我が願いと共に』

『願いと言いますと…』

少し経って、ジルは1つの願いを完成させる。

竜の魔女、ジャンヌ・ダルクを。

『これは…！』

『そう、聖杯から生み出した。無論、感情がある。自らを火刑にしたこの国に復讐する、我らの聖女の誕生です』

聖杯を取り込んで、宙空で肉体を形作っていく。バーサークを付与されている段蔵ですら、この意味が分かるほどの奇跡。いや、理解出来てしまった時点で全ては終わ^{ジル}った。

『ば、バカなッ!? 令呪があるはずッ』

ジルの胸を貫通する短刀。

背後からの一刺し、そして振り向く前にクナイで砕け散る霊格。

『いま、俺が遣えるべき相手を定めた。それだけさ』

ジャンヌ・ダルク。その有り様を見たら、彼が我慢できるはずがない。

バーサーク化により理性を剥がされ、狂気に揉まれながら浮上した側面。地雷亜の暴走により、オルレアンという特異点は早々に首魁が

入れ替わった。

『お前の魔術、俺が活用してやろう。なあに、俺も鬼じゃない。バーサークの借りを返すのさ』

ジルの霊格を掴み、完成間近のジャンヌ・ダルクに埋め込む。同時に、ジルの魔導を地雷亜は手にした。魔術は知らないが、ジルのソレは地雷亜の性質と相性が良いらしい。多少の無理をすれば半分程度は扱えるようになった。

『ジル・ド・レエの残滓^{むねん}を糧に、竜の魔女は導かれる』

間もなく、竜の魔女は生まれる。

復讐心から生まれた魔女。聖杯を心に秘めた英霊。そして、産みの親を自らの精神に宿した者として。

『そ、んな……わたし、声は……』

血を吐きながら、胸に刺さる剣を抜く。しかし、もう手遅れだ。霊気は砕かれてしまった。

ランサー、エリザベート・バートリーは己の未来を倒すこと叶わず退去していった。

『貴女の故郷を、なぜ壊すのですか』

聖人、ゲオルギウスは最期に問いたです。

血塗れの身体を抱えながら、魔女の答えに嘆いた。

『ああ、悲しいわ。貴女、自信がないのね。』

どうか後ろを見て。手を取ってくれる人を待って』

王妃、マリー・アントワネットは道を射した。

まだ戻れると信じた輝きは間もなく散る。

『嘘ではない……。しかし、自分自身の答えでもない』

焼け落ちた炎とともに、清姫は魔女を責める。

聖女を語る者の正体に気づけずに目を閉じて。

「ああ、知らないのねアナタ達は。人間の醜さを死の間際で見なかったんだ。権威は死ね、羨望は呪いよ。こんなものが蔓延る場所は全て燃やす」

魔女は与えられた餌と対峙する。

ただ殺すだけではない。会話をして見聞を深め、復讐と孤独で強くなれと己を高めてきた。

竜の魔女として生まれ、餌を食べてジャンヌ・ダルクとして畏れられる。生前の慈しみは消えたからと、オルタを名前に付け足した。

心はジル・ド・レエが導いた。

生きてほしい、その一心で竜の魔女を諭し、褒めて歪な大地に路を造った。地雷亜という存在を認識することなく、魔女だけに見えるジルはこうして完成した。

英霊を召喚し、餌場に誘導する。

『一……いや、三綺か……！』

竜殺し、ジークフリートの背中を裂いたクナイ。

彼女には、竜殺しを殺したのはジルであるように見えていた。その実、地雷亜がドドメを刺したと気づいたのはジークフリートのみ。

このとき、自分の実力を凌ぐ相手に、不意の一刺しがどれほどの威力になるかを知る。魔女は味わい、これを食す。残酷な味が自分の舌に合うことを深く理解する。

こうして勝機を生んだ。敗走の道を潰した。

特異点が完成を迎え、じきに地雷亜の目的も果たされる目前。竜の魔女は完封なきまでの敗北を喫した。

カルデア一行により、地盤は敢えなく崩れてしまった。

『チェックメイトだ』

地雷亜による一刺し。

転移の魔術が込められたクナイによってオルレアンに戻った魔女。そこで、歪な事実合致がいった。

地雷亜の人生が頭に流れ、彼の目的も読めた。だが理解が追いつかない。全てのこと怒りが噴き出して、寝て。マダオに連れ出されたあと、自室のベッドに寝転んで眩く。

「——そう。ジル、貴方はどこにも居ないのですね」
精神上的のジル・ド・レエはアヴェンジャーの成長を見届けて、幻想の向こうに消えていった。

これが全てではないオルレアンの前日譚。
原点と異なる復讐劇的一幕である。



焦げて変わり果てたヴオークルールの中心。

虫の息となった竜の魔女のもとへやってきたジャンヌ。耳が聞こえているかも怪しい容態だが、このまま逝かせてはきつと復讐劇は終わらない。顔を覗き込んで声を掛けると、薄く開かれた瞳と視線が合った。

「……………は」

笑った。いま、確実に、勝利を確信して笑った。

死に際の魔女に思わず慄いたとき、背中に異物が差し込まれていた。

「あ、あ、」

声が出ない。思考が回らない。

毒か、それとも技か。ただ手遅れなことは間違いない。

「地、ッ、らい、、亜……い」

どこかに倒れて、視界に映る男の名を呼ぶ。

どうして気づかなかったのか。

疑問は解決しない。何故なら、誰にも分からないほど隠蔽に長けた者。それが地雷亜であるからだ。

まだ終わっていない。

竜の魔女もきつと立ち上がれる。

分かっているのに、伝える手段は閉ざされてしまった。痙攣する意識のまま、これから起こる現実を傍観することしか出来ない事実。ジャンヌは震えた。

朱に染まる月明かり。

容易く行われた裏切りに銀時も動くことが出来ない。まだ辛うじて生きているジャンヌを見て、地雷亜の意図が読めないせいだった。

「お前、なにをしてるんだ!!!」

迷った刹那、背後から怒号とともにジークが飛び出していた。

頭に血が上った彼を止めようとして伸ばした手が空振る。アヴェンジャーの宝具に縛られたときと違い、身体強化を全力で使えるいまの速さは倍以上だ。

建物の損害は考えていない。ジャンヌを引き離すこと、一点に集中していた。早急に手当てをするため魔力放出が威力を倍増させる。そして剣を地雷亜に振り抜いて、横に一閃。

「があああー！ー！ーあ!!」

地雷亜の背後から突き出された剣によって、ジークは腹部を貫かれた。立て続けざま、引き抜きながら炎が傷口を焼き焦がす。

噴き出す血飛沫は一瞬で止まった。

傷口が炎で塞がった証拠だ。

「ジーク!!!」

瞬間に注ぎ込まれる痛覚で気絶する。乱雑に放り捨てて、刺した当人が笑った。

「さっきのお返しよ、竜殺し」

『ば、馬鹿な!?確かに霊格を砕いたのは確認した。』

なぜ竜の魔女が無傷で立っているんだ!?!』

「彼が貫いたのは俺の元マスターの霊格だ」

『なんて恐ろしいことを考えるんだ。それほど人類が憎いのか、殺してでも手にしたかったのか...』

「ジークさんにジャンヌさんが...」

「どうして竜の魔女の味方をするんですか！

ドン・レミで少女を助けたんでしよう!？」

「下ごしらえさ。餌を太らせて食^くろす。こればかりはどうしようもなかった。

「テメエ、ハナからこうする気だったのか」

「まさか。俺の予定なら3日後だった。オルタの成長がここまで早いとは、嬉しい誤算だったよ」

喉を鳴らして笑う地雷亜。

銀時は怒りで木刀を握る右手に力が入る。

「放任主義も大概にしろ。月詠から学んだことを忘れた、なんて言うつもりじゃねえだろうな」

「忘れやしないさ。ただな、バーサークというものは恐ろしい。このシステムを考えた者は異常者だ。俺のような外道に与えては……：そりゃあ、心もイカれる」

銀時は心のなかで舌打ちした。

地雷亜の生前を話しておけば違った結果になったかもしれないのに。

そんな後悔が一瞬過ぎつて、地雷亜の変貌ぶりに胸が痛くなる想いをする。

月詠に執着して、最期は本望のなかで眠った男だ。死後とはいえ、月詠との思い出を忘れたとは思えない。

バーサーク。バーサーカーとも。サーヴァントに付与される、理性を失う代わりにステータスを上げるクラススキルだと聞いている。

(生前のテメエを破つちまうほどなのかよ)

つまり彼は元から正常な思考はしていなかった。

元マスターの魔術によって、溶けていく自我を保っていたに過ぎない。あの顔の皮膚、メイクが剥がれているのもそのせいか。

「仕上げよ」

「しまっ——」

邪悪な笑みを掲げて剣を抜いたアヴェンジャー。

ラ・グロンドメント・デユ・ヘイン
「吠え立てよ、我が憤怒」

地獄は再来し、一方的な鎖が銀時たちを未来から突き放す。

「さあ、決着の刻よ！」

復活したアヴェンジャー。

彼女を裏で支えてきた地雷巫。

最悪最凶の師弟、ここに並ぶ。

オルレアン最終決戦、開始。

諦めない理由

竜の魔女、ジャンヌ・ダルク・オルタの宝具は魔力、そして憎悪を燃料にして燃え盛る。魔術師は魔術の行使で自爆。サーヴァントは魔力放出から宝具の解放に至るまで、多大な損傷を覚悟しなければならぬ。

「簡単なこった。自力で復讐師弟をぶっ飛ばす」

「そう簡単な話じゃあない。オルタの憎悪だけでも相当な熱さだ」

滴る汗で喉を鳴らし、地雷亜は笑う。

竜の魔女の宝具は人を選ばない。誰にも平等に毒を吐く本人のように、地雷亜もまた霊気をジワジワと焼かれている。

（顔を捨てたときに比べれば極楽だ）

そして地雷亜は彼女の異変に納得した。

宝具の威力が落ちていく。以前、魔術師を相手に解放したときは数分とせずに仕留められた。

（宝具の質が変化している。ふん、あの男の仕業か）

ジャンヌの精神を成長させながら敵に塩を贈るとは。上手いこと出し抜かれた）

もし彼の手が加えられていなければ、この場面は実現しなかっただろう。しかし、竜の魔女の在り方が変わらずに実現していれば…。

この先の思考を止める。

「ふん、せいぜい耐えることね。私を欺いたこと、許してはいけません。彼らを仕留めたら、次はアナタの番です」

「分かっている。罪を糧にするのが業に生きる者の定め。

復讐者に仕えるための義務なのさ」

霊気が歪んでいた。

バーサークに侵された地雷亜は作品完成のため。

泡沫から抜け出したアヴェンジャーは勝利のために。

顔を合わせてこなかった師弟の戦いが始まる。



マシユが立香を抱えて跳ぼうとしたとき、既に暗殺者の蜘蛛糸は張り巡らされていた。建物に張り付き、マシユと立香だけでなく倒れ伏したジャンヌを囲う。

「この宝具、ジャンヌさんが…」

「マシユ、来てる！」

立香の声に引き戻されて、ほぼ直感で盾を構えた。

蜘蛛糸をなぎ払い、地雷亜の蹴りを受け止める。盾を蹴った脚から力を抜き、その場で力の向きを斜め後ろに修正を入れて蹴り直した。

「ええ!？」

「マシユ！」

追撃の回し蹴りが腹部に直撃して、蜘蛛糸を絡めながら立香ごと退げられる。マシユの背中を支えるが勢いは止まらない。退がる距離だけ蜘蛛糸が2人の身体を裂く。

「先輩、大丈夫ですか!？」

「うん、これくらいなら…」

燃えていく真っ白な想い。

崩れる頬の皮膚を気にも止めず、地雷亜の蜘蛛糸は2人の世界を狭めていく。

「英霊の力はろくに使えない。オルタの宝具中なら身体能力の差でしか優劣はつかないのさ。お前さんたちに勝機があるかは明白だろうか？」

魔術礼装がなければ援護の1つも出来ないマスター。

戦闘経験、ステータスともに地雷亜とは天地の差が開いたデミ・サーヴァント。

地雷亜の言う通りだ。否定しない、だから。

(魔術礼装を使ったら、きつと熱いんだろうなあ)

他人事のように考えて、自分の恐怖心を押さえ込んで、躊躇を捨てたフリをする。

『む、無茶だ藤——』

「ジャンヌツ!!」

大股5歩先で動かないジャンヌへ手を向けて、魔術礼装カルデア・応急手当を発動した。

瞬間、応急手当の発動した感触とともに、身体の内側が熱に蹂躪される。

「ああああああツツツツツツ」

「先輩!!」

ジャンヌからの加護を受けながらも、意識の回線が焼けるを感じた。マシユの叫び声が無ければ、もう起きていられなかった。

血が流れる視界を振り払って、横たわるジャンヌに視線を向ける。

(…なんで、起きないん…だ)

「無駄だ。俺の糸は魔術を阻害する。カルデアとの通信を阻害したのも俺の糸だ、効果は分かるだろう?」

「そんな…」

(ジャンヌを半殺しにして…。こんなことのために、自分を信じた相手を利用したのか、この男は)

なけなしの手段を使わされた。

ジャンヌを生かした理由にも、自分が罠にかかったことも、腹が立つ。

「その目は…ちっ」

蜘蛛糸を食い破る銀時の瞳と立香の瞳は似ていた。

彼には地雷亜を傷つける筋力がない。それでも肌を感じ取った殺気に押されて、地雷亜はクナイを叩きつけた。

「順番が違うでしょう」

「それは捕食者次第だ」

クナイを盾で弾いたマシユ。

そのまま蹴り返して、2人は戦闘へと移った。

「ドクター…。ダ・ヴィンチちゃん…」

返事はない。

地雷亜に通信を再び切られたみたいだ。

銀さんもマシユも戦えているけど、この熱気のなかでどこまで耐えられるか分からない。

いや、時間が経つごとに敗北へ加速している。
なにか、出来ることは、ないのか。

熱い、頭が痛い……

援護……辛い……魔術礼装……熱い……

魔術礼装を使うだけで筋肉繊維が脊髄反射で折りたたまれるほどの熱だ。もう、立ち上がるのも息をするのも目を開けるのも現実を見るのも辛くて仕方ない。

だから、先ずは目を閉じた。

「心が折れたな。」

早く楽にしてやったほうがマスターのためじゃないか？」

忍びの音がする。わざとなのか、やけに耳に届く。怒りが湧かないといけないのに恐怖で押し流されるのが分かる。

次に、立ち上がることを諦めた。

「死なせません。私たちは所長と約束したんです」

マシユの声に引き留められる。

燃え盛る街。思えばここは冬木の町に似ている。炎上し、命が絶えたあの世界で俺は……

“もうこんな想いはごめんだ！”

一方的な約束をしたじゃないか……！

「くっ……そっ……」

起き上がるうとして、全身の筋肉が既に限界だと痛みで教えてくれる。もう立てない、ならばと目を見開いて現状を確認する。

「小娘、大事な者を守ることの重さを知っているつもりか？」

甘いな、軽すぎる。その背中じゃ小僧1人と背負えんぞ」

「か、あ……あー！」

防戦一方ながら耐えている。

素人目でもまだ保つ。

(……大丈夫、まだ戦える)

安堵も束の間、身体が動かなくても出来ることがあることを思い出した。この右手を見て、だけど。

ちよつと熱いのを我慢さえすれば、きつと上手くいく。あとは信じ

るしかない、この思いがジャンヌに届くことを。

「令呪を」

弱目に祟り目とはこのことか。

声を出すたびに喉が憎悪に焼かれる。勝利への執念がこちらの未来を妨害する。

…大丈夫だ、俺は死なない。

所長との約束を守りたいんだ…！

「自分の信念をやり通すんだ、ジャンヌ・ダルク」

令呪が煌めいたと同時に、右手から憎悪が身体に這いずり回る。奇跡を憎む炎が意識を殺しにきている。

「ヂッ……ッ負けるか……っ!!」

届け、願うしかない。

届け、祈るしかない。

もう一度、立ってくれ、ジャンヌ…！

「我が神はここにありて」
リュミノジテ・エテルネットル

紅蓮の炎を纏うように立ち上がる、年端もない少女の旗が憎悪を振り払う。地面に伏したまま、空が青く広がっていく光景を笑いながら見ていた。

「感謝を、藤丸 立香。」

「この命に代えても役目を果たすと誓います」

少年の想いを受け取って、救国の聖女はここに健在している。今度こそ安堵して暖かい空気を吸い込んだとき、立香の意識は途切れた。



「くっ………見えない」

赤い視界を縦横無尽に駆け回る地雷亜。

追っても追っても掴めない存在に、マシユは身体も心も振り回されていた。上下左右、いつでもそこにいて、気づけば消えている。盾で蜘蛛糸を切り落としても、次の瞬間には新しい巣が張られていた。

バーサーク化は理性を代償にして身体能力を向上させるもの。こ

これまでの技巧で攻められるのは余程身に染みたものでも難しいはず。
(別のものを代償にしているとしたか思えない……！)

謎は解けない、そんな余裕はない。

1秒経つごとに身体は地雷亜の体術で崩れていく。

「心が折れたな。」

早く楽にしてやったほうがマスターのためじゃないか？」

勝てる場所は1つもないかもしれない。

だけど、彼の発言は聞き捨てならなかった。

「死なせません。私たちは所長と約束したんです」

“もうこんな想いはごめんだ！”

先輩の叫ぶ姿が記憶に焼き付いている。

この先、負けそうになるたびに、あの叫びを思い出して立ち上がる
うと思えるから。

「だから、負けられない！」

焼ける空気でも動くために取り込まなければ死ぬ。こんな悔しい
想いをして、大人しく死んでいられるほど臆病じゃない。

諦めないと駆けた。もう立ち止まる時間は無くす。巢のなかに入
ってしまったのなら、全力で蜘蛛糸を巻き取るまで。

(マスターから離れず、さりとて蜘蛛糸を断ち切って空中戦を避ける
か。未熟だが聡い：生命線をしつかりと把握している)

立香に投げるクナイを落とし蜘蛛糸を断ち、自分への攻撃は引き
寄せて地雷亜を叩かんと生命を使う。

糸を張りながら超絶体術を繰り出す地雷亜。

立香を守りながら観察と攻撃を絶やさないマシユ。

生死を賭けた攻防はマシユが不利な状況で佳境に入ったとき。

「我が神はここにありて」
リュウミンノジテ・エテルネットル

マシユは勝利の兆しも同時に呼び寄せていた。

「オルタの宝具が消えた？」

ちっ、面倒なことをしてくれたな、立香！」

クナイを投げる直前、こういうときに妨害してくる相手が来ないこ
とに気づく。

地雷亜の意識が逸れた瞬間、全ての蜘蛛糸の中から、たった1本の当たりを掴んでいたマシユ。

「見つけました」

糸に滲む起死回生の結晶^{III}。

埃のように舞う無数の蜘蛛糸。

無作為なものを選び、地雷亜が足場になっているものを残した。

「俺の糸を見切ったと!?!」

間違いないと確信した。

理由は分からないけど、聖女の導きだと納得できる。

「うおおおおお!!」

地獄から現世へと昇る蜘蛛糸を引き寄せて、宿主の身体が宙空へと放り出された。もう阻むものも、踏み台も見当たらない。盾を振りかぶり、一直線に地雷亜へ跳ぶ。

体勢が整わない蜘蛛の身体目掛けて、渾身の一撃を叩きつけた。

「——え」

宙空で2度飛び跳ねて、地雷亜はマシユの攻撃を難なく躲して背後を取る。

「俺だけに見える糸があるんだよ」

背後から届く声に背筋が凍る。

盾を引き戻す時間はない。首だけを振り向かせて、迫るクナイを見届けた。

「地雷亜、アナタは決して許されないことをしました」

地面から突き上がる旗が地雷亜の腹を貫いて、マシユに向けたクナイが力なく落ちていく。

「誰かの信頼を弄ぶのは最低です。反省しなさい」

「ぐっ……。ああ、ここでも俺の弱さか出たか…」

地面に身体を打ちつける地雷亜。

マシユの身体を抱き寄せたジャンヌは着地すると、もう動く気配のない地雷亜を確認してからマシユを立たせた。

「大丈夫ですか、マシユ」

「あ、ありがとうございます…。そうでした、先輩が!」

「彼なら大丈夫。いまは眠っているだけです。
さあ、決着をつけに行きましょう」

暖かく示す未来

憎悪の風が銀時の身を焦がしていく。

ただ近づくだけで命の末端から炭になり、生き物としての限界は刻一刻と擦り減っている。

「どーした、テメーの思春期はそんなもんか？」

「消し炭にしてやる……！」

塵芥に変わる景色のなかを、銀時はそれでも身体機能を落とすことなく駆け回る。限界がどうかで語れる域ではない。感情を燃やす炎の最中なら、この身に委ねて戦うほうが幾分か動けるだけのこと。

空からは憎悪の炎を纏う剣が銀時目掛けて降り注ぐ。

毛先を、皮一枚を割いて終わり。芯は捉えられず、木刀の一振りですべて包囲網は四散する。

「…なに、その棒つきれ。」

やけに固いじゃない。きもいつつの…！」

炎に侵されず、アヴェンジャーの剣が割れる始末。

原理は不明だが、木刀と剣を交わすごとに男の強さを叩き込まれた。数で押している…いや、数でカバーしなければ接近戦は成立しない。

（いつ死ぬの。とつくに神経が焼きただれている頃よ。本当に人間なの？）

死に近づきながら、銀時の猛攻は苛烈を極めていく。

体力を削り、心肺機能を落として、環境を傾けた。

「男つてのは何時でも何処でも踏ん張る生き物なんだよ。ちよつと髪が天パになるくらい、もう慣れっこさ」

「~~~~~っっ！」

なおも侍は折れず。

アヴェンジャーの振り下ろした剣を払い、木刀を斬り返した。

経験が足りない。それどころの問題ではなかった。

アヴェンジャーには逆境から立ち上がる数が少なすぎたのだ。国を恨み、神に吼えて、憎しみ以外の感情に突き動かされる。この全て

を目の前の男は既に経験していた。

「燃え尽きろ」

それが悔しくて、怒りで踏み留まる。

次は木刀ではなく右腕を掴み、ありつたけの憤怒を放出する。

「その炎じゃ俺たちは燃えねえ。燃え尽きてやらねえ」

「うそ…」

銀時はアヴェンジャーの炎を一身に纏って、なおも身体が燃えることはなかった。それどころか笑う姿に掴んだ腕を咄嗟に離していた。

「理不尽な世界も、誰かの復讐も、どこかで誰かが止めなきや引き返せなくなる」

ただの呼吸で肺が崩れそうになる。

とうに限界を迎えた身体で、最後の一振りを構えた。

「ここで立ち止まって自分のしてきたことの意味、しっかりと考えやがれ」

異質な執念を見せる銀時を見て、心の奥底から掠れた悲鳴を上げるアヴェンジャー。剣を振り上げて、ありつたけの憎悪剣を放つ。

避けることは銀時には出来ない。木刀を振ることで限界に到達する身体は、

「——いけ、銀時」

怨嗟のなかで放出されるジークの魔力群によって、五体満足でいられた。

自分の剣が壊れて、銀時の木刀が燃えもしない。馬鹿げた現実に目を奪われたまま。

「師匠に言つとけ。」

積み荷の背負い方が下手くそだってな」

青い空を仰ぎながら、完敗した現実をゆっくりと受け止めた。

ジャンヌ・ダルク・オルタはフランスに召喚されてから数々の悪虐を行った。ジル・ド・レエと話し合い、現存する彼を討ち、シャルル7世を火刑にして、生前の生まれ故郷を焼き払った。

後悔はない、そんな心はないから。ただ、ジルが幻覚だと知らずに生きてきたことには怒りよりも悲しみが勝ったかもしれない。全部、ジルではなく地雷亜の仕組んだことなのだから。

「ねえ、アンタは私を憎んでいるでしょう」

だからせめて、本物の顔から同じ感情を見届けたくて、性懲りも無く近づいた聖女に聞いた。

「……………はい、貴女を許しません」

強く言い切ったジャンヌ。

そのご尊顔を見て、アヴェンジャラーの期待は裏切られる。

「だから、貴女を許せるのは私たちだけです。

アヴェンジャラー、貴女に贖罪の心が少しでもあるのなら。どうか、カルデアの旅に助力してください。いつの日か、心の準備が整ったとき」

「……………約束のつもり？呼符なんてビリビリに破くし灰にしてやるわ」

「何度でも、新しいものを持ってきます。気に入らないなら破れたものを継ぎ直します。同じ真名を持つ者として、貴女だけにこの罪は背負わせません」

優しく微笑む姿が憎くて、最後に自嘲する。

「結局、1人も殺せてないじゃない」

「いつか、殺さなくて良かったと言える日が来ます。今日はそれを見つけた記念日ですね」

「……………バカよ、イカれてるわ、お前たち」

「はい。だから私もまたここに来たんです」

最後まで暖かい視線を曇らせることは出来ず。

根を上げたアヴェンジャラーはため息を吐いて敗北を認めた。

時を同じくして、銀時は無理の効かない身体を引きずって倒れ伏す男のもとにきた。

「おい、起きてんだろ。最後に面倒見てきたアヴェンジャーに挨拶しねえのか」

「…役目は果たした。誰かに絆ほどされた笑顔なぞ、いまの俺には眩すぎる」

「そこは相変わらず面倒なんだな」

「手塩にかけるには時間が足りなかった。だがな銀時、そして立香。お前たちと触れ合わせて良かった。アヴェンジャーは強くなった、見惚れる月と対を成すように」

ひとつ息を吐く忍びの瞳には正気が戻っている。

霊気が砕けて、バーサークが先に霧散したのだ。

身体を反転させて、地雷亜は最後にこう言い遺す。

「『巢』にかかるものはなかった。

天に昇りきる前に水面の月を捕食しようとした、愚かな蜘蛛の末路さ」

フランスの聖杯戦争をたった一人で壊滅させた男は、アヴェンジャーの生きるさまを見届け退去していった。

邪竜百年戦争 オルレアン

―救国の聖処女―

定礎復元



こうして、息つく暇もない1つ目の特異点定礎は果たされた。

「急げ！藤丸君を医務室に運ぶんだ！」

「私も手伝います！」

「マシユには休んでほしい…ああ分かった、手伝ってほしいから小動物のような目を止めるんだ！罪悪感がすごい！」

カルデアに戻ってきた銀時は騒がしさに目を擦り、直ぐに状況を理

解した。

「おい、立香のやつは大丈夫そうか？」

「ああ、お帰り銀時君。心配ないよ。ちよつとばかり無理しちゃつて
るけど、命に別状はない」

そのわりには慌てていたロマニからの返答だが、運ばれていく立香
を見て本当に無事だと分かり安堵する。

「銀時君こそ火傷は大丈夫？それに、サーヴァントと真つ向勝負した
んだけど。君、人間だよな？」

「つたりめーよ。世界滅んでもジャンプ読みたさに世界救うのが俺ら
ジャンプ愛好家だからね」

「あーっ！そーやって強さの秘訣を隠す気だなあ！この天才を前にし
てその抵抗は無意味だぞー！」

「ちよ、無理に出ているのこれ？なんか身体ビチャビチャなんだけど
!？」

「大丈夫大丈夫。だあーいじょうぶだからー！」

背後からひよつこり現れたダ・ヴィンチ。

コフィンから銀時を引っ張り出すと、そのまま外まで引っ張り出し
て行った。

「なんちゃって。まあ聞きたいことが事なんでね、私の工房に来ても
らうよ」

「おいおい、帰ってきてきて早々に？疲れたからロマンのケーキ食って寝
たいんだけど」

「それこそ大丈夫、あいつの秘蔵はあとで全部吐き出させておくから
とんだ飛び火を食らうロマン。」

雑談をしながら歩くこと数分、工房とやりに案内された銀時は手頃
な椅子に腰掛ける。

中央の作業机に腰掛けたダ・ヴィンチはタブレットを手に取る。

「今じゃなきやダメ…というより、その方が有難い。まあ私の都合に
合わせてもらってるんだけど、早速質問だよ。」

地雷亜というサーヴァント。彼の名前は歴史に残っていない。真
名はなんだい？」

「鳶田 段蔵。最強の元御庭番だとか言われてた」

「ふうむ。うん、そんな真名の人物もない」

ささっとタブレットに打ち込んで1秒、画面にはどの偉人も照合しなかった。

「バーサーク・ランサーを圧倒し、アヴェンジャーの宝具のなかで打ち勝った。魔術を行使せず、かといって代行者でもない。」

君の経歴は真っ白なんだよ、前所長のプロファイリングだね。

レイシフト適正者No. 47、坂田 銀時。

君、どこの世界の出身だい？」

ダ・ヴィンチの質問に銀時はから笑いで答えた。

永続狂気帝国セプテム―民の先導者―
台風対策よりも特異点修復

瓦礫と焼却の世界を歩き回って、生存者がいないことに1人の男性が喉を噛み殺してため息を吐いていた。

なんて声を掛ければいいのか分からない。初めての体験に自分が整理をつけられていないんだ。

十六年生きてきて、昨日まで人々の活気に溢れていたはずの無人街を散策することはなかった。

……いいや、あつて良いはずがない。今なら悲劇の主人公として名乗りを挙げてでも許されるだろう。だって、否定してくれる人がここには居ない。残された人間達は、資格ある人間に主人公になれとは言わない。

彼らの出す選択肢は2つ。人類史を背負うか、不明瞭な戦いを課されるか。

“なんて、真剣に言われても困りますよ”

いつか問われたとき、ドクター・ロマニにそう返事した。後ろではマシユが見守るなか、背筋を伸ばして胸を張る。

特異点Fから戻ってきて、人生の岐路に立っていることを自覚したとき。最初に思い浮かんだのはオルガマリー所長の背中だった。

“所長の背中について行きたいと思っっているの”

“……ありがとう、本当にありがとう”

微力でもいいから意志を継ぎたかった。

「――あ、ゆめか」

約1ヶ月ぶりの特異点修復の朝。

あれから、所長の夢を見ることは少なくなった。けど、やっぱり特異点修復の前夜だけは必ず夢に見る。

ここまで来たら恒例行事と言っても差し支えない。守れなかった悔しさを思い出して、次に自分の背中を押してくれた想いに励まされ

るんだ。

いつまでも見守ってくれている実感が湧いて、絶対に負けてたまるかって気持ちのまま特異点修復に臨める。

「よし、やるぞ」

藤丸 立香は負けられない。

また一つ、大切なものを背負う旅を始めよう。



世界でも稀有な環境下にある職場、カルデア。

世界が燃えようと生き残る職場の食堂、ど真ん中で。ロマニ・アーキマン……愛称ロマニは職員の健康に配慮した太陽光灯を仰いで涙を流していた。

「日本の和菓子には無限の可能性がある。昔立ち寄ったとき、大福を食べながらそう思ったよ」

ロマニの反対側に座り、両手を世話しなく動かしているのは坂田銀時。突然始まったロマニの和風語りに耳を傾けて、その想いを聞き届けようと真剣な眼差しを向けていた。

「餡子を包む白い皮、アレはお米を潰して薄く広げたものと知ったときの感動はいまも覚えている。日本の主食をまさか甘味に合わせるなんて……どうやったらその発想に至るのか、開発した御仁が英霊として召喚されたら詳しく話を聞きたいくらいに僕は胸に刻み込まれたんだ。大福の素晴らしさを」

そう涙を流してひと口。

箸を動かして、手元の丼から大福のように色めいたソレを口いっぱい頬張る。

「銀時君、これはダメだよ………」

「——いいんだ、しっかりと味わえ」

丼を持つロマニの手が震える。

銀時はその様子を満足そうに見たあと、優しく歓迎の言葉を贈った。

「白米に餡子乗せなんて美味しいに決まっているじゃないか!!これは冒涇だよ、大福の開発者への!!」

この味、この手頃さ、そしてコスパの良さ!僕は歴史の分岐点に立っているんだね!」

「お前なら分かってくれると信じてたぜ?元から素質があるとは思ってたが、まさか俺についてくれるとは……………」

あれ、もしかして俺、特異点になってる?」

「うん、間違いないよ。特異点発生を解明する偉大な発見をしているかもしれない!!」

両者の手元、丼に盛られる具材はたった2つ。

ほくほく白米と缶詰のなかの小豆。

聖杯の泥に食わせるくらいの用途しかない食事、宇治銀時井同盟に1人の猛者が加入した。

「こんな特異点なら生まれて良いよね!!」

「おりゃあー!」

ダ・ヴィンチの微小特異点修復パンチが2人の頬に炸裂。

こうして、人理焼却は解決しましたとき。

めでたし、めでたし。

「なにも終わってないよ!」

「そうとも。おっさん2人の殺人甘味開発を止めただけさ。監視室の特異点メーカー(適当)が振り切れたときは何事かと思ったよ」

「レオナルド……!いくらキミでも、この宇治銀時井を封印指定させるわけにはいかない!」

「するわけないだろ、こんなもの」

「なんだとてめえ!」

する価値もないってか?ふざけんなコラ!」

「めんどくさっ!怒り方が酔っ払いのそれだよ!」

宇治銀時井を片手に抗議する2人の真横。

箸を動かしていたジークの顔が真っ青になる。手元には宇治銀時

井。どうやら律儀にも2人に付き合ったらしい。

「うぷっ……。まさか血を飲み込むより……きつい味がこの世にはあるのだな。いい体験をした……………」

……………今日はこの髑髏烏帽子を倒せば良いのか？」

「違うよジーク。台風対策をするんだ」

「それも違います、先輩。」

次の特異点を修復しに行くんです」

意識が飛びかけているジークをこちらに引き戻しながら、その原因である宇治銀時井に目を向ける。

……………やっぱりこれは無理。食べ物に見えない。

銀さんが食事当番のときに出てきた日、カルデア職員の半数が倒れた伝説の食べ物。ロマンは治療に専念していたから食べられなかったらしいけど、まさか適合できるとは思わなかったよ。

場所を移って管制室。

「さて、今回の特異点の概要もスルーするよ。モタモタしていると読者離れに繋がるからね」

「別にいいだろ、そんなくらい。こちとら台風が休日出勤してるせいで危うくこつちも仕事するところだったんだ。」

誤魔化すの大変だったんだぞ。千利休が来るから忙しいってことで誤魔化せたけどさ」

「現実の話も原作の話もいまは置いておこう。」

私が再周知しておくことは1つ。銀時君のいた世界についてだ」
ダ・ヴィンチが端末を起動する。

するとホログラムが宙空に映し出される。

それは簡単な見解図だ。俺たちの世界、銀さんの世界を別軸に置いたものになる。

というのも、銀さんが別世界の人間だと知ったのはオルレアンを定礎して少しあとのこと。

地雷亜という忍びはこちらには存在しない。だけど銀さんは知っていたことで、ダ・ヴィンチが個人的に事情聴取をしたとのこと。銀さんの過ごしてきた世界を聞いたとき、流星に全部は信じられなかった。

あまりにも情報量が膨大で、まだ全部は聞き出せていないというし…。

ま、俺はちよつと無茶をしたから2日寝てただけだね。

「宇宙人…いや、天人が来訪した世界。我々の知る江戸とは似ても似つかない人物。銀時君の世界を“パラレルワールド”と呼ぶべきか、はたまた“空想世界”に分類するかは未定だ。

現状では“人理焼却”が起こったゆえの“空想交錯”と私は予想している」

「レオナルド、その話は長すぎるから後にしてくれ」

「はいはい、分かったよ。ちよつと先だししたかったんだ、伏線つてやつき。

…銀時君から聞けた情報はざつと3割つてところだ。

特異点で君の知り合いに会ったときは判断を任せる」

「危険人物たちは既にリスト化しているのを読んでもらったね。ある程度は敵味方の判断に使えるけど、オルレアンでのマルタのように聖女が敵になるケースもある。

皆んな、十分に注意してくれ」

2人の言葉に全員で頷いた。

そして、説明も終わり俺たちはレイシフトを決行した。

…

レイシフトが成功したことを確認して、ダ・ヴィンチは独り呟く。

「坂田 銀時。

なぜマスター適性No. 47に登録されている」

異邦の侍へ投げた問い。

本人には決して聞かない嫌疑。

触れて開けてしまったとき、なにが起こるか分からない。割れ物を羽毛で隠すように、聞こえない刻に本人の顔を見ながら問う。

「前所長が招いたのか、それとも割り込み？」

もしくは——運命。……なくんて、ね」

スリルに浸る声はロマニにも聞こえはしなかった。



くとある男の独白

ああ、あそこにも戦禍は刻まれていた。

未解決のまま次に来た。きっと、答えても正否には至らない。外堀ばかりを埋めても、肝心の居城は空の上だ。

冬木の状況とはまるで違う。■■の余力を削るための準備を整えていた。

1つの肯定を。残りは否定を携えて駆け回っていた。それでも、結末を焼き尽くすには質が足りない。

「なあ■■、死ぬ覚悟は出来たか」

焼け爛れた口調で否定する。

積み重なった禍根をなにも解決^はさせていない。いま身体を休めろと言うのは、永遠を一瞬に変えろと神に縋る行い。

俺は、あの丘で**を——。

「……………なんだっけ」

思考が途切れる。

何か、大切なことを思い返していた気がする。

記録に残らないものだ、忘れたのなら唸つても仕方がない。思い出したときにまた考えればいいから。

欠壊した帝国

永続狂気帝国。

この特異点において敵地の中心部にあるセプテムはいま。

「フォトン・レイ
軍神の剣」

空を疾る3色の流星、破壊の大王の進撃によって壊滅の危機に瀕していた。

「これは予想外だ——！」

空から地上へ。国内を風で切り払うように彼の宝具が唸る。一瞬の出来事は大地を砕く神の怒りの如く、天災はセイバー、カエサルを諸共消し飛ばした。

「無駄だ。どれだけ足掻こうと全て破壊する」

「……………」

月面のように荒れた帝国を見渡して、今しがた致命傷を手当てしたサーヴァントが破壊神の前に現れる。

その真名はロムルス・クイリヌス。セプテムの最強のサーヴァントは風前の灯となった靈気を引きずり、この特異点の過ちを正すために己が宝具を——

「お待ちなさい」

解放する直前、両者の刃が静止する。

足下の小石が自転するような不可思議さに首を傾げる。

破壊神と建国王の戦いに介入するには見栄えがなさすぎる、中背の老サーヴァント。彼は戦闘において間違いなく最下位争いをする、実に敗北し甲斐のある異物だ。

「お前は、なんだ」

魔力放出の一撃で消える靈気、この場の静寂を保てるのもあと数秒。

破壊神が言葉を投げたのはただの気まぐれだ。

次に発する言葉で判断が決まる。不可思議が他人事になるか、耳を傾ける価値を見出すかを。

「破壊とは刹那的なものだけにあらず」

「なんだ、意味が分からない」

「破壊とはなんだ。」

世界を更地にするとか。それとも、自分の行い全てか
問いに対する返答は剣を握ること。

即ち、老人の価値はなし。

高々と掲げた軍神の剣は容易く振り下ろされる。

「——満たされたくはないか、アツティラ」

「……………」

豪速の剣を、老人はたったの一声で止めた。
交差する視線。

1秒後、破壊神は結論を改めた。

「良いだろう。場を整えておけ」

「無論だ。…………そちらは外だが？」

「破壊は止められない。これは私の性^{さが}だ。

露払い程度でいまは済ましてやろう」

踵を返した破壊神は次の目標を見定めた。

既に老人の破壊は後回しになった。

利害の一致が真であるか確認するまで、落ちかけた帝国は彼女の眼
中から消える。

「ふむ。おおかた、外をうろつくローマの敵将を狩り尽くすつもりだ
ろう」

「…………あの剣を御するというのか、定々よ」

定々という、現実世界には存在しない英霊へ。

破壊の跡地、悠然と佇む老人に建国王は問う。

「いいえ。私はひと時だけの時間を稼いだに過ぎません。ロムルス王
もご存知でしょう、彼女とローマの関係を」

「……………………アツティラ・ザ・フン」

アツティラの歴史を振り返る。調べる。

「なぜお前はあの剣を止められた？」

「簡単な話です。私は連合帝国の宰相。元より幕府の裏方で頭を捻っ
ておりましたゆえ、他者の感情を宥めるのが得手なのです」

朗らかに、臆面に語る言葉を嘘だとロムルスは理解していた。

「……………赦す。ローマを手に入れるのだ、定々」

「お任せください」

然し、靈氣に刻まれる狂気がそれを見逃す。

本来ならば即座に処断する場面だ。己が槍が1ミリも動かないほど壊れた想いを再認識して、途方に暮れる姿を押し殺して玉座へと戻る。

「……………^{皇帝}ローマよ、早く来るのだ」

帝国連合の宰相、徳川 定々。

繁栄を促し城を護る。

彼ほどに帝国連合の意向を理解した宰相はいない。

そういう思考に侵されているだけだ。

歴史に名を残す皇帝は9割が退去した。

半分以上はアツティラとの戦闘によるもの。

破壊神を召喚した者は誰か。

「……………否。それは道理ではない」

ロムルスは自らの愚痴を断じる。

玉座に座るだけの王になが見えよう、と。

もう消える身体の首丈を掴み、空に消えゆく愚かな魂の結末を先送るように口を閉じた。



煙る帝国の間を歩きながら、定々は散々たる様相を懐かしそうに見て回っていた。

壁面に張り付いた血液、地面に残る剣戟の痕。

ここは江戸とは違う異国なれど、戦禍を辿れば2つの国に違いなどまるでない。己の欲望のまま、手にした力を振り回す獣たちの群れがいる。

「首を狙う族も、美しい貌まで同じとはな」

「ハ……………あ。き、さま……………皇帝じゃないな」

破壊の痕から這いずり出てきたサーヴァント。

白い装束は泥水と血液で着色され、使い古された雑巾のようにくたびれている。

彼女の真名は荊軻。

始皇帝暗殺を果たせず、その不死性を奪ったのちに死した者。連合帝国セプテムと敵対するローマ帝国の客将、アサシンのサーヴァントだ。

つい数刻前まで、セプテムの勢力を削るために遠征していたとき、破壊神の徒歩圏内に踏み入ったことで全ては終わってしまった。退くよりも早く軍神の剣が隊列をなぎ払い、圧倒的な火力を前にして。同行している別部隊の呂布、スパルタクスが足止めに入り、荊軻に最後の暗殺を託して退去した。

「どうだった、アツティラの剣は。太陽よりも神々しく、月よりも艶やかだったろう？」

託された使命を握ったとき、その身は満身創痍だった。

ローマに帰還できる者は1人いるか分からない。散らばった斥候たちの身を案じるまま、最後の魔力を振り絞り、暗殺も叶わない暗殺者は、真つ向から暗殺を仕掛けた。

「ヒ首す——」

距離十歩。

血切る想いを身体に乗せて進む。

生前、幾多もの障害に阻まれた暗殺を脳裏に過らせる。あの時といま、同じ距離でも致命傷だけを抱えた方が成功率は遥かに高い。

何故かと問われれば、サーヴァントだからと答えよう。この身が歴史を震え上がらせた証明だ。独りの苦痛など軽く洗い流してくれる。

距離二歩。

それは現れた。

赤眼と交差する。

あとは早業の独壇場。

疾る刃が暗殺者を断つ。

「……!?」

再び、目の前の首を獲ること叶わず。

ヒ首あいくちの殺意だけならば届いたものの、ついに果てた靈気が先に沈黙した。

「ご苦労だったな、斉藤。」

これでローマ軍の暗殺者は全て殺した。

ロムルス王も安心して治療に専念できるだろう」

「劳いの言葉に無言を貫く。」

荊軻の暗殺を阻止したアサシンは刃を仕舞う。彼の様子を見ながら、定々はまた歩き始めた。

徳川幕府第十三代征夷大將軍、徳川 定々。

空想の物語の悪党が特異点に乱入した。

本来立つべき宮廷魔術師の後釜として。

「だが……」 狂気を失った「連合帝国では長く保たない。第5代ローマ皇帝を使うことになるだろう」

「」

「分かっている。掛け違えた過去は清算しよう。」

「例え、ソラに刃を向けようとも……な」

ゆえに、変貌の影が落ちてくる。

破壊と陰謀が混ざり、正規を逸した。

▼
永続狂気帝国セプテム
薔薇の皇帝

▼
牢城災建帝国セプテム

― 民の先導者 ―

徐々に…原点からのズレが浮かび上がる。
レフ・ライノールの離脱より、愛を込めて。

ローマ真剣勝負

街道から城に至るまで石造りに拘った文化、ローマ帝国。

『西暦333年から1000年続いた、西洋史でも長い歴史のある国だ。』

くう：僕も“永遠の都　ローマ”を生で見たかったなあ』

立香たちがレイシフトした場所はローマ帝国からやや離れた丘の下。

空を見上げれば目では捉えきれないほど大きな円環がある。もう疑いようがないほど、人理焼却に関係する存在なのだろう。オルレアンと同じものということは直ぐに判明したが、内容については引き続き調査をすることのこと。

「俺たちは遊びに来たんじゃねーよ。」

人理を元に戻してさっさとファミレスに行きたいんだ。

分かったならこの時代の甘味処にさっさと案内しやがれ」

『今から行くつもりだね、テルモポリウム大衆食堂に。僕も興味あるし、お土産を弾んでくれるなら見逃そう』

『戦禍という戦禍がないし、案外とローマ帝国は落ち着いているかもしれない。』

着いたら聞き取りがてら寄るといいさ』

円環以外では異常を感知しないとのこと、ロマンたちと通信がてら呑気にローマへ向けて一行は歩いていった。

「食事ではありませんが：時間があつたらパラティーノの丘を登ってみたいですね。“7つの丘”を見渡せる、軍事と商業に恵まれた景色は是非見ておきたいです」

『あつ、生で見るなら“フォロ・ロマーノ”だよ！』

ローマ建国後にローマの中心として栄えた場所さ！』

『おおお！確かに西暦60年ならローマのシンボルとしてしつかり遺っているだろうね！ナイスだロマニ、私たちがローマの全てを独占しよう！』

「ちよ、顔が悪い！ローマ侵略する側の考えだよ!？」

マシユやロマニがローマについて語り合つて程なく。

1キロメートルの距離をあつという間に歩いた一行。地平の彼方まで続きそうな平原を歩くひと時は、ローマ帝国が丘の向こうに見えるたことで終わりを迎えた。

「えっ!?壁が穴だらけだ!？」

…いや、笑い声が一変したのはそんな理由ではない。

領土を主張し、外敵から民草を守る石の壁はだらしなく内側を覗かせている。一見すれば敗北間近、もしくはそれ以上の痕跡が壁面に描かれていた。

トラクターでも突つ切らないとあの大きさの穴は開かないぞ!？」

「隕石でも降つたみてえな痕だな。防空壕ネロの異名は伊達じゃねえつてことか」

『暴君ネロ、ね。けど、本当に空襲でもあったような町の崩壊っぷりだ。中心部は大丈夫そうなところを見るに、まだ攻め落とされたわけじゃなさそうだけど…』

『壁の向こうから人々が行き交う気配を感知した。町は健在のようだね。いまは戦闘行為も確認されない……………これはっ!くくく!……………』

ダ・ヴィンチちゃんの声がなにかに気づいたかと思えば、通信が鋭利な刃物で断たれたように途切れる。緊張感を後押しするような状況になった。

「なんだ、また通信切れたのか?」

「いまの切断は第三者の意図的なものを感じます」

カルデアに通信を飛ばしても応答はない。

周りを見ても目ぼしいものは……………

「止まれ、その一団!」

いた。飛んできた怒号によって彼らを見つける。

赤い盾と無骨な剣。荒々しい防具はフランス兵よりも軽装…というよりも短パンのようで、走ることに注視したものと思う。盾と剣、そして筋骨を魅せる姿を見れば、ローマ兵というイメージがびったり

と重なった。

「タイムリングとしては合いすぎているな」

「うん。それにすごい警戒されてるね」

十数人が既に剣を抜いてこちらを囲み始めている。

「その服装、この時代のものではないな！貴様らはサーヴァントか？」

「いやまあ、半分くらい？」

「銀さん、返事が適當すぎる」

もっと突くべきことがあるよね。

彼らはサーヴァントのことを知っている。少なくとも、ローマの地にも厄介なサーヴァントがいるんだ。

「やはりか。というより、身の丈を凌ぐ盾を普通の少女が軽々と持てるわけがない！」

「ちよ、ちよつと待ってください！私たちに敵対の意思はありません。いまのローマ帝国についてお話しを聞けないかと……」

誤解を解こうとマシユが両手を上げる。真似て俺たちも両手を上げるが、ローマ帝国の人たちには全く通じない。これがジエネレーシヨンギャップだろうか……？

横では銀さんとジークが既に武器を掴もうとしている。

会話が出来ないのなら、こつちも抵抗するぞ……。

「ならば丁度いい。僕が相談に乗ろう」

話が並行を進むなか、唸い声音が迫る足を止める。

荒唐な集団が隙間を開けて、1人の男性が歩いてきた。

(この人、どこにいたんだ)

アイボリー色の短髪、メガネを掛けた男性。

服装は黒を基調として、前を走る黄色の線が目立つ。この特徴、銀さんの話のなかにあった組織の制服と似ている。

「お前は……伊東？」

「こいつらが敵かどうか、僕の剣で見定める。

ローマ真選組よ、ここの委細を見届けるのだ」

「承知しました、セイバー殿!!!」

そう、真名は。

「伊東 鴨太郎……だったか」

「うん。治安維持組織、真選組の人だ」

ジークの言葉に頷く。

同時に空気が1つ重みを増した。

彼の話の思い出す。真選組を乗っ取るため、局長たちの暗殺を画策した人物だ。最期は更生したって聞いているけど、地雷亜の例がある。

「1対1の真剣試合を申し込む。

その侍か、赤目の剣士。盾の少女でも構わない。

敵ならば斬る。無論、弱くとも情けはかけん」

伊東の提案、どういふつもりか分からない。

真剣勝負に見せた不意打ちを考えてしまう。

「カルデアとの通信を遮断したのは貴方ですね。こちらに真剣勝負を挑むのに、用意周到すぎませんか」

「はっ、なに考えてるか探ろうってか？

こつちこそお前がなんのつもりか見てやんよ」

警戒心を尖らせる。

彼のことを知っている銀さんが応じるなら心強い。

「待ってください、銀時」

木刀を抜く肩に手を置いて、マシユが力強く前に出る。

「マシユ・キリエライトが受けて立ちます！」

「マ、マシユ!？」

「おい、大丈夫なのか。あいつ、腕は確かだぞ」

「理由は分かりません。だけど、人選から既に見られている気がして。私が行くべきだと思っただけです」

それは直感に従って動いたということ。

根拠のない自信なら止めるべきだ。

真剣勝負と言った以上、マスターでも手は出せない。退かせるなら……ここが最後だ。

息を吸い込む。返事1つで未来が大きく変わる自覚がある。だから、いまの俺に出来ること。

「マシユ、頼んだ」

「はい！先輩、任せてくださいー！」

そんなもの、マシユの決意に即答することだけだ。

本当は怖いけど……マシユが進む限り未来は途絶えない。負けるつもりが毛頭ないんだ、言った以上は信じるのみ。

「宜しくお願いします」

マシユは気を落ち着かせるためにお辞儀する。

立香たちは見ているのに、自分一人で現地のサーヴァントに立ち向かうことは初めての経験だ。

ここに魔術的な制約はなくとも、言葉で交わした真剣勝負を破ることは叶わない。きつと、真名のある大盾を穢してしまうから。

「礼儀は満点だ」

向かい、対峙する2人。

マシユの礼に伊東が静かに返し終えて――。

「はぁー！！？」

大砲に着火した瞬間の勢いの如く、マシユは遠慮なく先制を取りに行く。

自信満々に踏み込んだのは銀時との稽古を重ねているからだ。侍との実践を想定し、マシユとジークは銀時と数十回もの戦闘を繰り返している。

対峙における経験値が最も高いと言えた。

「武とは礼にあり。組織は肩にある」

振り下ろす大盾を伊東は暖簾をくぐるように躲す。

空振りした大盾の隅っこで、マシユは伊東の動きを捉えていた。

「武を力で示す者は三流だ。

相手に一瞬先を視せてこそ、強者ツワモノという」

耳に届いた教えをなぞるように、居合いの構えを終える。マシユにはいま、くつきりとイメージが見えていた。自らの首に触れる刀の切っ先を。防ぐには、力任せに大盾を戻しては間に合わない。

「――っ！」

そして、洗礼の一太刀は閃く。

8の字を描くように戻した大盾へと。

「すごい、防いだ!!」

紙一重で大盾が間に合った。然し、マシユの体勢は後ろに逸れてしまっている。これでは踏ん張りが利かない。

マシユは押し返せないことを理解した。不利な体勢ならば、利用すればいい。このまま後ろに流して反撃するんだと思った矢先。

「盾を守るうちは組織を担っているとは言えん。

支え合いとは肩を並べることだ。当たり前のことを見逃してはいけない」

「それは、この英霊の——あわっ!？」

伊東の剣が盾を引っかけて、真横へと振り抜いた。流そうとする力を逆手に取られたのだ。

「分からなくてもいいが…先ずは席に座れ。

いつかどこかで、その力を発揮できる」

マシユが身体を起こしたとき、伊東は既に背後で剣を鞘に納めていた。その音で漸くマシユが目標の位置を知ったけど、どう見ても間に合わない…!

(居合い斬りだ。まずい…)

止めようと思ったとき、銀さんが肩に手を置いてきた。

彼の瞳に目を向けて。

「大丈夫。マシユを送り出した自分を信じろ」

「——っ、はい」

真つ直ぐな自信に応えることにした。

(伊東さんは私の中の英霊を知っている?)

どうして?...いや、いま考えることは)

あつという間に詰められた状況下、マシユは考える。

伊東が投げかけてきた言葉の意味は1割程度しか受け取れていない。彼があまりにも殺意なく渡してくるものだから、無意識に肩肘を張っていたことに今更になって気づいた。

初対面でここまで親切にしてくれるのは不思議だ。けど、自分の中の英霊に投げかけていたら、少しだけ頷ける。

(盾を守る、席に座る……………)

分からないことばかりの私にはピッタリな言葉です)

だから叱責しているんだ。

真名を告げなかったことを。

けど違う。あの時は時間が無かった。この不備はマシユ・キリエライトの責任なのだ。

誤解を解く必要がある。なによりも、私自身がこの力をもっと許容出来なければいけない。理解していても出来ないのは…大盾の真名を穢さないように努めているからだろう。

そこで気づいた。まだ、藤丸 立香の前に立てていないことを。分からない真名に拘ろうとして、順序が逆転していたんだと。

(この盾は……先輩のために！)

マシユの背後で神童の刀が斬り払われる。

飛び散る火花。大盾を持つ少女は、大盾を利用して伊東の頭上に飛び出た。

「盾を飛び台にした!？」

「肩の力が抜けたな」

初めて見せる伊東の無防備な背中。

完全な死角から、大盾を背中目掛けて振り下ろした。

「発想は悪くない。だが、経験値不足だ」

———はずが。

マシユは地面に落とされ、大盾が宙に投げ出されている。

「マシユ!!」

自分が体術で組み伏せられたことを理解する間も無く。

(これが達人との差……………)

見上げる伊東の剣が煌く光景を眺めていた。

「待て伊東オオオ!!？」

銀時の静止の声をあつきりと断ち、剣は振り下ろされた。

「筋が良い。頭も回る。なによりも理解している」

「……………え」

「大盾の少女、貴様は武士として潔かった。

だが、カルデアのマスター。なぜ割り込んだ」
マシユと剣の間に割って入る者。

藤丸 立香の鼻先で剣が止まる。

問答に誤れば即落とされる。

すぐに位置を入れ替えようとするマシユを押さえつけて、立香は剣
圧に耐える。

「僕は真剣勝負と言ったはずだ。彼女の決意に泥を塗るつもりか」

「マシユは…盾じゃない。俺の後輩です…」

先輩と呼ばれたからには…俺が彼女の盾だ！」

震える奥歯を噛み、立香は伊東の瞳を睨み返した。

「ローマ真選組諸君、彼らを”連合帝国”だと思うか？」

「いいえ！少年の行動で敵ではないと確信しました！」

「えっ」

「——ビビらせやがって」

伊東とローマ真選組の問答で、場の雰囲気が一気に緩まっていく。
アホ面のカルデア一行は銀時を除いて置いてけぼりだ。

「見ての通りだ。彼女の盾が体を表し、少年の行動で組織が見えた。

これより彼女たち”カルデア一行”をネロ皇帝への客人とみなす」

「はっ！承知しました！」

「えっ、あの…どゆこと？」

「まずは現状の説明から始める必要があるな」

そう言いながら指を鳴らす伊東。すると、

『あつ、繋がった!？』

やつと繋がったぞロマニ！」

『マシユ！マシユウウウウウ！』

無事かいマシユウウウウウウウウウ！』

『うるさい！』『りえりっ!?!』

混乱気味のロマンをしばくダ・ヴィンチの姿がモニターに映し出さ
れた。

「君の組織は騒がしいようだ。あっちと同じだね」

「お前は陰湿過ぎるだろ。あと何重に畏張ってんの」

「まあ警戒しないでくれ。

すまないね、カルデアの諸君。僕は伊東 鴨太郎。セイバーのサーヴァントとして召喚された。

さて、皇帝謁見の道すがら、この特異点について説明させてもらおう」

—
—

「じゃあ、なんですか。ローマ帝国と敵対する“連合帝国”との暗殺合戦が続いたせいで、あんなややこしい潔白証明をやらせてるの!?”
「サーヴァントは特に厳しく調査している。これでも五騎は密偵未遂で始末してきた。

顔見知りとはいえ味方とは限らないからね」

「それお前がいう?それお前がやる?」

伊東の説明を聞き終えた一行。

銀時の鋭利なツツコミを華麗にスルーする伊東。

「俺、なんなの………恥ずかしいだけじゃん。

伊東さん本気にしか見えなかったし………」

「先輩!私、すごく嬉しかったです。とても男性らしい、堂々とした振る舞い。やはり先輩です!」

……伊東さんに殺意がないのは知っていたのですが」

マシユの言葉がトドメとなり、立香は白目を剥いて思考を閉ざした。

『然し、驚いた。あのネロ皇帝が女性だったとは』

『歴代ローマ皇帝が敵になって……いまはひと段落したと。それもこれも、アルテラという英霊が割り込んだせいとは。』

なぜ歴代皇帝がわざわざ人理焼却に加担する?』

「ヤツらとはロクに話せていない。どいつもこいつも狂化されたように話を通じん。」

恐らくは召喚のおり、靈気に細工でもされたのだろう」

『オルレアンでも聖女マルタたちに付与されていた前例がある。今回も正規の英霊を陥れる者がいても不思議じゃないか』

「それについては目星がついている。」

銀時君を引き入れればヤツも多少は怖気付くだろうさ」

「ヤツ？」

「徳川 定々。この特異点の首魁の真名だ」

「――！」

一瞬だけ引き絞られた雰囲気に皆は気づきながらも、聞き返すことはせず。ローマ帝国の賑わうブリーフのなか、皇帝のもとへと歩いていった。



「鴨太郎から話は聞いている。」

其方たちがカルデア……人理を想う同士だと」

そして、カルデア一行は混乱を極めていた。

皇帝の座の前に毅然と笑い、優しく声をかける男性の姿に理解を拒んでいたからだ。

「余はネロ・クラウディウス。いまは記憶を失くしてしまったが、ローマ帝国の危機を救わんとする立場は同じだ」

その男は筋肉質の肉体美を余すことなく晒した姿で。

民を率いるに値するまげが特徴的な英霊。

「カルデアの遣いたち、どうか我らが国を共に守ってはいただけないだろうか」

「思いつきり知ってる顔なんですけどオオオオ!？」

坂田 銀時の絶叫は、もっさりブリーフへ向けられていた。

すべてのローマはブリーフに通ず

「思いつき知ってる顔なんですけどオオオ!？」

本来、将軍の座に相応しいとされる、日本一のもっさりブリーフへ向けて。世界の垣根を越える勢いで、本日2度目の銀時の絶叫が轟く。

『えええええ!?!あのネロ皇帝と顔見知りって、銀時君いま何歳?!』

「何歳もなにもネロとかいう名前じゃないからね!？」

親の顔より見てるよ、あのブリーフ!」

「貴様、皇帝に向かってその態度はなんだ!」

「ブリーフ一丁のお出迎えより失礼なことあるか!」

ローマ兵の指摘に青筋を立てて言い返す。

「なんと!その親しみの籠った声、余が忘れようとも解る。同じ志しを持ち、肩を組み合う友に違いない!」

「いや、あんた将軍!おれ待!」

てか茂茂、お前また記憶無くしてんのかよ!」

銀時が指差しながら突っ込んだサーヴァント。

江戸幕府十四代征夷大將軍、徳川 茂茂。

堂々とブリーフ一丁で立ち尽くすその姿、あまりにも似合い過ぎて
いる。むしろ服を着ると進言するほうが間違いだと思えてきて、突っ
込むのをやめた。

「見ての通り、茂茂公は一時的な記憶障害となっておられる。皇帝ネ
ロ失踪のおり機能が麻痺したことでローマ兵の不満が積もってな。

ネロ皇帝を模したサンドバッグが欲しい。ローマ兵のそんな想い
から、ブリーフを履かせたサンドバッグが作られたのが発端だ」

『いや意味が分からないよ!』

なんでネロ皇帝とブリーフがイコールになってるの?普段どんな
格好してるんだい……!』

ロマニの疑問に伊東が答える。

「ネロ皇帝は普段から薄着でね、ローマ兵の鬱憤が溜まっていたのだ。そこで、とある職人に依頼して、ブリーフを履かせたサンドバッグを作らせて鬱憤を発散していたようだ。これが民衆に知れ渡り、たちどころに大盛況。」

芸術家たちも加わり、ブリーフはサンドバッグからネロ像へ。興味は石像から神殿に移り、支柱や入り口に使われ始めた。やがてブリーフの彫刻は芸術的価値が認められ、民衆に浸透したのだ」

「いや殆どブリーフにしか興味向いてないけど!？」

「えっ、ローマ市民みんなブリーフでした？伊東さんの話に集中して気づかなかったけど…」

『これはっ!』

『どうしたんだ、レオナルド』

『ほら、前話の茂茂公と会う直前の地の分のところ。』

“一瞬だけ引き絞られた雰囲気には気づきながらも、聞き返すことはせず。ローマ帝国の賑わうブリーフのなか、皇帝のもとへと歩いていった。”

『ここに賑わう町、とかじゃなく。ブリーフと書いてある』

『いや分かるかアアアアア!!?』

『こんなもん誤字と変わらねえよ!!?』

『読者皆んなスルーか誤字報告してくるよ!!?』

『知らなかった。』

ローマではブリーフが一大ブームとなっているなんて…」

「私もです。現地に行かなければ分からないものです。勉強になりますー。」

『やめて2人とも!そんな文献1つも無いからね!絶対に偽ネロ皇帝の仕業だから!!』

「なにか勘違いしているな、カルデアの者。ブリーフが流行ったのは茂茂公が召喚される前の話だ。」

「断じて我らの將軍は痴態に塗れてなどいない」

「ならなんでローマにブリーフがあんだよ。ブリーフってこんな時代からあったのか?」

「それはな——」

「あつ、サンドバッグのパンツ持つてくんの忘れた。」

「……………ま、俺の替えのブリーフでいいか」

「と、サンドバッグ職人……………もとい平賀博士が履かせたブリーフに触発されたものと予想される」

「お前が発端かいイイイイイイ!!!」

「こんなところでなにしてんだあのクソジジイ!!」

「無論、彼を止める者もいた」

「だ、だろうな。普通の神経してたら止めるだろ。んで、誰なのその健常者って」

「おい源外、サンドバッグにブリーフとはどういう了見だ。飾り付けはメイド服だろう」

「伍丸博士だ」

「お前も召喚されてたんかいイイイイイイ!」

「伍丸博士は最期までメイド服を推していたが、残念ながらメイド服がブリーフに勝てる道理はないに等しい。」

「メイド服は完敗だった…………」

『勝てる道理しかないよね!』

「メイド服がブリーフに負ける世界なんてここだけだよ」

「こいつら仲が悪いことは知ってたが、こんな低レベルのイザコザしてたのかよ」

「そんなこんなで、ブリーフがローマに浸透していったな。伍丸博士は試行錯誤の末、サンドバッグと龍脈を繋げたんだ」

「……………まさか」

サンドバッグを殴って鬱憤を晴らすローマ兵の前に、その男は突如として現れた。

「ああ？なんだお前エ。

一丁前にブリーフ履きこなしやがって」

「余はネロ。ネロ・クラウディウスだ」

ローマ兵の詰所に変質者同然の姿で現れた茂茂。

この時、ブリーフ一丁の姿でネロ皇帝を名乗るジョークが流行っていたことが不幸中の幸いと言えよう。

「ぶはははははは!!」

「確かに皇帝レベルでブリーフは似合ってるけど！」

「おいおい、ブリーフが似合うからって俺らのところに乗り込むかよ！」

「ほら、ネロ皇帝ってんなら、皇帝らしさ見せてくれよ！」

「それは拳を痛めてまで殴るものなのか」

「そりやちよつとは痛いけどよ、布を巻いて殴ればスカツとするんだぜ。よし見てな？ほらこうして………思いつきり!!」

少し皮膚が破けるが、ローマ兵として強くなる手段ならば喜んで受け入れる。まだ若きローマ兵は過ちに気づかず、ブリーフのサンドバッグへと拳を振り抜いた。

「サンドバッグのように座して民の不満が晴れるのなら、皇帝としていくらでも甘んじよう」

「!？」

ローマ兵の拳を受け止めたのは茂茂の掌だった。

ただ悲痛に思ったのならローマ兵は激怒しただろう。

「然し……このやり方は間違っている。みなの声に黙るだけの皇帝サンドバッグは終わりだ」

茂茂はローマ兵の……この場にいる彼らの拳を見て涙した。自らの記憶がなくなり、誰かにネロと揶揄われたことからネロ・クラウディウスという名前と勘違いしてしまった。

それでも、茂茂の涙を見たローマ兵たちの心に届く。

「民の想いに共感し、みな拳が痛まないように尽くす。これまで道を指し示してやれない愚かな皇帝に……拳の痛みを分けてはくれぬか」

言葉なら幾らでも吐き出せる思いやり。

何度と聞いてきたものだけならローマ兵たちが傳くことはなかった。

「——ネロ、皇帝」

1人が認める。男の瞳に、主従の真髄を見たのだ。

「……………なんてお方だ」

愛おしく拳を包むその姿に、また1人が認める。

「万歳！ブリーフ万歳！」

そして、誰もが認めた。ブリーフ一丁の男を見て、轟々しく、この場の誰よりも薄着で立っている王にローマ兵は立ち上がったのだ。

—

—

「そうして混乱するローマを纏め上げ、一夜で皇帝の座に就いた。流石は江戸を統べる征夷大將軍であられる」

「これ下着がブリーフになっただけだよね!？」

「いまではもっさりブリーフがローマのシンボルになりつつある。見てみる、土木、青果店、浴場の番頭に至るまで、あらゆるところでもっさりブリーフが浸透している」

「ただの変態国家じゃねえか！

なんでブリーフにエプロン掛けで接客対応!？」

「ふっ…分からないか、坂田銀時。」

あれがローマの絆というものだ」

「そんな絆があつてたまるかアアアア!!？」

「なんだ、お前たちにはブリーフの前面から出ている絆のイトが見えないのか。……………ふっ」

「なんで『分かってないな、こいつ』みたいな反応されてんの!?伊東お前知らねーかもしんねーけどよ、將軍のブリーフから出てる絆じゃいからね?あれもつと汚いナニかだから!」

取り敢えずお前は水着プール回観て出直せ！」

銀時の反論に伊東はキレた。

生前の最期に見えた絆の糸を否定された気がしたからだ。…本当に気のせいなのだが、説得も聞かずに刀を抜いて襲いかかっている。

「まあ…皇帝交代の経緯は理解した」

「けど、本物の皇帝ネロはどこなんだろう」

「偉いし、風呂知ってるし、薄着だからどっちも同じだろ」

『ブリーフ一丁の変態に乗っ取られるローマ皇帝って大丈夫なのかい…。』

ん、レオナルド？俯いてどうしたんだ』

ロマニが首を傾げる。

次いで聞こえる奇声でロマニはひっくり返った。

『すごい！こんなイカれた発明家が近くにいたとは！』

なあ鴨太郎くん、その2人を私に紹介しておくれよ。

いまだここに居る？銀時くん、至急向かってくれ！』

レオナルド・ダ・ヴィンチ。

自身を性転換する変態……イカれたサーヴァント。銀時は彼に平賀 源外や伍丸式號の話をしているため、一挙両得の状況に鼻穴をふた周り広げられずにはいられなかった。

モニターいっぱい広がる鼻穴に、銀時と揉める伊東は動きを止めると。

「……………退去したよ」

「!?」

レオナルドの問いに非情な現実を返した。

『なに。どういう事だい』

「伍丸式號、並びに平賀 源外はアルテラの破壊活動によって靈気を砕かれて退去している。

門に入る直前、大きなクレーターを見たか。アルテラの宝具、ティアドロップ・フォトンレイ星の涙、軍神の剣による殲滅の跡地だ」

『……………確かにあるね。』

映像を見返したら、村規模のクレーターを見つけた』

『アルテラか。そんな英霊は存在しない。かと言って銀時君も知らないときた。記憶を無くした茂茂公と関係があるのかな』

『伊東くん、次は平賀博士たちがしていたことを教えてもらえる?』

「伊東、ここは任せてよいか」

「ええ、大丈夫です。お出かけですか」

「これから城下町を視察しようと思っていたのだ。護衛として彼らを連れて行きたい。付き合ってはくれぬか」

ネロ皇帝もとい、茂茂の気遣いによつて、沈んだ雰囲気から銀時たちは連れ出されることとなった。

風呂で洗えるのは心と身体、それと思い出―前半―

茂茂のひと声によって、お忍び放浪の護衛を任命されたカルデア一行。

「護衛任務を仰せつかって着いてきたけど……」

「なんで云百年前に温泉スパリゾートがあんだよ」

「噴水の町というだけのことはあるな」

かぼーん。

風呂桶の音が鳴り響くローマの大浴場。

茂茂が真っ直ぐ向かったのはローマ市民が集う大衆浴場。

「ここは皇帝たちの趣向が蓄積されてきた。民が最も見てきたローマの歴史博物館ともいえよう」

茂茂の言葉を聞いて、改めて浴場内を見渡す。

壁面に造られた数々の石像。床に敷かれるタイルは海景や丘山、ローマにまつわる歴史が刻まれている。建物の支柱一本に至るまで芸術家たちの手が振るわれていた。

一部……というよりもシャワーや蛇口、ドアといった節々に現代の技術が注がれている。石像や彫刻の時系列は分からない銀時や立香でも、現代の技術が源外たちによる影響だとすぐに見抜いた。

「あいつら時代に馴染めてなさすぎるだろ」

「きつとヒートアップしちゃったんだろうね……」

『分かる、分かるよ。競い合う者、理解してくれる者が傍にいるとき！人は己の欲にどんどん忠実になる。』

男の浪漫を止めることは誰にも出来ないのさ！』

モニター越しの熱弁に頷くのは銀時。目を輝かせるジークだが、立香は苦笑いで誤魔化した。

そのまま何気なく髪を洗おうと蛇口を捻ると。

「銀さん、蛇口から醤油出てきたんだけど!?!」

「あいつ温泉でTKG作る気だったのかよ!」

「ダ・ヴィンチ。これはどんな浪漫だろうか」

『えっ、醤油が蛇口から？頭大丈夫？』

『1ミリも理解しようとしてないな！』

全身、九州醤油塗れになった立香を見て、ダ・ヴィンチは無慈悲に数秒前の自分を切り捨てた。

『それにしても、風呂のど真ん中にオベリスクか！』

ロマニの興味は大浴場の彫刻に戻る。

「オベリスク？」

「簡単に解説すると日時計になります。太陽の光を利用して物の影から現時刻を計る、針きしんと呼ばれる棒状のものを指します」

お湯に揺蕩う銀時と立香の間から、花のような声音で解説が施される。

「へえ、随分と詳しいなマシユ」

うんうんと頷いて数秒後。

「……………え、マシユ？」

「ああ、マシユだな」

違和感を覚えて振り向くと、マシユが目を輝かせて大浴場を観察しているではないか。ジークたちは冷静で一瞬戸惑うも、立香は慌ててタオルを巻き直した。

「時計という概念がなかった時代、人々は世界各地で針を利用して生活していたとされているんです！あ、恐らくですがこの銭湯に設置しているオベリスクは古代エジプトから輸入したもの…ないしマルス広場に設置されたオベリスクを元に作成されたものと思われ——

——

「うんうん、すごいね。ところでさ、マシユ」

「えっ、あつすみません。」

つい生オベリスクを見て興奮してしまいました！」

「いやあ、良いと思うよ、銀さんは。夢中になれることがあって。でもね、立香が言いたいのはそこじゃないんだな」

銀時の指摘に心当たりがないマシユは首をかしげる。

「……、男湯！」

「……………あ。す、すみません！女湯の内装が素晴らしかったので、

男湯も気になってつい。

失礼しましたー！」

状況にやっと追いついたマシユ。

立香の下腹部を少しだけ見つけたあと、全力疾走で男湯を退出した。

『あく、君のは普通だと思うよ?』

『なんの慰めにもなってないよ…』

放心状態の立香を置いて、銀時は1つの彫像に近寄る。

それは柱の如く目立っていた。力強く『Y』の字を身体全身で表現。人間の肌を迫る色塗りはどう施したのか検討もつかない。というより、人間にしか見えないから銀時は手であちこち触れ始めた。

「しつかし、よくもまあ野郎の彫像を置いたもんだな。おいおい、これなんか肌艶まで再現してるよ」

「これも彫刻なのか?驚いた…俺にも人皮にしか見えない。…被ってるわけでもなさそうだ」

「なんなのこれ。『Y』の字で直立不動の彫像って。

作者の意図がまるで分からねえよ。なに始めるつもりだ」

「無論、ローマである」

「ギヤアアアアアア!しゃ、喋ったアアアア!」

股間を掴んだ銀時に反応して動いたソレ。

大樹の如く遅い肉体から銀時は飛び退いた。

『うん?ちよつと待った。彼はサーヴァントだな』

『あつ、本当だ!反応が微弱すぎて気づかなかった!』

カルデアの貧弱センサーに文句を言いたそうにするが、この大男に敵意が全くない。ジークの警戒心も薄かった。なによりも…。

「オベリスク…それもまたローマだ」

「え、なにこの大男。なんで彫刻に扮してんの!」

「おお、ここにいたか友よ」

「友!?友って…」

茂茂が呑気に近づいたかと思うと、大男と握手を交わしたのだ。これでは警戒もあつたものではない。

「紹介しよう。彼はロムルス。ブリーフをこよなく愛する、大浴場の常連客だ」

「これ即ちローマである」

『ろ、ロムルスウウウウムグウツ!』

『あ、バカ!……ちよつと切るね!!』

「騒いだり通信切ったり忙しいな」

「……………」

ロムルス。つまり真名ということになる。

この場で彼の名前を知っているのは立香だけだ。それも、ローマを建国した偉人として、レイシフトする前に話を聞いた程度のもの。

(あれ。歴代ローマ皇帝は敵のはずじゃ…)

伊東から聞いた話を思い返して、ロムルスがローマ帝国にいる現状に疑問が浮かぶ。

「皇帝。良いのか、こう訪れては正体がばれかねんぞ」

「抜かりはない。頭だけでなく、余の皇帝にも頭巾あしがらを被せている」

「それ被せてるっていうか被ってるだけだろ。忍べてるのブリーフのなかだけじゃん」

だが、立香はロムルスに警戒心を抱けなかった。

地雷亜の件があつたにも関わらず、相手を疑うまでに至れない。自分の目ならまだ疑惑に変わるのだが、茂茂と銀時の仲を見てしまうと……………。

「敵とは思えない」

「…………ジークもそう思う?」

「根拠はないが、疑えないんだ」

「あく、分かる」

「あれがビッグダディというものか?」

「それは違うよ」

これでロムルスが敵だつたなら良い。

もし本当に裏切られたら、立香はサーヴァント不信になる自信があつた。

ロムルスとの仲を深め、気づけば夜になっていた。

マシユはロムルスの話に興奮して、ローマのポーズを会得。その後、通信を復活させたロマニたちが事情を聞こうとするも、何処かに消えてしまった。

仕方なく帰路に着き、茂茂に案内されるまま、客室に通されて夕飯を終えたカルデア一行。

「いやあ、良い風呂だったなあ」

「だねえ。日本以外で銭湯に入れるとは思わなかったよ」

「初めての体験だったが、また入りたい。」

きつとジャンヌたちも気にいるはずだ」

「おー、いいんじゃないかねーの。カルデアに大浴場作ろうぜ。ダ・ヴィンチ、俺らが帰るまでに支度頼むわ」

皆、パジャマを着てベッドに潜り準備万端だ。

こうして、ローマー1日目は無事に終了となる。

「二それじゃあ、おやすみなさーい」

『じゃないでしょオオオ!!』

ドン!と机を叩く音がモニター越しに響き渡る。

ロマニの顔面ドアップに銀時が青筋を立てた。

「ちよ、うるさいロマン。」

もう夜だよ、良い子は寝るんだ。そっちも寝ろよ」

『なんで僕が悪いみたいになってんの?』

ジーク君、あざとい欠伸をしてもダメだから。今日なにも進んでないんだけど!』

「とは言っても、もう夜も遅いですし…。」

明日から連合帝国の調査としてはダメでしょうか」

別室からマシユがやってくる。

こちらにもパジャマのため立香の眼球が見開かれた。

『それもそうだけど!』

いやそうじゃなくって…この特異点は皇帝の暗殺合戦をしてたんだ。見張りも付けずに寝るのは得策じゃないって話だ…ん?

あ、マジ☆マリからメールだ! えへ、なにになに!』

「夜中に大声出すな。口にブリーフ詰め込まれたいのか?」

『辛辣ツツツ?!? 最近のマジ☆マリから罵詈雑言しか飛んでこないんだけど!!? レオナルド、マジ☆マリのプログラムに細工しただろ!!?』

『ウイルスにでも感染したんじゃない?』

お前たまに茶菓子食べながらプログラムしてるだろ!』

「なんでAIが騒音気にしてんだよ。」

…つたく、しゃーねえなあ。ジーク、立香、マシユ。

ちよつとそこいら散歩して暗殺者確認してこいよ!』

「お、おお。サボりは見過ごせないが…:…こう堂々としていると逆に遅しさを感じる。これがカリギュラ効果か!」

「ジークさん、それは違いますね…!」

「ほら、バカ言ってるんで銀さんも行くよ!」

人をパシろうとする銀時を引きずって、カルデア一行は安全確認に乗り出すこととなった。

「こういうのは隣室が怪しいもんだ!」

という銀時のひと声により、隣室へと足を運んで立香の頬が引きつる。そのドアノブには赤黒いお札が貼られており、扉全体には似たような禍々しいものが無数に列を成していた。

「という訳でちよつと失礼しますね!」

「銀さんンンン! 表の札が見えないんですか!?!」

半分寝ている銀時の腕を掴む。

「これ? あれだろ、ローマの芸術とかそんなの!」

「俺にはピッコ○封印してるように見えるんですけど。軽い気持ちで破ったらダメなやつですって!」

「ばっかお前、そんな封印が渡り廊下に堂々とあるわきやねーだろ? こういふのは見かけ倒しなんだって。本命は地下とか、ごつつい施錠

された扉の向こうにあるんだよ。

記憶とか、深海の奥深くとか」

「アナ○ンみたいな世界観と一緒にすんな」

「……………というか、立香」

「どうしたの、ジーク」

「それ、掴んでるのは……………」

「え？これ銀さんの腕だよ」

ジークが青ざめながら指差した意味が分からずに答える。すると、次に青ざめたのは銀時だった。

「おい立香……………お前なんでドアノブ掴んでんの」

「あ、あれ……………おかしいなア……………」

確かに銀さんの腕、掴んだつもりなのに……………」

「い、いや……………銀さんの腕も、掴まれてるよ」

「……………誰のでしょうか、この腕は」

この場にいる全員が銀時の腕に注目する。

そこには、闇の向こうから伸びてくる、白い腕が一本。

一同、白目を剥いて言葉を失う。

そして、腕が歩み寄り……………」

「皇帝家は代々、深夜アニメで臣下と交流するのだ」

「將軍かよオオオオオオ！」

腕の正体は深夜アニメのお誘いに来た茂茂だった。

絶叫とともにガチャリと音が鳴る。全員の視線は、ドアノブを開けてしまった立香へ。

「あ、気が緩んで開けちゃった……………てへ」

そして、ドアの向こうから……………」

L B · K

「パドルパドル」

VI

「『ギャアアアア!!? 出たアアアアア!!?』」

カルデア一行は走って逃げ出した。

感情の機微に乏しいジークでさえ、両肘を肩の位置まで上げる全力っぷりである。

「い、今のなに!?!」

「ききき、きつとサンタだ! サンタの悪霊が化けて出たんだ!」

「なんでサンタ!?!」

「赤いからな! それにほら、クリスマスカラーの変わった鍵の部屋だから」

「だからあれは呪符かなんかでしょ!!? 悪霊封じ込めるやつだよ!!? 思いっきり魑魅魍魎の主の封印破っちゃったよ、どうしよう!!?」

「おおお落ち着けマスター。ここは俺が魑魅魍魎をバルムンクじょれいする。そして部屋に戻って一晩眠れば元通りだ」

「落ち着くのはジークさんですよ!!? そんなことしたら漏れなくローマ壊滅、特異点修復が不可能になってしまいます!」

先ずは私が宝具で部屋を塞ぎます。その間に先輩たちはサンタを倒すサーヴァントを召喚してください」

『マシユも落ち着いて!?!』

サンドバッグに龍脈通ってるから召喚は出来るけど、まだアレがサンタと決まったわけじゃないから!」

『まあローマだしサンタっていうのは良いセンスだと思うよ。けど倒すってなるとねく……うん、サタンでも呼ぶか』

『適當すぎないか!?!』

「つか、將軍居ねえぞ。置いてきたか?」

「え、全然見てなかった。

てつきり一緒に来てるものとはかり…」

走る銀時の肩に手が置かれる。

見覚えのない、やや半透明の手の甲を見て違和感を覚えれば良かった。

「ん？なんだ、そこに居たか——」

「うらめしやあ」

だが、振り向くまで予想外のことすぎたのだ。

白装束の黒髪女が、まさか存在していたなんて。

「……」

『……』

カルデア一行が意識を落とし。

カルデアではロマニとダ・ヴィンチが気を失う。

「あれ……あの、皆さん？」

声をかけた本人すらも戸惑うほど、彼らの気絶っぷりは気持ちのいいものだったとか。

こうして、カルデアの旅は幕を閉じたのであった。

——完——

風呂で洗えるのは心と身体、それと思い出―後半―

まぶたの裏に白い手が浮かんでいる。

目を閉じているのに見える。避けようがないのに、銀時は必死に走って逃げ出した。耐えられるものならやっている。だが、本能が碎けてしまうのだ。生命にとって例外なく、これに勝つことは困難である。

「来るな………！」

侍の勇気を一瞬で押し潰す存在。

その名を――。

「起きな、ギン」

「ギャアアア！スタンド！」

気絶状態から起き上がり、一気に後ろへ飛び退く。

視界に映り込んだ白装束の女を“スタンド”と呼び、すぐさま逃げようとベソをかいて1秒。白装束の女の顔に心当たりがあると立ち止まった。

「…あれ、お前はレイか!？」

「良かった。忘れてたら思い出すまでおどかしてやったところさ」

ちびりかけた蛇口をやっと閉められる。上の方はダダ漏れだったが、レイと呼ばれた少女は黙っておくことにした。

「アンタだけなら兎も角、全員に気絶されると流石に申し訳なくなっちゃうね。アタシ、そんなに怖い？」

「ここに、怖くないよ？皆んな疲れてたからね。銀さん、レイシフト直後は眠くなるから、多分それかなあ」

「ああ、うん。まあそういうことにしとくさ」

「じゃなくて。なんでレイが……って、理由は1つか」

「そ。サーヴァントってやつ。元々は幽…スタンドだったけど、なんの因果かサーヴァントにクラスチェンジしちゃった。

ギン、なにか知ってるかい？」

「いや、知らねえ」

銀時の返事に肩でため息を吐く。

改めて部屋を見回す。

元々、茂茂によつてあてがわれた客室だった。立香たちも寝かされているから、レイが運んだことは容易に想像できた。

ふと、当然の疑問が湧いてくる。温泉があつて、レイがいる。なら、当然居るであろうスタンド使いのことを。

「なあ、召喚されたのはお前だけか？」

「ふふ。私がいるのに、お岩も欲しいのかい？」

「誰がいるかつてんだ。こちらら顔見るのも懲り懲り…」

「若いくせにババアの陰口叩くなんざ、物好きなことだ。そんなに暇なら手伝ってもらおうかね、仙望郷を」

「レイが居るんだから、そりやお勤めですわな…お岩」

ベッドの傍らに現れた声に、糸に吊られるように肩を震わせる。視線を向けば、霊体化を解除したサーヴァント、お岩が銀時の反応に笑いながら手を叩いていた。

「あつははは、そう警戒しなさんな。」

アンタと似たようなもんさ、寝て起きたら自分がスタンドになつちまつてたよ」

「おお、お前たちと一緒にすんなよ！俺はちゃんと生きてるよ？世界が一巡しても銀さんのままだから！」

「誰がジョジョ〇の話って言った。スタンドになつてようが別に些事さ。いま、ネロ皇帝の身に降りかかっている問題に比べたらね」

「ネロ？それって、いま行方不明になつてる？」

レイとお岩が頷く。

「ここから先は全員に聞いてもらわないとね。」

「さあレイ、ギン。まずは全員を起こすんだ！」

訳も分からないまま、銀時は朝焼けを後ろにして立香たちを起こし始めた。

場所は変わって皇帝用の大浴場。

玉座から徒歩3分の場所にあるのだから、ローマ皇帝たちが生粋の風呂好きと理解できる。

「銀さん。スタンドってなに。いきなり○ヨジョっぽい作風になっても困るよ」

「スタンド。それは使用者の側に立つことから名付けられた生命エネルギー。もう1人の自分の自分だ!」

「もう1人の自分……成る程、ジークフリートの力みたいなものか」

『止めて!このままだと多重クロスオーバーになっちゃうから!タイトルを" fate / 銀時も行く奇妙な冒険" にしなきゃならない!』

『そういう問題で済むわけないだろ』

「それは後にしな。ちと困ったことになってね。さっき見ただろ、あの部屋に封じていたものを」

「……ええ。封じてた?ほわっつ、なにを?」

「皇帝さ。ローマ帝国第五代皇帝、ネロ・クラウディウス」

「ええええええええ!」

「お岩さん、あの恐ろしい方がネロさんというのは……確かに暴君ネロという名は後世に残っていますけど。あれは人ではないものに見えました」

「そりゃ、サーヴァントを3騎も取り込んじゃってるもの。

ちよつとだけ人外に見えちゃうさ」

「人外すぎません!?マジモンじゃないですか」

「3騎って、まさか……」

「そう、ブリーフ3さ」

「成る程、俺が英雄ジークフリートの心臓を移植してもらった時と似ている。それが3騎ともなれば暴走するのもおかしくはない」

「いや全然違うと思うよ?世界樹の葉と汚いブリーフを一緒にしたら流石のすまないさんも怒るって」

立香はしっかりとネロの全体を見ている。

爛れるように赤い瞳。背筋に滲み込む声音。なぜか身近に感じる雰囲気。事情はどうであれ、ベースが人間だとは思えなかった。

「破壊神の話は聞いたね。あいつが現れたのは1週間ほど前さ。まだ伊東先生が召喚される前、ヤツはローマ帝国に侵攻してきた。」

その時戦ったのが元いたサーヴァント10騎とネロ皇帝。最初は皇帝も玉座にいたんだが、アタシらが押されてねえ…堪らず応援に来なさった」

『ええ!?その話は初耳だよ』

「茂茂公が代役になっちやいるが、いまのローマ帝国を回しているのは半分以上が伊東先生さ。アタシが説明するからって黙っててもらったのよ。オバさん喋りたがりなの、ごめんね〜?」

「んで、ネロが返り討ちにあつたわけか。」

けどアレはどういう経緯で…」

「早とちりしちやいけないよ。ネロ皇帝のお陰で1度目の破壊神襲撃は防いだんだからね」

「はあ!?皇帝つっても10代のガキだろ!?!」

「本当だよ。ただ、その手段がまずかった。破壊神に対抗するには生身じゃ勝てない。そこでネロ皇帝はブリーフ3を取り込んだのさ」

「あのバカども^{ブリーフ}ここで何してんの!?!」

つかネロ皇帝もスタンドなんで使いこなしてんだ!!」

背後に浮かび上がる、ネロの額に『3』の数字。

ついでに白化粧とくればイメージしやすいあの顔。

「ちよ、顔!・皇帝というより閣下だこれー!!」

fateのヒロインにあるまじき閣下っぷりだよ!?!」

「アタシも驚いたさ。ちよいと説明したスタンドを、当たり前のように使い熟すんだからね」

「やってることは格好良いのに絵面は最悪だ…」

「ネロ皇帝が取り込んだのは英霊化したブリーフ3だ。その負荷、影響力は常軌を逸している。破壊神を退けたあと、暴走し始めたところを茂茂公が落ち着かせたんだよ」

「そんなことが…」

爽やかに現れる茂茂だが、やはりブリーフであることに変わりはないようだ。もうそこは飽きたと銀時が結論を急かした。

「ブリーフ3を引きずり出せばいいのか？」

「試したけど分離は無理だった。どういう訳か、ネロ皇帝のナニかと癒着しちまつてる。ブリーフ3を成仏させるしか方法はない。」

英霊化したとはいえ、倒し方は一緒さ。この浴場はアタシたちの宝具で顕現させた仙望郷でね。

癒やしてあげればサーヴァントは例外なく成仏する」

「成仏ならお岩の専売特許だろ。なんでやらねーんだ」

「ヤツらを表に出す必要があるけど、そのためのマッサージに私とレイ2人がかりになる。」

成仏まで手が回らないんだ」

「仙望郷で培った技術をローマ式に改良した。」

これでネロ皇帝からブリーフ3を一時的に引き出す。成仏はギンたちに任せるよ」

そう言つてレイが布を被せた椅子を持ってきた。

ふう、と息を吐いて、勢いよく布を取り払うと。

「これもローマである」

「パドルパドル〜……」

自らを椅子と思い込んだロムルスが現れたではないか。

しかもネロ皇帝（闇落ち）を抱きかかえるサービス付きだ。

『これただの建国王ロムルスでしょうがアアアア！』

「ローマ皇帝なら、きつと感動ものの施しですね！」

「なんで当たり前のように建国の父を土台にしてんの。」

なに、銀さんがおかしい？ジークどう思う??」

「早く終わ……本人が幸せならOKだ」

「よーし分かった、もう突っ込むのやーめた」

「細かいことは良いの。」

ロムルス様だって納得してくれてるんだから」

やや眠たそうなジークに便乗して胡座をかく銀時。

どうせロクなことにならないとツツコミは諦めた。

「いいかい、ブリーフ3が出てきたら速攻で成仏させるんだ。やり方はアニメを観た通りさ。各々、気イ引き締めな！」

「では、僭越ながら失礼します」

ネロの両腕をロムルス、両脚をお岩が抑える。

一同、意味不明の行動に首を傾げていると、レイの半透明な手がネロの身体をすり抜ける光景に唾然とした。

手の甲まですり抜けた次の瞬間、

「よっ」

「あぐおああつ?!」

レイの掛け声とともに、スヤスヤと寝ていたネロが言語化できない声で苦痛を訴え始めた。

「皇帝の身体すり抜けて心臓マッサージしてる!？」

完全に○I○戦の息止め承太○じゃん！」

「天にも昇る気分だと評判なんだよ」

「天に召しかけてるだけだろうがっ！」

マッサージはマッサージでも、心臓マッサージ（止）。

そして、ネロは父の胸元で天寿を全うした。

『ま、まずい！ネロ皇帝の心拍数がゼロになった!!？』

「このままじゃ僕らのせいで人理焼却されちゃう!!？」

「急げ、心臓マッサージだ！まだ間に合う！」

「銀さん、私にお任せください！」

こんなこともあるのかと、自動車教習所で心臓マッサージをマスターしておきましたから！」

「えっ、マシユ自動車免許持ってんの!？」

両手でマッサージの準備を整えて、マシユは宝具を展開せんとする気合いを両肩に込めた。

「ちよ、その気迫なんか違…」

「MT!!」

「うごおっ！」

立香の問いに返事をしながらネロの心臓へ一撃。

その衝撃波で数メートル先の温泉が煽られて波を打った。

「マシユくん力加減って知ってる?!?!」

「ネロ皇帝から鈍い音がしたぞ……」

善意100%から繰り出される無数の心臓マツサージ。

可愛い顔してこの時代の皇帝に殺人級の無礼は止むことがない。慌てて止めに入ろうと銀時と立香が腕を伸ばしたとき。

「ちよ、苦しい!アンタら俺を殺す気か!?!」

ネロの口から半透明の武人が飛び出してきた。

上半身裸、下半身ブリーフのみの彼は明智光秀。

ブリーフが綺麗な明智光秀だ。

「あつ!出てきた!光秀出てきた!どゆこと!?!」

「良くやった!人間に憑いたサーヴァントを出すなら、本体を死に近づけた状態が最も剥がしやすいのさ。」

剥がす手段が心臓マツサージなんだが……まさかこうも上手くやるとは。マシユ、アンタやるね!」

「そ、そうですか?……えへへ、ありがとうございます」

褒められて照れるマシユ。然し立香たちは絶対に受けたくないし心の中で思うのだった。

「よし、やれジーク!!」

「俺か!?!分かった。癒せばいいんだったか。」

光秀、すまない……!!」

「えっ、ちよなに!?!裏切り!?!」

銀時の号令で飛び出したジーク。

両腕を後ろポケットに回して、ある物を取り出した。

「あの……サインください」

「……えっ、俺のなんかで良いの?」

「ああ、勿論だ。その名、確かに俺の心に刻み込まれている。貴方だから良いんだ」

「……こんな俺でも、こんな裏切り者の俺でも憧れになれたんだ――」

「良い名だ、バルムンク・フェザリオン」

「それ声優被りなだけエエエエエー!」

『ええええええ!? 有頂天から谷底に突き落とされたよこのドラゴン!! 人違いの羨望に光秀耐えられなかった!』

これ、成仏っていうか…除霊の間違いでしょ?!』

「すまない。バルムンクという響きが頭から離れなくて」

『光秀って呼んで思いつきり謝ってたよね!』

三日天下を濃縮再現してたよねエ!』

電光石火の如き速さで明智光秀が成仏した。

生半可に銀時から知識を入れられたことが災いした。

「なんとという手際の良さ……!」

アంత、うちに来ないかい」

「て、照れるな……だが俺には使命がある。すまない」

断られて肩を落とすお岩。

「よし、もう一回だマシユ」

「怒っ!」

『ねえ!? さっきから女の子が出しちゃいけない声出してるよ! ていうか威力もつと抑えて!』

マシユの追撃により、次のブリーフが飛び出してきた。

○ン筋の付いたブリーフ、豊臣秀吉である。

「よし来た、次は秀吉だ」

「銀さん、次は俺が行く」

右腕をぐるぐる回しながら立香が出陣する。

秀吉はネロの顔に座って猛抗議に出た。

「あーっ! ワシ見てたからな! どうせマヨリーンとか言うんだろ? 声優違いで成仏させられると思うでないぞ!」

「そのパンツ綺麗ですね!」

「ほああああああああああああ!!」

『1発で逝ったアアアア!?! どんだけ嬉しかったんだ、パンツ綺麗つてよっばど褒めるところ無かったときにしか出てこないよね!』

『あれネロ皇帝のパンツ褒めただけで、秀吉のブリーフは○ン筋ついてたけどね…!』

「流石だな」

「いえ〜い」

ハイタッチするジークと立香。

そして、残すは織田信長となった。

「ラスト！行けマッシュー！」

「阿ッ!!」

『だから掛け声エ!!』

マッシュが最後の心臓マッサージを開始する。

あとひと息、ネロの復活も目前で安心している銀時の背中に声がかけられた。

「次で最後か。なら俺にも手伝わせてくれよ」

「おう、いいぜ。頼むわ」

軽く返事をしたとき、ネロの口からまげが出てくるのを確認した。そこで漸く、耳が違和感に追いつく。ジークも、立香も前にいて、マッシュとお岩、レイは心臓マッサージに専念している。

「……つかお前、誰？」

振り向いて、視線が合ったのは全く見知らぬ男。

ひと目見て理解したのは、この男が日本のサーヴァントだということくらいなものだ。

「えええええええ!!」

「なんだ、どうした!」

立香の叫び声で視線を戻す。

ネロの口から飛び出しているのは織田信長ではなく……。

「なんかネロ皇帝から將軍出てきた!」

「これ將軍の失われた記憶じゃない!？」

白目を剥いて、半透明のスタンドと化した茂茂だった。

記憶が失われた理由にしても、なぜネロのなかに入っているのか。皆目見当も付かないが、成仏だけはダメだと分かる。

「銀さん、これどうしよ——」

「おっし、俺に任せとけ!!!」

戻すことを選んだ銀時の声をかき消して、男が十手を片手に飛び出していた。

瞳に灯る殺意を見て、銀時の身体は勝手に反応していた。
「?!?!」

茂茂に躊躇いなく直進する十手。一手遅れてマシユは立香を庇い、男の侵攻を止めに入った。

盾は間に合わない。徒手で対峙することになるが、盾のない接近戦は銀時によつて師事されている。

「はっ、甘いぜ」

「そんなん?!」

一瞬だった。十手を落とそうと腕を掴んだ瞬間、マシユの身体は地面に転がっていた。そのまま、男の十手は茂茂に突き刺さり――

「てめえ、なにしやがんだ!」

銀時の木刀によつて阻まれる。

全力で踏ん張る銀時を押し込みながら、男は十手を突き出して笑う。

「ここは銭湯。身体と心を癒す水の都よオ。

水場に霊が居たとあっちゃ休めやしねえ。

おら、退きな兄いちゃん? 怪我じゃ済まねえぞ」

「退くのはお前だ」

魔力を纏った竜の剣が振り抜かれる。剣の軌道に熱量を加えたジークの攻撃だが、大袈裟に躲して距離を置く。

いきなり現れて中央突破の立ち回り。

ただ肝が据わっただけでは出来ない芸当。

「なんのつもりだい、辰五郎」

「辰五郎だど?」

ネ口から離れたお岩が、ふざけた男の真名を口にす。

銀時の記憶は一瞬でその名前に該当する人物を呼び出した。

「お岩、ばらすの早いつて。たく、しょうがねえ。

俺は寺田 辰五郎。ただの口煩い裁定者おかつびきさ」

銀時が住処にしている万事屋の家主にして、命の恩人。

お登勢の旦那、その人である。

乱入者の軌跡

立香たちカルデアの目的はローマ帝国に発生した特異点の原因を
解明し、これの修復にある。

連合帝国などという歴史にない帝国が誕生し、ローマ帝国を侵攻し
ている。更には帝国でありながら首魁は徳川家の前々代将軍、徳川
定々だ。疑う余地もなく、このサーヴァントを打倒し、ローマ帝国を
守ることがカルデアの目標となった特異点で、異常事態が続出する。

徳川定々の君臨。

破壊神のサーヴァント粛清。

徳川 茂茂の記憶喪失。

第5代ローマ皇帝ネロ・クラウディウスの失踪。

そして――。

「なんのつもりだ」

「そりやおめえ、将軍を屠るためさ」

江戸の守護者、寺田 辰五郎の将軍暗殺未遂。

岡っ引き、それは悪人を逮捕する立場の人間であり、決して悪戯に
命を狙う者に務まらない役目である。

『寺田 辰五郎と言いましたね。なぜ裁定者が人理焼却に加担してい
るんですか?..』

「カルデアの連中か？俺は人理焼却にや反対よ？」

俺たち正義の味方が手エ出すのは悪いヤツだけさ」

「なにが正義の味方だ、答えになつてねえよ。ここで将軍暗殺して何
が解決するってんだ。説明しろよ、3行で」

銀時は純度満点の殺意を込めて言葉を促す。

自身の木刀は既に限界まで引き絞っている。

返答、一挙手で次の行動を見破り、心臓を貫く準備を整えた。

「第5代皇帝も目覚めてないか」

辰五郎の返答はまるで銀時を意に介さないもの。無視に等しい態
度を取った最初の言葉で、銀時の木刀は辰五郎の心臓に突き出して

た。

「一気に2……いや、3人の首を獲るのも悪くねえな」

「マスタ………」

この場で最も先頭経験のある侍の先制を、辰五郎は道端の小石に向ける感情で避ける。

ジークが駆け始めるが1秒遅い。

2人が交えるのは一瞬の差し合い。意識の隅で捉えられたところで、着いてくることは不可能。ジークが不幸なことはこれに加えて、辰五郎の十手が銀時の腹に刺さるのを見ているしかないことだった。

「……………お岩?！」

辰五郎のセリフが宙空の風が変わる。

銀時が立っていた場所を横取りし、躡るするように笑顔で拳を振り抜いた女が1人。

電光石火の間に入り込む人外の業に、銀時ですら喉を鳴らすほど壮大な景色であった。吹き飛んだ辰五郎は大理石に減り込んでいる。

「ここが風呂屋と知つての狼藉とは、岡つ引きも廃れたもんだ。うちの客に手、出すなら俺が黙ってねえぜ」

「お前はタゴサクか!？」

宿屋を営むのに適した番頭の姿で、サーヴァント1人を吹き飛ばす破壊力を持つ女将……いや、大将。

バーサーカー、タゴサク。お岩のスタンドにして、サーヴァントとして独立も可能な仙望郷の主。サーヴァントとなり現界したことで、お岩と身体を入れ替えての行動も出来るようになっていた。

「あの時は世話になったな、ギン。」

狂化を抑えるために引っ込んでたが……ちと面倒なことになった。ギン、ちよいとネロ皇帝を頼むわ」

「おい、話が見えねえって………あれ」

あらゆる無念を受け入れてきた者らしく、朗らかな笑顔を向けるタゴサク。彼に託された言葉とともに、銀時の側でしなだれていた茂茂の身体が起き上がる。

銀時が気づいたとき、茂茂の両腕が銀時の魂を掴んでネロの身体に

引きこもってしまった。

「銀さん!? え、なんか今、將軍起きてなかった!？」

「ああ、俺にもそう見えた。マスターの脈がない……」

『本当だ……こっちも銀時君の心拍数が0になってる。』

ど、どうする!?! あつ、こんな時こそ心臓マツサージを』

「落ち着け、ドクター。マスターが本当に死んでいたら俺の方で分かる。まだマスターとの繋がりは切れていない。」

これは……仮死状態じゃないか?」

「その通りだ。ギンはネロ皇帝の中に入って信長たちを成仏させている。それが終わるまで、私たちは2人を守らなきゃならない」

『銀時君の不意打ちが通じなかったのは驚いたが……。相手はサーヴァント、人と英霊じゃ仕方ない。』

落ち着いて、皆んな。現状、こちらは3騎。

敵はダメージを負ったルーラー1騎。防衛はそう難しいことじゃないよ』

盾を構えてダ・ヴィンチの言葉にマシユは頷く。然し、内面では慰め程度の意味だと理解していた。辰五郎が銀時の不意打ちを躲したとき、マシユとジークは反応が二手以上遅れている。

タゴサクの桁外れた反射神経が無ければ……。

(その先は考えても始まらない。)

頭は戦闘に切り替えました。言い訳はなしです)
意識を浴場全体に向ける。

大理石から抜け出した辰五郎にタゴサクは追撃しない。油断している姿勢に見えて、彼の視線はずっとタゴサクを捉えている。

「まあ待てよ、いがみ合ったのは生前だろ。」

いまは大切な事中なんだ、場所は弁えようぜ」

「どこのルールに則ってるかは聞きやせん。」

だから俺は、お岩が信じるヤツらを守るだけさ」

マシユとジークに意識がいかずとも、2人の奇襲は成功しない。何故かと聞かれれば、出力の差とでも答えるだろう。タゴサクの一撃は立香の強化を受けたマシユよりも強い。それを受けて立ち上がれる

時点で不利。

奇襲に成功しても、一撃で霊気を砕けなければ反撃を受けて敗北する。やはり、守りに専念するしか手はない。

「くっそー。生前から俺に厳しすぎるだろ。」

ちっ、下手こいちまったな。

時間制限を設けやがるから焦っちゃまった」

「なんの話だ?」

ぐるりと現状の最適解を整理したマシユは、辰五郎が陽気に外を眺めるさまを見て逡巡する。

(なにかを待っている?……それも、すぐ)

『気を付けて! 物凄い勢いで宝具級の魔力が飛んでくる!』

方角は———」

ロマンの声よりも先に、マシユは大盾を握りしめていた。なにかが近づいてくるのを知れたのは、辰五郎が嘆いたおかげだ。

「3時の方向だ!」

「はいっ!!」

そして、視線を向けた方向だと伝える立香と同意見のもと。見えな敵に向かって魔力を大盾に集中させて飛び出した。

『向かって右から……って早っ!?!』

大盾が立香の前に聳え立った瞬間、大浴場の外壁がポップコーンのように弾け飛ぶ。味付けは3色に塗られた破壊衝動。不躰な謁見によって呑み込まれるはずの者たちは、未来を生きる大盾を支える理由となった。

大盾を穿たんと奔る空腹の唄。呼吸と同じ行動理由で大口を開ける衝動に、大盾が一步後退する。宝具が間に合わなかった自分の落ち度だ、嘆く暇が惜しいと歯を食いしばって二歩後退してしまい———

「ぐ、う……」

「マシユ!!」

負けそうな温度に手を伸ばし、すぐに決意を温める手のひら。立香がマシユの背中を支えて、消し飛びかけた思考が急発進した。

(真正面でダメなら……！)

大盾に真正面から衝突する衝動には付き合いきれない。手荒で無礼な挨拶に、大盾の下から蹴り上げて応えた。

『勢いを斜め後ろに逸らした！上手いぞマシユ！』

軌道を大きく逸れた3色の路。

そのまま離れてくれれば助かるが、無論それはあり得ない。やがてその軌道は上空に反れて、反れて………大袈裟なカーブを描いて1秒、この大浴場にいる辰五郎の真横に着陸した。

「時間だ。どうやら暗殺は失敗のようだな」

石造りの浴場を踏み荒らして、砂煙と蒸気を退ける。

生命なきモノたちを慄かせ、破壊神は畏怖を体現した。

「ああ、まだ2人とも生きてる。

ちよいと予定はズレるが……付き合ってくれ」

「お前の事情に付き合うつもりはない。

私はただ、全てをこの剣に与^{あずけ}るだけだ」

この浴場において、最も肌を露出させ、最も礼節を弁えたように振る舞う女性。マシユよりも細い肢体、太陽よりも煌めく顔立ちでありながら、立香は欠片の情も湧かなかった。

「か、彼女は……」

「アツティラ・ザ・フン。よく会話に出る破壊神だ」

誰もが理解している答え。

敢えて口にして、答えてくれたのはロムルス。彼が答えてくれなければ、理解できずに動いていたかもしれない。

破壊神の真名、アツティラ。彼女はいま、辰五郎を殺すかどうかで逡巡した。瞳が辰五郎を捉えたとき、少なくとも立香は死んだと錯覚したのだ。

『なっ………！3度目の襲撃!?!』

あまりにも脈絡が無さすぎる！気まぐれか!?!』

(気まぐれ……?)

そうか、彼女の意思は気まぐれなんだ)

分からないこと尽くめの立香でも、彼女が退屈していることを感じ

取った。いま辰五郎を殺さないのは少しだけ興味を思い出したから……その程度の情で動いている。

「その名は好かない。私の名はアルテラ」

いま、彼女に勝つのは不可能に近い。圧倒的に火力が足りず、守ることに注力しなければならぬ今、狙うべきは撤退だ。

もし、アルテラと名乗った彼女を少しでも満足させることができれば……。破壊意欲を煽ってやればヒートアップする。そこに冷や水を頭からぶっ掛けて、気まぐれが後ろに向くことに賭けるしかない。

(本当にそんな無茶、出来るのか……?)

確証がない論理に喉が詰まる。

「先輩、どうしましたか」

「……………」

逆鱗に触れでもしたら取り返しがつかなくなる。急遽組み上げたものを伝えて、場を混乱させたら……。

「カルデアよ。即ちローマよ。」

安心せよ、ローマ余がいる限り未来は続く」

「——ありがとう」

立香の背中を押す、太陽の匂いがする手のひら。

後ろを見上げれば、眠る2人を抱えるロムルスが微笑みかけていた。いま立香を肯定するのはローマの歴史。建国王の言葉により、自分を見失うこともなくなった。

「マシユ、ジークと一緒にアルテラを抑えるよ」

「はいっ！」

「了解した」

また一つ強くなれた気がする。

もちろん、ここで生きなきや証明もできない。

「お前たちの文明を破壊する」

会話が終わり、静寂の始まりが合図となる。

動き出す破壊神と対峙して、絶対に壊れない礎は輝き出した。

▼

「よオ信長。お前、〃ぐだぐだ本能寺〃で主役なんだって？あつちでpOk oがお前のこと描きたそうにしてたよ」

「うっそまじで?!?!?」

「あらやだ、還って支度しなくちや!!」

銀時のリソースなき言葉で舞い上がる最後のブリーフ3、織田信長は意気揚々と成仏した。

無論、イラスト化など夢のまた夢である。

だが、ブリーフに手間を取るわけにはいかなかった。

「やつとこき話が出るな、将軍様」

ここは泡沫の空想世界。

立てば徐々に自意識と結合していく場所。

夢を騙るには思い込みやすい黒々とした空、雲のように揺蕩う赤い芸術たち、そして持ち主の情景を慈しむ男1人。

「彼らには悪いことをしたな。あとで謝らねば…。」

然し、いまは時間がない。

「先ずは外の状況を教えてはくれないか」

徳川 茂茂は懐かしんだ声で訪問者を迎え入れた。

「別世界の我々がなぜ居るのは検討もつかない」

「だよなあ。全員そんな返事だ、気にすんな」

茂茂にことのあらましを説明し終えて、一先ず知りたかった疑問に対する応えは空振りで終わる。

「気になるのは、オルレアンとローマでは我々の世界のサーヴァントの数が違いすぎるところか…。」

ローマでは少なくとも7騎だ。オルレアンが1騎だけとは偏りが過ぎる」

「……………確かに。いや、そもそもアンタらが呼ばれたのって自分の意思なの？」

「それも分からぬ。気づけば召喚されていた。少なくとも伊東や平賀源外たちはそうだ」

「なんだ、自分の意思で来れるやつもいるのかよ」
「確証はないが、叔父上はそれに近い」

茂茂の返事には理由もなく銀時は納得していた。

人に化けた獣物。アレが人類側とそうでない側、どちらに立つかなど明白だ。超法規的組織があるのなら、定々はその組織に属し、自己に染めていっても不思議ではない。

定々とは正反対の男：地雷亜を思い出す。

“ 巢 ” にかかるものはなかった。

地雷亜は最期にそう言い残した。

最初から目的があつてオルレアンに来たように…………。

「地雷亜のやつ、なにを待っていやがった…」

「或いは居たのに姿を見せなかった可能性もある」

疑問に茂茂は付け加える。

まるで答えを知っているように。然し、核心に触れることを避けた言葉選び。追求したい気持ちに駆られる銀時を見て、逸らすように茂茂は話を戻した。

「余は元々、叔父上の駒として持ち出された。サーヴァントという性質上、江戸城を造るのは叔父上では遠く及ばなかったからだろう。」

この霊気ならば江戸の政を再現できる。そう勘違いをしているんだ」

「江戸を再現？それがヤツの目的だつていうのかよ」

「ああ、間違いない。連合帝国を裏で操り、瓦解したローマ帝国に江戸を咲かせる。徳川茂茂の霊気を種子に変え、特異点に新たな江戸を建築することが定々の目的なのだ」

「諦めが悪いにも程があんだろ。よく逃げてこれたな」

「叔父上の目的を見抜いた皇帝のおかげだ。定々の目を盗み、余を逃してくれた。」

ローマを任せる……その言葉を余に託して、いまでも連合帝国に残っている」

「一緒に逃げなかったのか？」

「彼の意思が残ると言ったのだ。無粋な真似は出来なかった。余の想いごと彼に託して、そしてローマへとたどり着いた。」

あとは知つての通り、破壊神が立ち去った跡のネロ皇帝を見つけた。傷口は酷く、手当てでは間に合はんほどだ……そこで余の靈気を半分ほど埋め込んだ」

「……………はあ!？」

会話を中断する叫声。

茂茂はサーヴァントだ。ブリーフ3の件でサーヴァントの靈気を人間が取り込むことの危険性は知っている。

「ネロ皇帝を助けるにはこれしか方法がなかった……」

胸の刺し傷を塞げたが、ネロ皇帝は暴走し始めた。止めるため、余の意識をネロ皇帝の内側に移すことで暴走を止めた代わりに、余の身体は記憶を失っている」

「それでブリーフ一丁で駆け回る將軍の誕生つてわけか。」

……やっぱり影武者じゃないのね、アレ」

「ああ、影丸は置いてきた。」

あの身体はただ記憶を無くしただけの余だ。

仙望郷で湯治を受け、今日に至る。お岩のお陰でネロ皇帝の身体は万全となった。これでローマ市民に胸を張って姿を見せられる」

「……………戻らないのか」

「ああ。力を使い果たしてしまった。」

生命を繋げる大役を成し遂げて、余は満足だ」

瞳を真っ直ぐに笑う茂茂。

靈気を再び身体へ移そうとする負荷は計り知れない。そんな理由を語らずとも、茂茂の決意を見て口を挟むのは野暮なことを理解していた。

茂茂の言葉を聞いて、彼の意思が残っていることも知ったのだ。あとは流れに身を任せ、変えたい時に気に食わないところを壊すだけ。

「んじゃ、もう行くわ。あいつら待つてるから」

「待て。言い忘れていたことがある」

立ち上がり、背伸びをする侍の背中を呼び止めて。

「其方たちの敵は1つだけではない」

「……………そりゃどうということだ」

特大の爆弾を伝えてきた。

「人理焼却に加担する者がいる。彼女たちは先手を打ち、其方らの往く道を塞いでこよう。この特異点もそうだったように、7つの特異点で凡ゆる妨害に遭うだろう。」

常に詰めを狙って動いてくる。どうか心してほしい。

いま伝えられるのは…余に許されるのはここまでだ」

問い詰めようとした口を閉じる。

茂茂の瞳がやめてほしいと願っていたから。

その意味に触れることを銀時は躊躇ってしまった。

「ネロ皇帝。どうか未来を宜しく頼む」

そして、真打ちの覚醒を促した茂茂。

いつから居たのか、それは暗がりの向こうから燦然と輝く足音を鳴らして現れた。

「……………うむ、余に任せるがよい！」

ネロ・クラウディウス、ここに帰還を果たす。

大浴場での防衛戦

サーヴァントのクラス、バーサーカー。

理性を失う代わりにステータスを上げる、与える英霊を間違えればその技能を失ってしまうクラス特性が特徴だ。召喚する英霊が戦力として見込めない場合、または逸話として狂った人物が当てはまる。

「あんた死人を黄泉に帰す良い案内人だったろ。」

「なんでバーサーカーなんだ。つか理性あるじゃねえか！」

「俺が裁定者^{ルイラー}を名乗るには早すぎる」

ならばお岩、そしてタゴサクはなにをもつてバーサーカーのクラスとなったのか。

答えは両方である。

ステータスが低く戦闘にはスタンドを必要とするお岩、死後も仙望郷を守り続けたタゴサク。2人にはうってつけのクラスと言える。

お岩・タゴサクのクラス特性、狂化は“C”。このランクならば理性が持つていかれて当然である。2人が理性を欠片程度失うだけで済んでいるのは、タゴサクの第二宝具と狂化を紐付けし、ロックを掛けているからだ。

第二宝具は死者を取り込み、魔力に変換する。サーヴァントも該当し、取り込んだ数だけ狂化に侵される。

「俺の理性だなんだ言うが、お前こそ強すぎだ。」

徳を積んだからって強くなるなんざ、異世界転生に影響されすぎじゃねえか？」

十数秒の近距離戦を経て、膝を着いたタゴサク。

第二宝具がタゴサクの脳裏にチラついたのは、辰五郎に押され始めていたからだ。

「ああ、これか？」

連れていけと煩いんでよ、ちよいと靈気に居座らせてやってんだ。いわゆる複合サーヴァントってやつ」

「……どのみち、流行りってわけか」

複合サーヴァント。

自身の靈気に複数の英霊を取り込んだサーヴァントのことだ。辰五郎の口調から一騎を入れているように聞こえるが、タゴサクは違っていると見抜いた。

「お前に着いてくる物好きが二騎もいるとはね」

「うへえ…黄泉の番人してるだけあるわ」

鼻の中に溜まる流血を押し出して、後ろ目に立香たちを見る。宝具によるステータス強化込みとはいえ、全員ギリギリで踏ん張っていた。

「よそ見とも思っていないだろうが、今の俺を見誤ったな」

「おいおい、本気か？」

見る、と言つても視線を逸らしたわけではない。あくまでも振動や声を拾っただけで、警戒はそのまま…のつもりでいた。

しかし、気配も察知出来ずに懐に入られた。

タゴサクの知らない辰五郎の動き。距離を無くしたような技を見破るのはタゴサクには無理な話だ。

「悪気はないんだ。ただ、俺も仕事で来てる」

よそ見は手土産。

戦に生き、戦で死した者たちの掟に染まれなかった。

「悪く思うなよ」

いや、そもそも。

寺田 辰五郎は問答無用を実行する人間ではない。

これは、確実に別の側面に影響されている。

複合サーヴァントの強みに気づいたときは手遅れ。辰五郎の十手は翻り、タゴサクの胸を目掛けて飛び込んでいた。

「悪く思うなよ」

「——っ!?!」

十手の先が上空を眺めている。

アルテラが破壊した跡から覗く陽を仰ぎながら、血の一滴もない事実には辰五郎の思考は一瞬だけ停止した。

いま、自分が吐いたセリフを返した人物を見ながら。

「俺はな、家に帰るために戦ってたんだ。」

他人を自分の布団に寝かせるヤツの気が知れないね」

「テ、メっ——」

十手よりも銀色に輝く視線を浴びて、坂田 銀時の仕業に舌を巻く。打ち上げられた右腕、固く握り締める右腕。どちらが次の一撃を見舞うか、素人でも分かる。

サーヴァントと人間の垣根を軽々と飛び越えて、侍の木刀が不貞の岡っ引きの横面に叩き込まれた。

「ギン、良く帰ってきたー!」

「俺の手、スタンドに掴まれた!まじで勘弁して!」

辰五郎を吹き飛ばした光景に興奮して、タゴサクがニカツと笑みを向ける。銀時はスタンドに触れられた嫌悪感をぶつけて応えた。

背後では熱線が舞っている。ここで銀時が倒すべき相手は1人に絞られた。

「っーわけよ、辰五郎。」

「ここは裸になって背中流し合えば許してやるぜ」

「遠慮しとくわ。ここには風呂上がりに寄る良いスナックがねえんだ」

乾いた返事にタゴサクは目を瞑る。

辰五郎の言葉、声を聞いて静かに失望のため息を漏らす。

「うーし、そんじゃ公僕殿オ。痴漢と覗き、あと建造物侵入罪と人理焼却加担罪で逮捕するっ」

「ああん?後輩のクセに生意気言いやがる。」

「こいよ、公務執行妨害でオメーら全員、死刑だ」



坂田 銀時が気を失って手助けは望めない。

立香は後ろでまぶたを落とす銀時を見て、足りない戦力以上の重圧を両脚に感じていた。

オルレアンの際のように、分断された恐怖とは別物。意識がない大切な仲間を、この特異点最強の敵から守らなければならぬ。避ける行動一つに注意しなければ、銀時たちの身体は破壊神によって散り散りになるだろう。

「その文明を破壊する」

アルテラは3色の剣をゆっくりと天に掲げて、悠然とこちらを見下ろす。悠長に構える余裕を有り難いと思った。

1秒未満の空白は心を落ち着かせるには十分だから。

「マシユ、任せた」

「はいっ——！」

初手もクソも自分にはない。サーヴァントの行動を読むのは難しいが……アルテラは単純だ。子供のように、興味が強い方に飛び込んでいく。だから、マシユに出てもらった。

予想は的中し、アルテラの興味がマシユに集中する。だが、攻撃方は想像の範疇を越えていた。

「まずはお前だ」

掲げた剣を天使の降誕の如く優しく下ろして、3色の閃光が直線を描く。熱量を収束した3色の魔力がマシユの大盾を押し退けた。

大浴場のタイルを踏み割りながら耐えたとき、衝撃で身体が硬直したことに気づく。

眩い輝きを放つ剣の魔力量が一段と上がる。破壊神は真名解放に最も近い魔力を剣に与え、大盾ごと破壊する暴拳を呆気なく実行した。

「早計だな……っ！」

破壊衝動に割り込んだ蒼い息吹。

両腕に纏う大英雄の鎧を駆使し、破壊神の一撃をその細身で弾き返す。

「ありがとうございます、ジークさん！」

破壊衝動が進む行方に彷徨うなか、動ける程度に回復した手足を無

理やり動かしてマッシュが前に飛び出した。ボディ打ちのように大盾を構えて、アルテラのリバーへと打ち付ける。

「っ——」

アルテラが目蓋が凹み、視界の上側が沈んでいく。死角となった上から、踏み込んだジークの剣が大英雄の両腕ごと落とされる。

「そのようだ。次は気をつける」

大英雄の両腕を載せた剣を、破壊神は引き戻した剣で押し留めた。瞬間的に英雄ジークフリートの筋力を引き出して、あと一ミリ剣を落とすことが出来ない。根本的に出力が違うことを見せつけられた。

アルテラの瞳に力が入る。次の瞬間、魔力放出とともにジークの身体は吹き飛ばされるだろう。

「反撃は命取りだ。立香ツ!!?」

ならば、その算段を一瞬だけ先送りにする。

自身の両腕、変身した鎧に魔力を叩き込む。魔術回路を行使して、魔力放出の妨害は成功する。

ジークの珍しい叫び声に合うように、既に立香の右指はアルテラを捉えていた。

「ガント!!」

「ガ——!?!」

アルテラが気づいた時にはもう手遅れだった。

破壊神の身体に付着する呪いのマスカラ。再び目蓋は重くなり、身体が軋んだように自由を奪われる。視界を映えていく苦しみから逃れるため、空を仰いだとき。

「行け!!」

「切り倒す」

剣を持ち直して、両腕の鎧を解いたジークが剣に魔力を込めていた。アルテラはすぐに死ぬ場面で、油断したとか、後悔の感情は一切湧かなかった。あるものは一つ。

「再…:接、続」

「待て少年!」

誰よりも壊れやすく、しかし破壊神が壊せない者たち。

彼らへの興味がアルテラ自身の退去を許さなかった。

「なにっ!？」

振り下ろしたジークの剣は、アルテラの蘇った剣撃で本人ごと大浴場の壁に吹き飛ばされてしまった。

雑に剣が転がり、ジークがうつ伏せでタイルに転がる。

『ガンドが効いてないのか!？』

呪いに耐性がある霊気には見えないぞ!？」

『いや、効いてるの間違いない。』

データ上、アルテラはガンドの呪いが残っていない。それでも動けるのなら、彼女はアルテラじゃないんだ』

アルテラじゃない？

だめだ、言っている意味が分からない。彼女はどう見たってアルテラ本人じゃないか。なのに、納得するしかない現実がある。

「先輩、私に強化を…」

「遅い。軍神の剣」
フォトン・レイ

大盾に切っ先を置いて、溜めていたであろう魔力を真名解放に注ぎ足した。マシユに伸ばした手が強化の魔術を起動する前に、破壊神はトドメを出力する。

「ぐあ………あぁー……!」

拮抗など出来るはずがなかった。

宝具に対抗する地力はこちらにない。宝具には宝具を充てる。防御として成り立たなければ、盤上の展開など素人にも読める。

「ローローマツ!!？」

ここに建国王が居なければ、だが。

ロムルスの雄叫びとともに樹木がタイルを突き破り、マシユの大盾を支え、アルテラの宝具に特攻していく。

地面に突き立つロムルスの大槍が成す加護。

防げる。そう確信するのに時間は要らない。最強の皇帝の後押しだ、ここで負けてなるものかとマシユの背中に手を置いて強化の魔術を付与しようとして。

「えっ、あれ!？」

急に軽くなった衝撃にマシユ共々困惑する。

まるで力尽きたように3色の破壊衝動は収まった。何事かと前方を確認しようとしたとき、大盾を蹴って高々に飛び上がるアルテラを目撃した。彼女の目的は……！

「ロムルスさん!!!」

「邪魔だ、建国王」

大浴場の宙空で翻り、破壊神が無防備の建国王に剣を向けた。

彼女の視線はもうこちらには向かない。俺も、マシユもまだ2人の間に割って入るだけの余裕を取り戻せずにいる。

タゴサクさんは…まずい、あっちも押されて応援を頼むどころじゃない。なにか手はないか……!?

「軍神の——」

「逃げて……」

逃げて、どうする。

ロムルスの背後には銀さんとネロ皇帝がいる。

それに、ロムルスの霊気はボロボロという話だ。アルテラの宝具を防ぐことが出来るはずもない。最悪の結果が脳裏を横切る…。

「案ずるな」

ロムルスは一言、そう放った。

死を恐れていない?…いや、死ぬつもりがないんだ。ローマある限り未来が続くと言ってくれた。俺たちはどんな苦境でも、上司の声に応える義務があるだろう…!

「マシユ、無茶を承知で行ってくれ」

「っ、はい、もちろんです!」

そして、0秒。睨み合う2人の頂点が覚悟を決めた。

「よくぞ耐えた、異国の美少年美少女よ!」

彼らの間に割って入る喝采。

頂点に咲く洛陽の花ならば、この絶望的状况を彩るに相応しい。ロムルスの背後から飛び上がる赤い影。声高く剣を手にして、宝具解放に薔薇の乱舞が突き刺さった。

「再び顔が見れて嬉しいぞ、褐色の半裸娘!」

「……………相変わらず巫山戯たヤツだ」

宙空から降り立つ破壊神。

……………ていうか、寝起きにアルテラの宝具を止めるってどういう身体なんだ!?

ネロ皇帝が目覚めている。ということは…やっぱり銀さんもタゴサクの応援に行っていた。なにがあつたから分からないけど、起きてすぐ行動する胆力は見習いたい。

「余の配下であるゲンガイとゴマルを倒しておつて！」

この借りを返さねば余の気が済まん!!!

今すぐに壊した文明とやらのツケを払って…」

「やああああー…!!!」

ネロ皇帝が勝鬨を上げる最中、全力で駆け抜けたマシユによる全力の一撃が怯んだアルテラの顔面に炸裂した。

「……………えっ」

大浴場の湯気を蹴散らし、壁に減り込む破壊神。

白目を剥いたその姿に、口上を邪魔されたネロは勿論、全員が言葉を失う。ただ1人、ドヤ顔で立香に「やりました!」と宣言するマシユを除いて。

「ははっ、すごいぞー!」

立香はぶち壊れた雰囲気の中、某プロデューサーのような返事しか出来なかった。

かがり火未満

それは一瞬の虚が生んだ産物だった。

ネロから一度は撤退したこと。致命傷も見当たらず、宝具を止められたこと。

この2つによつてアルテラの意識を拐ったことが、マシユの突撃成功の要因であつた。

『えええっ!?!ちよ、ネロ皇帝復活?!銀時君さすが!』

それにマシユもアルテラを沈めるなんて凄いで!!

………えっ、本当に?』

『目まぐるしく状況変わるからつてバグるな。』

破壊神アルテラ、沈黙を確認。残すは寺田 辰五郎だ』

マシユの容赦なき一撃で破壊神を撃破したことにロマニの脳みそはパンクしている。

対照的に銀時は押し殺した笑みを浮かべた。突貫してきたラスボス風の敵を返り討ちにして喜ぶ立香とマシユを見て、懐かしい思い出が過ぎつたからだ。

「おいおい、アンタの連れ大物ぶつて出てきたクセにやられてん…ぞ?」

目の前にいるはずよ辰五郎の姿がない。たったいま話しかけたはずが、スタンドの如く消えたことで驚愕に目を開く。

「あくらら、派手にやられたな。」

お宅ら強いわ。俺が見誤つちまったよ」

表情が曇る2人の後方、倒れたアルテラのもとに辰五郎はいた。立香たちの緊張感も元に戻っている。

「いつの間に移動しやがった?」

「分からない。辰五郎の動きじゃねえよ。」

なにか別のサーヴァントを取り込んでやがる」

「合体つてことか?おいおい、序盤からインフレとか打ち切り臭しくないんだけど」

軽口を叩くが余裕はない。

さつきまで2人がかりで辰五郎を圧していたのは、手を抜かれていたと知ったのだ。あの速さ……いや、跳躍と言うべき能力。似たことをする人物を銀時は知っている。

恩師の姿をした彼を。

(……違う。あれは、ヤツとは別物だ)

脳髓に走る痛みを抑える。

気づけば辰五郎はアルテラを抱えていた。

考え事をしているうちに逃がしては、せつかく倒した破壊神が復活してしまう。

「ま、良い経験だろ。たまには負けねーと今みたいに驕り高ぶるからな。ケンカは勝つだけじゃつまんねえ。」

「つーわけで、今回は俺たちの負けだ」

踏み込めず様子見に徹していた立香たちに言い放つ。

するとダ・ヴィンチが耳元にモニターを映す。

『銀時君、ここは抑えてくれ。彼は撤退する気だ。』

あの動き、全員で取り囲んでも捕まえる保証がない』

「……………分かった」

頷いた。頷くしかなかった。

いま背中を向けて立ち去ろうとしている男から、やつと殺気が溢れている。明確に追うなど伝えているのだ。そうまでして、ヤツはアルテラになにを教えようとしたのか。

「アンタ、またお登勢を残して行くつもりかい」

1つの疑問を考えるために口を閉じたとき。

タゴサクと霊気を入れ替えたお岩が、辰五郎の表情を歪める言葉を投げかけた。

「…………お前のそういう所が嫌いなんだよ」

「そうか？俺は好きだぜ。どんな想いでお岩が言葉掛けたか、手に取るように分かる。」

ヒーローごっこでせつかくの機会、ぶつ潰すつもりか」

吐き捨てる言葉に反応したのはタゴサク。

スタンドよりも素早く身体を容赦ごとに入れ替えて、辰五郎に厳しく答えた。

「はっ。今は無いだけだ。いずれ手にしてやるさ」

笑って言い返す。無いという理由も、手に入れる手段も全く想像がつかない。だが、なにか方法はあるらしい。

匂わせる言葉選びをする辰五郎に一步踏み込んで、ネロ皇帝は愛剣を向けて目を見開いた。

「お登勢とは貴様の愛する者か。ならば余は……たわけ！と貴様を罵ろう。会うのが怖いようには見えぬぞ。」

未来の男はこうも性根が不甲斐ないとは、嫁も愛想を尽かそうて「……………」

そして、剣を振り抜く。

感情のままに円弧を描くと、薔薇と炎の魔力を放って2人に迫る。辰五郎はあっさり避けると、

「1つだけ忠告しといてやる。茂茂公はローマ帝国から出すな。次、定々に捕まったら負けるぜ」

崩れた大浴場の壁際、敗者の義務と言わんばかりの助言を残して立ち去った。

ロマニとダ・ヴィンチが2人の逃亡を確認して、漸く大浴場の防衛戦は幕を閉じるのだった。

「皆の者、大義であった。余の不在中、よくぞローマ帝国を守ってくれたな。盛大に歓迎するぞ!!」

ブリーフにローマ帝国を乗っ取られたことにネロが気付くのは、もう少しあとのことだったりする。

く前半終了く



そうして本来の目的を果たせないまま、辰五郎はアルテラを抱えて帰路に着いた。

向かう先は宵闇の帝国、未完成の江戸牢城。

「……………なわけにもいかねーや」

連合帝国壊滅のいま、あそこを支配する男の元に滞在するのはネギを背負った鴨と同じ行い。打つ手を誤れば即詰みの特異点が……、ローマなのだと辰五郎は知っている。

辰五郎の所属は置いておくとして、快復したアルテラでなければ定々の元には帰せない。残念だが、いまの辰五郎にその手段はない。

「はあ……。いつそ、殺るか——」

逡巡一瞬、腰に手を伸ばして。

「その必要はないぞ、辰五郎」

平原のど真ん中で、下劣な言葉は降された。

辰五郎が振り向くと、城に籠もっているはずのサーヴァント、徳川定々が佇んでいる。

「おおっと、将軍様が自らお出迎えとは何事で？」

「なに、私の大事な兵が不躰な男に拐かされたと聞いてな。こうして取り戻さんと立ち上がったのだ」

定々の朗らかな微笑みを見て、吐き気を催すが内側で押し殺す。生粋の悪から逃げることでだけしか考えられない現状に嫌気が差したせいだ。

だが、仕方がない。定々さえ殺せば、あとのことは後続がどうにかしてくれるから。

「アツティラに貸した靈気分の働きをして貰わねばならん。それを拒むというのなら、貴様が立て替えるのが筋だ」

「へえ、おいくらだ？」

QP稼いでくつから、値段を教えてくださいよ」

「なに、そう高いものじゃない」

滲み出る殺意から飛び退く。

「その靈気、城に捧げろとは言わん。死ね」

刹那、世界に零れ落ちたのは城下町の風景。

心臓が鳴り止む。己が護るべき場所を見せられて、身体が錯覚したのだ。本来の使命を成し遂げた、と。

きつと、この道を真つ直ぐに歩けば…馴染んだ店が見えてくる。あの暖簾を潜って、ふざけた世界から先に降りよう――。

(大馬鹿者が)

無力になる直前、内側の靈気が暴れた。

主に、辰五郎の頬を殴り、脛を蹴った。

「――つぶねえ！」

定まらない意識ではあるが、偽りの町から帰還する。

そして悲報を受け止めた。定々の宝具は完成間近にあり、本人は不死に限りなく近づいてしまった。

「くそっ！仕方ねえ、ここで解放^{っか}うぜ」

このままでは倒すことが不可能になる。

明日の世紀末を想像して…否、実現すると確信したがために真名解放に乗り出した。

それを見て嗤う定々が手を挙げようとしたとき。

「邪魔だ」

「があっ」

辰五郎は血に塗れて、3色の破壊衝動に潰されていた。

「……………見事だ、アツティラ」

暗転する視界が脳と接続したのは、トドメを刺しに来た名前を知ったせいだ。

声を出そうとして、喉が鳴らしたのは血液を含んだ泣き声。辰五郎は恨み言も、感謝も伝える手段はもう壊されてしまった。

“会うのが怖いようにしか見えぬ”

「なん……………で…？」

掠れる視界が閉じると、耳元にネロ皇帝の言葉が聞こえてきた。人の事情も知らずに、ずけずけと言ってくれると腹を立てたが、もう言い返す相手もない。

「致命…的、に……………噛み合、え…ない……………」

そういう運命なのだ、独り自虐して意識は霧散した。

「ローマ帝国の外にいる客将は全て潰した」

それだけを言い残し、辰五郎を始末したアルテラは何事もなかったように連合帝国へ歩いていく。

止める理由のない定々は笑顔で見送った。

遠ざかったアルテラから視線を移して、ローマ帝国に眼を向ける。

「……………ふむ。ローマ帝国の中を遠見することは不可能か。なにか細工をしているな。まあよい、茂茂さんが居ることは知れた。器さえあればどうとでもなる。」

それに…ネロ皇帝も出てきた。敵ながら辰五郎は上手く転がしてくれたじゃないか。準備は整ったに等しい」

嗤いを殺しもせず、定々はソラを仰ぐ。

そして、側に控えている暗殺者に幾度目かの殺意を渡す。

「然し、賊がいる。」

白夜叉……………ヤツは殺せ。私に近づけるな」

「……………」

「理由が知りたいと？良い、かつての仲間を斬るには理由が必要だろう。」

あれは鬼。獣を喰らう者。私を殺す悪だ」

地面を踏み荒らさんほどの苛立ちに、暗殺者は黙して応えた。

自らを殺せないと知りながら、その入念な警戒には見上げ果てるしかない。

「明日にも決着がつく。ヤツは疾風の如く国を陥れた前科がある。先を越されるわけにはいかない。」

育ちきる前に根絶してくれる。

芽吹くのは我が城、我が国だけでよい」

暗殺者はそれでもこうべを垂れる。

己の信じる正義^真のために。

ローマ帝国の破壊者

女神の住まう島。

アルテラがその存在を知ったのは、ローマ帝国軍の分基地を破壊したときだった。報告書にあった島の位置を見て、拠点に戻るついでに破壊する。スナックを買いに近所の駄菓子屋へ行く感覚で立ち寄ったのが、この特異点最大の分岐点と言えた。

「……っ、何者だ」

片膝を着きながら、自分を振り返りにしたサーヴァントを睨みつける。

藍色の上着をダボつかせ、右手の十手で肩を叩き、空いた左手は物足りなさそうに宙に揺れる。破壊神の真名を見抜いたことで裁定者^{ルーラー}と判明した男は、破壊神の攻撃を十手と身軽な足取りで煙に巻いていた。

「こっちのセリフだぜ。かつ飛んできたかと思えば、島の木々を薙ぎ倒しやがって。

女神さん、怯えて引き籠もったじゃねえか」

「それは、破壊しか知らない私には仕方ないことだ…。

私の破壊で隠れたなら、力尽くで引き摺り出すまでのこと」

結論どころか、行動原理すらも破壊に染まる思考。融通の利かない結論は、周りの頭を悩ませる程度では済まされないものだ。

「わっかんねくやつだなあ。んな戦闘民族脳だから易々と利用されんだよ」

「ガハッ——」

あつという間に距離を跳躍した裁定者は、呆れと叱咤のゲンコツを振り下ろす。

「物種あつての破壊だろ。……つっても分かんねえか」

ひよいと後ろに飛んで、減り込んだ顔面を上げる破壊神を見ながら。裁定者は一考して手を叩いた。

「うし、お前の全力を俺にぶつけてこい」

「はっ？」

「それで俺が受け止めきつたらよ、お前徳川んこの大将定々、討つのを手伝え」

「……………馬鹿なのか」

その提案に破壊神は目を丸くする。

裏切れ、と真正面から言われたのだ。当然の反応といえよう。だが、裁定者には破壊神が裏切ってくれるという確証があった。

いや、そもそもが裏切るなどとは可笑しな表現だろう。破壊神は定々の下で舞台が整うのを待っているだけだ。言いようのない不満を満たす、その口約束に大した期待もなく頷いているに過ぎない。

「馬でも鹿でもねえ。俺は寺田 辰五郎。」

ただの江戸の岡っ引きさ」

だから、こちらがそれを越える舞台を示せばいい。

これはそれだけの、実に本能的な話なのだ。

「ほら来いよ、クソガキ」

煽りと、期待感。

結局は防げなければ殺すだけの存在だ。

突然現れた裁定者が、全力を出すのを待つと言ったのだ。

破壊神が止まる理由も、否定する材料もなく。

「フォトン・レイ軍神の剣——！」

真名解放は逡巡の果てに、辰五郎へと振る舞われ…。

僅か数日前の記憶を思い出した。

あの時、結局は宝具を真正面から受け止められてしまった。厚い義によって破壊神を迎えた辰五郎は、いま。

「……………」

軍神の不意の一撃を受けて呆気なく地に転がった。

無敵にも思えた寺田 辰五郎の限界を越えて、アルテラはトドメを刺すための魔力を軍神の剣に込める。

「……………」

一瞬、微かに開かれた瞳がアルテラを見つめる。

交差した視線を、しかし容易く千切る。3色の魔力が地面ごと辰五郎を破壊して、砂煙を巻き上げて数日ばかりの縁を空に還した。

「……………見事だ、アツティラ」

勝利を手にする、そのためだけに。



大浴場での激闘が終わり、ここは玉座前。

ネロ・クラウディウスは仁王立ちで、これまでの経緯を伊東の口から聞き終えたところだった。

「うむ。報告ご苦労である！」

「礼には及びません。これも全てはローマ帝国のため。この鴨太郎、靈気損傷も惜しまずに奮闘する次第です」

「その意気込み、此度の留守を預けた甲斐があつたというものよ。だが靈気は傷つけてはならぬぞ？カモが欠けた穴は誰にも埋められぬゆえな！」

肩を叩いて感謝するネロの態度に、伊東は吊り上がる口角を手で隠していた。

いまの伊東の靈気は、誰かに尽くすことを芯に据えている形になっている。例えば真選組局長でなくとも、相手が相応の“カリスマ性”を持つていれば伊東の靈気は燻られ、出力が上がっていく。

逆に、“カリスマ性”に欠ける相手がマスターにでもなれば、遠くない未来になにが起きるかは言うまでもない。

「それにしても、ぐぬぬ…アルテラめ。フォーリ・インペリアーりまでも破壊するとは、許せぬ！だが…それよりも許せぬことがある

！」

ネロが腹を立てる理由。伊東の口元を隠す態度ではなく、アルテラの侵攻でもなく、いま自分が立っている場所にあった。

ネロは皇帝の玉座を指差して、ローマ皇帝の座を預けていたサーヴァントに憤慨を申し立てた。

「茂茂エ!!：貴様なぜ余の玉座に腰を下ろしておる!？」

ここは復活した余が華麗にそこに座り、騒々と指示を出す場面であろう！」

そこには、ローマ兵が次々に持ってくる資料や報告を処理していくローマ帝国仮皇帝、徳川 茂茂が座している。

「すまない…。ネロ・クラウディウスという役からまだ抜け出せない自分がいるのだ」

「むっ：それは頼んだ余が配慮すべきことか…」

「いや流されてんじゃねえよ」

「あいだっ!？」

憤慨が簡単に消えていく少女の後頭部を、銀時は手のひらで1発引っ叩いた。

「何をするギントキッ！余を助けた恩が今ので全部吹き飛んだぞ！」

「吹き飛んでんのはお前の地位だ。そもそも、お前が どうやって派手に登場すればローマ兵が喜ぶと思う？なあ、なあ！」とか言って、裏で立香たちとグダグダやってたからだろうが。

アレ無かったら今頃お前がローマ皇帝だったよ」

「うわあああああ！言うな！それを言うでない！」

あれはタイミングが悪かったのだ！方針も決まり、いぎ満を辞して余復活!!？と飛び出したら…」

”—————”

ハツラツと炎とともに飛び出したネロを、ローマ兵たちは状況が飲み込めないまま見つめ、そして。

”不審者です、お下がりにください皇帝!”

”い、いや、彼女はネロ・クラウディウスで…”

”いや然し、ブリーフ穿いてないです!”

不審者扱い、果てにはブリーフで皇帝を判断するまでに変貌していたのだ。

『恐らく、“カリスマ”だね。茂茂公のサーヴァントとしてのスキルによって、ローマ市民たちはブリーフこそ史上という認識になってしまっているんだ』

「ローマ皇帝に勝るカリスマ性!？」

なにこいつ、ブリーフ以下ってこと?」

「銀さん!はつきり言っちゃダメでしょ!」

ネロの膝が崩れ落ちた。

茂茂のブリーフと自分の男装を比べながら、宇宙の彼方へと思考を放流した矢先。

「ご報告がございます!!?」

1人のローマ兵がネロの前に立ったのだ。

「……うむ、許す!このローマ帝国第五皇帝、ネロ・クラウデウスがしかと聞き届けよう!」

「……………」

ネロの弾けるような笑みに反して、ローマ兵は首を傾げる。そして、ネロの後ろに立つ伊東へと再び立ち直して。

「失礼しました、伊東殿!ローマ真選組、連合帝国諜報班からです。破壊神アルテラの襲撃について——」

「よし分かった!!」

「えっ!?し、然し……」

「あつちだ、いまから皇帝による極秘会議が始まる!とにかくあつちで報告を聞こう!」

曇った眼鏡をローマ兵に向けて、そそくさと部屋の隅に連れていく伊東。彼の内なる叛逆心が燦っている現場……というより、統率のためにと少し調子に乗った結果のローマ真選組なのだが。

「……………」

ネロは両膝から崩れ落ちて、半泣きで眩く。

「……………」余のローマ、乗っ取られてる?」

『お伊伊伊!?もう見てるこつちが辛くなってきたよ!』

僕たち人理救う側なんだよ！なんで江戸で上塗りしちゃうの!?!」

「余が居ない間を任せるとは茂茂に申したが…よもやローマ兵たちの心を驚掴みにするとは思わなんだぞ!?!」

玉座に座る茂茂を見ながら、握り拳を地面に叩きつける。

「俺たちローマ守りにきたのに、既にローマ制圧されてますけど…」

『うくん、大丈夫とは言いがたいね。ネロ皇帝の失脚は悪影響でしかない。最悪の場合、茂茂公とバトることになるかも』

特異点を修復しに来た側として、そんな未来は避けたいところ。

焦る立香とマシユを他所に、銀時は事の重大さに気づかず耳を掻いていた。

「名前さえなんとかなりやいいんだろ。もう將軍を皇帝にしちまえよ」

「流石にまずいと思うぞ、マスター」

「じゃあ2人で人気投票でも…」

「もつとまずいよー!」

「ローマ帝国を侮るな」

ふらりと立ち上がるネロ。

怒気にも近い声音は静かな情熱を想わせる。

「これしきの苦難、飽きるほど食らうてきたわ。余の策略に恐怖せよ」

銀時たちが思わず口を閉じるほど、ネロの活力は漲っていた。

「今日から」ネロ中法度」を定める!これに反いたものは謀反と見做す!即刻肅清、肅清だ!」

「お前が一番心を驚掴みにされてんだろがアア!」

銀時による2度目の引つ叩きがネロの後頭部に炸裂した。

その後、頭痛が発動したり髪の毛が抜けたりして、大泣きするネロを宥める頃には日が沈みかけていた。

落ち着きを取り戻し、ついでに皇帝の座も涙と鼻水を流して取り戻して。

「では手始めに……余を手にかけてしようとしたサーヴァントのことから問おう」

玉座にご満悦で座ったのも束の間、時間が惜しいとばかりに議題を口にした。

「伊東、あやつは貴様と同じ服装だった。てつきり味方と思って油断したわ……あの者の説明をせよ」

「彼は斎藤 終^{しまる}。真選組三番隊隊長です」

「なっ——!?!」

開幕、銀時の耳を疑う人物の名前が挙がる。

それも、敵……定々の味方として。

「なんだ、知ってるようだな」

「そりゃ、死線を一緒に潜り抜けたヤツの1人だ。どうして終のやつが定々の下にいやがる」

「分からない。口数の少ないやつだが、理由もなく茂茂公に刃を向ける隊士ではない。

特殊な事情を抱えているのだろう。定々とサーヴァントとマスターの関係にある、とかな」

本来従う側のサーヴァントがサーヴァントを従える。ルール無視の横行を、既に立香たちはオルレアンで見してきた。竜の魔女の例がある手前、伊東の予想には口を閉じるほかにない。本来は聖女であるマルタや、生前に願いを叶えた地雷亜すらも悪に染めた。ならば、治安維持組織に所属しようとも、マスターの意向1つで鬼にも変わる可能性は大きい。

「シマルによつてローマ帝国の前線は崩された。あとは貴様たちの知る通り、カモとお岩、茂茂を残してアルテラめに余の客将は一掃、と。……カモ、連合帝国の戦力は？」

「破壊神アルテラ、斎藤 終、そして徳川 定々を残して連合帝国皇帝は退去しています」

「ううむ……。む、タツゴロウとかいう男は含まんのか？」

「もしや諜報員か？」

「いえ、あれは味方ではありません。ただ……」

ネロの問いにほんの少し躊躇って、伊東は自分の意思を度外視した答えを取り出す。

「――失敬。私としたことが、寺田のことを失念しておりました。寺田含めた4騎が敵主戦力となりましょう」

「あまり深いことは聞かんでおく。義兄弟とか、性別がとか言われるとやり難いからな！」

敵のことを少しは知れた。あとはどうやって連合帝国の居場所を明かし、どうやって攻め入るかだ」

「所在については既に判明しております。ここから南西に徒歩半日の位置にあります」

「あれだけ探して分からなかった居城が見つかったのか！やるではないか！」

「伍丸博士の置き土産で探し出せました。

ですが、彼のカラクリを維持するには魔力が足りず……もう稼働は不可能です」

「そうか……。あやつの働きに報いれなかったのが無念だ。

「そうだ、ギントキよ。お主はゴマルたちの知り合いだったな？」

「ん？ああ、まあそんなところ」

「ゴマルやゲンガイに会ったら伝えてほしい。

ローマ帝国第五皇帝ネロ・クラウディウスが感謝を伝えたい、とな！」

「わーったよ」と手のひらをブラブラさせて答える銀時。マシユや立香たちは大人しく話を聞いていたが、銀時は飽きて欠伸をしていたので話半分で聞いていたことは短い付き合いでも分かった。

『銀時君、気軽に返事してるけど……』

『突発的に現れた破壊神。皇帝暗殺未遂の隊士。江戸の岡っ引きに、江戸の将軍とききたか。連合帝国というわりに、皇帝はいないね』

そして、思慮して知恵を回すロマニたち。

『まだ表に出ていないだけかもしれない』

『そのところどうなんだい、神祖ロムルス』

二人の結論。

ロムルスは連合帝国と関わりがある、だが敵ではない。それでも頼るには躊躇してしまうのは、その真名とローマの現状を考えれば仕方なかった。

はつきりと白黒を着けて、特異点修復に繋げることを二人は選んだ。

「いや、誰だよ」

「建国王ロムルス。ローマを築いた人物として世界的な知名度を誇ります。そして……恐らくは——」

マシユが言いにくそうに、そして緊張が増す心臓を抑えてロムルスを見据える。

「余は連合帝国の王として、ローマ帝国を滅ぼすために興された。其方たちの憶測は正しい」

ロムルスは姿勢を崩さないまま、堂々たる風貌で敵であったと宣言した。細くなつていく銀時たちの瞳を制止するのは茂茂。

「安心せよ、カルデアの遣いたち。」

我が友はローマを愛する者。敵対の意思はない」

『聞くところによると、定々の支配力は歴代皇帝を従わせるほど強力という。』

彼の靈気ではとても抗えるとは思えないよ』

「それは誤りだ。定々ならば今の余でも倒せる。抗えぬほどの束縛力はない。然し、あの男は余の靈気に爆弾を打ち込んだ」

「爆弾……!?!」

「“狂気”だ。いまも余の内側で燻っているコレは…弾ければ殺戮兵器へと変貌させる。我が子らには、これが効いてしまった」

聞く者たちは愕然とする。歴代皇帝たちが敵として立ちはだから真実は、ロムルスを想つてのことだと知ってしまったからだ。

「ロムルス王…ローマの誇りを守る為に…歴代皇帝たちはローマを攻めざるを得なかったと。ひどい…!」

「内ゲバ引き起こして自分は高みの見物か。」

とても不愉快な男だ、許せない」

怒りに震えるのはマッシュやジークだけではない。モニター越しに黙々と状況を纏めているロマニたちや、目の前で静かに話を聞いている銀時たちも2人の言葉に同意見である。

「あれ？ならロムルスはなんでここに？」

そんな中、立香が首を傾げて当然の疑問を投げかけた。

ロムルスを人質にしているのなら、ここにロムルスがいるはずがない。頭を捻っても分からない疑問は、

「靈気を捨てたあと、記憶を失う前の茂茂に連れ出された。敵を救う胆力、まさしくローマであつた」

「余が…」

靈気を捨てるという、無茶苦茶な手段とともに答えが出された。

『靈気を捨てた…？』

ロムルス王はいまも現界しているじゃないか』

靈気を捨てる。即ちこの世界からの退去であり、消滅を意味する。靈気を捨てても現界する力など、サーヴァントにあるまじき反則もいところだ。

ほんの一部の例外も許さない話だが、それを可能にする条件がここにはあつた。

「簡単な話さ」

ローマ兵たちが出払つたところに、重みを払つたような足音で現れたのは仙望郷の女将、お岩だった。

どういう関係があるのかロマニたちが首を傾げる。死者を成仏させる特殊な温泉を営んでいることは聞いたが、ロムルスの話と繋がる節が見当たらない。

『お岩、差し支えなければ教えてもらえるかい』

「仙望郷のスタンドたちがロムルス王に靈気を与えてるんだよ。ここが日本なら無理だろうけど、ローマに集うスタンドだ。

ロムルス王によく馴染むものを提供できてるのさ」

捨てた靈気を志願者たちの靈気で補う。

言うは易しの理論を、スタンドというサーヴァントとも言い難いも

ので代替えしてロムルスは現界していた。

『瀕死のサーヴァントどころか、靈氣が無いに等しい状態から持ち直せるっていいのか!?!』

『サーヴァント未満だが、微かに靈格はあるようだ。チリも積もれば…というやつでも、これは中々にすごい数が集まらないと出来ない芸当だろう。』

面白いね、お岩。これは宝具かい』

「そっすよ」と頷く。

「仙望郷があるローマ帝国だけなら現界し続けられる。外に出れば、吹雪の真っ只中の生命のように消えるさ」

ロムルスの生存が保証されるのはローマ帝国のみ。あまりにも狭い場所でも、ロムルスはローマのためにスタンド達に感謝して、残り僅かな時間を愛し尽くすつもりだと窺い知れる。

『普通に反則級の宝具じゃないか!』

これで伍丸博士たちは復活させたり出来ないの?』

「ダメだ。未練があるスタンドを成仏させるのが仙望郷の役目。この世を彷徨うなら癒せるが、成仏すりゃこっちの管轄外さ」

ダ・ヴィンチの興奮をお岩はあっさり切り捨てる。そう上手くいけばこうも苦労はしないだろう。

肩を落としてモニターの向こうに消えるダ・ヴィンチ。

「あゝ、盛り上がってるところ悪いですが」

熱が増す事実が次々と飛び出す空間に、立香の申し訳なさそうな声が割り込む。そろりと挙げた右腕、その下で。

「ローマの父、味方、殺戮兵器……」

ネロ・クラウディウスが目を回して倒れていた。

「ネロ皇帝、ネロ皇帝!?!お気をしっかり!」

「しまった。神祖の衝撃的事実に脳がやられたか」

着いていけないというよりは、定々に向けた怒りだけで心のキャパが限度一杯となってしまう。偉大で敬愛するロムルスへの心配がソレを上回って、身体が熱を出して倒れてしまったようだ。

「話し合いはここで切り上げるとしよう。」

ネロ皇帝の体調を確認し終えたら最後の話をする。カルデアの諸君、あてがった部屋でしつかりと休養してくれ」

お岩がネロを担いで行く。側に佇んでいたレイが会釈してから扉を開けて、伊藤は言い終えるや彼女たちのあとを追う。着いていこうとするロムルスを制したのは、起き上がったときにネロが再び寝込まないようにするためだ。

「最後の話って?」

解散の空気のなか、銀時が引つかかる言葉を聞く。

扉の向こうに消えかけた伊東は立ち止まると、

「無論、徳川 定々の討伐だ」

この特異点最大の問題、聖杯の所有者候補である首魁の名を口にした。

なんで重要なことって直ぐに話さないんだ

ローマ帝国を一望出来る石造りの邸宅。

人工池を取り囲む庭園の淵に、伊東 鴨太郎は脱力した肩を石柱に寄せてソラを仰ぎ見ていた。視線の先にあるものは夜空で輝く月のように見える。だが、月よりも輝く存在を知っている彼には、月の明かりを手にしても頼りないと、理不尽な比較を無機物にぶつけていた。

「流れ星でも見えんの?」

「いいや。ソラですら僕に情は零さないらしい」

返事を送った相手は坂田 銀時。

人並みから外れ、ローマで唯一と言ってもいいほどに瞬きの音が聞こえそうな場所で、真逆の性を持つ男が現れたことにため息をひとつ。

「お前も土方みてえな反応しやがる。実は仲良しだろ」

「なわけあるものか。アレの反応は闘争を煽られるものだ。僕のは憩いが一瞬で終わったことの落胆。歓迎の仕方が違う」

「どんだけ俺を喧囂扱いですんだよ。お宅らのところと大して変わんねえだろ」

お宅ら、つまりは三桁の人数いる真選組と、たった三人の万事屋を同等の騒音と言っているのだ。どれだけ万事屋が迷惑な組織かを自白しているものだが、伊東は指摘するだけ疲れると再びため息で答える。

価値を生み出さない言葉のやり取りは生前、何度もしてきた。決まって不快感や憤慨で伊東の内側は染まり、その度に相手を同じように組織うちがわから食い殺してやったものだ。

だが、真選組には出来なかった。

土方 十四郎という、最も殺したかった男を。

何度といがみ合い、人生で最も無駄と価値のないと思っていたやり取りをした男に、最期は引導を渡された。

あの日、気づいた。

価値を生み出さないと思っていた土方との言葉のやり取りは、人生で最も得難い絆を育んでいたんだと。

「僕たちの世界のことを、考えたことはあるか」

「ねーな」

ふと、そしてやつと思いついた言葉。誰かに聞こうとして、ローマの平穩を覆さんと迫る狂気と対峙するあまり問えなかった伊東の疑問を、銀時は鼻くそ交じりに即答してみた。

「……………実は僕もだ」

「質問したつてことは考えてんだろ」

「いま、ふと浮かんだ疑問だ。ずっと考えてることは別にある。

僕たちの知らない世界の危機に、何故この世界を知らない僕たちが喚ばれたのか、とかね」

「もう一週間以上も居んだろ。誰かと肩並べて寝るときにでも聞かなかったのか」

「ないよ。ここに来て一度も寝ていない」

「……………どういうことだ」

冗談にしては場違いな声音で言い放つ。

伊東は冗談が似合わないとかいうイメージを抜きにしても、その目が本当だと語っていた。

「僕たちサーヴァントは寝ずに活動できる。

便利だぞ、魔力さえ供給されていれば無限に本を読めて、知略を重ねられるからな」

「そーいうことかよ。とんだブラック企業だと勘違いしたわ。…つか、ジークだって寝てんぞ。寝なくてもいいだけで、寝たほうがいいんじゃないのやっぱ」

「当然だ。生きた年月だけ就寝してきた身に、寝ないことを強いるほうが精神的負担は大きい。剣の修行を積んでいても、睡眠欲に抗うのは僕でも難しいよ」

「一週間も寝ないヤツが言うとか自慢にしか聞こえねえな。だいたい、元は部外者のお前がそこまでするほどローマやばいのか……………いや、

お前まさか」

寝ずに2、3日経つだけで人間の体調は悪化の一途を辿る。脳が寝ないことの悪影響は計り知れない。サーヴァントは寝ずを出来るかと実行出来るのは、普通の状況とは言えなかった。

そうまでする理由は、同じ立場の敵を注視することに他ならず。

「そう、敵がいつ襲ってくるか分からん。休むことを恐れ、暗殺に警戒し続けたよ」

「枕が変わると眠れないタイプか。ダメだろ、そんなんじや戰場は生き残れないよ。……あれ、違う？あつ、もしかして寂し」なにが悪いっ！」ぼっち!？」

飛び蹴り顔面1発。

風を切って飛んでいく銀時。

「おつといかん、思わず土方君のような振る舞いをしてしまった。もつと賢く生きなければ」

「今の結構効いたよ!？」

俺の頭上に「クリティカル」って表示されたからね!？」

「大丈夫だ。君にはガッツが1つくらい付いていそうだ」

「マスターは画面の右上から降りられないんだよ!？」

銀時の弁は、画面下に表示された『HP：1』という心許ない数字によつて否定される。そもそも木刀でサーヴァントと渡り合う男に、画面右上でヌクヌクしてると言う方が無理だ。

「つたくよお、お前は男のくせに考えすぎだ。

皇帝と将軍、二人のために働いてるんだ。ローマも江戸も見えてるに決まってるんだろ」

怒りの矛を収めて、伊東と同じ壁に背を預ける。

同じようにソラを見ながら投げってきた言葉に、

「……そうか、そうだな。全くだ」

深く考えず、そして胸に沁み渡る言葉を受け止めた。

生前と同じことを繰り返さないか、サーヴァントとして召喚されて、定々の暴虐っぷりを知ってからは不安が渦巻いていた。それも、たった数秒で銀時は解消してしまったのだ。

まるで、土方のような不器用な言い回しで。

「やれやれ、君のことは苦手なようだ。顔を見てみると憎たらしい顔を思い出す。疲れた、あく疲れた。休息が必要だ」

「あくそうしろそうしろ。寝て忘れろ」

肩を壁から浮かして、軽くなつた心とともに歩き出す。

柱の向こうに消える直前、伊東は立ち止まると。

「生きていた自覚のある者もサーヴァントとして現界している。平賀博士やお岩殿がそうだ。

この聖杯戦争は既に狂っている。用心しろ」

そう忠告して返事も聞かずに行ってしまった。

伊東の言葉は、この先が通常とは違つた運命になると予感してのもの。ただ、銀時には全部が異常事態だから、なにが狂っているかの區別を付けるのは難しい話だった。

—
—
—

「それで。伊東がやっと寝静まる頃合いに暗殺を仕掛けようつて魂胆ですかい、旦那？」

伊東が休憩に向かった直後、銀時は欠伸をしながら睡魔を吐き出して、壁の反対側に立つ男へと問いかける。

余裕綽々の態度に呆れながら姿を見せたのは、昼間に將軍暗殺を目論んだサーヴァント、寺田 辰五郎だった。

「——お前、なにがあつた」

ただし、その姿は倒れたアルテラを連れて逃げた時の無傷とは程遠い。額から流れ出た血の痕、裂かれて焦げた服、自由には動けない足元を見て、予想外の姿に銀時は目を見張る。

「…ホラよ」

「なんだよ、これ」

辰五郎は銀時の質問には答えず、何処からか取り出していた一本の

刀を柔らかく投げ渡す。

「それいっなら定々を斬れるからよ、あとは頑張って近づけ」
受け取った刀を見る。

銀時の目は、これの素材が何かを直ぐに理解した。

「この刀には、魂が宿っていると。」

なぜそう思うのか。納得してしまったのか。

きつと、そう……きつと、違う形で銀時は知っている。生命の在り方は、無機物でも変わらないと知っているからだろう。

「んな説明で分かってやれるほどの仲じゃねえよ」

「はっ……頭カラっぽにして定々斬りやいい。」

コレじゃなくても殺せるけどよ。また野郎の顔を見たくねえなら、コレで殺せ」

「……………」

馴れ馴れしい辰五郎の態度に訝しむ。

「お前、定々の味方か、俺らの味方か、どっちなんだ」

「野郎の味方なわけあるかよ。」

言っただろ？俺は、正義の味方だって」

言葉の真意は見抜けない。渡された刀で定々を斬っているのか……いや、斬る必要があると刀が訴えている気がして、それが銀時の胸中で葛藤を生む。

背を向けて離れようとする辰五郎に、なんと行って足を止めるか悩んでいるとき。「あっ！」と声を上げた辰五郎が、口元の血を拭って振り向く。

「その刀の名前は、最後の王」だ。大切に扱えよ」

背景が何も見えないまま、辰五郎が立ち去るのを止める気は失せてしまった。

刀らしくない名前に、呆気に囚われてしまったせいかは分からない。1人の男の顔が浮かんで、辰五郎との関係性の皆無さに今度は首を捻る。

生前の関わりはないはずだ、そうすると死後……サーヴァントとして

なにかあつたに違いないが。

『あれ、銀時君？なんか今、少しだけ通信が乱れたんだけど何かあつたかい？』

場の雰囲気をぶち壊す声を聞いて、銀時は考えるのをやめた。

「どいつもコイツも話したがらねえ。

ぼっちぼつかじやねえか、ローマは」

『えっ、ぼっち？』

だだ、誰がぼっちだって!？」

鼻くそをほじった人差し指で、ロマニの顔面を指差す。

面倒だから、定々を斬ったあとに辰五郎を探して聞こう。知ってるやつに聞くのが一番手っ取り早いもの。そう言い訳を並べて、睡魔に降伏した銀時は充てがわれた部屋へと戻っていった。

化け狸の皮算用

連合帝国を象徴する石造りの城。

一週間前までは歴代皇帝、加えてローマ歴戦の将たちが居座り、立ちほだかることでローマ帝国を滅ぼさんとしていた。伊東が一週間もの間、その襲撃に警戒せざるを得ないほどに殺意は鋭く、愛国を裏切る姿を見た伊東は心に傷を入れられたものだ。

「来たな」

連合帝国の宰相、徳川 定々は目蓋の奥の瞳をゆつくりと覗かせながら呟く。瞳の裏に視えるものは、要塞の如き装甲で大地を駆け荒らすカラクリ仕掛けの戦車。あけっぴろな天板で連合帝国へ向けて進軍するのは僅か4名の自殺志願者だ。

定々の笑い声を聞き届ける者は2人のみ。

アルテラ、そして……斉藤 終だ。

手元にある手駒としては心許ない。

いや、定々が信頼に足る手駒はローマに来てからは一騎、1人たりともなかった。

「暗殺合戦を仕掛けられ、〃ローマの盾〃が討たれたことが一番の痛手か」

定々は元よりこの世界での知名度は無く、靈気は最下位を奪い合うほどに弱い。支配下にしたと思っていた皇帝たちでさえ、謀反を企てていたほどには。例外といった特例も持ち合わせていない男の支配力など、皇帝たちを心から動かすことも出来なかったのだ。

故に、定々は皇帝たちの処分を実行に移し始めた。都合良く現れた破壊神を利用することに躊躇いはない。

「ローマ帝国との正面衝突をする他になくなってしまった。カエサル、貴様たちの思惑通りに事が運んでいるぞ」

状況を利用して、最善を尽くした手持ちが今となる。

一度敗北しているアルテラ、白兵戦ではA級サーヴァントに手が届かない終。表面上、敵に割れている情報を纏めれば降伏必須の布陣

だ。

「だから決めている。歴代皇帝の残滓が残るこの地で、今代ローマ皇帝を喰らい我が国の礎としてくれよう」

醜く果てる唇を噛み締めて、悪鬼の心が燃え上がる。

逆境だから怒りに燃えているのではない。生きたくて未来を掴もうと拳を握ってはいない。

「貴様たちの愛が私の慰みモノになるところを、あの世で見ているがいい」

人の欲望を垂れ流すこと。

それが定々が過去を踏み荒らす理由であり、悪辣な手段でローマ帝国を啗う正当性だと信じている。

「アルテラ、ローマ帝国を破壊しろ。」

さすれば……貴様の望む舞台が降りてこようて」

定々の指揮に破壊神が動き始める。

災害のような存在を軽々と振りかざせる性根は、もはや意思を持つた厄病だ。ここに部下、後輩、将軍、帝……皇帝に至るまで、定々が配慮する生命は自分自身以外には存在しない。

「貴様に与える身代わりはソレで最後だ」

無論、手駒として扱う破壊神ですら、成果を上げれば幸運、負けたら残飯という思考でいる。

食い意地が汚いが、余さずに敵を処理する最適な方法だった。

「分かっている」

破壊神は無感情に答えながら、欲望に縋るだけの獣から抜け出せない定々を視界から外して考える。

どうして私はこの男を壊さないのか、と。

少しだけ巡った思考が引き摺り出したのは、定々に剣を振り下ろす直前のことだ。

男の底に潜んでいる、言い知れない悪意を理解したが故の急停止。

「あ

あの時、定々に振り下ろした剣を止めたのは実のところ、定々の言葉が理由ではなく。

“物種あつての破壊だろ。……つっても分かんねえか”
辰五郎の言葉を思い出したからだ。定々を殺せば、全てが終わる。単に、自分の役目が奪われるのは癪だっただけのこと。ぐずっていた破壊衝動を抑えつけて、だけど直ぐに滲み出てきたものを誤魔化すかのように、城の壁を剣で破壊してローマへと飛び立った。流星の出立とともに、ローマ帝国の存亡を賭けた戦いの幕は上がる。



いつときの夜は陽によつて帳の向こうに落ち着いた。

神祖ロムルスのご尊顔に漸く耐性を着けたネロが、力強く頷いて挨拶をする。

「おお、昨夜はグッスリと眠れたようだ。皆の顔を見れば一目分かるぞ。ローマの湯と寝具で癒えぬ者などおらん！」

腰に手を当てて快活に笑う。

相変わらず皇帝の座には座っていないが……座には茂茂の姿は見えない。

「はい。カルデアの浴槽が霞んでしまうほど、ローマの大浴場は魅力が詰まっています。ダ・ヴィンチちゃんに相談して、余裕ができれば改装を検討してくれるくらいには！」

「そうであろう？ そうであろう！ 改装の折には余を招んでくれ。さすれば、ミューズ自ら踏み入れるような美を凝らし、人理修復に貢献してみせよう！」

「おおー」

マシユの感激にネロが応えて、それを見た立香とジークが拍手を送る。

「ネロ皇帝、連合帝国打倒の説明を始めますよ」

「なにを言う伊東。其方はここまで良くやった、ゆつくりと休んでよ

い。余が許す！だからホレ、全ての指揮は余に任せよ」

「……………」 「……………」 「よこせ」 「いやだ」

目立ちたがりやが2人もいる。

指揮権の奪い合いが起こるのは必須。

「伊東、定々はなにを企んでやがる」

「余の出番がないところを突かれてしまった…」

面倒なことを避けるため、銀時は伊東にしか答えられない質問を投げて無理やり進行を促した。

メガネを人差し指でとんと叩き、鼻を鳴らす勝利宣言にネ口の頬は膨らむばかり。

「僕には〃皇帝を排除〃しているように見える」

「排除？意に沿わなくとも持ち駒に違いねえのに？」

「アルテラめの襲撃時も歴代皇帝たちを悪戯に使い潰していた。そこに付け入るかのように建てた、連合帝国に聳える江戸城。

ローマ帝国を江戸に塗り替えるには、邪魔なんだろう」

「何のために…」

「支配欲が擬人化したような男だ。アレの思考はもはや獣の類いと見ている。理由は考えるだけ無駄だ。自らが生きることの特化した、最悪以下の獣…と、僕が言わずとも、君なら知っているはずだ」

銀時は答えない。

定々という人物への態度が殺意しか無いと思うほど、定々への理解が深いんだと立香は独り思った。

無言の銀時がこの考えをより肯定している。

「問題がもう1つある。定々は千里眼の保有者だ。」

「いまもローマ帝国を監視しているだろう」

「千里眼？」

『簡単に言えば未来を視る力だ。預言者をイメージすればいいよ。他にも過去、現在を視れる眼のことも総称して千里眼と言うんだけど…』

『定々は現在視か。…………え、会話筒抜けじゃない？』

「安心しろ。伍丸博士がローマ全体に千里眼を阻害する特殊な魔力を

張ってくれている。仙望郷に繋げてスタンドから魔力供給を受けているから維持は完璧だ」

『ええ：伍丸博士、ちよつと有能すぎない?』

「彼の功績はまだあるが…。もう語る時間もない。ただ、こう言っていた。〃千里眼持ち同士は認識し合う〃と」

「どっかで聞いたことあるんですけど。スタンド出してるからって、おもつくそ名ゼリフぱくってますよね!？」

「つか、千里眼持ち同士って…」

「彼も千里眼持ちのようだな、直感的に分かるそうだ」

「ちよ、待って待って!定々もあの博士も、未来なんざ視えねえはずだぞ!」

「定々は知らんが…。伍丸博士はサーヴァントになってから、とあるキヤスターに協力を仰いで開発したと言っていた。監視システムの確立を目指す最中、連合帝国から千里眼保有者を認識したらしい」

「あいつ人間辞めすぎだろ!？」

衝撃の事実の連続に思わず絶叫する銀時。

立香は、定々がいまもコチラを見ている意味を噛み砕いて、余りにも不利な状況下だと理解した。

「じゃあ、例えば夜に忍び込んでも向こうは迎撃準備万端で待ってるってことだよね…」

いつ休むかなんて野暮な横槍は出来なかった。

なにせ、サーヴァントは寝ずに活動できるのだから。

『皆んなで攻めて一点突破!』

そのまま定々を倒しちゃうのはどうだい』

「ここを留守には出来ない。こちらがもう後戻り出来ない場所まで進んだら、ローマ帝国に破壊神を差し向けてくる。そうなれば僕たちは敗北する」

「——それは」

「伍丸博士が視た、敗北のうちの1つだ」

ロマニの提案を却下したのは、もう居ない伍丸の千里眼だった。

「籠城戦でも敗けると言っていた。僕たちは二手に別れ、アルテラと

定々、両者を各個撃破するしかない。

僕、銀時君、ジーク君、そしてネロ皇帝の4人で連合帝国に乗り込む。お岩殿とタゴサク殿には茂茂公の護衛とともに、仙望郷を維持してもらおう」

「……待て、じゃあ」

銀時の抗議を手で制する。

まずは全部を聞け、と目で伝えて。

「立香君、マシユ君、ローマを守りきれるか？」

国を背負えと、ローマ皇帝を差し置いてたった1人の少年と、まだ青い空を知らない少女に問いかける。

立香は、伊東の言葉を聞いて喉が枯れるような緊張感に襲われた。ここで軽々と返事をしていいのか…という疑問がある。前回、オルレアンで竜の魔女と戦ったとき、ヴォークルールから人払いは済ませた後だった。だから死傷者を出さずに済んだが……。

今回、人払いをするには場所がない。ローマ帝国の全市民を安全圏に移し終えるまでに、アルテラの襲撃で疲弊してしまう。

なら、ローマ帝国から外に出ればどうだろう。……いや、ダメなのか。アルテラの目には破壊出来るものを優先的に捉える。俺には歯応えのある相手を探しているようには見えない。なら、外で待つ俺とマシユを無視して、そのままローマ帝国を破壊し始める可能性が高い。

きつと、伊東の狙いはそこなんだ。

周りに壊せるものを置いて、破壊の邪魔をする相手を優先させる環境が必要ということか。

分かってしまったら、余計に責任重大で頷くことが怖くなった。頷けば、同じ…いや、俺以上の責任とプレッシャーをマシユに頼むことになる。

「余は皇帝の座を追われたなどとは思っておらん」

「えっ…」

下を向いて悩んでいたとき、両手を頬に添えてネロが顔を上げさせ

た。

「さりとて、茂茂を糾弾する気なんてさらさらない。よいではないか、2人のローマ帝国第五代皇帝。

あれも、これも、誰もがローマである！」

ロムルスがいる前であつさりと、前代未聞の処遇を宣言するネロ。

こちらの迷いを力強く吹き飛ばす笑顔に：

「余が茂茂を許容するように、立香、お主もマシユに信頼をもっと託すのだ」

「……あはは、ローマつてすごいや」

「うむ、当然の感想だな！」

俺の決意は流されるような気楽さで、だけど大切な想いを掴んだことを実感して笑顔で返すことができた。

「マシユ。伊東は愚かな指揮は取らん。

ソナタの盾を余よりも評価している。そう暗い顔をしては立香も頼り甲斐がないぞー！」

「は、はい……マシユ・キリエライト、先輩の期待には精一杯応える所存です!!」

下を向いているから見えなかったマシユの不安も、ネロはしっかりと拭い去っていく。

「ローマ帝国の防衛、やってみせます！」

「おお！その返事を待っていた！」

決心はついた。

……もうつけていたことを、再認識できた。

『すごい……すごいよ2人とも。』

よくここまで成長してくれた……！」

『隣の医者が父親面してる……』

モニター越しに1人だけ騒がしい人がいることを、立香は知らぬ人と決め込んだ。

賑やかな玉座を取り囲む彼らを微笑みながら眺める銀時の横に、

「どうやら話は終わったようだな」

少し準備があると言つて遅れてきた茂茂が立っていた。

ブリーフ姿を想像していた銀時は、茂茂が身に纏っている紋付羽織を見て目を見開く。

「その格好…記憶が戻ったのか？」

「朝、起きたらこの霊衣になっていた。だが記憶は戻らずじまいだ、すまない。」

ただ、この姿になれた理由は分かる。ローマの明日を見届けてほしいと…：今度は友と一緒に、最後まで。

それが茂茂の願いだ。：叶えてくれるか、友よ」

「…相変わらず、変なところで漢になりやがる。」

アンタと似たような依頼を頼まれててな。抱き合わせでよけりや、何回でも叶えてやんよ」

銀時が閉じたまぶたの裏側には、オルガマリーから託された依頼がしっかりと刻まれている。立香とマシユを、必ず明日に連れて行くことを託された。

ここに、誰かの依頼を混ぜ合わせても怒らないだろう。

「余の成すべきことも分かった」

「見届けることじゃなくてか？」

「ああ。その為に必要なことだ」

記憶は無くとも、立香たちを見守るその瞳は江戸の民を守る茂茂と同じもの。いまの彼ならば、茂茂に誇れる行動を取れるだろう。

藻屑のように散り散りに見えて、目指す道は一条となり、一国よりも太くて強い信念が出来上がっていく。

「良いかな諸君。では、最後に移動手段だが…」

皆んなが心を一つにして決戦に挑む。

素晴らしい雰囲気築かれるなか。

「ここに、平賀博士が遺した発明がある」

「そいつは…」

何故か城の地下からエレベーターによって送られてきた、8畳を越える面積を絞める2メートル越えの鉄の塊。

キヤタピラに野太い装甲、そして正面にデカデカと貼り付けている大砲。

「これで一気に攻め込むぞ」

『ローマ帝国を改造しすぎだろ!?!』

石造りの景観をぶち壊す、現代社会も驚きのカラクリ技術がローマの地に現れた。

アルテラが連合帝国を飛び立った頃、銀時たちは荒野の最中を爆走していた。

「おいネロ！運転したことあんのか!?!」

「無論だ！余の戦車捌きは悪魔も恐れると評判だぞ」

「それ四輪駆動じゃないけど!?!」

誰だ、このバカに運転教えたやつは!?!」

銀時の悲痛な叫びに、キヤタピラ装甲の上から荒野へゲロをぶち撒けるグロツキーな伊東が答える。

「ぐっ…まさか…あれしきの口添えで動かせるとは思わなんだ」

「やっぱお前か。うえっ…これ乗り込む頃には全員戦闘不能になってるぞ…」

『はははは…。手ブレ補正?そんなものいまのカルデアには贅沢だよ。うえっ…。』

ネロ皇帝、少々運転が荒いものでは…。画面見てるカルデア職員、全員の容態が悪化したんですけど…』

「はーっはっはー…そう畏まるでない。」

歌に踊り、芸術に設計と、余の才能こそ未来を創っている。ローマの地に刻むこの戦車も、いつかカルデアのためになるうて！許す、存分にデータを集めるのだ!」

『あく、ダメだこれ。才能マンだな、彼女。運動センスが高いようだ。』

下手な嫌味は褒め言葉に変換されるぞ!」

ネロの運転によってカルデアのデータベースに蓄積されるのは、銀時と伊東のゲロの持続時間とゲロの飛行距離ばかり。もらいゲロをしそうなほどゲロ塗れになったデータを見ながらロマニがもらいゲロを引き起こしていると、

「どうやらあちらも動いたらしい!」

ローマ帝国から連合に続く道の約7割を進んだとき、その衝撃は目視できる距離に砂塵とともに現れた。

「アルテラか!」

『宝具使つて飛んできてる!?!』

なんて燃費の悪いサーヴァントなんだ…!』

『連合帝国とローマ帝国を行き来する方法が、まさか宝具での移動とはね。あれは大浴場に奇襲するときのものとはかり思っていたよ!』
フォトン・レイ
軍神の剣と呼んでいた、剣と友に敵へと突撃する宝具。それを、あろうか数十キロにも及ぶ距離を移動するために解放していた。今回だけではないだろう。ローマ帝国を苦しめるたびに、この巫山戯たことを仕出かしていたのだ。

「マスター、俺の宝具で撃ち落とすぞ!」

霊体化していたジークが声を掛ける。

確認を取りながら、既に体勢は宝具解放の準備を終えていた。銀時の合図があれば即座に。なくとも激突の直前に、竜を屠る一撃が放たれるだろう。当然、銀時は頷いて――。

「その必要はない!」

「じゃあどうすんだ!?!」

このままじゃ俺らが消し飛ばされるぞ!」

伊東が合図を止めさせる。

道中、アルテラとの接敵時については元から、伊東に一任する話だったが、あの宝具は次元が違うと訴えた。

それでも、伊東は策があると目で答える。

「――ネロ皇帝!!」

「よしきた!!」

声を上げて皇帝の名前を呼ぶ。

彼女もハツラツと答えた。そして、ネロのハンドル捌きが既に常人の域から抜け出していることを、手元の動きから銀時は読み取っていた。

ここまでの荒々しい運転、そして銀時たちのゲロはこの為の予行演習だと言わんばかりに――

「うっ……」

ネロは一瞬俯いたあと、活と目を見開いて。

「パドルオロオオオオオオ!!!」

運転酔いして遙か前方にゲロをぶち撒けた。

「おイイイイイイイイイイ！」

「どんだけゲロ飛ばしてんだよ！」

「結局お前も酔ってんじゃねえか！」

「それどころじゃないぞマスター！前！」

前方にはアルテラの宝具。ゲロに呆気に囚われたジークは、宝具を解放する余裕などない。

「そんな馬鹿な!!?!」

「こんな死に方は嫌だアア！」

伊東と銀時の絶叫とともに、彼らの身体が巻き込まれる直前。

突如、宝具の進行方向がブレて、キャタピラの真横を通り過ぎて行く。

コントロールを失ったように二転、三転して地面に激突しながら、最後には勢いの削がれた紙飛行機のような勢いでローマ帝国へと飛んでいった。

「うげロ……。う……。うむ。狙い通り……。だな、伊東」

「え、ええ……。うえっ……。作戦通りです……」

『き、奇跡だ。ネロ皇帝のゲロが目眩しになったか！』

『スローカメラで見返したけど、アルテラの眼球にネロ皇帝のゲロが入ってるね。うん、完璧な作戦だ』

「なあにが作戦通りだ！お前後方見てみるよ。辺り一帯モザイクだらけだよ。モザイクの大地の上をモザイク塗れの飛行物体が飛んでっ

てるよ。あれもう特異点だろうが!!」

「バカか銀時君。君は運転する時、何処を見て走る？モザイク塗れの猥褻物なぞ見てみる、脇見運転で捕まえちゃうぞ」

「うぜえんだよお前。なにこんな時だけ職権濫用？」

俺ら環境破壊してる極悪人だからね!？」

ゲロを吐いて、馬鹿騒ぎをしながら進むこと数分。

『ちよつかいの1つは掛けにくると思っただけど、まさか宝具で轢きにくるとは！あの勢いでよく魔力が保つね』

『マスターの魔力量が一流でも、ここ一週間の暴れっぷりを見たら保つはずがない。』

特殊な魔力源がない限りはね』

「それが聖杯ってわけか」

『恐らくはね。聖杯を回収すればオルレアンのように特異点は修復できる。持ち主は言うまでもないだろ』

ダ・ヴィンチが視線を促す。

ようやく見えたのは異様な光景。ローマの時代にありながら、江戸時代を象徴する天下の城が銀時たちの視界に映ったせいだ。

『なんて不細工な景観だ！』

『パスタに小豆を乗せるような暴挙だよ、これ』

ロマニたちがモニターを共有すると、そこには江戸城の上層をアツプで映し出されていた。

その一角、大きな穴が空いた場所から覗く人影。

「おい、分かるか」

「ああ：2度と見たくもなかった顔だ」

異様な組み合わせに目を細めていると、ボタンを押す電子音が鳴った。

「えっ——」

「ネロ皇帝、いま何を押したんですか」

「『定々絶殺』と書かれたものが前に出てきた！」

ならば押すしかあるまい！はーっはっは!!」

ゲロったあとのスッキリ感でハイとなったネロ。

自分の行動1つ1つに疑問を持つ余裕なんて、あるはずがなかった。

『発射まで3——』

「なんかカウントダウン始まったけど!?

大丈夫?・ねえこれ爆発しない!?

『2——』

「余を酔わせた恨み、貴様で晴らしてくれる!」

「さ、最悪の八つ当たりだ!!」

『1——』

装甲の前に現れたのは巨大な筒。

そして弾と思われる2つの球体。

文章だからモザイク不要のソレの先端から、

『FIRE——!』

先手必殺とばかりに、江戸城の一角。

モニターにアップで映し出された定々のいる大広間に、砲撃は勢いよく撃ち込まれた。

「定々が吹き飛んだ——!?」

仙望郷へ誘い込め

ローマ帝国に残った立香とマシユの2人は、お岩から手渡されたローマ帝国の地図を広げて最後の確認を行っていた。

「ここら辺にある浴場は4つ。場所の下見もこれで終わったね」

「はい。思ったよりも住宅と近接していますが、あからさまではない分、誘導し易いと思います」

今しがた2人が確認し終えたのは、アルテラがやってくる南西側の帝国内に建設された浴場の場所だ。勿論、仕事終わりに寄ることを目的としたものではない。

発端は伊東たちが発発する直前に戻る。

「ローマを守るにしても、持久戦となればアルテラに軍配があがる。だから2人には、アルテラを仙望郷へと誘導してもらおう」

「仙望郷って、ここに!?!建物壊れちゃいますよ」

「言い方が悪かった。お岩殿、説明を任せます」

「皇帝専用の大浴場は仙望郷の一部なんだよ。宝具として使うには、表舞台じゃちよいと燃費が悪い。」

だからね、本拠地は裏側に居を構えてんのさ。

コンビ〇で立ち読み出来るジャン〇と、書店で封をしてある〇ヤンプくらいの違いだけどね」

「その例え大丈夫ですか?コロナ的にも、ローマ的にも」

「ローマ帝国には無数の浴場があるのは見ただろう。その全てが仙望郷に繋がっている。」

アルテラが踏み込めば、仙望郷に転送される仕組みだ。あとはタゴサク殿と協力して一気に叩く寸法さ」

仙望郷に転送って、そんな簡単に言うけど…。

「それに、茂茂公を守りながらでは…」

「心配は無用だ。これでも立場は弁えている。

其方たちは存分に戦つてくれ」

茂茂公は記憶が無いけど、銀さんやローマ兵が信頼を置いている。嘘はつかない人だ、そこまで言われたら頷くしかないよ。

「ああ、それと。辰五郎については考えなくていい」

「何故でしょうか。彼が1番の難敵に思います」

「連合帝国から出てこない。そういう未来が視えた」

そう言う伊東の瞳は少しだけ下を向いていた。

――

――

コンビニくらい気軽に浴場が建っているけど、ここに誘導しなければアルテラを倒すのは難しいのも事実だ。

茂茂公は戦えないから、戦力は俺とマシユ、お岩さんとロムルス
4人になる。

昨日もアルテラ相手に4人で相手をした。あの時はお岩さんじゃなくてジークだったけど、重圧だけはなにも変わらない。

銀さんたちを守るか、否か。

ローマ帝国を背負えるか、否か。

これは重さとか、優劣をつける問題じゃない。

思考を止めれば…進むことを諦めたら取り零すものだ。全員が諦めずに戦ったから、銀さんはネロ皇帝を連れ戻してこれた。今回も同じだ、破壊神という圧力に屈したら最後、もうカルデアに戻ることは出来ない。

「来ました――！――」

マシユの気迫が出した声に反応して視線を向ける。

ローマ帝国と荒野の境界線から確認したのは、砂煙を起こして爆走する三色の破壊衝動。荒地を戦場跡に変える暴挙は、まさに破壊神と
いふべき所業だろう。

あと数秒で接敵だ。

気合いを入れる…！

思考を止めるのは、なしだ。

「マシユ、宝具で止めよう」

「了解ですー」

作戦を立てるのは簡単だ。

まずは宝具で止める。隙を見て俺がガンドを撃ち込んで、マシユに浴場まで吹き飛ばしてもらおう。

問題は……簡単にガンドを当てさせてくれないことか。

「ロード——」

マシユの宝具が展開準備に入る。

フォトン・レイ軍神の剣の到着まで二秒。

軌道が変わる気配はない。背後のローマ帝国を守るように立つ俺たち2人を見て、先に片付けたほうが自由が利くという判断だろう。

マシユの盾が地面に突き立ち、そして。

「えっ」

アルテラの破壊衝動は目の前で霧散し、地面に降り立ったアルテラは千鳥足のままフラフラと彷徨い、

「—————!」

四肢を地面に投げ出して、轟音とともにゲロを吐き出し始めたではないか。

「ええー!?!」

なんだこれ、何してんのこの破壊神。

「ドクター！ダ・ヴィンチちゃん！」

……呼び掛けても反応なし。

おかしいな、銀さんたちと俺たち、モニターは半々で使い分けるから通信出来る手筈なのに。

「あの、大丈夫ですか？これ、酔い止め薬です」

「ありがとう……これはいい文明だな……」

「マシユ、それどこから出したの？」

「盾の収納スペースです」

少しだけ頬を赤くしながら、盾の裏側の小窓を開ける。そこには日用品や化粧水、それにフォウが眠っていた。

「ええ…すごいね」

「えへへ、すごく便利です！」

なんで照れてるんだろう。

というか、アルテラが目の前にいるんだけど。

一通りゲロったアルテラは、

「……………湯浴みさせてくれ」

「えっ、あはい」

この人、何しに来たか分からないけど…。

悩みの浴場への誘導はあっさりと完了したからヨシ！



アルテラの申し出を断れるほどの非情さはなく、立香とマシユは求められるがままに近場の浴場へと案内をした。

ローマ帝国にも関わらず浴場の入り口には“ゆ”の暖簾。少しばかり躊躇った手で暖簾を触れ上げて、視界に入ったのは和風な受け付けだ。人は…いない。さっきまで通りにいた大勢のローマ市民が嘘のようだったが、ここが仙望郷だと理解するには十分な合図だった。

女風呂に入るわけにもいかない立香と別れた、マシユ引率のもと女子脱衣所へ。

「何故、ローマ帝国を襲撃するのですか」

脱衣所を通る際、マシユは躊躇いやく武装を解除する。

ここに来る間に、外で待つべきか悩んだ。解除して、直ぐに剣を取られたら自分は抵抗もできずに血塗れだ。それは立香たちを裏切る行為なのに…アルテラと会話をしてみたいと、そう思ってしまった。だから、迷うこととしてはいけなかった。

浴場の入り口に置かれたタオルを手に取り、木造の扉を引く。迷いは敵意……………死に直結すると肌で感じる。

「私の目的は破壊だ。だが、定々だけはいまの私では殺しようがない。

だから先にローマ帝国を破壊する」

湯気の向こうに消えるマシユを不思議そうに見ること2秒、アルテラも做うように服を解いて浴場に入った。

「そんなサーヴァントが実在するとは思えないのですが」

アルテラの言葉は相変わらず無茶苦茶だ。優先順位を決めているだけで、最後に救いの1つもない。始めから残すものを設定しない姿勢は破壊神に相応しいだろうが、マシユは許容できない。

シャワーに手を伸ばし、お湯を出す。

アルテラが真似してシャワーを浴びながら、

「……なんだお前たち、知らないのか。定々は身代わりを用意している。影丸という宝具を使つてな」

「えっ……」

許容どころではない事実を突きつけられ、桶に伸ばした手が止まる。

「私には何故か、定々の影丸が埋め込まれていた。アレを殺しても、私が定々に飲み込まれるそうだ」

辰五郎がそう言っていた。私もそう思う」

「なん、で……」

石鹸で身体を洗っていくアルテラに、掠れた声で問う。言葉は足りないが、アルテラは意を汲んで答えた。

「定々を殺そうとして、自分の危機を察した」

細い四肢から汚れを落として、濡れる髪の毛の水気を落としながら自らの胸に視線を落とす。そこに影丸がいて、どれだけ洗っても落ちないと嘆いているようにマシユには見えた。

「辰五郎も定々を狙っていた。だから協力することにした」

アルテラはマシユの視線を気にもせず、髪を纏め上げると水風呂に身体を浸していく。

湯浴みする姿も、水風呂で肩まで浸かるさまも画になっている。女性として、アルテラのスタイルは美の頂点に位置すると思わせるほどに恵まれている。この四肢である破壊を行えることが現実から離れていて、己の目的を忘れそうになる。

「あと1つの、定々の影丸を探し出して、全てを破壊するために」

「それは、どういう——」

「全ては語らない。分からないのは私もだからな」

湯に浸ることを忘れて見惚れていた意識が、嫌な予感とともに現実に戻ってきた。

影丸という分身がいること。

定々は影丸に成り代われること。

きつと、特異点を攻略するための最大の鍵になる。

早く知らせなければと、カルデアに呼び掛ける。

「ドクター！ダ・ヴィンチちゃん！」

だが、返事はない。

モニターの故障？違うと断定する。

こんな時は、敵勢力による妨害が最有力候補だ。

アルテラ？

違う、彼女には器用な真似が出来るはずがない。

ならば、定々と接敵した銀時たちのほうに異常があつたということ。

「ぐっ!？」

そこでマシユの思考は中断する。

水風呂から立ち上がり、振り払った軍神の剣によってマシユを攻撃した。

「私を一度倒したお前たちなら…とも考えて口を滑らせたが、通信を遮断されているは魔術師の知恵も期待出来ない」

アルテラからは敵意と落胆の視線が向けられる。彼女もまた、定々の呪縛に悩む1人だということだが…。

「盾を構えろ、カルデアのサーヴァント。」

でなければ、国を差し出せ。文明の全てを破壊する」

会話は通じない。分かり合えない。

敵は同じなのに、彼女の在り方が最終的にこちらに牙を向けてしまう。彼女の思考に寄り添える隙は与えられないまま、マシユは武装を装着した。

▼

アルテラの剣が起動する音を聞いて、慌てて壁際から距離を取る。既に待機していたお岩さん、そしてロムルスが戦闘体制に入ったとき、女湯で三色の光が爆ぜた。

「下がりな、立香」

二度、三度と発光し、古風な浴場を破壊して、四度目の発光で男湯と女湯を隔てる壁は破壊された。

「マシユ!?!」

壁を砕いて転がり込んできたのはマシユ。武装を済ませて、大盾でその身体を支えながら立ち上がる。

「先輩、会話もままなりませんでした!」

「いいや、上出来だよ!ありがとう!」

会話は全部聞こえている。

あんなに強大な敵を前にして、マシユは武装を解いてまでアルテラにひと時でも歩み寄ってくれた。それだけで賞賛が尽きないというのに、

「はい!今から破壊神アルテラを止めます!」

援護をお願いします、皆さん!!」

彼女は人理の盾として、絶対に最前線から離れようとはしなかった。

一瞬だけマシユと視線が交差する。

俺だけに向けた瞳は、俺だけに伝えたいメッセージがあるからだ。

この場で肉体的に最も役に立たない俺に求められるもの。

“影丸の摘出方法を考える”

カルデアとの通信が妨害されて、借りられる知識はここにはない。おまけに連携も取れないから、仮にも銀さんたちが定々を倒してしまえば、アルテラがどう変貌するのか想像もつかない。それに、アルテ

ラを倒したとき、影丸も倒せるのかが分からない。

——任された。

決して、アルテラの破壊活動を止めたいわけじゃない。影丸をアルテラから取り出したところで、アルテラの本質が変わることはないんだ。

(あれ、なんでこんな事を心配するんだろう)

なにか気の迷いを起こしなような疑問が浮かび、夢を見た時の記憶くらい軽々と消失する。

「案ずるな。ローマは彼女の盾を支えてみせよう」

ロムルスに頭を撫でられる。

向けてくる言葉と、手触りと力の加減が破壊の音から少しだけ遠ざけてくれる。

目の前に集中しろ…。

俺は頭を働かせるんだ。

「湯浴みさせてくれたことには感謝する。この文明は良い…だが私に残された時間も少ない。

お前たちを破壊して、余力があるときはこの場所を遺してやろう」
優しさを感じない配慮に乾いた笑いで答える。

出来れば会話での和解が最高なだけけど。

そんな日が来ることを祈りながら、戦闘に移るマシユたちに目を向けて方法を模索し始めた。

破壊神の影

剣が暴風を撒き散らし、大盾が僅かに浮き上がる。

アルテラの手にある剣は現代ですら目にしないほど未来的で、その脅威は科学では説明がつかない古代の力強さで造られていた。

「はっ——」

一息で剣を一閃する。

ただし、女湯の真ん中から男湯の真ん中まで、10メートルは離れている距離から、という剣にしてはあり得ない射程距離を伴って。

アルテラの剣は射程距離3メートルがせいぜいで、投げなければ当たようがない。そんな常識を打ち破るが如く、マシユの大盾に鞭を打つような一撃を見舞った。

「ぐう…伸びるんですか…!？」

軍神の剣はアルテラの一風ぎによって、その特性を剛から柔へと変質させたのだ。

手元に戻るとき、柔軟に富んだ三色は剣へと戻っている。そこから立て続けに剣を振り回すと鞭となり、着弾点であるマシユを中心にして軌道上に走る一本の線が浴場を粉碎していく。

「前進しますー!」

距離を置けば一方的に体力が削られる。経験不足のせいで分が悪くとも、黙っているよりはマシだと突っ込んだ。

アルテラはその場から動かない。正しくは、剣を振り上げて、一撃のもとに勝負を決める心構えだ。そしてマシユは真っ直ぐに進むことを止めない。

受けて立つつもりだ…!」

失敗すれば人理修復の旅は直ちに終わる。

手を貸したいけど、俺が手を伸ばせばマシユの気が逸れる。だから、いまは信じて待つんだ。

「シールド展開」

「破壊し尽くす」

矛と盾、剛と音を響かせて剣と盾が激突する。

それに合わせて、マシユの無事を信じるお岩……ではなく、身体を入れ替えたタゴサクが俺の横から飛び出していった。

舞う飛沫の向こう、マシユは浴場の基盤を割るほどに踏ん張り、眼光を絶えず両腕に注いで耐えてみせた。

無闇に続けたら徒労で終わる防御も、

「テメエが壊した浴場は弁償させっからなあ！」

仙望郷最強の戦士、タゴサクの攻撃の機会を生み出すことができ

る。
剣を握る右腕の外から踏み込んで、タゴサク自慢の右拳をリバーへと振り抜いた。

重心がまだ盾から離れていない。確実に入った！

「働く必要などない。私には不要なものだ」

素人目に興奮する俺の期待は、あっさりと裏切られた。

着弾するレバーに割り込んだアルテラの左手のひら。手の甲を自らに向け、力が出ないように見える姿勢で、衝撃波をも生むタゴサクの一撃は止められた。

そして、アルテラの足が剣の代わりに大盾を蹴り飛ばし、その勢いを授かった剣でタゴサクに襲い掛かる。バランスが崩された2人に、互いをカバーする余裕なんてない。

「マズい……反撃が！」

「まだだ」

ロムルスが断言する視線の先で、アルテラの剣がタゴサクに振り下ろされようとしたとき。

薄らとタゴサクの中から現れた半透明の人間……いや、お岩が、アルテラの身体に左右の拳を打ちつけたではないか。

「お岩は嫌だってよ、嬢ちゃん？」

「があ!?!……いまのは、なんだ!?!」

そのまま剣の軌道はタゴサクから逸れて、アルテラの身体は硬直した。

無防備な身体に、今度はタゴサクの拳が二度、三度と打ち込まれる。雷鳴のような音をアルテラの身体から響かせる様子は、破壊神よりも破壊が似合っていると言えなければならぬだろう。

痛みを堪えて、アルテラは限界まで引き絞った筋肉を反撃に回す。全快と変わらない動きで剣を振り下ろし、

「どこ見てんだイ」

氷上を滑るような足捌きを魅せるタゴサクによって、その剣圧も届かぬうちに躲かされていた。

空いた距離は三步。

タゴサクにとって、ひと息で潰せる距離と理解したうえで、アルテラは鞭にした剣を構えた。身体を捻り、右足を軸にした姿勢。360度、全ての敵を薙ぎ払う攻撃をタゴサクが許すはずもない。

立ち直ったマシユが立香の前方に駆け寄る。これでタゴサクは後ろを気にする必要はなくなった。

「――」

ひと息のうちに踏み込んで、攻撃が繰り出される前に決着をつける拳を打ち下ろした。

酸素が吐き出される瞬間、タゴサクの拳に重なったのは剣の柄だった。鞭はそのままに振るうことなく、1センチ程の大きさの柄で止める感情と判断力にアルテラ以外が舌を巻いた。

不利な戦況を覆すのは、アルテラの空いた左拳。捻っている身体をついに解放して、タゴサクの顎に目掛けて左拳を打ち上げる。

「アンタ……」

タゴサクの背後から現れたスタンド……お岩の両腕が左拳を止めんと立ちはだかるが、事も無げに殴り飛ばす。そして、タゴサクの顎を勢いそのままに打ち抜いた。

「!？」

仰け反った身体に剣を振り下ろす。

地面を蹴らすように叩きつけたアルテラの剣は、走り寄ったマシユの大盾の一振りとは拮抗した。

そして再び、タゴサクが踏み込んで隙を探して拳を放つ。

2対1、いや…お岩のスタンドを含めば3対1の状況で、アルテラの優勢が崩せない。戦況はアルテラがやや押している、このままじや時間の問題だ。

「強い…!」

「ああ、強すぎる。尚のこと、外には出せないね」

思わず溢した言葉に返してきた方を見ると、半透明のスタンド…：レイが眉間にシワを寄せていた。

「なんでですか?」

「ここは外部から遮断されてる。魔力源が外にあるなら、サーヴァントへの魔力供給はストップするんだ」

仙望郷に誘い込もうとしていたのはそれが理由だったのか。

「魔力供給が止まると普通はどうなりますか」

「出力が落ちる。単独行動持ちのサーヴァントなら兎も角、セイバーやバーサーカーが魔力供給を断られたら数時間で退去さ。」

そうでなくとも、仙望郷は死者の国。サーヴァントならステータスは下がり、タゴサクとお岩との戦闘はままならない…はずなのに」

レイが戦闘に視線を向ける。

マシユとタゴサク、2人の息が合ってきている。アルテラの攻撃をマシユが流して、タゴサクの一撃が右頬に直撃した!

「やった——」

「…：やっぱりね」

前回、マシユが決めた一撃よりも威力のある拳を受けて、アルテラは軽々と起き上がった。耐えるように工夫してきたか、それとも受け身を取ったのか。疑問が浮かんだまま、観察だけは止めないと右頬を見て思わず声を上げた。

「治ってる!?!」

「自分の力じゃないね。」

定々はあの娘を死んでも使い倒すつもりなんだよ」

レイの言葉に怒りが込み上げる。

分かっている、今やる事じゃない。

影丸というのがアルテラの中に居ることはこれで証明されたよう

なものだ。なにか、先に影丸を潰す方法を見つけなくては…。

「——アルテラはあの場から動いていない」

「た、確かに」

横で2人を見守っていたロムルスが呟いた。

破壊されて悲惨な姿になっていく大浴場にばかり目が向いていたけど、軽快だったステツプワークは活かされていない。

「待てよ……………」

ステータスが下がっているのが、影丸だとしたら？」

無関係なはずがない。

足を使っていたし、タゴサクとお岩のラツシユにも反応しているから敏捷が下がったとは考えにくい。

「待っている、のか？」

昨日、仙望郷の一端である皇帝専用の大浴場での戦闘を思い返す。俺がガンドを打ち込んだとき、アルテラは“再接続”と口にして、直ぐに動き始めた。あれで影丸に繋げたのは言うまでもない。

じゃあ、繋げるためのパスがあるはずだ。これを断てば、影丸を先に潰せる。その方法は…。

「レイさん…その手で掴めないものはありますか」

「そうさね…。私は温度の影響を受けずに触れられる。閻魔様くらい濃い魔力は触るのに苦労するかな。

……ああ、惚れた男の背中はまだ流せてない」

「——それは、叶えなきゃいけませんね」

方法は決まった。

レイさんにやる事を耳打ちして、頷いたのを見るや。

「マシユ、タゴサクさん！退がってください！」

「っ！はいっ！」

一瞬の勝負の幕を、乱雑に捲り上げた。

「どうした、立香。レイに変なこと吹き込まれたか」

「ふざけてる暇はないよ、タゴサク」

タゴサクの背中に手を置くと、それだけで意思伝達が出来るのだろう。タゴサクがレイと俺を見て無言で頷いた。

「先輩、何かありましたか？」

「うん。マシユには構えていてほしいんだ」

「ええと…分かりました！マシユ・キリエライト、先輩の盾として不動の構えです！」

「はっ！そやつ！」と言いながら立香の前に仁王立ちするマシユ。若干、意味合いが違う気がするも、やる事に変わりはないのでよしとした。

なによりも、待ち構える姿勢が大事だ。予想が当たれば、アルテラは乗ってくる。

「覚悟は決まったようだな」

「最初から決めてるよ。勝つってね」

だって、彼女は全てを破壊したいのだ。

己を操ろうと画策する、定々をも。例え、自分の手で破壊出来ずとも、破壊する自分に繋げるためなら相手を乗せてくる。

俺たちが見過ごせないことを逆手に取ってね。

「見せてみる。でなければ、破壊する」

鞭の状態を一振りで剣に戻し、10メートルの間合いから剣先をこちらに突きつける。

回転する三色の剣。先端から空気を捻り、床に散らばった大浴場の破片を吹き飛ばす。破片だからと呑気に笑うことは出来ない。気を緩めれば、破片のように吹き飛んでいくのは俺たちだから。

「軍神の——」

相変わらずの無表情で、さらりと宝具を解放していく。

荒野を駆け抜ける様子を遠目から見ていたが、あれほどの迫力は2つの特異点でも見てきた。アーサー王の剣、ファヴニールの息吹と同等に、一撃で町を破壊し尽くせる。

あれは、影丸による補助も加わっていた。

影丸の影響を抑えられている…はずの今なら、絶対に防いでくれる。

「マシユ、宝具だ！」

いや…そんなもの無かったって、俺はマシユなら防げると信じてい

る。

「――剣！――」

「ロード・カルデアス
疑似展開・人理の礎！」

三色の光が一条となり、この特異点で最も強い破壊を伴ってカルデア最強の盾に放たれる。

人類の希望を背負い、未来を繋げるための盾が展開した。相手が破壊に特化した英霊ならば、彼女は破壊を受け入れる盾だろう。

これは深い話ではない。

破壊も、繁栄も許さない未来をマシユは受け入れない。ときには破壊も必要だ、人生に不必要な要素はきつと無いに等しい。

「先輩……お願いします!!」

ただ、破壊だけじゃ俺たちの望む未来には届かない。

だからマシユは盾を握りしめて、破壊に合わせる手段を俺に託してくれるんだ。

「任せて！タゴサクさん！」

「おうさ――」

撒き散らす破壊の衝撃を横切って、タゴサクに抱えられながらアルテラの真横に飛び出していく。タゴサクによる加護がなければ、この衝撃で俺は樽に入れたブドウを踏み潰すように飛び散っていた。

そして、戦闘のセンスに長けたアルテラを相手に、

「ガンドー！」

呪いの架け橋が二度も届くことはなかっただろう。

盾にひと時の拮抗を許した破壊衝動は、仙望郷によって威力と効果を増幅させた特性ガンドによって硬直を余儀なくされた。

「……………！再、接続――」

それも一瞬の話だ。

身体は動かなくなつた。しかし、ガンドは思考まで止めるほど万能の呪いではない。アルテラが言葉にした瞬間、立香たちには見えないものへと繋ぎ直した。

「いまだー！」

千載一遇の機会に、タゴサクたちと入れ替わりで疾り寄る影。

「そこっ!!」

硬直から解かれる直前、レイの右手がアルテラの身体の中へと入り込む。そして、確信を持って引き抜いた右手の中には、光り輝く黒い影。

「こいつだね、影丸ってのは」

「や、ヤメ——」

「えいつ」

野太い命乞いが霊気から響いてくるが、レイは無視してビー玉サイズのソレを握りつぶした。

大浴場に空いた穴から吹いた風に乗って、仙望郷のスタンドたちに食われ尽くされていく定々の影丸。ここでは碎けた霊気からの修復も望めない。定々にとつて、最悪に近い相性の世界ゆえに、影丸は捕まるほどに弱くなっていた。

「——よっしやー!」

全部を見届けて、倒れたアルテラが影丸の消失を物語り、立香たちは一先ずの目標達成に喜んだ。

牢城災建帝国セプテムⅠ

連合帝国に造られた偽りの江戸城。

目的地であり、標敵のいる階まで苦難を覚悟して来た銀時たち。彼らが今いる場所は目的地の江戸城、遠侍の間。壁に空いた大穴は3つ。1つは元から空いており、1つは源外の用意したカラクリ装甲車に搭載された『定々絶殺砲』による砲撃痕。そして最後の1つはたった今、キヤタピラが地面から跳んで突っ込んだせいだ。

難しい話ではない。ネロが操縦席に用意された『最短距離』というボタンを押したら、キヤタピラがジェットに早替わりし、江戸城に突撃しただけのこと。

「君たちに良い知らせが2つある」

「普通、良い報せと悪い報せ1個ずつじゃねーの」

「作者が轢かれたからな。それと交換だ」

そんな珍突撃をした直後の騒ぎも収まり、作者も筆を取り始めた頃。

定々を消しとばした遠侍の間で、伊東が会話を切り出した。

「斉藤が退去した」

「は？」

『さっきの砲撃で定々諸共吹き飛んだってこと？』

「こちらからは確認出来なかつたけど…」

「当然だろう。僕の宝具で感知した話だからな」

「まじかよ。いいなあ、どんな必殺技？」

「真選組隊士の霊気を感じ出来る。」

おい万事屋、顔に失礼極まりない表情が浮かんでいるぞ。僕の宝具はこれだけじゃない……こほん。

隊士の気配遮断は僕には通用しない。遠くからの狙撃でも、狙う場所まで分かる。だから、彼が自ら退去したことも分かるんだ」

真選組に限られた掌握力で断言する。

「そこで2つ目だ。確実に定々を殺せた。聖杯さえ見つければ、この特異点は修復する……………はずなんだがね」

斉藤の退去の裏を返せばマスターが死亡したことになる。定々も退去していることが確定するのだが、伊東は歯切れが悪い。辺りを見回して、なにかを探すように落ち着かないのだ。

「どうしましたか、ネロ皇帝」

「余は、最初に江戸城を見たときは感動した。大木で城を建て、趣向を凝らすという日本人の腕前に脱帽せざるを得なかった。

だが……………中は違う。これは偽りの城ではないか」

次に胸騒ぎを訴えたのはネロ。

失望の眼差しを城の全方位に向けて、そう言い始めた。何をもって偽りと呼称するのか。これは江戸城であって、定々が造り上げた魔力による城だとは知っている。

意味が違う。銀時たちが思っている理由以外で、ネロはそう批判した。その理由を問おうとしたとき。

『不味いぞーマシユたちの方と通信が繋がらない！』

仙望郷に入っても通信出来るように調整してくれる算段なんだけど……………明らかに妨害されてる！』

こちらが後手に回っていることに気づいた。

ロマニの慌てる声がモニターから聞こえたのを確認して、偽りの城が蠢き始める。

「地震か!？」

「違う……………魔力が城から滲み出ている」

城が嗤う、無機物が嬉ぶ、訪問者を拒絶せよと。

「見事な手腕だ、ネロ・クラウディウス」

「なにやつ!？」

悪は讃える、訪問者が脅威であると自覚するために。

声のする方向を見る。

銀時は天井を、ジークは穴の空いた壁を、伊東は床を、そしてネロは銀時を見て、全員が声の主を見つけた。

「……………どういことだ」

4つの身体、4つの重なる声。

増えることなどあり得ない。生前にそんな逸話はあるはずもなく、全員の危機察知能力が最大値を叩き出す。

「其方ら皇帝は実に厄介だ。手中に収まったフリをして私を欺き、私の活動を制限させた。」

これでは千里眼も思うようには使えなんだ」

天井から溢れ落ちる影の滴。

拳大の滴が一滴、二滴と続く。

おかしい、影に感触がある音を鳴らすことに、脳が混乱しそうだなによりも、滴が積み重なり、何十滴と落ちて人型を形成し始めた。見ていて寒気が走る光景に、冷静な伊東の喉が震えた。

「貴様…ネロ皇帝の砲撃でバラバラになったはず」

「あれには驚いた。まさか砲撃するとは思わなかったよ。少しばかり痛かったが、この通りだ」

4つの影が1つに集まり、徳川 定々の身体となる。

人の形を成した、なにかの生き物が現れた。

『ひええ……！皆んな気をつけてくれ！そこにいる定々、得体の知れない靈気をしている。』

これ本当にサーヴァントか疑わしいぞ！』

「ああ、見れば分かるよ。」

雰囲気だけでも不愉快だ。……ジーク君！」

伊東の掛け声に合わせて、ジークが前に出る。

剣に纏う魔力は一瞬で宝具級となり、

「はっ——！」

ローマ帝国を出発する前の打ち合わせ通り、バルムンクによる強襲を決行した。

定々が生前に握った剣はペンと飾りの脇差し程度のもの。即射可能なジークの宝具は、達人ならいざ知らず、戦いを見てきただけの定々に躲せるものではない。

事実、ジークの剣は距離20mは離れた定々の身体を真横に真っ二つに斬り裂いた。避ける反応すら取れず、その身体は焼け落ちてい

く。

「……………うそ、だろう」

焼けた肉の表面が溶けていき、二つの肉塊が生物の域を声で混ざり合う。互いを捕食するかののように、自分の中で頂点を獲り合うが如く潰して、

「私とて人だ。下手人に何度も殺される失態を、死後まで繰り返そうとは思わんよ」

再び、定々は嗤いながら立っていた。

全員が確信する。彼はサーヴァントではない。正体不明の敵であり、人理焼却における重要人物にあたる、と。

「あやつだけではない。」

ジークが斬った壁も、なにやら再生しておらぬか!？」

ネロの声に振り向けば、焦げた支柱や襖絵がバルムルクの痕を侵食している。舌を出して熱を確かめるように、ゆっくりと焦げ跡に覆いかぶさって舐めていた。舐めて、取り込んでいるように見える。

『その部屋をスキャン出来た。江戸城と似た造りだが骨子がまるで違う。城の至るところに魔力が通っている。』

まるで人間の毛細血管みたいだ……』

「なんと!ではカラクリのように動くのか!？」

『そこまでじゃないですね。異常なほど魔力は行き届いているが、まだ量が少ない。どうやら魔力源にするためのアテが足りないらしい。どうですか、定々公?』

「——は。そこまでは分かるか、遠見の魔術師」

ロマニの指摘に定々は頷く。

含みを持たせたところに混じる味は、血と涙。

身内で殺し合うような、心が裂ける現実だ。

「だが私の全容は見えまい。身体を巡る血肉の色も、城を組み上げた民草の顔も…影に潜んだ正義の刃すらな」

定々の微笑みは一騎を討ち取る自信から現れる。非戦闘員である男から溢れた笑みこそ、暗殺で地位を築いた地盤を見る目と同じ。踏み台になる者に送る勝利宣言に全員が周囲へと警戒して、

『な、なにも起きない……………?』

五秒経過。

来ると思っていた斉藤の刃が現れず、定々は訝しむように眉を上げた。

「なあ、もしかしてだけど」

欺かれたとは知らない狸に向かって、最悪の怨敵を前にここまで黙っていた銀時は一枚の紙を見せた。

『サーヴァント契約が切れたので廁を借りて還る?』

ここに踏み込んだとき、銀時の懐に入れてあった紙だ。もしも本気で殺しに来れば達成出来たという警告。

千里眼持ちの定々に通じるか定かではない騙し打ちだったが、どんな眼を持つとも性分は変わらないらしい。

差し出された紙を全員が見て、驚きに目を見開く。

「あれ本当だ切れてるー!?」

「お前の縁は所詮そんなもんだ」

男と女が月夜に交わした誓いを髪の毛一本と侮った化生に、渾身の力を込めて木刀を振り下ろす。

この一振りには銀時の私怨ではない。

江戸の法で裁けなかった罪をいま、暗殺で終えた幸せな人生に上塗りせんとしたのだ。

「……………は、ははっ」

罪人、これを否定す。

銀時の木刀は定々の前に現れた壁によって阻まれた。

「喋らぬと思ったら、それを隠すのに必死だったのか。全く、無駄なことでよ」

壁は暖かく、脈を打ち、人間の皮のようなシワが見受けられる。中で踊る液体は血のように見えるものの、木刀越しの感触がソレよりも最悪だと告げていた。

「斉藤にはどうせ殺せぬと思っていた。私が殺すしかないと…いや、私が殺すと決めていたのだ」

城の床から生えた壁は生きている。意志を持ち、定々の身を守った

これは、鬼には受け入れがたい肉片だ。

『これは……悪魔!』

なんで伝説上の悪魔がここにいるんだ!』

『離れるんだ銀時!』

ダ・ヴィンチの警告を聞いて、木刀を舐めずる肉壁が舌を絡める。獲物へと続く道を確保したとき、木刀にかかる圧力は少しすら無い。木刀に肉壁を絡まれた時、既に銀時は木刀を手放して後退していた。

『早っ!?!』

『いやまだだ!』

武器を手放せる判断力に感嘆するロマニだったが、肉壁はその面積を銀時へと突き伸ばす。

先端に鋭さは見られない。それでも抉ってくるのは目に見えて分かる。あれは威力じゃなく、もつと別の……咀嚼するような粘りがある。

「シユトラセ／ゲーエン理道／開通」

銀時に近づく肉壁を横から鷲掴みにして、ジークの変身した右腕が解析と破壊を開始する。銀の光に触れた矢先から、肉壁は魔力を吐き出して肉片を辺りに散らして果てていく。

そして、左腕に握る剣で肉壁を貫き、再び理道／開通を叩き込む。肉壁に行き渡る破壊が地面に達する直前、しっぽ切りでもするように根本から折れて弾け散った。

「大丈夫か、マスター」

「助かった。それよりも——」

銀時たちの前に立ちはだかる汚濁の壁。

大黒柱のような太さの肉壁が二柱、三柱と増えていく。定々を取り囲み、徐々に銀時たちを壁際に追いやるうちに数は十を超えていた。『気をつけて! それら一柱一柱がサーヴァント級の魔力反応を示している!』

肉壁と呼ぶにはそれぞれに自律心があるように見える。誰の意思か、問うことはしない。

「我が真名、徳川 定々。我らの王の意志により、セプテムを手中に収めに来た。」

新たな世界を敷き、私が法に返り咲く」

定々の足元から溶けていく。

それが肉柱の一柱と繋がることで、他よりも巨大な柱を構築し始めた。

「ブネ」の力をもって、今度こそ我が国を完成させる。

暗殺でしか殺せなかった貴様らに、私を殺す術はない」

生前の姿から生える肉の蠢き。

定々は最悪の方法で死後を捧げた。

ローマを飲み込むために、次第に肥大化する悪魔としてセプテムに降臨する。

牢城災建帝国セプテムII

青い柱が唸りを繰り返す。

十を超える柱が同時に進撃し、銀時たちを呑み込めんと奔る。速度に違いこそあれど、建物の奥まで横薙ぎにする手段があれば横並びと同じ。

「下がってくれ」

射程距離、威力ともに融通が効くジークほどの適材はここにはいない。剣を携える両腕が竜殺しの鎧を纏う。

どしりと構えた両足。剣から溢れ出した魔力を寝かせて、右足を軸にして竜殺しの名を背負った一撃を振り放つ。

「やったか!!」

「ネロ皇帝、それはフラグと言って迂闊に発言するものではありません」

銀の光が到達する瞬間、肉壁は面積を真横に広げて竜殺しの一撃を受け止める。

一柱目、直ぐに消滅。二柱目、防御にリソースを追加。三柱目、四柱目が魔力を喰らい、五柱目が押し潰した。

『五柱が壁になって後ろを生かした?!』

振り抜いたジークに向けて、六柱目が肉壁を突き伸ばしていく。僅かな隙を狙った侵攻だが、舞い上がる赤薔薇の剣が柱ごと切り落とした。

「やああー！！！！」

続けざまに七柱目の腹下へ飛び込み、炎を纏うステップから斬撃を繰り返す。

「余の発言が原因なら、華麗に片付けてみせよう！」

ローマ皇帝の名に賭けて、余の前で客将は死なせぬ！」

高らかな宣言を終えるや、最後の抵抗を見せる七柱目の押し潰しを躲してトドメを差した。

「視界の隅で見てはいたが……本当に人なのか」

「こちらで多少の補強は行なっているが、ネロ皇帝の実力は並のサーヴァントと渡り合えるものだ」

肉壁は学ぶ。一本の柱では敵わぬと知り、その身を無数の血管の如く散らして全方位から獲物を仕留めに行った。

「いやはや、皇帝というものは未恐ろしい。」

トップ自らが敵将を討ちに行く。まるで、僕たちの組織を見ているみたいだよ」

だが、通じない。細く別れた肉壁は、細切れとなって地面に転がる。伊東は先の手を読み、刀を数度振りかざすだけ。生まれ落とされた肉壁に、真選組の知恵を越すことは出来ない。

「それに比べて、我が国が国の元代表は呆れた男だ。我が身可愛さで魂を売ったとはね。」

かの名君がこれ程の大馬鹿者とは、伍丸博士も見抜けなかったな」江戸城に赴いて、真選組の活動を説いていた伊東。定々にも言葉を並べたからこそ、裁くべき人間だと知りながら頭を下げていた事実に苛立つ。

同時に、定々を引きずり落とした関係者に真選組がいたと知ったときは、土方に少しばかりの賞賛を送った。

矛盾する我に腹を立てながら、残る肉柱に居合い斬りを終える。

「皇帝を排し、城を穢して、貴様は民になにを与えるつもりだ。連合帝国を自分の傀儡と言うのではあるまいな」

ネロが最後の肉柱を斬り伏せ、定々が呼称した“ブネ”十柱は魔力の粒子となって消えた。

「ネロ皇帝、其方は想像よりも言葉が通じるようだ。」

暴君と蔑まれる政に少しは親近感があったのだぞ」

醜悪な部下が消えても、定々は狼狽えない。

「過去は我々、死者のもの。法を敷き、秩序を生んで悪を成す。現在は君たちのものだ。敷かれたレールの意図を解き、若しくは足元のレールを疑いもせずに進む愚か者よ」

どう見ても手札が尽きていない。

誰が見ても分かる。あの肉壁は、一端に過ぎないのだ。

「ならば未来は？誰のものでもない。死者と現在いま、混ざり合えるからこそ未来は“奪い合う”ものだ!!？」

過去と現在、手と手を落とし合っただけ

全員の確信を後押しするように、定々は何処からとも無く取り出した黄金の器を手にして、内側に取り込んだ。

『聖杯を吸収したアアアア!』

『定々の魔力が急激に増幅している！』

皆んな下がれ！そいつ大きく広がるぞ！』

ダ・ヴィンチの声に反応して、全員が後ろに飛び退く。

後ろ目に定々を見ながら、銀時が目撃した光景は身の毛が逆立つような変身だった。

定々の身体を卵の殻のように破り、奥から覗くのは赤黒い結晶。あれを受け入れたら、どんな人間でも元に戻ることは出来ない、そう思うのに十分なほど定々の魂は喰われていた。

定々の全てが地面に落ちて、砂粒のように崩れた皮をすり潰す存在。瞬く間に江戸城の天井を穿ち、比類なき悪が世界へと降り立った。

「なんつー大ききさだよ……！」

「愚かなことを、定々！」

皮膚表面からさざめく稼働音が畏怖を与える。

等間隔に、螺旋のように配置される濁色した瞳が銀時を見つけた。

「——死ね、白夜叉」

合図はそれだけ。

人間が日々、無意識に行なっている仕草一つですら、肉柱にとっては格別の呪いに昇華される。少しでも殺意を抱いた視線は、熱線となつて対象を焼き焦がす。

「なつ……に……に……！」

視線で釘付けにされた銀時は、迫り来る物理的な視線を避けることが出来ない。喉を締め付けられる苦しみで動けず、足先どころか心臓すら麻痺したところに、赤い熱線のろいが無遠慮に通過した。

「ぐっ……！！？」

真横に吹き飛んだ銀時。

その肩を押して、竜の鎧を纏ったジークが熱線を一身に浴びてしま
う。

江戸城の壁を突き破り、圧倒的な物量によってジークは遠くへと流
されていった。

「ジイイイク!!」

硬直が解けた銀時がジークを目で追うも、その姿は目視できる場所
にはない。無事を確認したいところだが、銀時の直感が急発進を両脚
に叩き込む。二転、三転して自分のいた場所を見ると、焼き焦げた床
が広がっていた。

「くそっ……」

『大丈夫、靈気は壊されていない。すぐに戦線復帰できる。それより
も、目の前に集中するんだ!』

ダ・ヴィンチの言葉を信じて前を向く。

聞こえていなかっただけで、既に伊東とネロが一太刀浴びせようと
ブネへの接近を試み、そして失敗に終わっていた。

「おい伊東! 伍丸のやつに聞いてなかったのか!」

「知らん! 博士の未来視は不完全だった。本当の詰みに絞って視てい
たぞうだ。ここからは博士の眼は頼れん!」

銀時も刀の届く範囲まで迫ろうと伊東たちにつき、3人で少しずつ
距離を詰めていく。

「そうかよ! じゃあいつも通りってこった!!」

「いつも通り!? 其方ら、こんな化け物相手に物怖じせぬとは思ったが
……! ぐぬぬ、余とてローマ皇帝。サーヴァントに負けておれぬわ!」
『皆んな! ブネ……いや、定々の呪いも一度に打てる数には限りがあ
るみたいだ。眼のような部分を酷使すれば焼き付くと解析した。』

このまま行けば、直ぐに攻撃が届くぞ!」

熱線を避けようと駆けるたび、壮麗な床は藁も同然に散り散りにな
る。少しでも隙を見つけては弧を描いて接近する。

あと少し、残り一步で刀が届く場所に来たとき。

『む、外から十数人の人影が接近している。』

恐らく連合帝国の兵士だ。援護射撃してくるかもしれない、注意してくれ』

ダ・ヴェインチの警告の直後、騒ぎを聞きつけた連合ローマ兵たちが遅れてやってきた。

弓屋や槍を携えた兵士たち。前後で挟まれたら厄介な状況で、貴様たちローマ帝国の者か！

連合帝国に堂々と立ち入るとは……」

「うるさい、役立たずどもが」

定々は味方である彼らを罵倒し、その眼に呪いを込めたのだ。

「ちっ、呑気に来るやつがあるか！」

入ってきた十名弱の連合ローマ兵の命を諦め、この間にブネへ接近しようと試みた伊東。

「させぬ——」

「ネロ皇帝?!」

視界の隅っこで、ネロが彼らへと駆け出していくのを見て、更なる最悪の結末を想像する。

どう見ても罠だ。銀時か、ネロならばするかもしれない行動かぼいを誘うために、援軍を殺すのだから。

『そんな無茶な!?!』

「守ると思つたぞ、民想いの皇帝よ」

銀時も、伊東も間に合わない距離から、ブネの呪いはネロを見定めた。

「ネロ——!」

ネロは薔薇の剣を構えて、伊東の回避の声に笑って応えた。

赤黒い結晶から、平和を汚濁する物量が迸る。

逸らすこと、不可。連合ローマ兵が1人は巻き込まれる。これ以外の選択肢は人手が足りない。故に、真正面から呪いを迎え撃つた。

物量を伴う呪いだ。必然的に斬ることも加納なはず。避けながら見定めたタイミングで、炎を纏う剣を振り抜いて、

「あ——っ……………」

衝突と同時に爆発して、赤い粒子が舞い落ちる。

血が混じり、闇が笑う。

一度の直撃で人なら瀕死する呪いを浴びて、

「余でなければ……死んでいた!」

皇帝は尚も立っていた。

額から滴る血がドレスを染めて、呪いが肌を焦がしても、膝を着けずに敵兵を庇っている。

そして、何ともない訳がない身体を背後に向けて、呆然とする男たちには告げた。

「見たか、連合ローマ兵よ。貴様たちが支えていた男は、悪魔に魂を売った愚か者だ」

「な、なぜだ………貴様は……」

「さつさと民を逃せ。皇帝の勅命だ!」

「………」

敵でありながら、身を焦がして口にした言葉は民の安全。連合ローマ兵たちは己のプライドを噛み殺し、無言で頷いて立ち去っていく。

「貴様はずつと勘違いしているぞ、定々」

視線は少しもブレない。皇帝たる意思を剣に込めて、その切先を定々に向ける。

「過去はローマのもの。現在いまがローマそのもの。

そして、未来こそローマが栄えた象徴である。

人に化けた悪魔になんぞ、ローマは一片たりとも明け渡したことはない! そうだろう、伊東、ギントキ!」

謳う言葉は徹頭徹尾ローマのこと。

ローマから始まりローマで締める。

「民を導く者として、大きく差が開いたな」

「ああ、百ゼロでネロだ」

暴君の名に相応しく、誰よりも先導者たる背中を示してみせた。

「あんた、皇帝の座を追われちゃいないよ。

連合ローマ兵はあんな態度だったが、心はガッツリ掴んだと思うぜ?」

「ふ………当然で、あろう」

仲間を傷つけられて、銀時は不甲斐ない自分に腹を立てる。
ネロを頼んだと伊東に目で伝えて、銀時は刀を……”最後の王”の
刀身を抜く。

動作を確認した定々は、呪いの的を再び銀時へと向けて――。
「貴様、その刀をどうして持っている!?!」

刀の正体に気づいたとき、驚愕に見開いた眼のうち地面から最も近いものに刀が突き立っていた。

「ば、バカなアアアアアアアアア!?!」

「お前は肝心な時になにも見えてねえんだよ」

守るものが増えて、同時に獲物を狙う狩人は1人となった。ここからは鬼の戦場。江戸の法を犯し、侍の国に唾を吐いた畜生を斬る時間だ。

銀時は無我になって走る。呪いを目で見るのが誤りだと漸く気づいた。殺気と要領は同じだ。来るべきところに、有るべき殺気が込められる。

ならば、駆け抜けるのは容易い。

「なぜ避けられる!?!」

戦闘において素人の定々が、眠れる獅子を泡沫から微睡みにさせた時点で、視線で捉えることは不可能となった。

「俺は目の前だけ、くそ狸」

突き立てた刀に手を掛けたとき、後方の床が呪いで弾け飛ぶ。定々が銀時をやっと見つけたとき、横一直線に点在する眼は全て斬っていた。

「ああああーああああー!!!」

断末魔が城を揺らす。定々の生き汚い人生を表す声を黙らせるように、2メートル上方にある眼も壁を掛けて斬り伏せていく。

『すごい、その眼を斬っていったらネロ皇帝に付着した呪いが薄くなっていくぞ!サーヴァントでいうところの霊格はまだ見えないけど、このまま眼を斬っていれば出てくるはずだ!』

肉柱を登り、斬って、走っては斬る。

頂点まで血を浴びながら猛る侍に怯えた定々は、悲鳴のような声を

上げて自らを倒して床に叩きつけた。

「離れるオオオオオオ!!」

「ぐっ!」

受け身を取って起き上がる。

背後にはくたびれたネロを抱える伊東。息はあるが、呪いは徐々に身体を蝕んでいるのが見てわかる。時間がないというのに、定々は残った4つの眼に呪いを込め終えていた。

『まずいぞ、避けるんだ銀時君!』

『無理だ!あれ全方位に呪いを撒き散らす気だ!』

早く下へ逃げ——』

自分一人なら間に合うかもしれない。

だが、後ろにいるネロの視線が言っているのだ。この城ですら、捨て置く気はない、と。

強欲な皇帝の眼差しに当てられて、銀時は特段の笑みを表に溢して、高々と叫んだ。

「見てろ……これが江戸の侍だアアアアア!!?!!?!!?」

撒き散らされる呪いを、“最後の王”で真正面から迎え撃つ。

無謀な挑戦だ。先程のネロが真正面から挑んでどうなったか、全員がしっかりと覚えてる。それでも、銀時には確信があった。

この刀は、定々の呪いを斬ることが出来る。

そのために託された刀なのだ。

——あっぱれだ!——

地面すれすれで静止する“最後の王”。

銀時から後ろに扇状に避けて通った呪い。降りかかる死を斬り伏せて、銀時は後ろを振り向いて笑ってみせた。

『の、呪いを斬った——?!』

銀時君、人間辞めすぎじゃないか!』

『本当に人かい!?オルレアンでも串刺し公を倒したり、灼熱の中で戦闘したり人外じみていたけど、まさか呪いまで斬っちゃうなんてね!』

惚れたよ銀時君!帰ったら実験に付き合っ♡』

「うっせえ!帰りたくなるから黙ってる!」

モニター越しのやり取りの間に、ロマニがブネの解析を終えた。

『今ので全部の眼が砕けたぞ！』

霊格は……あつた、天辺だ！

そこを斬り落とせば定々は消滅する！』

「やらせるものか！」

王に賜りし魔力で貴様たちだけ死ね！」

「往生際が悪イんだよ。」

章ボスごときが尺取つても嫌われるだけだっつーの」

『や、ヤバイヤバイやばい!!』

「今度はなに!?!」

『3人とも、今度こそ退却するんだ！』

定々の身体から魔力が溢れまくってる。霊格を壊しても、暴走させて道連れにする気だ!』

留めを刺そうと踏み出した足を止める。

ここまで来ておいて、最悪の選択を定々は強制してきた。

死 or 死。殺して死ぬか、爆発を起こされて死ぬ。

どちらも似た結末を、定々という畜生は迫ってくる。

『強制退去急げ!!?逃げてても間に合わない!!?』

物語の土台を覆す仕業に、誰もが血相を変えて足掻く。

「万事屋、来い!僕の霊気に変えても——」

だが、間に合わない。

誰の努力も、名君と呼ばれた男の一手には届かない。この男は、最高の土台を最低の場所に落とす方法を知っている。それだけで成り上がった畜生なのだ。

「牢城災建 ブネ」

「やっちまえ」

だから、届いた声に銀時は佇んで応えた。

次の瞬間、天空から現れた影が肉柱へと手を伸ばし、

「やめな……いか!」

「スレツ t——」

江戸城を突き破って災いの上から巨影が降り立つ。

邪竜ファヴニール。ジークの転身した姿に目を向く伊東とネロ、ついでにモニター越しのカルデア一同。

続けざま、定々の発動した爆発はファヴニールの前足に押し潰され、江戸城の天辺から真下へと駆け抜ける。突き抜ける赤い炎は定々の断末魔となり、水星の如く死に果てた。

牢城災建帝国セプテムⅢ

握りしめた右拳を開く。

手のひらから魔力の粒子がソラに浮かんでいき、影丸の靈気が呆気なく砕けたことを物語っていた。

ローマ帝国に創られた仙望郷、大浴場にて。

破壊神アルテラとの戦いで影丸を引き剥がし、立香たちは喜んだのも束の間。倒れ伏したアルテラが傷ついた身体も気にせず立ち上がるものだから、再び臨戦体制を取った。

「これで…消えたのかい？」

「ああ、影丸は死んだ。ここから出ない限り、定々に感知されることはない」

「それは良かった。俺たちは直ぐに連合帝国に行きたいんだけど…」

立香の言葉は本意だが、ここから連合帝国まで直ぐに行く手段はない。少しだけ凶暴性が抜けた…：ように見えるから、会話で気を収めてもらおうという考えだ。

それも、アルテラが振り上げた軍神の剣を見て、成立しないものと悟った。

「次はお前だ、ロムルス。お前の靈氣にいる影丸を出せ。でなければ、お前ごと破壊する」

「えっ…!？」

初めて聞いた…：いや、あつてほしくないと思っていた考えをアルテラが言い放ち、立香とマシユは詰まった声を漏らす。

全員の注目を浴びるロムルスは、一歩前に出て応える。

「私の靈氣に影丸はいない」

己の靈氣は不干涉だと断言した。

ロムルスが元々は連合帝国の王に据えられていたとしても、ローマを背負う父としての在り方は変わっていない。ネロがロムルスを認め、最上級の敬意を示すことから見ても分かる。

「……………なら何処にいる。サイトウも、シゲシゲも違った。残る定々との関係者はロムルス、お前だけだ」

「ソレを止めたのが答えだ。お前自身、薄々は気づいているだろう。ここに影丸の気配はないと」

「……………」

ロムルスの言葉を聞いて大人しく剣を下ろす。

戦闘の意思が見られない。これが答えということだ。

「じゃあ、ロムルス王は大丈夫なんだね！」

「……………否。民はいまも苦しめられている。民無くしてローマ無し。今から連合帝国へと向かう。最後の影丸は“江戸城”にある」

「えっ、色々と聞きたいことはありますが…居場所をご存知なんですか？」

「見てはいない。だが、確信がある。定々が造りし江戸城は、ローマ皇帝の靈気を基に建てたもの。」

そこに影丸を埋めるのは容易かろう」

この特異点に来て何度目かの絶句。

皇帝が退去し始めてから江戸城が建ったとは言ってたけど、それが骨組みに使われているなんて……………。

「どう読み解けと!？」

とんだ伏線に立香は思わず叫んだ。

いや、事はそれどころじゃない。

「江戸城そのものが影丸になっているなら、銀さんたちが危ない！」

「そ、そうでした。なぜかカルデアとの通信が出来ないので、このことを伝えられません！ 私たちが出向くしかないですが…」

「そうだぜ王様よ、どうやって移動するんだい？」

こっから徒歩半日って話だ。今からじゃ間に合わねえよ」

「タゴサク…即ち仙望郷^{ロム}よ。我らの未来のために、その力を奮ってはくれまいか」

「…そういうことか！」

ロムルスはタゴサクに協力を求め、逡巡したタゴサクは合点と手を鳴らす。いまのやり取り、立香とマシユは首を傾げるだけだ。

何をするのかタゴサクに聞くと、「ロムルス王に託すのさ」と渋い笑顔を向けられた。

「魔力をロムルス王へ回す。『芙蓉 伊―零號未来型』とのパスを遮断。仙望郷をローマ帝国に繋げる」

タゴサクが宣言する。

途端に仙望郷が揺れて、雪山景色が晴れる。

「な、何をするのでしょうか!? 外が揺れ始めましたが!？」

「嫌な予感しかない!」

仙望郷が世界へと浮上する。

外を見渡せばローマ帝国に早変わり。写真を横にスライドしたかの如く、景色が一瞬で元に戻った。

「ほら、どこでも良いから捕まりな?」

いまからちよいと揺れるよ」

「捕まるって何処に……」

レイに促されて、慌てて辺りを見回す。マシユと一緒にいようと思つてその姿を探していると、白い手が差し伸ばされてきた。

「あつ、マシユ——」

手を掴む。だが、すり抜けた。

なぜかマシユの手がすり抜けた。

なんでだろう?」

首を傾げて、手首から視線を上げていく。するとそこには半透明で、反対の手には火縄銃を持っているハゲがいた。

「ブツ殺ス……床屋」

「あぎやあああああ!？」

「せ、先輩!？」

ビククリして手を引つ込めたが、もう遅かった。

ロムルスの槍がいま、仙望郷に突き立てられたのだ。
「征くぞ。すべては我が槍に通ずる」
マグナ・ウォルイツ・セ・マグヌム

その声から鳴る音が、仙望郷との親和を語る。

魔力が絶え断えの神祖に、ロムルスローマへの献身を示す。

仙望郷に集いしスタンダたちが束となり、魔力を惜しみなく捧げ

る。この時代では決して見ることもない光を灯して、ロムルスはローマ帝国の全てを創造し始めた。

「ロムルス・クイリヌスがローマへと導こう。人類最後のマスター、藤丸 立香。しかと受け止めよ」

隆起する大地が仙望郷を推し進める。

この場所だけを何かが下から持ち上げて、連合帝国へと向けて発進した。

衝撃に耐えきれず、身体が放り出された。

慌てて手を伸ばして掴んだものは――。

「こ、これは!?!」

「ロムルス王の宝具だ。過去・現在・未来のローマを造成して敵を倒すらしいが……お前さんたちに勝利を届けるために解放したらしい。

速いねえ、これなら直ぐに連合帝国に着くぜ」

軽快に笑っているタゴサクも、感心するマシユも銭湯の壁に張り付いている。かなり上下に揺られて、三半規管を試される状況下でマシユは目を輝かせて振り向いた。

「す、すごい!先輩、見てますか!?!」

「……………うん、見てるよ。てか、こっち向いてる」

冷や汗を垂らして、火縄銃の先端を掴む立香。

「銃口が」

そこには絶望に目を曇らせて、三半規管どころか、運命を試されるマスターがいた。



天守閣を染め上げて、恐怖の威厳を連合帝国にもたらした存在、徳川 定々。彼が変容したブネはいま、ファヴニールの右足によって押し潰された。

巻き上がる血飛沫。下降した魔力の粒子。

「ド、ドラゴンンン!?」

「脳内にセファなんとかという単語が出てきた!」

そして、突然の出現に驚愕するネロと伊東。

叫んだ拍子に全身に激痛が走るネロは、その辺をのたうち回っている。

『あく、大丈夫ですよお二人とも。ほら』

「無事でなによりだ、マスター」

「そっちこそ。ナイス右手だけ、ジーク」

ドラゴンと銀時が気さくに会話をしている様子を見て、ネロたちはドラゴンの正体に気づいた。

「そ、その声……ジーク!お主、ジークか!」

「驚かせてすまない、ネロ皇帝。緊急事態だったので断りなく宝具を使わせてもらった」

「——くれ」

「えっと、なんて言ったのだろうか」

「ジーク、ローマに来てくれ!メチャクチャ格好いいではないか!その背中に余が鎮座し、ローマの空を飛ぶ!

いや飛びたい!頼む、報酬は弾むぞ!」

「えっと、お断りする」

「ガーン」

ジークは、オルレアンに続いて勧誘を受けたことに苦笑する。

項垂れるネロを見ながら、銀時はふと辰五郎の言葉を思い出す。

“また野郎の顔を見たくねえなら、コレで殺せ”

(つべく、大丈夫かな。この刀で殺さなかったけど。うん、大丈夫だよ、スレツ〇も笑ってたし!俺も笑ったよ)

辰五郎の忠告の真意は分かず仕舞いだが、状況が状況だ。取り敢えずこの刀で斬りまくったから良いだろうと納得する。

「あは、あははは!」

「——はははは」

銀時の笑い声に重ねてきた嘲笑。

「(、)の声は!」

『これは定々!?でも霊気反応なんて何処にも…』

『……………あつた』

『えっ、どこ?』

『江戸城』だ。飛び散った壁も、押し潰した床張りも、銀時君たちが立っている場所も……………そこかしこから、定々の霊気反応が発生し始めた!』

ダ・ヴィンチの解析を聞いて、やっと声の出どころを理解した。

床が揺れる、いや…嗤っている。何処にもいて、何を見れば良いのかを分からない下等生物を見下して、人間の上位に昇った悪魔が再び現れた。

「言つたはずだ。私を殺す術はない、と」

「嘘、だろ……………」

江戸城の床から、徳川 定々が浮かび上がる。

1人、2人と数を増して、瞳から生気を無くして。

江戸城をも喰らい、定々は生きることへ執着する。

「皆んな、俺に掴まれ!!」

現状では倒す術がない以上、選択肢は退避のみ。乱雑に腕を振り回して、その前足に3人とも掴まる。合図など出さず、一気にフアヴニールの巨体をソラへと移す。

次の瞬間、江戸城は悪魔の針山と化した。

「我が城を」人間の毛細血管」と例えたな。あの時は肝が冷える思いをしたぞ」

江戸城を突き破る無数の柱。

その全てが定々がブネと名乗った悪魔。どれも同じ見た目で同じ言葉を発する。

この世で最も醜悪な音だ。不協和音では物足りない。公害と名づけるに相応しい破壊音を響かせる。

「連合帝国は…貴様の民草であろう!」

どこまで皇帝を愚弄する、愚か者が!」

ネロの叫びは届かない。

いや、人間の訴えが定々に届くことはない。

ブネという姿は、定々が人の心を捨てた姿。決して人類とは相容れないことを体現している。

「江戸城を造ったのは“たまたま”素材が手に入ったからに過ぎん。貴様たち皇帝の靈氣、座に還るだけの粒子を有効活用したまでのことだ」

「……………屑が！」

「実に土地に馴染む骨子だ。そのおかげで、この通り」

地上に現れ出るのは、江戸城を構成する全てのもの……………例えば柱、壁の一面、瓦に至るまで。無駄なく、全てが溶けて混ざり合わさって、幾つものブネが連合帝国を染めていく。

地上は逃げ惑うローマ市民で阿鼻叫喚だ。どこに逃げようと、逃げた先に呪いが聳え立つ。外に逃げるまでに、市民の大多数は助からない。

『ば、バカな!』

定々の靈気反応が十、三十、まだ増えていく! ヤバいぞ、これ全部、ブネに変わるんじゃないか!』

「見よ、江戸の災建を。これが我が城である」

そうして、七十二のブネが連合帝国を見下ろす。

地面を引きずって家を壊し、連合帝国を更地にしながら進む先はローマ帝国。この数でローマ帝国を襲おうものなら、数の暴力で敗北するのは目に見えていた。

「おい、本体だ! 本体の居場所だけ教えろ!」

『今やってる! やってるけど……………全部本物なんだよ!』

何度やっても、データを比較しても全部一緒。1つの違いもないんだぜ! 双子でもあり得ない!』

そのための最短の道を、ふざけた現実によって閉ざされる。

ここからローマ帝国まで、距離にして徒歩半日。

50キロ弱の道中で、この数の化け物を3人と一体で倒し切らなければならぬ。

地上を這うように進んでいるところを見るに、ファヴニールで燃やし尽くすことは出来る。ジークがどこまで戦えるかにローマ帝国の

未来が賭かっている。そして、魔力の使いすぎは銀時の身体にも影響が出る。

最悪、身体を酷使してでも止めることを覚悟した矢先。

「国家の父、定々が時代の王となる瞬間を見届けよ。」

征くぞ。ローマ帝国を喰らい尽くし、人理焼却を果たす」

ブネは砂埃を舞い上げながら、地上から姿を消した。

「じ、地面に潜りやがった……………!」

「カルデアの魔術師!定々はどこまで潜った?」

『定々は地下100メートルまで潜ってローマ帝国に進んでいる。アルテラと同じ速度だ、30分足らずで着くぞ…』

しかも、十柱を連合帝国に残している。

目的は最悪だ。誰が聞かずとも、銀時たちに連合帝国ローマ市民の殺戮を止めさせるためだと分かる。

「一部を敢えて残し、連合帝国を襲わせている。

これは定々の時間稼ぎです。付き合ってしまったえば、定々に追いつく頃にはローマ帝国が呪いで満たされるでしょう」

「……………だから見放せと申すか、カモ」

「ネロ皇帝、いま追わなければローマ帝国の負けです」

伊東は嘘を吐いた。

地中100メートル下を進む化け物を、ジークの息吹に頼ること以外、思いつかない。だが、倒し切ることは不可能だ。銀時の身体が魔力の使いすぎで壊死するのが先になる。

「ジーク君、一発打って何体倒せる?」

「……………一体倒せば良い方だ。」

地面が邪魔で俺の息吹も威力を發揮できない」

「それを、定々を追いながら、連写は可能か?」

答えは返せない。

どの道、ローマ帝国に到着した瞬間から、六十二ものブネを相手にしなければならぬ。

つまるところ、ここです済み——

「高度を下げてください」

「えっ……？」

伊東は全員が一致しかけた結論を、突然の指示でうやむやにする。高度を下げるなら、定々を倒しに行くということ。だけど、自分の言葉とは真反対の指示だ。ネロは混乱しているが、銀時は伊東の意図に気づく。

「僕が残る。出来る限り、僕が定々を止めてみせる。だから銀時、ジーク君、ネロ皇帝。定々を倒してくれ」

「お前……」

「僕は真選組の頭脳にして神童、伊東 鴨太郎。」

今の僕になら、この隊服がある。やってみせるさ」

「——余の我儘に付き合ってくれて感謝する。」

こローマ帝国第五代皇帝ネロ・クラウディウスの名において命じる！連合帝国のローマ市民を守り、そして帰ってこい、伊東 鴨太郎!!!」
「お任せください。必ずや果たしてみせましょう」
ネロの宣言を守るため、伊東は従者として最後の務めを果たしに行く。

伊東が救えないと思ったものを、ネロは救えた。生前の過ちから学ぶならば、伊東はここで連合帝国のローマ市民を守ってみせなくてはならない。

「ジーク、定々を追ってくれ」

「……………分かった」

伊東の決意を見送り、ネロはジークに進むように頼んだ。

堂々たる瞳を見て、なにも心配はいらないと分かったジークは両翼を開き、再びローマ帝国へと羽ばたいた。

「敵だというのに、救いの手を差し伸べようとする。暴君とは思えない言動だからこそ、僕は懐かしんだ」

連合帝国の地面に降り立った伊東は、勢いよく飛び立っていくファヴニールの背後を見送ってから剣を抜いた。

いまの状況を確認する。ネロが救った連合ローマ兵たちによって、避難は迅速に進められていた。それでも人手が足りていない。この混乱で市民が逃げ惑い、恐怖で動けない者も続出している。

どれだけ人手があっても足りないわけだ。まるで、ローマ帝国で過ごした毎日のようだった。

「ローマに仕えながら、真の絆を貴女に重ねていた」

騒がしかった十日余りを思い返して、背後に迫る定々だったものを見上げる。

「愚かだな、鴨太郎。ここに全員で残れば、少しは長く生きられたものを。いっそ、私の元に降ることも許したというのに」

「愚者はお前だ。ここでお前たち十柱を仕留めれば、十分に採算が取れる」

「十柱は残しすぎだ」と笑う。

同時に「十柱で足りるわけないだろう」と言う。

不可思議な言葉に、定々が無い首を傾げると、ブネの身体に浮き出た眼が斬り飛ばされた。

「攘夷志士と繋がってたかと思えば、次はローマ帝国だあ？これだからエリートは裏切り気質で嫌いなんだよ」

伊東とは真反対に付いた眼が機能を停止する。千里眼で伊東の挙動に注目していた定々は、突然の奇襲に混乱を隠せない。

「組織立ってしか動かない君とは違って、僕は単独でも調査してるんだ。しっかりと情報共有はしている」

伊東が話しかける相手を探すために周囲に目を向けて、やっと見つけた。

1人、2人、3人……。まだ増える、なぜか増え続ける人影。次々と召喚されて、方々に聳えるブネへと走り寄る。

「な、なぜ……どういふことだ!？」

—— 彼らは、伊東の呼び掛けに応じた。

真選組に所属し、承諾した隊士たちを召喚する。真選組の幹部が共通して保有する宝具、『真の絆』の能力だ。

いまの伊東では一度使えば現界も危うくなる、魔力消費の激しい宝具をここで解放した。

「なにも成果を上げず、『女神様』を相手に手を焼いている君には言われたくないね、土方君」

真の絆によって呼ばれたサーヴァント、土方 十四郎は伊東の直球な悪口に悪態で返した。

「煩えよ。成り行きでなっちまったんだ、仕方ねえだろ。好きでやってんじゃねえ」

「いやいや、嘘も大概にしてくださいよ」

ブネを挟んだ会話に横槍を入れたのは、土方の後ろから振られてた一閃の刀。間一髪で不意打ちを躲す土方を他所に、ブネの眼がもう一つ抉られた。

「犬の餌をバカにされて喧嘩売ったの土方さんでしょ」

「危ねえっ！ふぎけんなよ総悟オ！あれはマヨ井！」

世界中のカロリー信者が崇拜する最強の食べ物だ！

気の抜けた返事をするのは沖田 総悟。

「貴様ら……そうか、宝具だな。無駄なことを。生前の恨みだ、楽に死なせると——」

「いやうるせえ！」「死ね土方！」「土方死ね！」

三方向から雨あられの如き斬撃を浴びて、ブネは細切れとなって消滅した。

「お前ら俺狙ってただろ！掛け声が俺に向けてたよ！」

「気のせいだろ死ね土方」

「そうですよニコチン切れてんじやねえですかい土方死ね」

「少しは殺意を隠せエエエエ！」

そして、本気の喧嘩がおっ始まる。

「ちよつとオオオ！呼び出されて早々喧嘩しないでくださいよ！！魔神柱、俺たちじゃ倒しきれないんですから！」

見兼ねた山崎が止めに入った。
剣を下ろし、土方と総悟が敵を確認する。

その先に伊東は隊士たちを見て、斉藤の姿を探した。

「斉藤の姿は…ないか」

「斉藤がなんだって？」

「独り言だ」

残念ながら彼は召喚に応じていないらしい。

応じたところで記憶があるかは定かでは無い。

もう分からないことは置いておくことにする。

「で、コイツらは誰だ？」

「徳川 定々だ」

「――」

「コイツらなら知ってるのか、近藤さんのことを」

「可能性の話だけだね。こんな化け物になっているんだ、叩けばなにか出てくるとは思わないか？」

近藤というワードを出すと、真選組全員の瞳の色が一段と獣の如き飢えを見せる。

伊東が真選組と行動を共にせず、セプテムに來た理由。それが近藤勲の所在を探すことにあるとは、ネロ皇帝ですら知らない。

この話をしたところで進む物語でもない。故にここまで語らずにいたが、定々のように敵と繋がりがあある者を見つけて、聞き出すタイミングを作るには別れるのが都合が良かった。

「優先するのはローマ市民の安全だ。その上で、チャンスはもう九柱しかない。心して臨め」

「はっ、言われなくても分かっているさ」

真選組全員で同じ敵に刀を向ける。

そこに、伊東自身もやっと加わることが出来た。

今更…とは嘆かない。やっと、スタートから踏み出せたのだ。

「行くぞ真選組！徳川 定々をもう一度討つ！」

ここから、伊東の真選組は始まる。

生前、最期に知った想いと共に戦場を駆ける。

あと1人、足りない影を埋める、その日まで。

牢城災建帝国セプテムⅣ

ローマ帝国から出発して程なくして、マシユはカルデアへの通信を試みた。

「ドクター！ダ・ヴィンチちゃん！聞こえますか!?!」

『うえ？マ、マシユ!?! やつと繋がった！急に通信が切れたから心配したんだ！見たところバイタルは正常か!』

呼びかけて数度、やつとロマニが応答する。

通信が途絶えたのは連合帝国による弊害だが、技術不足のカルデアが把握するのは先になるだろう。

モニターの向こうで鳴り響く警報音。次いでモニターに現れたダ・ヴィンチが声を荒げた。

『ちよっ……マシユ、なにに乗ってるんだ!?!』

「すごい魔力反応……これ、宝具だね?」

「はい、ロムルス王の宝具です。なんでも、あらゆるローマだそうです……って、今は説明の時間も惜しいのでした。聞いてください、定々についての情報です!」

『アルテラもいる……!?てか立香君なにしてるの?』

「銃口オオオ！銃口こっち向いてるんでエエエエエ!」

引き金からアアアアアアア！ゆび離してエエエエエ!」

モニターを横に向けると、スタンドの火縄銃を掴んで振り落とされまいとする立香がいた。

「絶対に打たないでねエエエエエエエエエ!!!」

「ブツ殺ス……床屋!」

スタンドの表情からは殺意が滲み出ている。

その顔はまさしく宣教師。

「ていうか誰ほんと!?!」

「先輩、ザビエルです! その顔はザビエルさんで間違いありません!」

「ザビエル!?! なんてザビエルがスタンドになってんのさ!?!」

「ああ、それね。彼は徳川政権に恨みを持ってんだ。なんでも、床屋改

革を早く施行しなかったことを根に持つてるらしい」

「いや逆恨み！」

「床屋改革ブツ殺ス!!」

『…おーけー、ひと先ず状況報告とはいかがか』

通信が途絶えて数十分、混沌としたローマ帝国組に腹を抱えて笑うダ・ヴィンチ。このままでは埒が明かなさそうなので、連合帝国で起きたことから話し始めるのだった。

ザビエルにお帰り願ったあと、現状確認を行った。

「……………酷い。歴代ローマ皇帝たちの靈気を、江戸城に作り変えていたなんて。こんなこと、許されません」

『ああ、銀時君たちも怒髪天だ。』

……………それにしても、定々の変わり身とききたか』

ダ・ヴィンチの苦い声を聞いて立香たちは嫌な予感がして、恐る恐る聞き返す。

「なにか問題が？」

『定々が変容した姿、ブネを解析したら七十二柱全てに定々の靈気反応を確認したんだ』

「ぜ、全員から？…それは、まさか」

『……………七十二柱、全部が影丸ということだろうね』

——前提が崩れてしまう。

全部を倒さなくてはいけない、と。気の遠くなる現実に立ち向かっていたのは、定々を倒せるからである。

本体がどこにも居ないのでは、ローマ帝国を守る手段が…。

「どうすりゃ倒せる？」

モニターを通して、銀時が問います。

『単純作業さ。地下100メートルから引きずりだして、一柱一柱倒

せば……』

「違えよ。定々本体の話だ」

『……分らない。ここに居ないなら、倒せない』

『ローマ帝国、連合帝国の全域にスキャンをかけて定々を探してる。だけど、見つかりそうにはない。』

恐らくだが、この特異点に居ないね』

意味を理解……どうやって事実を読み込めばいいのだろうか。

これだけローマ帝国を荒らした男は、千里眼でこちらを観戦している。なにも傷を受けず、他人の痛みを理解しないで、人理焼却を完了させようとは。

「——くそっ、どうすれば」

「場を整える」

悔しくて漏らした言葉を、ロムルスは拾った。

「えっ……？」

「ローマの全てで、迫る六十二柱を閉じ込める。あとは、その刀で本体を斬るのだ」

まだ手段は……定々を倒す方法があるということだろうか？

俺も、マシユも、いや……定々を知る者以外は分かっていない。

「難しいことは一任するぜ。」

だから、俺らの国の後始末は任せろ」

銀時が笑う。ロムルスがモニター越しの声に頷く。

作戦を伝えてもらう暇はない。俺の目にも見えてきた、ブネ六十二柱の大進撃。悠長な時間はないから、2人を信じて、俺に出来ることを探すことに徹する。

「ここからは王^{ローマ}を示す時間だ」

荒野にて、ローマ帝国の存亡を賭けた、第二特異点最後の戦いが幕を上げた。



ローマ帝国へと向けて進撃するブネ、六十二柱。

その保有者、徳川 定々は実のところ、連合帝国に残した十柱と合わせた七十二柱全てを消されても本体にダメージは入らない。何故なら、ブネを提供した“首謀者”の玉座に、徳川 定々の本体は保管されているからだ。

「鴨太郎め……真選組を喚ぶなどと小癩な真似を。一度ならず二度までも、国家の父を国家の犬が噛み付くか」

苛立ちを込めて呟いた。

定々は当然のように千里眼を使い、無駄な抵抗を始めた真選組を蔑む。この調子では連合帝国に残したブネは残し損だ。

「まあいい。全てのブネが消滅したとしても、また量産するだけのこと」

そう、想定外の対処に不満を残しながら、斬られた右腕を再生させながら呟いた。

本来なら七十二柱に分裂する予定はなかった。江戸城を一柱のブネへと変容させて、地上を呪いで満たすだけで終わるつもりが……銀時の使う刀のせいで御破産だ。

“最後の王”。

徳川幕府を終わらせる“概念宝具”の名を思い浮かべる。征夷大將軍ならば、見たただけであの宝具の特性を理解する。出典を思い出せなくとも、斬られれば玉座で物見遊山を決め込んでいる本体すら容赦無く斬られることを知っている。

だから七十二柱に分割した。將軍家が代々抱えてきた將軍の身代わり、“影丸”を。

そうすれば、身体の一部が傷つくだねで済むから己の霊気までは届かない。霊気が無事なら再生が出来る。そうして何度でも別の特異点に乱入し、いつか“最後の王”を砕けば定々の勝ちは約束される。最悪の醜態っぷりを買われた男、徳川 定々に許された暴挙だ。

「直ぐに目にも物を見せてくれる。

今度は死なぬ。サーヴァントとして、貴様らを殺し尽くして我が世の

春を楽しむのだ」

笑う定々は油断していた。

七十二柱に分ける作業に移ってから、ローマ帝国を視ることを止めていた。視えないなら視るまでもない、という理由で。

「——なんだ、あれは」

ローマ帝国を視た定々は異常事態に気づく。

ローマ帝国が視えた。しかも、大地が荒れに荒れている。アルテラの仕業かと思うが、すぐに違うと分かった。地面の抉れはローマ帝国の外、連合帝国へと伸びている。

大地が割れた痕を追う。

追って、追って、直ぐに見つけた。

進行方向から迫る壁……帝都ローマの波を。

「ロムルスか……！」

ロムルスの宝具が解放出来ているのは納得がいく。

きつとカルデアのマスターと契約したからだ。

そうじゃない。ロムルスは定々の死因を……倒し方を知っている。

地下100メートルを進む定々を閉じ込めようと、宝具を左右に展開している時点で牢城を作ろうとしているのを理解した。

「ロムルス、貴様がなぜ牢のことを知っている!？」

ロムルスの意図に気付いたが、もう遅い。

サーヴァントである以上、逸話や生前の死が付き纏うのは当然のこと。一見、無敵に見えるサーヴァントも逸話は誤魔化せない。

アキレウスのアキレス腱、ガウエインの日輪のように生前の逸話が弱点となり強みとなる。

徳川 定々には暗殺だ。

銀時たちによって牢屋に投獄された定々は、高杉 晋助の手によって暗殺された。普通の聖杯戦争なら使い所の無い最期も、こと今回は絶大な威力を發揮する。

定々の影丸を牢に入れて、靈気を破壊する。

定々が死んだ牢ならば、影丸は身代わりになれない。

即ち、対徳川家概念宝具が無くとも定々を殺せるのだ。

「ふざけおって……そうか、辰五郎だな。あんの異物、隠れて入れ知恵しおったかア！」

定々は理解した。

事実、瀕死の辰五郎が銀時に“最後の王”を渡した夜、その足でロムルスの元に出向いたのだが、定々に知る由はない。

それに、七十二に分割したブネ全ての消滅が必須。

「いざとなれば、ブネを——」

切り捨てればいい。

首謀者への説得には苦勞するが、定々の宝具がある限り利用されるのだ。

隠し球がある。死にはしないと、悪辣な笑い声を噛み殺す。

自らの勝利は揺るがないと、いつまでも嗤う。



茂る草木、昇る大樹、栄える水の都。

世界の全てが過去を尊び、全ての現在を愛し、全ての人類の未来を望む国。

ローマのスタンドたちが協力して紡ぎ出し、ロムルスの宝具として実現したローマ帝国。

『ぶ、ぶつかる！衝撃に備えて！』

凄まじい轟音を大地に広げて、魔神柱ブネの大進撃に同じ速度で衝突した。

「……………あれ、あんまり揺れない」

「ローマならば当然のことだ。大丈夫、目を開けなさい、破壊神を退けたローマたち。

今度は我らが、民に未来を示す時だ」

立香がゆつくりと目を開ける。
それは、ローマの全てだった。

過去のローマを地下に敷き、左右に現在と未来のローマを展開する。地下と地上、ロムルスのお宝は定々を閉じ込めるまでローマの繁栄を止めはしない。

「いや、閉じ込めて、定々を倒してもローマは終わらない。終わらせないのがロムルスというサーヴァントだ。」

『こ、これがローマ帝国……！』

地上30メートルの壁が出来上がって、地下に300メートル弱の国土が出現している！左右に1キロ広かったものなんか、そのままブネを囲んだぞ!!!

「なに言ってるか分からない？僕もだ!!」

『これを生み出せる時点で神霊の域に達してるぜ？』

なのに短距離だけでも国を自走させてブネにぶつけるとか……霊気を損失したなんて信じられないな!」

荒野のど真ん中、世界で最も贅沢な牢に閉じ込めた六十二柱のブネを見て興奮する。

「ま、魔神柱ブネの侵攻停止を確認!」

マシユの盾では到底防げるものじゃなかった。ロムルスがいてくれて心から安堵するほど、この牢は心強い。

だが、問題は残っている。

「あの中に行くのは自殺行為です!」

地上に顔を出した約三十柱。

目下、地面が弾け散る。

凝視した壁が爆ぜた。

敵味方なんて関係ない。

無作為に、激怒を見たものにぶつけているだけだ。法則なんてないから見切ろうだなんて無駄。マシユが自殺行為だと警告したのは正しい。一柱ずつ倒そうとするなら遠距離攻撃が必須。

「ドクター、銀さんたちは?」

「ジークのバルムンクじゃないと倒せないよ!」

『ジーク君がファヴニールに転身して向かってる！』

あと30秒だ、それまでは回避してほしい！』

「了解！」と返事をしてマシユと後ろに退がる。

表に現れたのは三十柱だけ。残りは虎視眈々と脱出の機会を伺っているのだろうか。

「この牢として永久ではない。タゴサク、スタンダムはどこまで力を貸してくれる？」

「不味いな…あと1分保たない。地下で暴れてるブネのせいで、ローマの修復に魔力を割いてるせいだ」

ロムルスの言葉に考える思考が止まる。

…1分以内に、六十二柱を倒し切れってこと!?

「ど、どうしよう!?!」

1秒に一柱でも不可能に近いんだけど…」

「ロムルス王、攻撃手段はなにかないのでしようか」

絶望的なんて話じゃない。

火力も、手数も、時間も、なにかも足りない!!

不可能な事態に頭を抱えたとき、ロムルスは俺とマシユの頭を撫でて。

「ならば心配ない」

我々は勝利する、と言い切ってみせた。

建国王に二言はないと背中語っているけれど、慈しみに満ちていた瞳にかげりが現れている。魔力が底を尽きかけているのも本当なんだ。

どうする?そんなの、俺に出来ることは1つしかない。

「ロムルス王、俺と契約を——」

サーヴァント契約を持ちかける言葉を遮って、ロムルスは高々と背後に呼びかけた。

「この程度ではローマ帝国には肉片1つ届きはしない。そうだろう、茂茂」

「その通りだ、友よ」

伊東たちの忠告を聞いて、仙望郷に潜んでいた茂茂が姿を表した。

俺は、いま自分がやるべきことをやつと分かった。
ロムルスたち……王様の道を見届けることなんだと。

「いまは貴方と過ごした時間も、貴方が犯した生前の罪も覚えてはいない。余が問う罪は友の国を貶めたこと」

幾つものローマを踏みにじつてきた王へと、全てのローマを愛する王の友として茂茂は江戸の法を握り込んだ。

「徳川 定々、貴方には罪を償う義務がある。

隠れていては始まらない。どうかこの場に御足労願う」

ローマの壁際に立って、人間ではなくなった血縁者に呼びかける。茂茂はまだ願っていた。己に勝て、と。最後に1つでいいから、人間に歩み寄ってほしい。

茂茂の想いに対する返事は、ブネによる呪いの視線。

「させません！」

マシユの大盾が呪いを防ぐ。

「……残念だ」

江戸の法を振りかざすと決めたのは、茂茂の我が儘でしかない。ローマを荒らし、貶した者への処遇としては軽いのだ。

それでも、定々はなに1つとして茂茂の言葉に理解を示さなかった。もう、温情はかけられない。

「茂茂の影丸を」置いてきた」。定々、貴方の靈氣に」

「……は？」

突然の告白に定々の思考が止まる。

徳川家歴代将軍が有する宝具の1つ、「影丸」。

定々の影丸の位置、状態を定々が把握出来るように、茂茂もまた茂茂の影丸の位置、状態を把握している。

この特異点の外、どこかに存在する玉座で物見遊山を決め込む、定々のことほんたいも。

「悪魔に魂を売ろうとも、貴方を江戸の法で裁く。

それが余に課せられた責務。茂茂の最後の償いだ」

「……視えているのか!？」

彼方のソラへと顔を上げて、定々の視線に合わせた。

「影は番えぬぞ、友よ」。茂茂の友を助けてほしい」

真名解放と同時にブネへと降り注ぐ光。

茂茂の影丸の生涯、その想いを込めたソレが定々の影丸へと届く。

最期に、茂茂の影丸は將軍になった。

ならば、歴代の影丸も將軍になれる。

友の肩書きを、“ただの人に戻す”ために。

「こ、こは……なぜ貴様らが……？」

逡巡の決断は下った。

ひと時、定々の影丸は仕事を放棄する。

七十二に分割された靈気を残さず掻き集め、茂茂に最も近いブネに結合した。漸く自らの靈気を取り戻した影丸は自我を取り戻し、遠い神殿から嗤う男の意識を喜んで茂茂に差し出したのだ。

「う、嘘だ……ふざけるでないぞ！」

私は今の今まで、玉座に居たではないか!!」

これは可能性を示す宝具。

相手が拒絶すれば通じない道理。

だが、定々の内側で待機している茂茂の影丸がそうはさせせない。拒絶の意思を見せる定々を取り押さえ、茂茂の声に応じたのだ。

「そんな宝具を影武者如きが認可するなど……」

生前の恩を仇で返すか、御庭番どもがツ!!?!!?」

哀れな男だ。

元より、この特異点で定々の味方は1人もいなかった。

影丸を含めて、定々は全てが敵でしかなかった。

『定々の靈気が1つだけになった。これが本物だ!』

ローマの牢に現れた定々の靈気。

神殿にも存在する定々だが、茂茂の宝具によって強制的にパスを繋がれた状態となる。これではブネとの接続も解除できなくなった。

「し、茂茂風情が……!」

もういい!地下に潜ませたブネを爆発して……」

地下100メートルで待機させていた三十二柱のブネ。

これを全て自爆させる。一柱一柱がA級サーヴァントの魔力を貯蔵する魔神柱なれば、その数の爆発だけで立香たちを殺すのは可能と踏んだ。

「星の涙——」
ティアドロップ

聞くに堪えない声を遮る、破壊神の怒り。

高く跳び、宙から地下を見下ろして、狙いを定める。

地下でたった今、三十二のブネの爆発を確認する。

「アルテラ!？」

地下の轟音に気付いても、立香はアルテラの名を呼ばずにはいられない。彼女が跳び立つ直前の声を聞いたから。

「辰五郎との約束を果たす」

そう告げたとき、彼女が自滅を厭わないことを知った。

もう止める隙間はない。

これまで好き勝手に暴れてきた破壊神は、遙かソラへと向けて真名を解放したからだ。

「軍神の剣！」
フォトン・レイ

これより天から降り注ぐのは神の権能。

アルテラの剣に向けて放たれる神の怒り。

然し、これを操作する力は残されていない。

否、万全の状態ならば辛うじて放つことが出来るだけ。

「—————これでいい」

破壊を受け止めたバカの顔を思い出して、笑う。

ソラが開く。雲が裂ける。

怒りを束ねた光が一筋、地上へ向けて解き放たれる。

目視した時、既に光はアルテラへと降り注いでいた。

神の一撃を以て、三十二柱の災害級の爆発を相殺してみせた。

定々の宿るブネを敢えて遺して。

「バカな馬鹿なばかなアアア!？」

醜く悲鳴を上げて、地上に残った十柱ばかりのブネの統率も忘れて定々はローマ帝国に背を向けた。

その先に待ち受けるのが——

「テメエがいそいそと集めてた骨子はローマが良いんだとよ。生前^{まえ}も、現在^{いま}も、作^まつてたのは自分を裁く法らしい」

自らの天敵だとも知らずに。

「白夜又！いつの間に……」

「周り見てみるよ。俺の仲間、全員で気持ち悪いバケモン相手にしてるぜ」

銀時に言われて、漸く周りを見た。

ローマ帝国の上にあった立香やマシユ。

振り払ったはずのファヴニールやネロ。

全員が残りのブネへと武器を取り、混乱するブネへと突撃していった。

「こうして、俺とサシにするためにな。

そろそろ閉廷にしようや。判決の刻だ」

助けは望めない。

殺す側から再び転落したことを理解する。

「そうだな、罪状は……皇帝侮辱罪。それと」

「——待て、頼む」

命乞いにも続かない喉。

「ここで、“最後の王”で斬られてしまったが最後、2度と舞台に戻ることが叶わない。2度目の終わりを目前にして、声が掠れる。言葉を編み出せない。

「地獄からの脱獄罪で現行犯逮捕だ」

「あ、あ——」

銀時は駆ける。

刀を抜いて、人でなしの始末をつけるために、肉柱に刀を振り放つ。

「地獄へ戻りな、化け狸」

徳川 定々の肉体を容赦なく斬り裂いて、霊気から概念まで、伸ばしていた幹を全て断ち切った。

地獄へ落ちる？

それは生ぬるい。地獄へ行けばやり直しが効く。

徳川 定々は地獄ではない場所に連れていかれる。

復活という可能性すら断つのが「最後の王」の切れ味だ。

ローマは不滅なり

牢城と化した帝都ローマに光が満ちる。

地下に潜んだ三十二柱、そして地上で暴走する三十柱、全てのブネが外側から崩壊した。

同時に、帝都ローマが祝福を奏でる。

大地を愛でるように壁が下がり、人類を激励する音を立てて地下のローマがソラへ舞い上がる。立香の背中を押して、マシユの未来を願いながら、全てのローマが魔力とともに在るべき場所へ還っていく。

「――終わった？」

「はい、この光がそう教えてくれました」

ソラを仰ぎながら、張り詰めた緊張の糸を呼吸とともに緩めきる。

「定々が消滅した場所に聖杯があります！」

へとへと立香とは対照的に、マシユは宙に浮かんだ淡く輝く器を見つけて走っていった。

『や、やった！銀時君が本体っぽいブネを斬った途端、全部のブネが消滅したぞ！これは本体で間違いない！』

『聖杯の回収も確認した。』

特異点の修復も始まったようだね』

ダ・ヴィンチの言葉を聞いて足元を見る。

足先から微かに光が漏れて、感覚が遠くなるのが分かった。特異点の修復が終わったから、自動的にカルデアへ戻る準備をしているんだ。

「――ローマの行く末、しかと見届けた」

「神祖ロムルス…」

それは特異点に召喚されたサーヴァントも同様だ。

ロムルスが光に包まれていく様子を、ネロが悲しげに見つめていた。

「其方が守りしローマは、立香たちが受け継いだ。

人理は必ず続くと、ローマが保証しよう」

凜と胸を張って、両腕でネロを包み、神祖の愛を注ぐ。言葉と行動、2つの愛を受けたネロは瞳を上げて、涙を溢しながら父に応えた。

「ネロ、あとは任せたぞ」

「……勿論だ。ローマは永遠だからな！」

ニカツと笑う愛し子を見届けて、ロムルスは光の向こうへと消えていった。

最後まで、ロムルスはローマのことを愛し続けてきた。敵の頭として召喚されながら、ずっと魂の在り方を忘れなかった。反転など永劫しないという姿を教えてくれた。

そんな最高の王に、感謝のお礼をせずにはいられない。偉大な建国王の姿を送り届けて顔を上げる。

「立香やマシユも消えてしまうのだな」

足元から光が発生し始めた俺たちに、ネロはロムルスと同じ度合いの気持ちを込めて聞いてきた。

「私たちは未来を取り戻しに行きます」

ロムルス王がネロさんに託したローマを、私たちも繋いでみせます！」

「くっ…嬉しいことを言いおって！」

良い胸の張り具合だぞ、マシユ。それを見て心配は吹き飛んだ！ちつとも寂しくなんて思っておらんからな？」

「えっ…そんな………」

「嘘、嘘オオ！すごく悲しい！残ってほしいなあ！

……あれ、余に勝ち目なくない？」

最強のハメ技に成す術なく白旗を上げた。

マシユはネロの姿を見て、特異点修復のあとについて口に出さずにはいられなかった。

「ネロ皇帝。この特異点の修復が終われば、きつと全てが元通りになります。連合帝国に殺された人たちも、普段の生活に戻れます。

……そして、私たちと戦った記憶も」

「余の言葉をマシユは覚えているのだろうか？」

「ならば問題ないツ!!?ローマは其方たちの胸にあり!!?」

「——はい、その通りでした！」

「ローマー！」「ロ、ローマー！」「ローマY」

ネロがマシユたちの帰還を惜しむように、この戦いをネロが忘れることをマシユは寂しいと感じていた。ネロの激励でしつかりと心構えを教わって、その心も大事なことでと学んだ。

こうして、ネロと熱い握手を交わして立香とマシユは退去した。

「……………ところで、余はここから一人で帰れと？」

ち、違うであろう…？こう、ビュンと時が戻るのでしょうか？あれ、誰もいない！

誰か、応えてくれエエエエ!!」

そしてネロは独り、荒野のど真ん中で叫んだ。

時を同じくして、銀時は退去し始めた茂茂に声をかけていた。

「やつと定々を江戸の法律で裁いてやれたな」

「———そうだな。といつても、記憶が戻らなかったから実感は薄い。將軍として果たすべきだと思つたから、きつと影丸は余を認めてくれたんだ。

全ての友に感謝し足りないほど、良い場所だった」

暗殺によつて生涯を終えた定々。

本来ならば法による裁きを与えて、罪を贖う時間があるはずだった。その機会が出来たことを複雑に思う。

彼の瞳に後悔はない。茂茂が自らを犠牲にしても果たしたかった結末に辿り着けたのだ。彼が誰であろうとも、茂茂として責務を務め上げたことに誇りを持っている。

そんな彼に、銀時は褒美を求めるように言う。

「記憶がないんじゃ聞いても仕方ねえか」

「なにを聞こうとしたのだ？」

今の余に答えられることかもしれんぞ」

「定々の中に茂茂の影丸がいたって、どういうことだ」

「———簡単な話さ」

一度だけ目を伏せる茂茂。

ちらりと覗いた瞳に、赤い景色を見た気がした。

「前日譚があつたのだ、きつと」

再び顔を上げた茂茂の瞳は黒く、普段と変わらない。気の抜ける返事に銀時は無礼千万なため息で答えた。

「きつとつて、知らないってことかよ……」

「ああ、時間がない。許してくれ、伝えるには一言じゃ表せなくてな。いつか会ったとき、酒でも交わしながら語ろう」

「この約束まで忘れないでくれよ？」

友と友、右手を交わして再会を約束する。

寂しい音を聞き届けて、銀時はまだ残っているお岩に視線を向けた。

「なんだ、まだ成仏してなかったのかよ」

「うるさいね。物事には順番があるだろう。伝えとかなきゃならない事があるんだよ」

「伝えたいこと？」

「辰五郎のことさ」

今回、寺田 辰五郎の行動には理解が追いついていない。

將軍の首を狙いに来たかと思えば、定々を殺す武器を渡してきた。あまつさえロムルスに定々の生前を伝えて、殺し方のヒントを与える。徳川家を殺すと考えれば筋が通るように見えるが、とんでもない。

人理焼却を否定したならば、茂茂の首を狙っては定々を殺すことは出来なかった。どこに一貫性を見出せばいいか、このままでは分からない。

ヒントになるかもしれない。

お岩の言葉に耳を傾ける。

「辰五郎は、攘夷戦争を続けている気がする」

「……戦場で死んだって話だったな。」

もう終わったと言っても、納得いかねえのか？」

「いいや、納得はしていた。一度は惚れた男さ、目を見りや分かる。

あいつ、まだ死にきれてなかった。何処かで続いている攘夷戦争なにかを

終わらせるために、独り突っ走っている」

脳内に届いた言葉を噛んで、苦い味だと気づく。

まだ噛み千切れない。辰五郎から感じていた想いだけは、お岩の考
えと似たものだった。あの戦いで失ったものの重さを知っている。
取り残して、ずっと過去を見ていた侍を何人も見てきた。

「ギン、次に会ったら説教してやってほしい。」

早く戻って、お登勢に顔見せろ……ってね」

だからこそ、お岩は銀時に辰五郎を託すことにした。

仙望郷の呪縛を解き放った銀時になら、辰五郎の抱える鎖も千切れ
ると信じたのだ。

「ババアに滞納してる家賃の利子くらいは準備しとかねえとだし？」

まあ、そのうち伝えといてやんよ」

「捻れた性格は相変わらずさね。」

レイ、あんたの好みはダメ人ング!？」

ぶつきらぼうに後ろを向いた銀時に、呆れた声を上げるお岩。だが
突然、言葉が掻き消されたので振り向くと、レイが笑顔で立っていた。

「なんて?……あれ、レイか。お岩は?」

「ああ、退去したよ。疲れてたからね、仕方ない」

明らかに作為的な退去の跡が見えたが、レイの無言の圧を見ては言
及できなかった。

「……………はあ。背中流せそうにないね」

「そりゃ、仙望郷も消えたしな」

見渡す限りの荒野を見て、レイは肩を落とす。

ここで夢を果たせないのは残念だが、考えようだ。サーヴァントの
一部として召喚されたなら、また機会は訪れる。ゆっくりと出来るタ
イミングで、好きなだけ流せばいいのだから。

「ギン、頑張りな。どんな世界だろうと、燃やすなんて許しちゃダメ
だ。負けるな、頑張れ!」

「ああ、ったりめーだ。まあ死んでも、仙望郷に行って身体借りて世界
救いってやらあ」

「あはは。その時こそ、背中流してやるよ」

いつか流す背中を押して、2人はそれぞれの場所へと退去する。
長い疲れを癒やす日を、夢に見て。

牢城災建帝国セプテム

―民の先導者―

定礎復元



「ふむ。人理焼却に加担する勢力。そして彼女という表現からして、女性の首謀者がいることになるのか」

セプテムから帰還してバイタルチェックを受ける銀時。傍らではダ・ヴィンチがデータを確認しながら、特異点で起こった話を聞いているところだ。

「夢の中？思念体？精神と時の間？みたいな所で話したってのに、あっさり信じるのかよ」

「信じるもなにも、私たちは四方八方が暗闇だ。どんな情報でも欲しいし、蜘蛛の糸にも縋る思いで手探りしてる。」

手繰り寄せた糸を登るか、離すかを決めるまでは手元に置き続けるのさ。そのうち役に立つかもしれない」

「ま、そこら辺のことさ任せっからいいけど。」

…詰みを狙うってどういう意味と思う？」

「例えば、海を渡るためのたった1隻の船を剥奪、若しくはその船長を抹消しておく。」

例えば、世界に1つだけの扉の鍵を私たちの手の届かない場所に保管する。なんて、物語の前提を破壊する行為と予想するしかないね。

最悪なところは、私たちが知らないこと。

特異点に来た時点で詰みなんて、判別のしようがない」

物語に必要なキーパーソンを掠め取る。

アーサー王伝説のエクスカリバーを、本の外でアーサー以外が引き抜いて持ち去るような暴挙だ。物語は成り立たなくなるし、その本はアーサー王伝説という名前すら付けられない廃棄物となるだろう。

ここまで戦ってきて、何かが欠けていたと思っただけではない。いや、知らないだけで既に手は回っていた可能性がある。

序盤だから影響が無いだけで、特異点を攻略することに加担者の妨害が苛烈になれば――

「報告してくれてありがとう。」

今回は謎が多い。寺田 辰五郎の所属と目的、定々と手を組んでいたブネという悪魔……まあ細かいことは纏めて考えるとして」

考えるのはやめた。

どうせ似たようなことを考えて、分からずに終わる。

無理なときは無理だ。無理と分かってから別の出口をこじ開ければいい。

「君にしか分からないことも多々ある。きっと、次の特異点でも銀時君の知識が必要不可欠。」

いざ頼りたいときに疲れてちや意味ないからね。ゆっくりと英気を養っておくれ?」

「ならジャン○の続き読ませてくれよ」

「ん〜!そのうち作家サーヴァントを召喚しよう!」

なにせいま銀時に迫る危機は、ジャン○が読めないという一点しか頭がないのだから。